

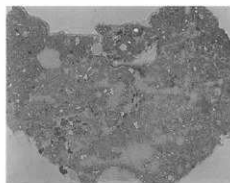
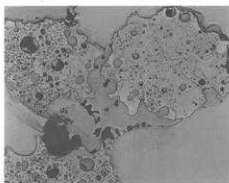
顕微鏡写真

ガラス ×10 (1/2縮小)



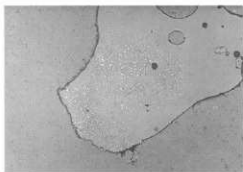
ガラス ×10 (1/2縮小)

胎土 ×10 (1/2縮小)



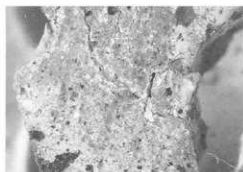
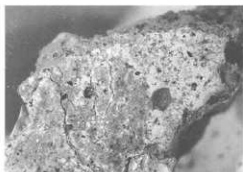
ガラス ×100 (1/2縮小)

×400 (1/2縮小)



胎土 ×10 (1/2縮小)

×10 (1/2縮小)



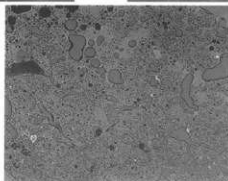
(95-69) 外觀写真 (1/2縮小)



顕微鏡写真

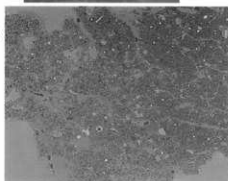
ガラス

×10(1/2縮小)



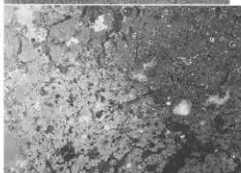
胎土

×10(1/2縮小)



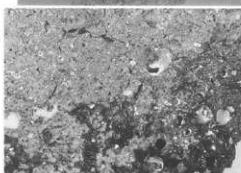
ガラス

×10(1/2縮小)



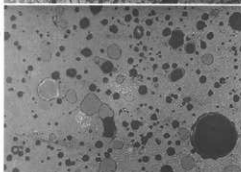
×10

(1/2縮小)



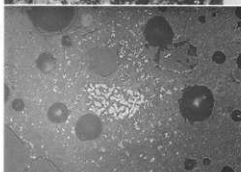
ガラス

×100(1/2縮小)



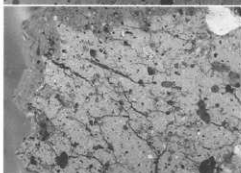
×400

(1/2縮小)



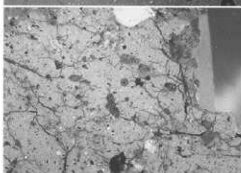
胎土

×10(1/2縮小)

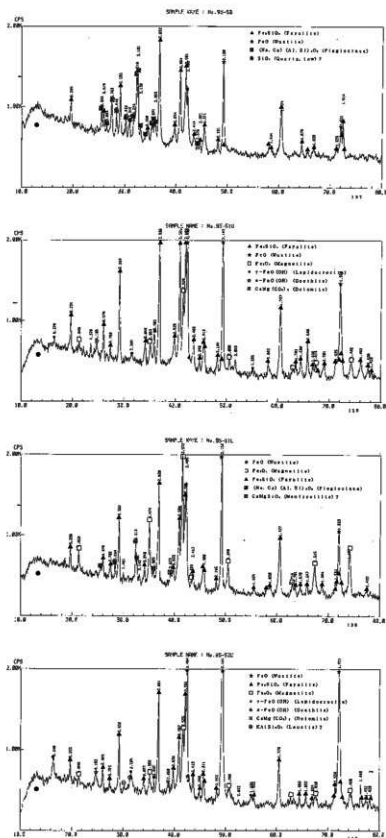


×10

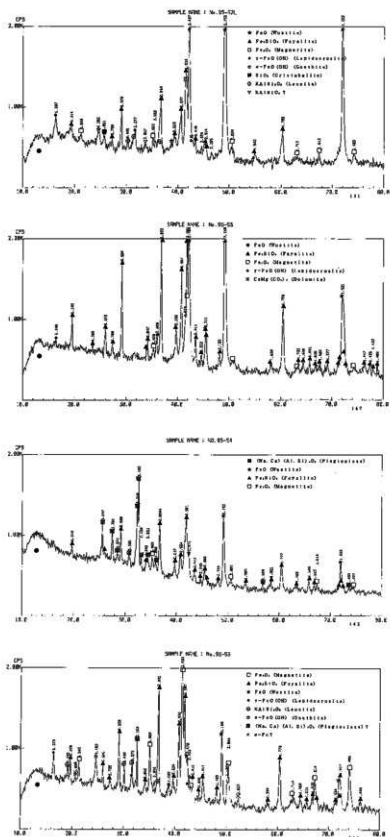
(1/2縮小)



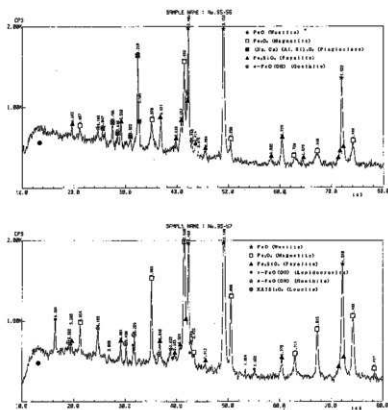
第93図 鍛冶関連遺物の分析調査(長土呂遺跡群) 29



第93図 X線回折による定性分析チャート(1)



第94図 X線回折による定性分析チャート(2)



第95図 X線回折による定性分析チャート(3)

第7表 耐火度試験結果

試料番号	耐火度 (SK)	色調	膨	張	試験錐の状況
№95-68	2 a	茶色	膨	張	ややあばた状
№95-69	6 a +	茶色	膨	張	ややあばた状
試験条件：酸素プロパン法					

ゼーゲルコーン温度比較表

温度 (°C)	コーン番号	温度 (°C)	コーン番号	温度 (°C)	コーン番号	温度 (°C)	コーン番号
600	022	940	08a		3		23
650	021		08	1160	4a	1580	26
670	020	960	07a		4	1610	27
690	019		07	1180	5a	1630	28
710	018	980	06a		5	1650	29
730	017		06	1200	6a	1670	30
750	016	1000	05a		6	0690	31½
790	015a		05	1230	7		31
	015	1020	04a	1250	8	1710	32½
815	014a		04	1280	9		32
	014	1040	03a	1300	10	1730	33
835	013a		03	1320	11	1750	34
	013	1060	02a	1350	12	1770	35
855	012a		02	1380	13	1790	36
	012	1080	01a	1410	14	1825	37
880	011a		01	1435	15	1850	38
	011	1100	1a	1460	16	1880	39
900	010a		1	1480	17	1920	40
	010	1120	2a	1500	18	1960	41
920	09a		2	1520	19	2000	42
	09	1140	3a	1530	20		

注：コーンでは正確な温度の測定はできない。耐火度の数値を概略の温度で示す場合のみ上表の温度が使われる。

第8表 微小硬度計による硬さ試験結果一覽

測定条件

①荷重	200gf
②荷重時間	15 sec.
③測定時間	5点
④圧子	対面角136° ダイヤモンド正四角錐

測定結果

	硬さ平均値(HV)	c. v. (%)	硬さ最大値/最小値(HV)
95-62	261	12.81	291/214
95-63	457	6.15	490/420
95-64	141	7.82	153/128
95-65	219	1.76	225/215
95-66	137	7.17	153/126
95-67	141	6.80	154/131

第6節 小結

佐久市が主に聖原遺跡として調査し、大規模な律令期の集落の姿があらわれ、しかもその内容たるは想像を絶するような立派なものであった。今回の調査対象域は確かにその一角なのだが、遺構の分布状況はまばらとなり、個々の遺構規模についても総じてひとまわり小さいといえる。その他、掘立柱建物跡の占める割合、遺物そのものの質・量なども劣っている状況であった。全期を通して集落の中心から外れていたと考えられるが、遺跡全体でみるならば、中心部と縁片部の差が明瞭であることから、集落構造をより具体化できる資料となろう。

今回、もっとも古い住居跡は6世紀末葉から7世紀前葉に設定した。これまで、律令期の集落といえは7世紀後半以降を考えるのが一般であったが、これには一考を要し、小規模だがもう少し古い段階から設定しなおしたほうがよさそうだ。浅間山南麓の高位段丘や谷中斜面には、やはり同じような小規模集落が経営されている。こうした一群にあって、成功したものがあつた時点で律令期集落として転化していく様子が読み取れまいか。

旧河川跡で発見された古墳時代後期の畑跡については、新たな畑作技術の発見と、さらには水田経営だけに頼っていたのではないことを改めて確認することとなり、これも大きな成果といえよう。

その他、特記すべき事項としては古墳時代後期後半の49号竪穴住居跡の構造にある。非常に深く掘り込まれており、幅広の周溝を持つもので、柱穴と周溝間に間仕切り溝を有している。最大の特徴は、壁体に角材を埋め込んだ跡と思われる壁溝または壁柱穴を有しており、住居構造や構築技術の系譜を探る上で興味深い資料となった。

1号鍛冶工房跡については、非常に遺物が多かったのだが、性格上七器の姿がみられなかった。9世紀前半におさまるのか、それとも11世紀代まで降下するのか、残念ながらわからなかった。ただし、我々は土器の編年だけで時期を設定するわけではない。残された鍛冶関連遺物は非常に良好で、故鉄利用の鍛冶業と精錬業から継続される鍛冶業が、同一の工房内の同一の炉の中で操業されており、ほかの遺物もからめてモデル化を図っている。時期がわかるのも、そう速くはないことだろう。

かつて古墳時代後期のある時点まで中央を流下した大規模な河川跡、また古墳時代末から奈良時代初頭の2号流路、平安時代前半の1号流路、これをもってこの台地から水が流れることはなくなった。現在でも同様である。栗毛坂遺跡群との境界は、明瞭な田切りによって区切られており、下方には蟹沢が流れ、もはや台地上には水をもらすことがない。当時、栗毛坂遺跡群との堺に小さな谷状のものがあったとしても、少なくとも9世紀前半までは田切りのようなものが存在しなかったものと考えられる。

第5章 ^{のびつけ}野火附遺跡

第1節 遺跡の概観

標高744m前後の田切り台地南端に位置する。佐久市・小諸市・御代田町の境が入り組むところで、ここでは小諸市大字御影新田字野火附に所在する。

幅100mほどの谷を挟んで、南側には中原遺跡群（『佐久市内その4・小諸市内その2』に所収）が所在し、同じ台地部分の北側一帯には鑄師屋遺跡群に包括される前田遺跡（本書第6節所収及び佐久市教育委員会1989）や宮ノ反A遺跡群（第7節所収）、あるいは御代田町野火付遺跡（御代田町教育委員会1985）・小諸市鑄師屋遺跡（小諸市教育委員会1988）その他が存在する。また、調査対象範囲からわずかに西側の田切り斜面には、かつて野火付古墳が位置していた（小諸市教育委員会1982）。

この遺跡は、当初未周知で、すでに圃場整備も済んでいた。ただし、一帯は遺跡の密集地であり、多少なりとも遺物が採取できる地点でもあった。用地買収が遅れたため、試掘調査もままならなかったが、平成5年度、長野県教育委員会文化課（現在文化財保護課）が試掘調査を行い、遺跡であることが判明し、日本道路公団東京第二建設局との委託契約の変更を行った。

未周知の遺跡であり、未だその分布範囲は不明である。たとえば御代田町野火付遺跡とは、現状で500mほど離れ、一体となるかどうかはわからない。また佐久市鑄師屋遺跡とは約200m離れているからこれも不明のままである。今のところ、これを単独の遺跡として見るしかないが、同じ台地上にある複数の遺跡を総合して“鑄師屋遺跡群”と称しているのだから、これもまた鑄師屋遺跡群野火附遺跡といったほうが適当だろう。鑄師屋遺跡群の南端が明るみに出たということになる。

第2節 調査の概要

用地買収が終了し、平成5年6月14日と15日に長野県教育委員会文化課による試掘調査が行われた。結果、未周知の遺跡であることが判明し、これを野火附遺跡とした。

日本道路公団としては、直ぐにも工事に着工したいとのことであり、6月25日、早々に調査に対応することになった。調査対象面積約4,500㎡である。

遺跡内には2本の市道及び農道が通過しているが、ともに舗装されており、長期に渡る砂利道による迂回路は適していないとのことで、工事途中に調査することになった。したがって、道路以外の部分を第1次調査、道路部分を第2次調査として行った。

第1次調査では、圃場整備による遺跡の擾乱及びそれによる調査範囲の決定ももろんで調査に入った。その結果、ほぼ全体に軽石流堆積物上面まで掘り下げられた後、平坦に埋土され、また市道3249号線の北側については軽石流堆積物まで大きく掘り込み遺構は存在しないとの判断に至った。北側については遺跡範囲が定まらなかったが、南側のやや急な斜面には遺構がなく、台地上部に群がる遺構群の展開が認められた。古墳時代の竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡4棟、その他があり、8月26日に調査が終了した。

11月5日から12日、及び12月11日から22日にかけて第2次調査を行った。古墳時代の竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡2棟、その他を確認した。

調査口誌抄

平成5年度

6月14日～15日

長野県教育委員会文化課による試掘調査開始。未周知の遺跡であることが判明。野火附遺跡とする。

6月25日

発掘調査開始。試掘調査で判明した遺構から着手。

7月1日

市道3249号線より北側部分の試掘調査開始。區場整備事業による捜査が目立ち、調査範囲を決定。

7月2日

市道3249号線より北側部分の表土剥ぎ開始。

7月3日

市道3249号線より北側部分の表土剥ぎ終了。竪穴住居跡1棟のみ。市道3249号線より南側部分の表土剥ぎ開始。

7月10日

表土剥ぎ作業終了。計竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡4棟、その他となる。

7月29日

高所作業車で遺跡全景写真を撮影。

8月26日

第1次調査終了。

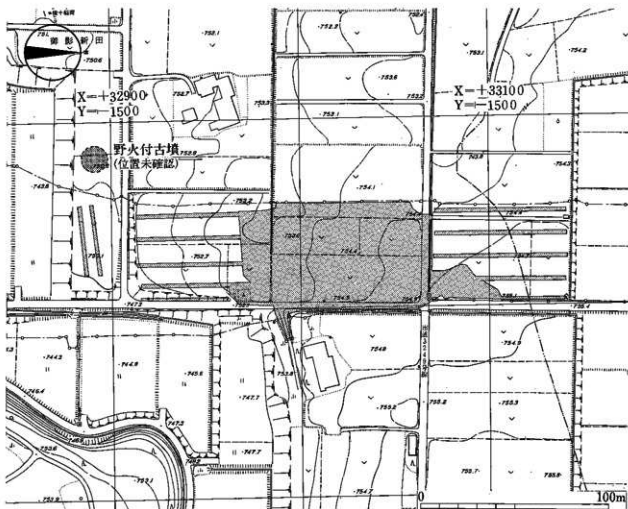
11月5日～12日

市道3249号線直下の調査を実施。竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟を確認。

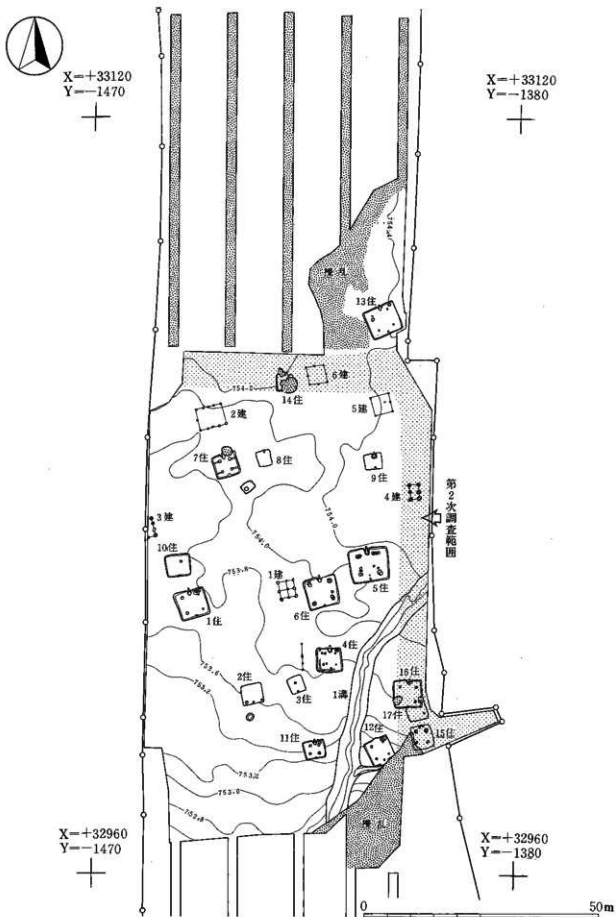
12月11日～22日

遺跡東側の農道直下の調査を実施。竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟を確認。

第2次調査終了。



第1図 調査範囲



第2図 遺構配置

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第3・4図、P.L30・35～38）

7世紀前半段階の住居跡である。

覆土は、周溝を除いて5層に分けているが、1～3層がブロック主体土で人為的な埋め戻し土、ないしは周堤のような盛土が崩落したものと考えている。4層は、一般的に壁際第1層目に認められる、混入物の少ない粘性の高い細砂壤土（黒色土）である。

カマドは、袖下端を掘り残し、以後赤色粘土でつくり上げたものである。袖の先端には、深さ15cm前後のビットを設け、おそらく礫を立石させていたのだろう。これに伴うものかどうかわからないが、整形され、しかも二次焼成を受けた軽石が、床面直上から2点みつまっている。

カマド右脇には、硬質な盛土による周堤をもつ貯蔵穴が存在した。なお、貼床を剥いだところ、その東側の部分にも貯蔵穴らしきビットが存在し、また梯子穴ももうひとつみつまっている。床を貼り替えた時点で、貯蔵穴及び梯子穴を一度つくり直したことが読み取れる。

遺物は、土器についてはとくに記すことはない。ただし、石錘の類をみれば、北東コーナー・東壁中央・出入口部・南西コーナーに認められ、またすべて床面直上であった。

掘方は、中央部及び壁際が一段高いものであった。

2号竪穴住居跡（第5図、P.L31）

遺物はまったく出土していないが、カマドや掘方がなく、また掘り込みも浅いことから、3号竪穴住居跡や10号竪穴住居跡と同じ時期、すなわち4世紀末から5世紀初頭のものと思われる。

覆土は、壁際に粘性の高い黒色細砂壤土がみられ、その上に軽石流堆積物のブロックが主体となる層が堆積している。

住居の主軸方位からみて、南壁中央のビットが梯子穴、南壁両コーナーのものが貯蔵穴と呼ばれるものだろう。

住居跡内の礫は、すべて火山岩質の自然礫であり、床面直上から出土した。人為的な行為であるが、使用された痕跡はない。

3号竪穴住居跡（第5図、P.L31・38）

5世紀初頭の住居跡である。

覆土は、壁際に軽石流堆積物のブロック層が認められるが、これは壁の崩落土と考えたほうがいいだろう。

北壁寄りに炉、南壁中央寄りには梯子穴が認められる。

遺物は、この3点以外、何も出土していない。北壁際の床面直上から出土しており、これを一括遺物とみなし、5世紀初頭という年代を与えた。

4号竪穴住居跡（第5・6図、P.L31・38）

7世紀後葉の遺構である。本跡は、一度作り替えを行っている。

古段階のものは、新段階の貼床を削いだ時点で確認した。床面自体は残っていないが、掘方として残存し、南西コーナーには周溝が一部残り、あわせて柱穴及び梯子穴が認められた。

新段階のものは、明瞭な掘方をもたず、西壁・南壁側を拡張している。あわせて西側の柱穴及び梯子穴を新たに作り替えている。覆土は周溝を除き2層に分けているが、自然堆積として考えた。

カマドは、新旧とも同一の場所に設けられている。掘方で基底部を床面に出すが、袖自体はすべて赤色粘土で作られていた。この時期の住居としては一般的なものではなく、住居再構築の際、これもまた作り直された可能性もあろう。

貯蔵穴は、北東コーナーに通常のものが見られる。それとは別に北西コーナー付近にも窠の下半部を埋設したものがあり、これも一応貯蔵穴として考えた。なお、後者については新段階の住居で作られたものだろう。

遺物はすべて新段階の住居跡のものである。2がカマドの覆土内、6が埋設土器である。

5号竪穴住居跡（第6・7・8図、P.L31・32・38・39）

7世紀中葉に廃棄された住居跡である。本跡は、カマド位置を変えずに二度の拡張を行っている。

新段階の覆土は、周溝を除き4層に分けているが、3層が粘性の高く不純物の少ない黒色細砂壤土であり、2層が黒色土と軽石流堆積物のブロック層である。また、3層及び4層の壁際の堆積状況をみれば、壁に構造物があったことを想定できる。

カマドは、袖の基底部を掘り残し、先端に長方形に整形された軽石を置き、さらに赤色粘土及び軽石で構築されていた。赤色粘土は貼床上に認められ、順番としては貼床が先となる。

中・古段階の住居跡は、掘方の調査で判明した。床面は残っていないが、掘方として残り、あわせてそれに伴う柱穴及び梯子穴の一部が確認できた。なおP₁については、軽石流堆積物内に存在する数少ない赤色粘土部分を削り取ったもので、新段階の住居を構築する際に行われたものである。カマドに使用した粘土にでも使おうと思ったのか。

遺物はすべて新段階の住居跡に伴うものである。本来15は、粘土埋設の貯蔵穴として利用されたものか。17は搬入品で、胎土及び調整手法から長土呂遺跡群29号竪穴住居跡6のような丸味をもった底部が想定できる。

6号竪穴住居跡（第9・10図、P.L32・39・40）

7世紀後葉の住居跡である。

覆土は、周溝を除き4層に分類したが、1層を除いては軽石流堆積物及び黒色土ブロックが主体となっているため、人為的な作用があったものと考えられる。なお、2層についてはカマドの崩落土が多量に混入していた。

カマドは、袖の基底部をわずかに掘り残し、貼床を行った後、赤色粘土を用いて本体を構築している。左袖先端には整形された砂岩系の礫を立石させ、またその周辺には同様の礫が床面直上に散在していた。カマドの芯材として利用されたものだろう。

カマド左脇近くには、窠の胴部上半以上を埋設した貯蔵穴が存在した。器の半分ほどしか埋設していないが、残存状況が良く、もしかすると周囲に粘土などによる保護施設が存在したのかもしれない。

柱穴は各々小穴として確認したが、実際には南西隅を除いて複数のビットからなっていた。上屋の建て替えを行った可能性もある。

掘方は、カマド及び住居中央部を除き、一段低く掘り下げられたものであった。南東コーナーの柱穴側

に、深さ-45cmほどのピットが存在したが、対応するものがなく、少なくとも柱穴ではないらしい。

遺物は、8が埋設土器、4は坏身の可能性あり、6は丸底甕地帯からの搬入品、13が弥生時代から古墳時代前期初頭の打製石斧を転用したものである。また12は古墳時代中期初頭のものが混入したのだろう。

7号竪穴住居跡（第11・12図、P L32・40～42）

7世紀前葉以前に廃棄された住居である。最近の擾乱によって、北東隅が壊されている。

覆土は、周溝を除き3層に分けたが、2層が軽石流堆積物と黒色土のブロック層、3層が粘性の強い黒色細砂壤土である。

カマドは、袖を地山掘り残しとし、貼床した後、袖先端に無調整の軽石を立石させ赤色粘土で保護し、地山掘り残し部分の上段には白色及び赤色粘土の混土層を盛っている。また煙道部は赤色粘土によるものである。

やや住居主軸寄りに配された柱穴には間仕切り溝が伴っていた。ただし、貼床上面では見つからず、掘方の調査段階で判明した。その理由は不明である。

掘方は、周囲をわずかに低く掘りくぼめたものであった。

遺物は、4が木葉底をもつものだが実測図にある器高は信頼できるものではなく、また6・7は弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての打製石斧であり、石錘群と同地点で出土しているためこれに転用したものと考えている。なお、入り口付近には3層上面に崩れ落ちた石錘群が認められた。

8号竪穴住居跡（第12図）

遺物が一点もなく時期不明である。ただし、北壁には散乱した粘土を伴ったカマドの残骸が残っており、カマド出現期以降の時期であることは確実である。また、本遺跡には古墳時代前期末から中期初頭及び古墳時代後期後半以外の遺構・遺物がなく、本跡のように掘り込みが浅く柱穴や掘方が存在しなくとも、やはり古墳時代後期後半の遺構と考えたほうがいだろう。

9号竪穴住居跡（第12図、P L33）

1は木葉底をもち直立可能で、7世紀とみても一見古そうな形態にみえるが、これは床から23cmも浮いている。ビニール袋1袋ほどの土器が捨てており、いわゆる武蔵壺の破片も一定量出ているので、7世紀中葉以降の竪穴住居跡である可能性が高い。

覆土は三角堆積したものであったが、いずれもブロック層が主体となっており、やはり盛土のようなものが常に堆積していたものと思われる。

カマドは、袖部分を掘り残し、以後赤色粘土で構築している。

掘方はない。

10号竪穴住居跡（第13図、P L33・42）

1が古墳時代前期末葉、2～5が中期初頭、6～13が後期後半を中心とした時期のものである。床面中央からやや浮いて一括出土したが、炉を有する遺構なので後期後半にはならない。前期末から中期初頭に廃棄された竪穴住居と考えられる。

覆土は、周溝を除き2層に分類したが、層高が厚いにもかかわらず第2層が粘性の高い黒色細砂壤土であった。この上面付近から遺物が一括して出土し、すくなくとも古墳時代後期後半までは第2層しか堆積していないような穏やかな環境であつたらしい。

柱穴・掘方はない。

11号竪穴住居跡（第13・14図、P L33）

1の存在から6世紀後半から7世紀前半の遺構と考えられる。

覆土は、1層が黒色土ブロック層、2層が軽石流堆積物のブロック層が主体となり、3層が粘性の高い黒色細砂壤土である。また、2層にはカマド崩落土が混入していた。

カマドは袖を地山掘り残しとし、貼床した後赤色粘土で構築している。袖の先端には長方体に整形された軽石を埋め込み、その上に同様の軽石を天井石としていた。なお、図上では天井石がふたつのように記載されているが、これは後に折れたものである。また、南東コーナーの柱穴付近から、一見してカマド石と考えられる軽石が床面から出土しているものの、本跡に伴うものかどうかは不明である。

北東コーナーには貯蔵穴が存在する。

掘方は、周囲が一段深く掘り下げられていた。

遺物は、1・2以外に1袋ほどが採取されている。壊破片がなく、1を以てして年代を決めるほかなかった。

12号竪穴住居跡（第14図、P L33・43）

7世紀中葉の住居跡である。南東隅には祝乱が入り、また南壁については圍場整備時に削られている。

覆土は1・2層ともブロック層が主体となる。

カマドは煙道部の一部及び燃焼部が残存していた。赤色粘土も散乱していたが、とくに袖として残るものではなかった。また、北東コーナーには圍場を巡らした貯蔵穴が存在し、その周囲から土器が出土している。

掘方はカマド部分を除き全体に浅く掘り下げられており、周囲が一段深いようなことはなかった。

遺物は、2～5が貯蔵穴周辺の床面上から一括出土している。3は正位状態で出土しているが、これには煮沸痕が明瞭であった。5もやはり正位で出土しており、依存状況からすれば貯蔵穴的な役割をしていたのかもしれない。ただし、粘土などによる保護施設があったかどうかはわからない。また、東壁中央付近から、軽石製のカマド石と思われるものが床面直上から出ている。

13号竪穴住居跡（第15図、P L33・43）

7世紀前葉の住居跡である。

覆土は、第2層に軽石流堆積物の小ブロックが少量混入していたが、とくに盛土の埋め戻しとは考えにくい。

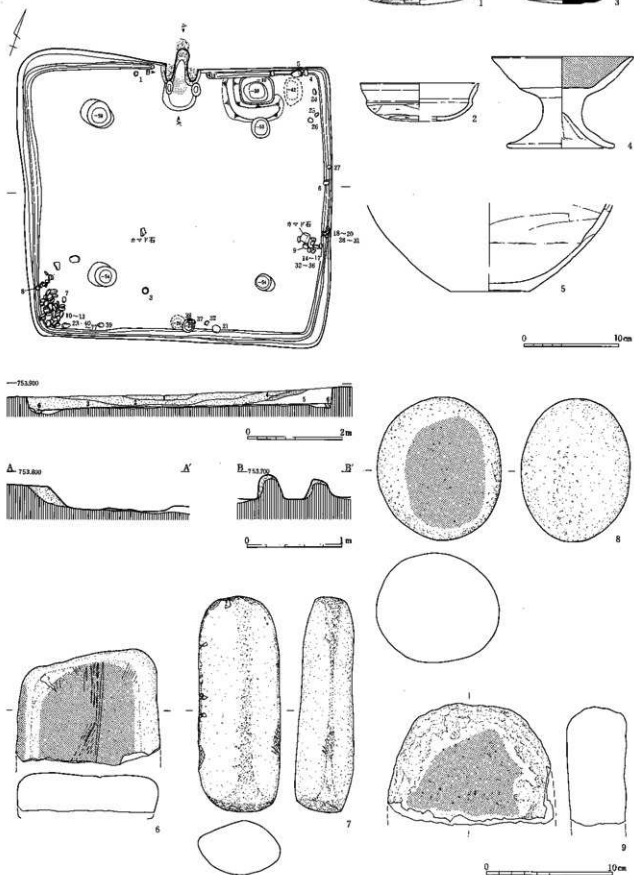
カマドは、地山を掘り残して袖とし、貼床をした後赤色粘土で構築するものであった。袖の先端については左右に差があり、右袖の場合は安山岩系の礫を埋め込み、すべて赤色粘土でカバーしているのに対し、左袖については同じ場所にもかかわらず、掘り残された地山の上に整形された軽石を置いていた。

北東コーナーには貯蔵穴が存在するものの、その上段には床面と同レベルで甕の胴部上半以上が正位で残存していた。これも貯蔵穴としての機能を果たしていたのだろうが、残念ながら覆土の観察は行わなかった。ただし、土器の外表面全体に粘土が付着していたので、これによる保護施設が存在したことが想定できる。

掘方は周囲がわずかに深く、またカマド燃焼部についてはとくに深く掘り込まれていた。

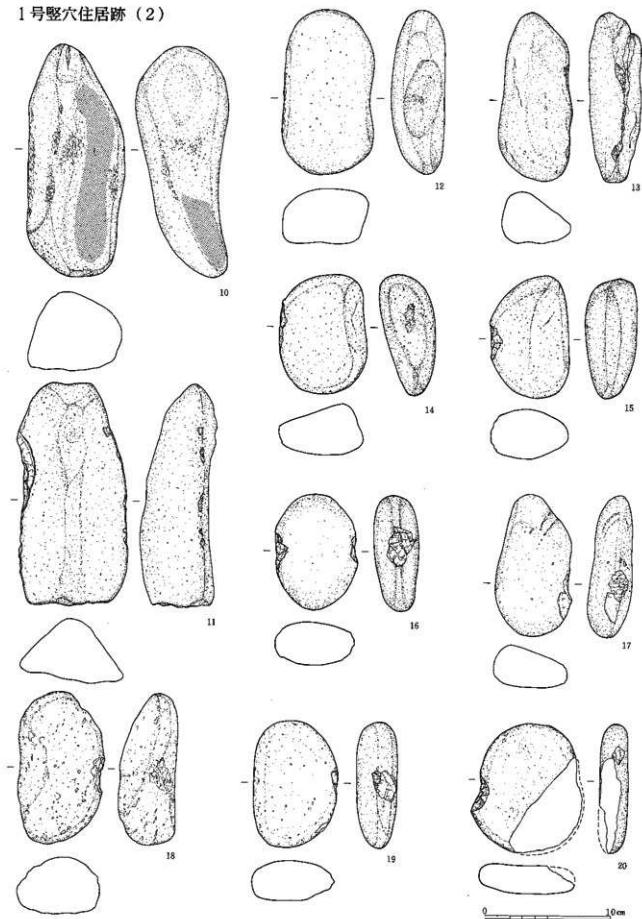
遺物で、7は貯蔵穴の上位にあったもので年代を決めるものではない。また8・9は古墳時代中期初頭

1号竖穴住居跡(1)



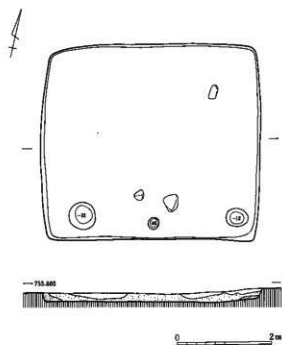
第3图 竖穴住居跡(1)

1号竪穴住居跡(2)

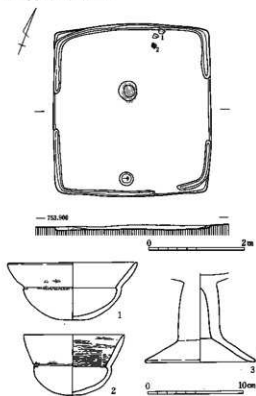


第4図 竪穴住居跡(2)

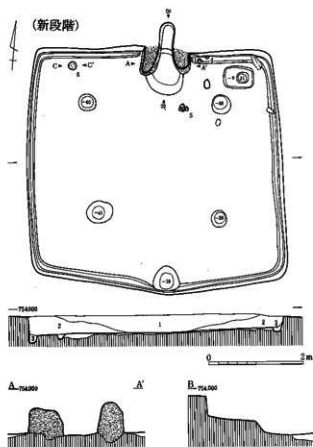
2号竪穴住居跡



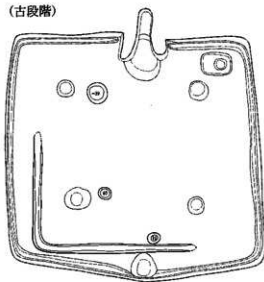
3号竪穴住居跡



4号竪穴住居跡 (1)

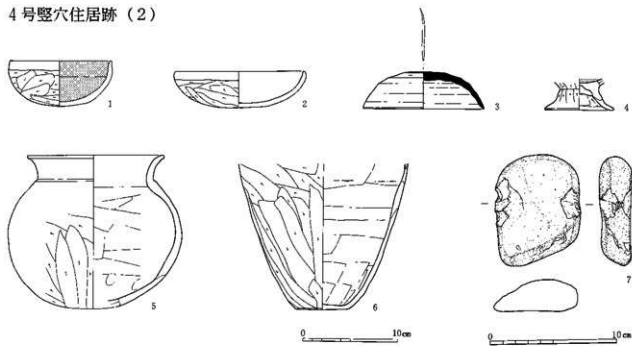


(古段階)

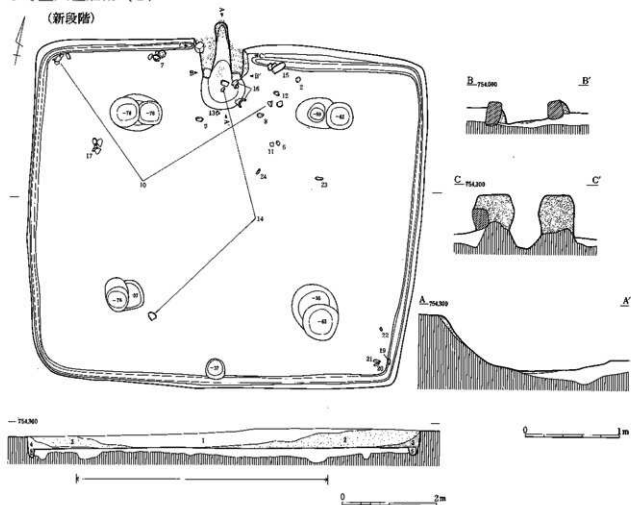


第5図 竪穴住居跡 (3)

4号竖穴住居跡(2)



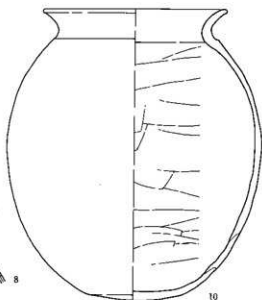
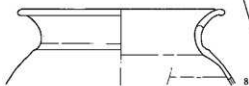
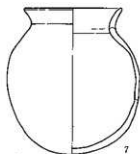
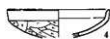
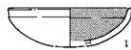
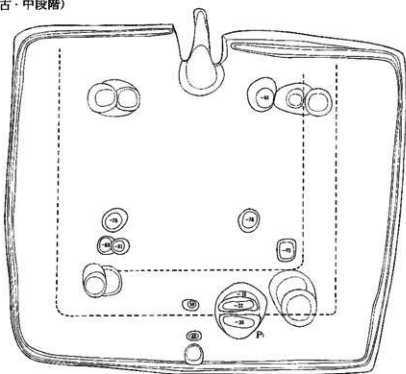
5号竖穴住居跡(1)



第6図 竖穴住居跡(4)

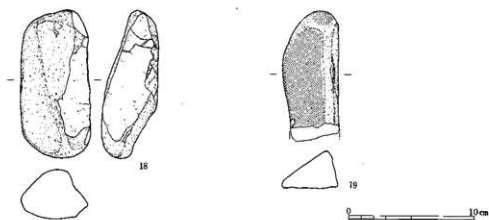
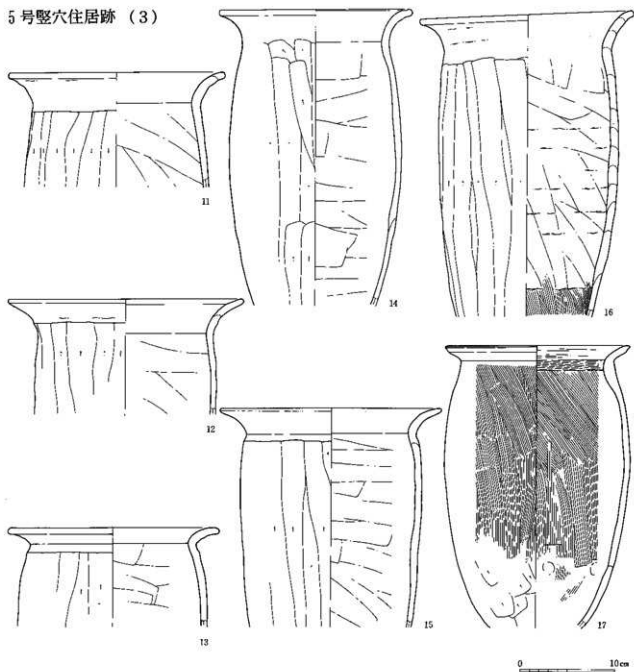
5号竪穴住居跡(2)

(古・中段階)



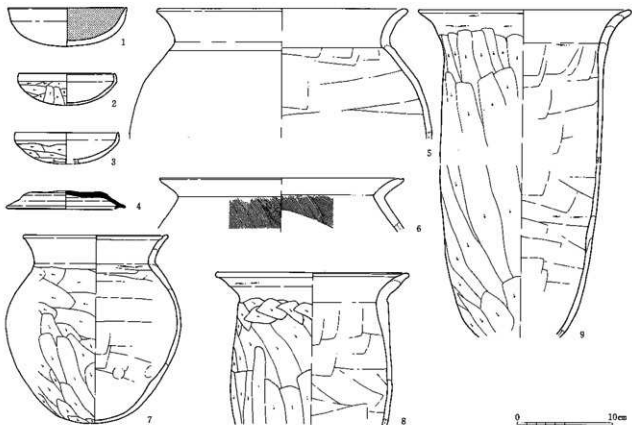
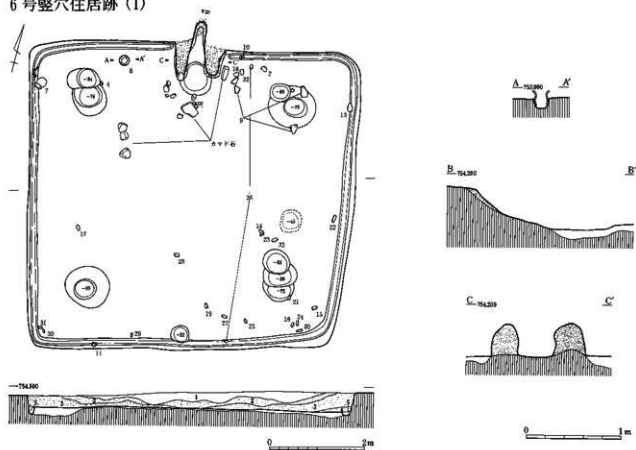
第7図 竪穴住居跡(5)

5号竪穴住居跡 (3)



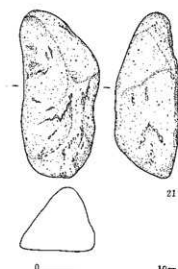
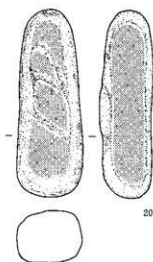
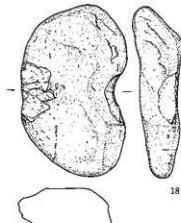
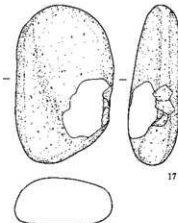
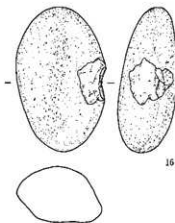
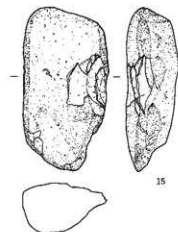
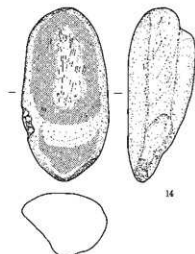
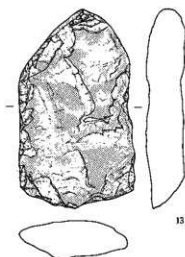
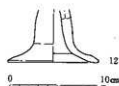
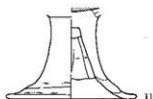
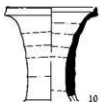
第8図 竪穴住居跡 (6)

6号竪穴住居跡(1)



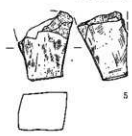
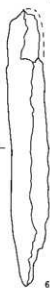
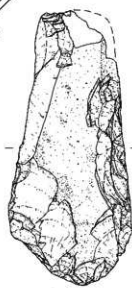
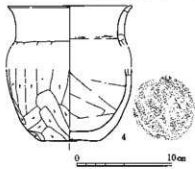
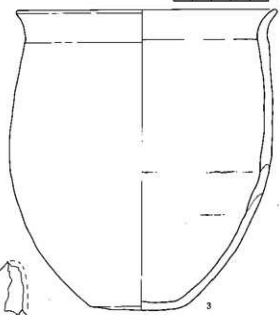
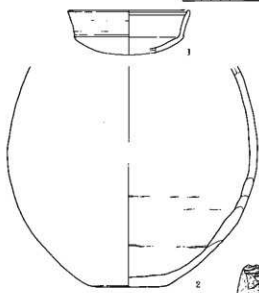
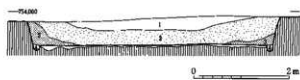
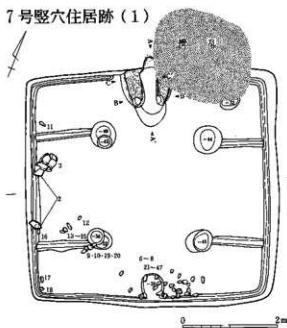
第9图 竪穴住居跡(7)

6号竖穴住居跡(2)



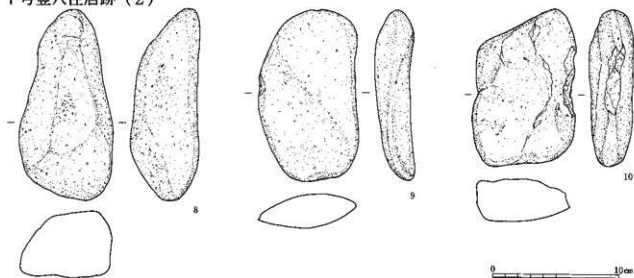
第10図 竖穴住居跡(8)

7号竖穴住居跡(1)

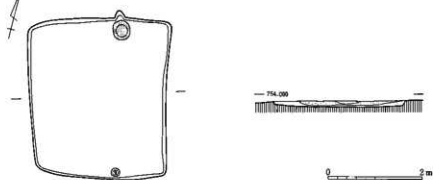


第11图 竖穴住居跡(9)

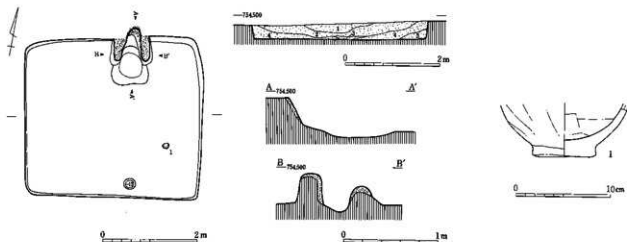
7号竪穴住居跡(2)



8号竪穴住居跡

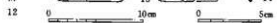
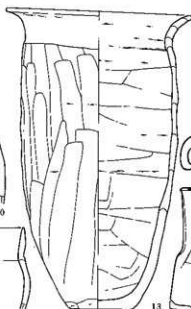
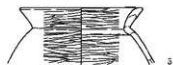
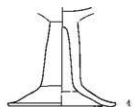
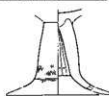
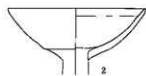
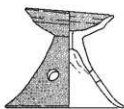
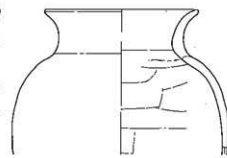
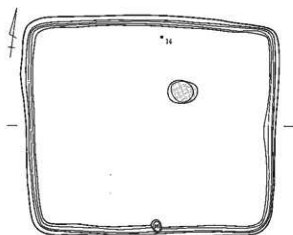


9号竪穴住居跡

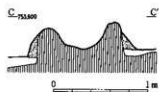
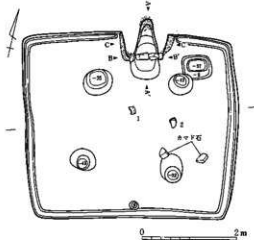


第12図 竪穴住居跡(10)

10号整穴住居跡

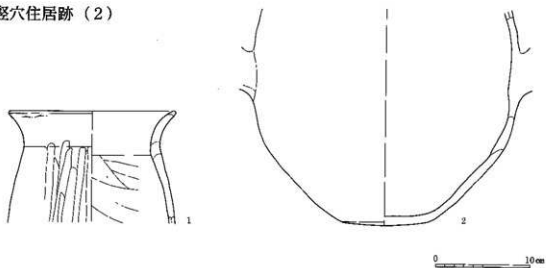


11号整穴住居跡 (1)

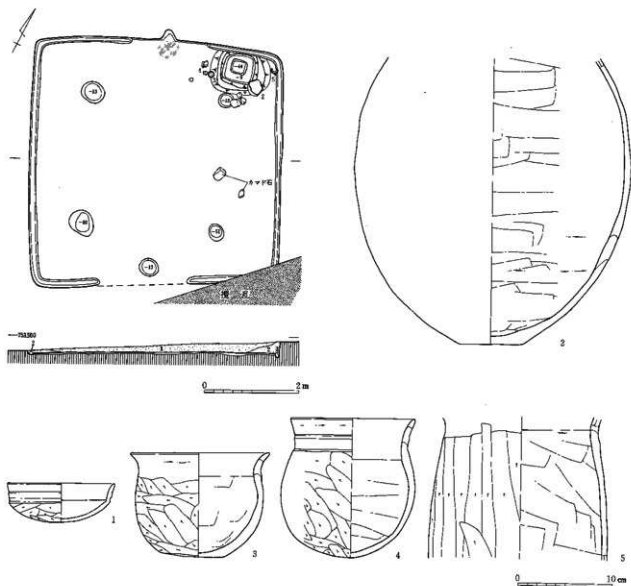


第13图 整穴住居跡 (11)

11号竪穴住居跡(2)

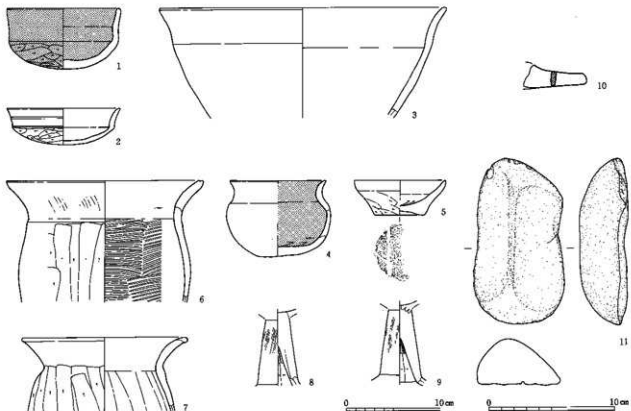
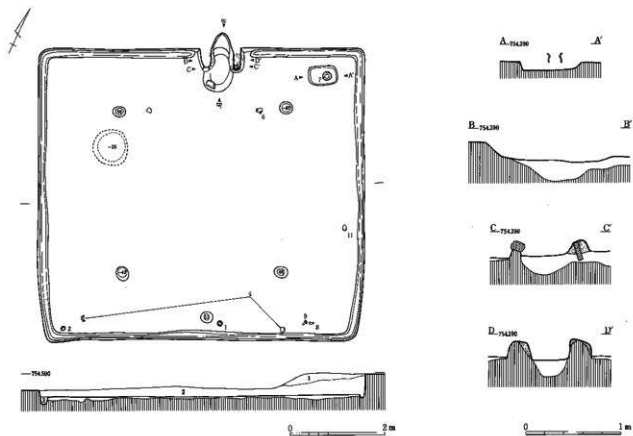


12号竪穴住居跡



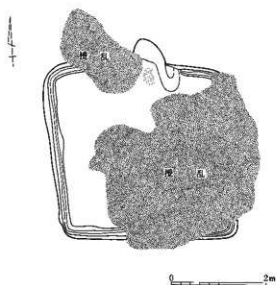
第14図 竪穴住居跡(12)

13号竪穴住居跡

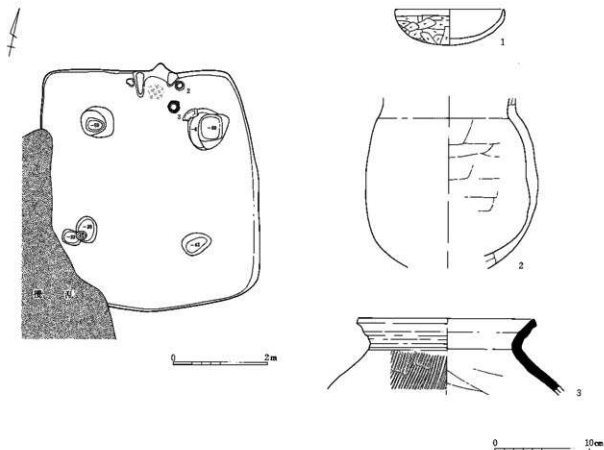


第15図 竪穴住居跡 (13)

14号竪穴住居跡

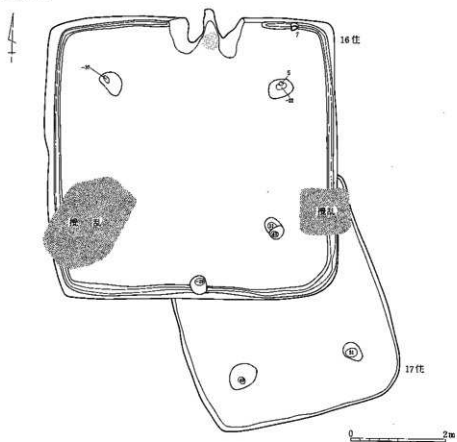


15号竪穴住居跡

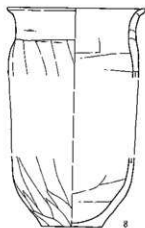
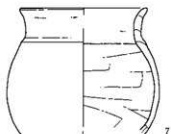
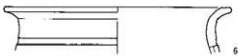
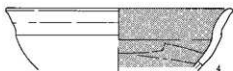


第16図 竪穴住居跡 (14)

16·17号竖穴住居跡



16号竖穴住居跡



0 10cm

第17图 竖穴住居跡 (15)

のもので、ともに床面直上から出土したが坏部及び脚部をきれいに欠いているので、何かに転用したものと考えられる。

14号竪穴住居跡（第16図）

土器の実測資料がないものの、ビニール袋1袋ほどの遺物が採取されている。時期決定資料に乏しいが、いわゆる武蔵塗の破片が主体となっているので、7世紀中葉以降のもと考えている。

本跡は大部分を壊されているが、調査担当者の判断に俟れば粘土採掘坑だという。しかし、セクションをみれば住居が埋まった後に掘り返されているので、整理担当者はこれを攪乱とした。

覆土及びその他の施設は不明である。カマドを有するが、これについても構造がよくわからない。

15号竪穴住居跡（第16図、PL43）

7世紀後葉の遺構である。南西隅を攪乱によって壊されている。

覆土は観察しておらず、掘方も下げている。カマドの構造も不明である。

遺物は、2・3がカマド右脇から出土している。ともに正位で出土し、2は胴部完形、3は胴部上半以上完形であった。貯蔵穴として機能したものでしょうか。

16号竪穴住居跡（第17図、PL43）

7世紀前葉の新しい段階から中葉にかけての住居跡である。17号竪穴住居跡を切ってつくられている。

覆土は不明であり、掘方も調査していない。カマドは、写真をみるかぎり、袖を粘土で構築しているようだが、その芯部は不明である。

遺物は、5が北東隅柱穴内から出土している。8はより古柏的なタイプであり、もしかすると17号竪穴住居跡のものかもしれない。

17号竪穴住居跡（第17図）

本跡からは実測可能な遺物は出土していない。10片ほどの土器を採取しているが、7世紀前葉を下限とする古墳時代後期の埴ばかりであった。

覆土・掘方の調査は行っていない。

2 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第18図、PL34）

2間×2間の総柱式のものである。P₁～P₈は、平面形が小さく深さも浅いのが特徴である。

覆土はいずれも同じで、黒色細砂壤土が主体で一部軽石流堆積物のブロック層が混入するものであった。また、柱痕は確認できていない。

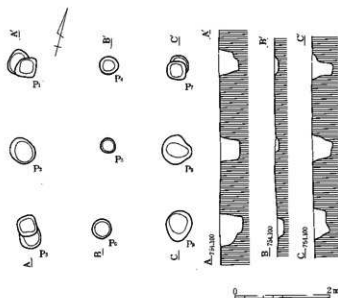
遺物は出土していないので時期不明である。

2号掘立柱建物跡（第18図、PL34）

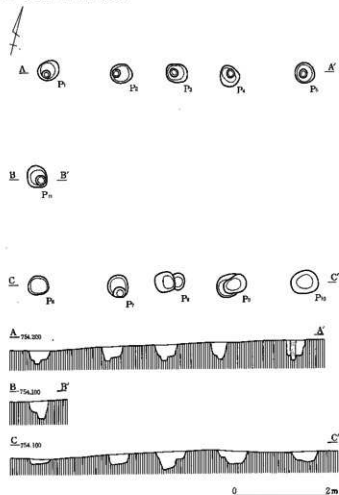
4間×2間の隅柱式のものである。P₁～P₄・P₇～P₈間が近い位置関係にあるのが特徴である。P₁₁と対になるピットはみつからなかったが、本来存在したものでしょう。

覆土は1号掘立柱建物跡に等しい。P₈にのみ幅10cmほどの柱痕が判明したが、平面では確認できな

1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



第18図 掘立柱建物跡 (1)

かった。

遺物は出土していないので時期不明である。

3号掘立柱建物跡 (第19図)

西側が調査区外となっているため、東西が2間以上、南北が3間の側柱式ものとしかえない。

P₃が最も高い標高で確認できたので、この上端を0とし深さを算出している。

覆土は観察していない。遺物がなく、時期は不明である。

4号掘立柱建物跡 (第19図)

3号掘立柱建物跡と同じ理由で、P₄の上端を0とし深さを算出している。

一見、1間×2間の掘立柱建物に見えるが、建物の西側がちょうど第1次と第2次調査の界となっており、もしかすると2間×2間の総柱式のものであったかもしれない。また、P₁~P₆が若干浅めとなっているので、1号掘立柱建物跡のことを考えれば、逆のことも考えられよう。ただし、P₁~P₄・P₅~P₆間がほかよりも広めとなっているので、1間×2間と考えるのも不思議でない。

覆土は観察していない。遺物がなく、時期不明である。

5号掘立柱建物跡 (第19図)

1間×1間を基本とするようだが、東壁のみ2間となるか、それともまたま土坑と重複するのかわからない。いずれにしても、1間×1間の割りには柱穴間が3.9m前後もあり、しかも小さな掘方しか残っていないので、壮大な建物ではなかったらしい。

深さは、P₅の上端を0とし計算している。

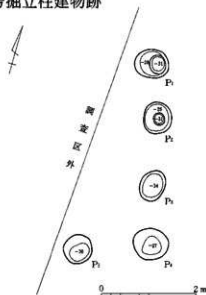
覆土は観察していない。遺物がなく、時期不明である。

6号掘立柱建物跡 (第19図)

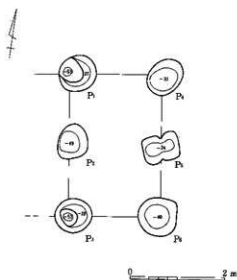
2間×2間の側柱式のものである。これも小さな掘方をとどめるだけで、壮麗な建物とはいえない。また、東西列と南北列とは、 $95^{\circ}\sim 96^{\circ}$ の角度となっており正確な正方形とはならず、さらに P_1 及び P_2 は東西列よりも若干外に飛び出していた。線対称的な不正六角形を呈している。

深さは P_2 の上端を0とし算出した。覆土は観察していない。遺物もない。

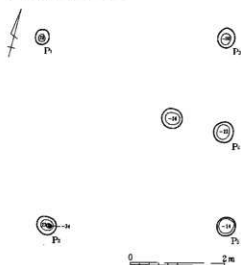
3号掘立柱建物跡



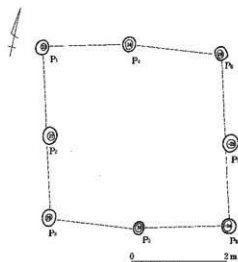
4号掘立柱建物跡



5号掘立柱建物跡



6号掘立柱建物跡



3 土坑

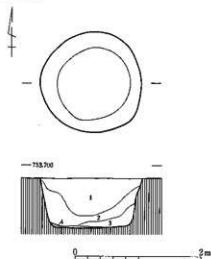
1号土坑 (第20図, PL34)

円形に掘られたもので、覆土は自然堆積をしている。ただし、4層のみ砂層が主体となっているため水性堆積物である可能性が高い。使用目的は不明である。土器片がわずかに拾えているが、古墳時代後期後半でも7世紀初頭を越えるものはない。

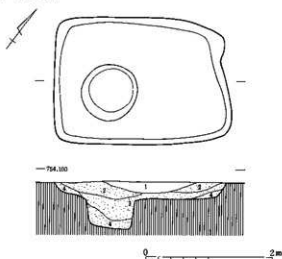
2号土坑 (第20図, PL34)

長方形に掘られたあと、さらに円形の土坑が入り込んだものである。セクションをみればわかるように、これらはひとつの遺構として考えられる。第2層以下にはブロック層が主体となり、周辺に盛土が存在していたのかもしれない。使用目的は不明である。遺物も出土しておらず、時期不明である。

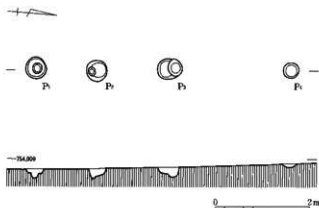
1号土坑



2号土坑



第20図 土坑



第21図 1号柵列跡

4 柵列跡

1号柵列跡 (第21図)

$P_1 \sim P_3$ が確実に遺構であり、 P_4 については定かでない。一応、柵列として判断したが、 $P_1 \sim P_3$ を掘立柱建物の側柱とすれば、それに対応するものが4号竅穴住居で壊されているという可能性もあろう。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

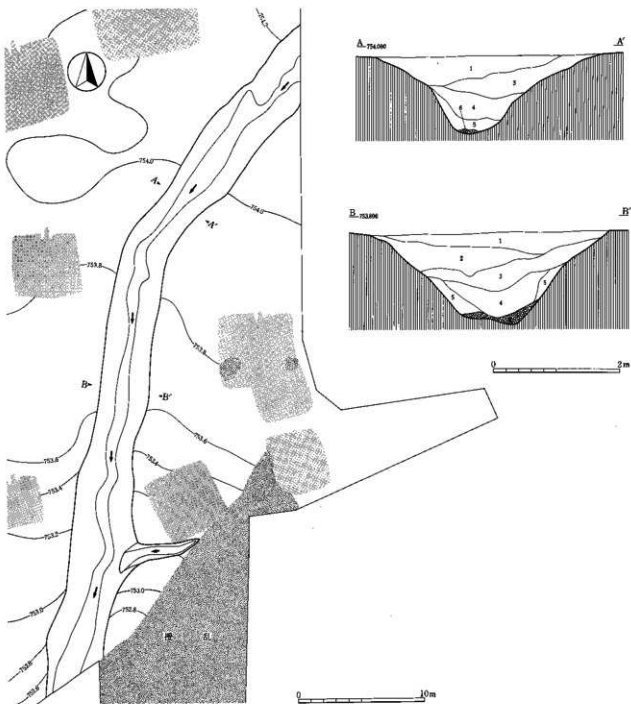
5 溝跡

1号溝跡 (第22図、PL34)

概ね箱菜研細りに落ち込んでいるが、これが人為的なものかどうかはわからない。

6層には純粋な砂礫層が堆積しており、明らかに流路として機能していることが判明しているものの、その範囲は狭く、また流砂からみれば流れが弱く一過的なものと判断した。5層にも砂の堆積が認められるが、以後自然堆積を繰り返す。1層中から古墳時代後期後半の遺物がわずかに拾えることができた。

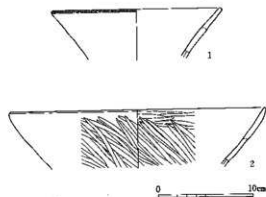
以上の内容からすれば、一過的な流れに対しこのような溝状のものが成立するのか、仮に遺構だとすれ



第22図 1号溝跡

ば古墳時代後期後半より前のものであることが確実で、これを必要とする集団が存在したのかという疑問が生じてくる。周辺の調査を行わなければ結論が出ないところであろう。

6 遺構外遺物 (第23図)



第23図 遺構外遺物

古墳時代後期後半のものが圧倒的に多いのだが、ここでは希少な弥生時代から古墳時代前期のものだけを取り扱いたい。

1は、13号竪穴住居跡の覆土から出土したもので、口唇部には縄文を付している。弥生時代中期後半のもので唯一の資料であった。

2は、1号土坑から出土したもののだが、本跡は古墳時代後期後半に属するため混入したものと考えられる。古墳時代前期の東海系の高環である。

第4節 小結

古墳時代前期末から中期初頭の集落については、これまでの銚師屋遺跡群の中には認められなかったものである。銚師屋遺跡群をさらに遡らせる結果となったが、残念ながら極めて小規模で、しかも短期のうちに終焉を迎えたとしか考えられず、住居の構造自体も一般的な集落に比べると単純極まりない。やはり銚師屋遺跡群の本当の範疇は、古墳時代後期後半以降のことなのであろう。

古墳時代後期後半の集落自体も、7世紀末葉以降のものがなく、これも短い期間のうちに終わりを遂げたムラと考えている。遺構の重複もただ一か所しか認められておらず、同様に小規模なものであったのだろう。ただし、初期の銚師屋遺跡群の様相を呈する点は興味深いものがある。これを起点にして、以後銚師屋遺跡群や周辺に広がるほかの律令期集落が成立したものと考えられる。律令期集落の初期の姿がここでも明らかとなった。

古墳時代後期末から奈良時代初頭には、南斜面に野火付古墳が構築されることになった。これが風水思想にのっったのかどうか不明だが、背後の尾根頂部には集落を形成するのがまずかったのだろう、これをもって集落は終わりを遂げ、墓域を構成することになった。

第6章 ^{まえだ}前田遺跡

第1節 遺跡の概観

佐久市・小諸市・御代田町域に位置する通称“鑄師屋遺跡群”の一部に相当する。第5章で記述した野火附遺跡及び第7章の宮ノ反A遺跡群もこれと同様で、田切り地形が発達した中でも、比較的広大な平坦面に立地するものである。

この台地は、田切り地形によって北・西・南方を囲まれ、さらに北東から南西にのびるゆるやかな低地に沿って帯状・鳥状の微高地がみられる。点々と連なるこの微高地に遺跡が存在しており、これをもって鑄師屋遺跡群と総称している。未だその範囲は不明で、所狭しと遺構が立ち並んだ状態が続いている。

この遺跡群は、かつて長野県営小田井・御影地区園場整備事業対象地区内に一部該当し、昭和59年度から昭和63年度までの5年間に約500,000㎡にも及ぶ範囲調査が実施され、内、佐久市・小諸市・御代田町を合わせて120,000㎡ほどの面的調査が行れた。調査の便宜上、小字名を利用して佐久市鑄師屋・前田遺跡（佐久市教育委員会 1985・1988 a・1988 b）、小諸市鑄物師屋遺跡（小諸市教育委員会 1988）、御代田町野火付・前田・十二・根岸遺跡（御代田町教育委員会 1985・1987・1988・1989）などに分かれているが、市町境を取り除けばこうした名称は決して適していない。なお、上信越自動車道建設にともなう調査では、佐久市内に該当することからこれを「前田遺跡」としているが、少なくとも小諸市鑄物師屋遺跡、及び、県道を挟んで隣接する宮ノ反A遺跡群（第7章所収）と同一の遺跡であると考えられよう。

鑄師屋遺跡群からは、これまで5世紀後半から6世紀初頭及び6世紀末葉の小集落も存在しており、これもまた新たな動態を指し示すものだが、敢えて遺跡の特徴ではない。7世紀後半から始まる大規模集落の出現が目を見張り、以後10世紀初頭をもって画然と姿を消す姿態、すなわち律令期に育まれた計画村落であった点が注目されている。その後、佐久市前田遺跡・鑄師屋遺跡で中世の集落（13世紀～15世紀）も経営されている。

特異視される律令期の集落については、これより南東には数多くみられるが、おそらくその東北端の集落であること、本遺跡周辺を古東山道及び令制東山道が通過したとも考えられること（一志 1956）、奈良時代以後、この内部もしくは東側に長倉駅や長倉牧などが設置されているが、その跡は錨が取りあえず見当たらないこと、実際に佐久市前田遺跡からは「長倉寺」・「長倉口」という墨書土器が認められること、並びに御代田町野火付遺跡や佐久市前田遺跡では実際に多数の埋葬馬が検出されたことなどから、これを駅戸部ないしは牧の管理に携わる集団の住まいとみる向きが強い（御代田町教育委員会 1987・1988・1989、堀 1986・1992・1998など）。

第2節 調査の概要

本来、前田遺跡は佐久市分に含まれることから、調査対象範囲は県道借宿・小諸線の両脇に存在した。ところが、園場整備事業が終了し、従来境界を使用することが困難となり区画を変更することとなり、県道借宿・小諸線から北側が小諸市分となった。これにより前田遺跡の調査対象面積は4,000㎡から2,000㎡と縮小し、小諸市分は宮ノ反A遺跡群として調査を行った。

なお、当該地はすでに圃場整備事業が終了しているため、当地は発掘調査が終了しているはずであった。実際には、昭和62年度に調査された佐久市前田遺跡C地区の西端部に相当するが、当時の事業設計から地山は削平しないとのことであり、また折からの水害で表土剥ぎをしたまま、再び埋め戻されていた。

平成5年5月6日、圃場整備事業終了後、再度表土剥ぎ作業に着手した。5月12日は、表土剥ぎの最中に遺構検出作業も行い、翌5月13日にはともに終了した。竪穴住居跡6棟・掘立柱建物跡5棟・その他が発見され、また南側の一角には浅い谷状地形が入り込み、遺構分布範囲がこれよりも南側に認められないことも判明した。

5月17日から遺構調査に着手し、5月28日には遺構配置図を作成、6月10日は航空撮影を実施した。6月11日には高所作業車をリースし、全体写真及び各遺構の完掘状態の写真撮影した。6月14日以降、竪穴住居跡の掘方の掘削も開始し、以下掘立柱建物跡及び土坑の調査を進め、7月2日にコンタ図を作成し、7月6日すべての作業が終了した。

調査日誌抄

平成5年度

- | | | | |
|-------|--|-------|-----------------------------|
| 5月6日 | 表土剥ぎ開始。 | 5月20日 | 降水が続き、新たに暗渠及び畦畔から多量の水が入り込む。 |
| 5月11日 | 周辺のU字溝から水があふれ、さっそく水害に合う。 | 5月24日 | 基準杭設定開始。 |
| 5月12日 | 遺構検出作業に着手。テント設置。 | 5月28日 | 遺構配置図作成。 |
| 5月13日 | 表土剥ぎ終了。遺構検出作業終了。
竪穴住居跡6棟・掘立柱建物跡6棟
・その他を検出。 | 6月10日 | 航空撮影実施。 |
| 5月17日 | 遺構掘り下げ作業開始。 | 6月11日 | 高所作業車リース。写真撮影実施。 |
| | | 7月2日 | コンタ図作成。 |
| | | 7月6日 | 発掘調査終了。 |



第1図 遺構配置

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第2図、PL45・47)

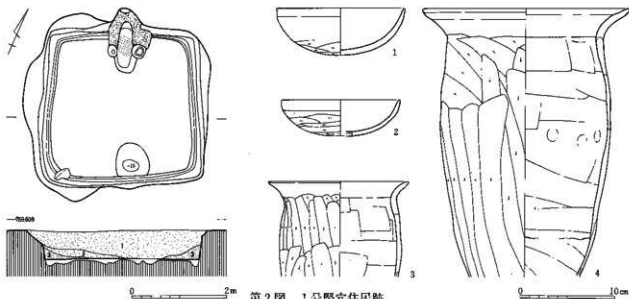
1・2の内屈口縁環、及び4の壁から7世紀第4四半期頃に廃棄された住居と考えられる。

覆土は、3層が不純物の少ない黒色砂壤土であり、以後黒色土及び軽石流堆積物のブロック層が堆積している。1・2層は、明らかに人為的な埋め戻しと考えられよう。

カマドは、床面構築後、白色粘土を主体につくられており、袖及び煙道部の一部が残存していた。焚口部には礫を立石していた様子が見取れる。

掘方は、全体に10cm程掘り込んでいるが、とくに特徴はない。梯子穴ともとれるピット、及び周溝は、掘方撤削時に見つかったものである。

遺物の出土量は少なく、とくに床面からの遺物は皆無であった。実測可能な遺物も、すべてカマドから出土したものである。3は頸部外面に粘土が付着していることから、カマド構築材に転用された可能性もあろう。また1は、一見完形のように見えるが、底部中央に内面から穿たれた小孔が認められ、併せて外面中位に焼成痕が顕著に存在するため、坏転じて甔に似た機能も想定できよう。なお、平面図に記してある南東隅にある礫は、床から10cm程浮いたところから出土した軽石の自然礫である。



第2図 1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡 (第3図、PL45・48)

1・3の存在から、9世紀第1四半期後半の公算が大きいが、須恵器坏が出土していないので第2四半期前半という可能性もあろう。

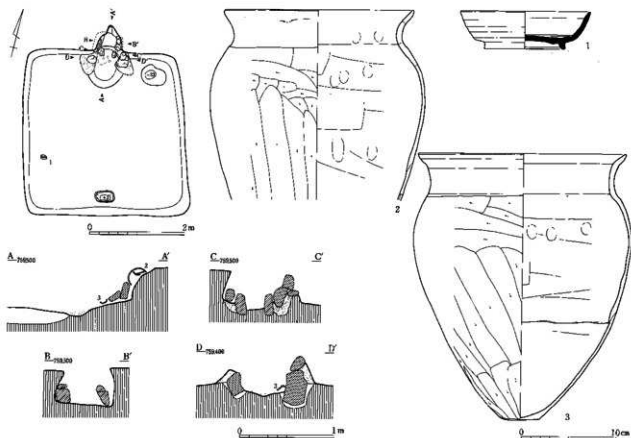
覆土は、三角堆積を基本とした6層に分類したが、いずれもブロック層ばかりが認められ、やはり人為的な埋め戻しと考えられる。

カマドは天井部を除いて良好に残っており、軽石で組まれたカマド縁片部、及びその周囲を取り囲む粘土で構成されていた。袖部には整形されたものを立石させ、煙道部は平積し、また燃焼部には面取りされた軽石を2個並べている。二つ掛けのカマドであることがよくわかる。なお、2は煙り出しから出土して

いるので煙道部に転用したもの、3もそれよりやや手前の覆土上層部から出ているので、原位置を保っていないが、煙り出しに利用されたものかもしれない。

出入口部には、上面が床から3cm程浮かせた状態で安山岩質の礫を埋め込んでいたが、これが当時の出入口施設かどうかかわからない。住居廃絶時に埋められた可能性もあろう。カマド右側にあるものは、不整形ながら貯蔵穴であろうか。

掘方はカマド部及び北西コーナーを除き、20~30cm程、比較的平坦に掘られていた。



第3図 2号竪穴住居跡

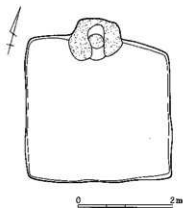
3号竪穴住居跡 (第4図, PL46)

奈良時代以降の住居跡であることは確かだが、細かな年代を推定し得る遺物が出土していないので、時期不明と言わざるを得ない。

覆土は観察していないものの、検出面から10~15cm程度で床面に達し、非常に浅めの住居跡である。掘方は、カマド燃焼部及び焚口部に認められるが、住居全体には存在しない。また、カマド以外にはとくに施設がなく、簡便な住居跡である。

カマドは、天井部を除いて良好に残っている。煙道も残存しているため、木米、煙り出し部も残存しているのだから検出できなかった。白色粘土と黒色土を混入して構築されている。

遺物は微量で、武藏甕と須恵器甕の胴部破片が出土しただけである。



第4図 3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡 (第5図, PL.46・48)

1・2の存在から8世紀前半に廃棄された住居跡であるが、5を以て第2四半期を中心とした時期ではないかと考えている。

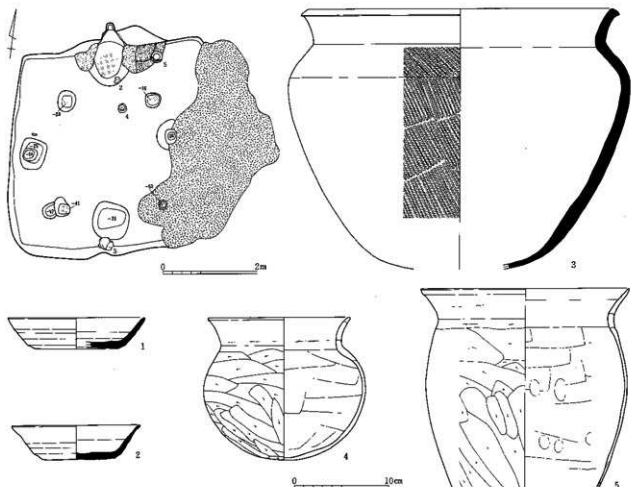
住居東側を粘土採掘坑と2号掘立柱建物跡に切られている。なお、2号掘立柱建物跡は本跡の床面まで達していない。

覆土は、カマド部分を除いて黒色土のブロック層からなり分別できない。明らかに人為的な埋め戻しと考えられる。床は、南側のみ2枚認められているため、張り替え作業を行ったことが確実だが、あわせて柱を2本柱から4本柱に設定し直している。柱については、掘方からしてともに角柱と捉えられており、柱痕が残る南側のものから見れば、4・5寸程度のものが想定できる。

掘方は、住居全体に認められ、10～15cmで平坦に掘られている。ただし、カマド燃焼部のみ深さ20cm程度となり特に深い。なお、北東コーナー付近では、明らかに白色粘土を採掘した痕跡が残っており、これをカマドに利用したものと考えられる。

カマドは、床面形成後に白色粘土で軸を形作っていた。また右袖の右側には、袖形成以後、黒褐色粘土を敷き、その上端に合わせるように5の甕を正位に置いていた。一種の貯蔵穴及び棚状施設の発見といえる。

4は完形だが、胴部下に小孔をもっており、もしかすると一般的な甕とは異なる機能を持ち合わせていたのかもしれない。5は、いわゆる貯蔵穴として機能していたのだが、胴部下半はカマド内から出土しており、貯蔵穴を作る際、胴部下半をカマド構築材に転用したものと思われる。



第5図 4号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡 (第6図、PL46・48)

本跡は、一度拡張を行っている。構築時期は不明だが、須恵器坏の形態から、9世紀第2四半期でも決して古い段階のものではない時期に廃棄されたものと考えられる。

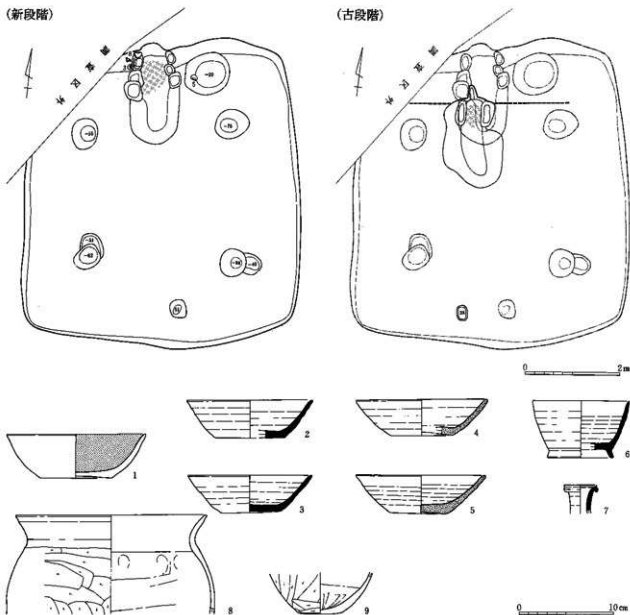
古段階のものは、床面以下のものが残存しているが、柱穴が存在していないので、正確な規模などは不明である。ただし、梯子穴とおぼしきピットが存在するし、また周辺をやや深めに掘り込む掘方の存在でおおよそ形態が判明している。それからすれば、住居の東北側だけを拡張した可能性が強いだらう。

カマドは火床部のみが残存していた。焼焼部は床面よりも15~20cm程低く、その両脇にはカマド石を置いたのだろうか、落ち込みが認められた。

出土遺物はない。

新段階の住居跡は、古段階の床に対しておよそ10cm弱盛土して床面が形成されている。覆土は、カマドを除いて3層に分類したが、淘汰がよくブロック状のものは一切認められなかった。

カマドは、石組みのものであることが判明している。石が残るのは左側一番奥であるが、掘方を見れば



第6図 5号竪穴住居跡

ともに3個の石を立石していたのだろう。なお、8はカマド構築材に転用したものであり、時期的には9世紀第1四半期を超えるものではない。

出土遺物はすべて新段階の住居跡から出土した。テンバコ1箱分が出土しているものの、形を成すものが少なく、またほとんどが覆土中から出土している。

6号竪穴住居跡（第7図、PL46・48）

4の須恵器環の内面底径から9世紀第2四半期の所産と考えているが、隣接する5号竪穴住居跡も第2四半期後半と考えているので、同時には存在しないはずである。9の口縁部、及び環では土師器が主体となる第3四半期にも一部入り込む時期かもしれない。

本跡は一度住居範囲を拡張している。旧来のものは、床の一部・カマド・梯子穴などが残存しており、おそらく全体を拡張したものらしいが、とくに北壁・東壁を格段と広げている。

旧住居跡には掘方がない。カマドは、北半が住居拡張の際、掘方として削られているので全体像はわからないものの、袖の焚口部分には礎を立石させていたらしい。出土遺物はない。

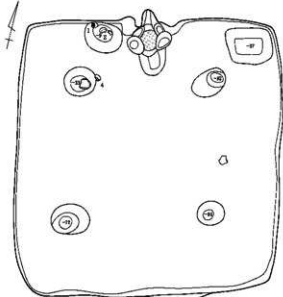
新段階のものは、旧来の床面を東・西側に広げ、逆に北・南側を一段下げて拡張し、全体には旧住居の床面より12cm前後高い位置まで貼り床し、床面を構成している。覆土は、黒色土を主体とした単層であるが、褐色土ブロックを多数含んでいるため人為的な埋没土と考えている。

カマドは、少なくとも袖部石組みのものを想定している。袖奥を地山掘り残しとし、燃焼部付近に礎石を立石させた掘り込みが認められた。また、8・9はカマド崩落土から出土しているため、本来、煙道部に転用されたものに違なからう。

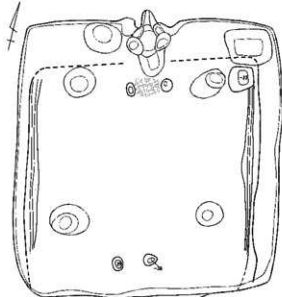
北東コーナーの柱穴には、床面と同レベルで偏平な割り石を置いていた。礎石状のものともとれるが、ひとつだけなので何とも言いがたい。

出土遺物は、カマド及び貯蔵穴以外には微量である。なお、3は明らかに混入品、4は火櫛と黒斑がなく、肉厚並びにざらついた傾向が強い軟質須恵器である。

(新段階)

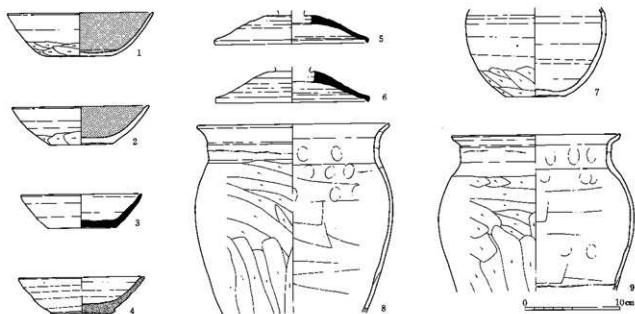


(古段階)



0 2m

第7図 6号竪穴住居跡(1)



第8図 6号竪穴住居跡(2)

2 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(第8図、PL47)

2×3間の側柱式のものである。検出レベルがもっとも高いP₁上端から深さを算出している。いずれも柱底が明瞭であり、一辺15cm内外の方形柱穴が巡っていた。時期不明である。

2号掘立柱建物跡(第8図、PL47)

2×3間の側柱式のものである。標高がもっとも高いP₁の上端を0とし深さを算出している。4号竪穴住居跡及び粘土探掘坑と重複しており、本跡がもっとも新しい。

掘方の平面形は方形を基本とし、また比較的規模も大きいし、深さもほかの掘立柱建物跡に比べればより深い。比較的壮観な建物であったに違ひなからう。柱痕はすべて判明し、幅17cm前後の方形を呈していた。時期は不明である。

3号掘立柱建物跡(第8図、PL47)

1×1間の側柱式のものである。P₁を除いては柱痕が判明し、およそ幅20cmの方形を呈していた。遺物は出土せず、時期不明である。

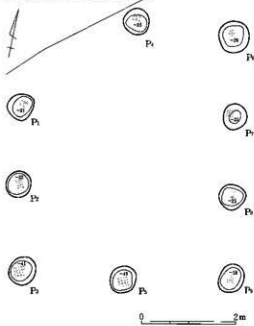
4号掘立柱建物跡(第8図)

全体を調査していないが、南側に自然流路が存在するため、おそらく1×1間のもので、南北方向を桁行としていたものと思われる。掘方は方形を基本形とし、またP₁にのみ15cmほどの平面形方形の柱痕が認められた。時期は不明である。

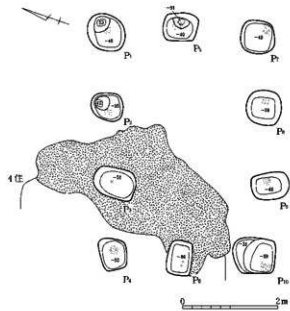
5号掘立柱建物跡 (第8図、P.L.47)

1×1間の側柱式のものである。西側の掘方にだけ柱痕が認められ、幅20cmで方形を呈していた。時期は不明である。

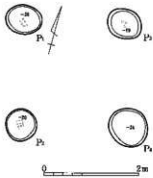
1号掘立柱建物跡



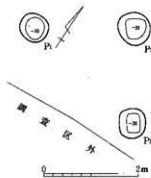
2号掘立柱建物跡



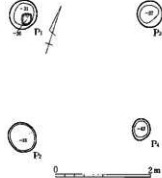
3号掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡



5号掘立柱建物跡



第9図 掘立柱建物跡

3 粘土採掘坑 (第1図)

8世紀第2四半期の4号竪穴住居跡が埋没した後に掘り込まれ、これを再度埋め戻し、以後時期不明の2号掘立柱建物跡によって切られるものである。ただし、2号掘立柱建物跡自体、10世紀以降のものでないことは、本遺跡群に存在することから確実で、したがって8世紀第2四半期から9世紀代のもと考えられる。

深さは、最高で検出面から62cmをはかり、これは住居の掘方よりも10cm程深い。また、住居跡の埋設土を掘り返したにもかかわらず、見事な採取方法で、西側から緩やかな傾斜で掘り始め、住居から外れた東側をオーバーハングさせて抉り取っていた。東壁側には白色粘土がふんだんに認められ、おそらくこうした壁体の状況を知り得た人間が行ったのではないかと考えている。この住居が、まだ完全に忘れられない内におきたものであろう。

4 土坑 (第1図)

調査区周辺には中世の遺構が存在しないため、すべて古代の遺構と考えているが、出土遺物がなく時期不明である。形態は様々だが、とくに記す内容ではない。なお、9～11号土坑には柱痕が認められ、また9号土坑と10号土坑及び10号土坑と11号土坑の軸が直角方向となっているため、掘立柱建物跡の一部である可能性もある。8号土坑や12号土坑も同様で、掘立柱建物跡の一角かもしれない。

第4節 小結

時期が判明したものは竪穴住居跡ばかりであるが、やはり古墳時代後期末から平安時代前葉のものであった。こうした状況は、佐久市や小諸市の調査と変わらず、いかにも遺跡の一端を調査したにすぎない。

ところが、今回の調査は二度目の表土剥ぎを行ったわけだが、そこには重い傷痕が残っていた。埋め戻し時に行われたのだろう重機の爪痕が方々に認められ、一部には竪穴住居跡とおぼしきものまで確認できた。発掘調査されないまま圃場整備された部分は広域に及んでいる。事業の遂行と文化財保護という難しい問題ではあるが、現地でのより慎重な対応が求められよう。

第7章 ^{みやのそり}宮ノ反A遺跡群

第1節 遺跡の概観

第6章で記述したように、本遺跡群も実際には銚師屋遺跡群の一部に該当する。小諸市銚師屋遺跡・佐久市前田遺跡と同様で、また御代田町十二遺跡も同じ微高地上に立地するものである。これから北は、現状で幅100m、深さ20mほどの田切り地形が存在し、今では「しなの鉄道」が通過している。向かい合う段丘面には下前田原遺跡群（第8節所収）が営まれている。銚師屋遺跡群の範囲は、なお拡大しつつあるが、今回調査の対象となった地点は、おそらく遺跡中心部にほど近い箇所の北端部に相当するものと思われる。遺跡群の内容については第5・6章を参照されたい。

調査対象域は、既に県営小田井御影地区園場整備事業が終了していたが、その終了時点、平成2年の段階で従前の境界の区画変更が行われ、遺跡南端の県道借宿・小諸線以北の小区を佐久市から小諸市へ、また遺跡北端の「しなの鉄道」側寄りも小諸市から佐久市へと移譲した。各章で記すように、ここでは市町単位に遺跡名称を与えており、勤労野果埋蔵文化財センターとしてもそれに融通してきた。したがって、当初とはまったく逆の形であっても、実際には小諸市側の宮ノ反A遺跡群と佐久市側の前田遺跡の両者の発掘といえるかもしれない。

ところで、区画整理事業が行われる以前、調査対象範囲のほとんどの場所を占める小諸市側では、残念ながらここを遺跡として認知しておらず、限なく園場整備事業が行われてしまった。現状で認知される宮ノ反A遺跡群は本対象地点より西側約200mの地点を東端とし、かつ南西に下る狭長な遺跡群といえる。この遺跡群は、既に宮ノ反遺跡（小諸市教育委員会 1985）や宮ノ反A遺跡群（小諸市教育委員会 1994）として法令期の集落の姿が報告されているが、本来これと同一視されるのかどうか疑問が生じる。本来、今回の対象地域のような地点は佐久市前田遺跡同様銚師屋遺跡群内部の構造であって、今のところまだ繋がりが認められない従来の宮ノ反A遺跡群と同じ目でみてはいけないうちであろう。

一方、宮ノ反B遺跡というものが、調査対象地点から東、わずか40mほどしか離れていない地点に存在した。畑2枚ほどで、区画整理事業でここは佐久市となったため今はもう消滅している。旧来、ここは佐久市との界になっているため前田遺跡との関連で考えていたらしい。とすれば、今回の対象範囲はいくら範囲が狭くとも、内容的には宮ノ反B遺跡として認知したほうが適切だったのかもしれない。

園場整備事業が行われ、あわせて周辺部が大規模に発掘調査されたが、調査対象域周辺は試し掘りされないうち整備事業が進行し、また区画整理事業を行い遺跡名の変更も余儀なくされた。我々としてもいかにように対応していいのかわからず、結果的に当時の文化課と道路公団が契約した“宮ノ反A遺跡群”という言葉をそのまま引用した。

第2節 調査の概要

周りの自動車道工事が着実に進むなか、平成5年中途、ようやく地権者の同意を受け発掘調査に対応することとなった。周辺は開場整備事業が済んでいることから大規模な発掘調査が行われているが、前節でも紹介したように、ここでは一切立ち入ることがなかった。9月1日から試掘調査を始めると、夥しい量の律令期集落の姿が露となり、全面的な調査が必要となった。

9月3日から表土剥ぎを開始した。調査対象範囲はすべて開場整備がすすんでいるので、いわゆる黒色土以上は一度除去されており、したがって始めから軽石流堆積物上面まで否応なく下げざるをえなかった。

用地内にプレハブなどの施設を設けたこと、ならびに未だ残件が存在したことなどから9月18日に第1次表土剥ぎが終了した。ちなみに、以後、プレハブ用地・残件部分を第2次表土剥ぎとしているが、調査の段階からすれば、県道伊宿・小諸線から排水路の間は11月2日にJ Vに明け渡したし、また排水路北側については11月16日以降新規のプレハブ用地として埋め戻すなど3次に分けて行った。

以前から中世の遺構が北端部に存在することが知られていたのだが、9月28日、中世の掘跡が確認され居館跡であることが判明した。以後、第2次表土剥ぎで遺構が密集することがわかった。

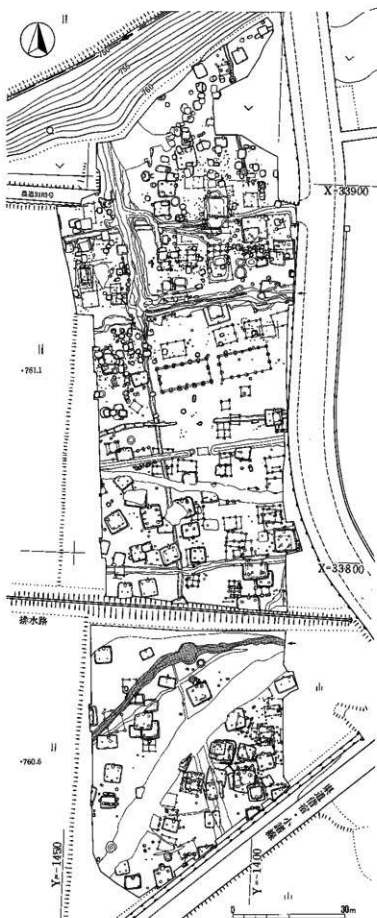
11月14日の夕方には、突如集中豪雨が到来し、発掘現場で切断したU字溝から水が溢れだした。現場全体が河川の如き状況となり、あわせてセクションベルトの崩壊や残された遺物の喪失や損壊、カマドや壁の崩落といったことも起きている。

11月20日以降、最終的に最後の第2次表土剥ぎを行った。3間×6間の掘立柱建物跡が2棟確認でき、その背後にも2間×4間の掘立柱建物跡が列をなして検出できた。以前から存在が確認できていた溝の一群は、実はこれを取り囲むもので、古代官衙跡であることが証明できた。

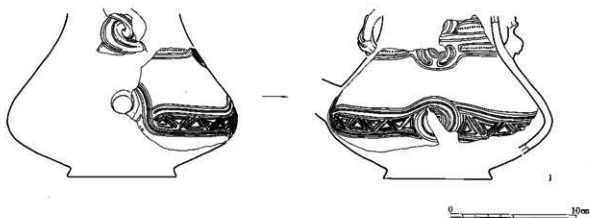
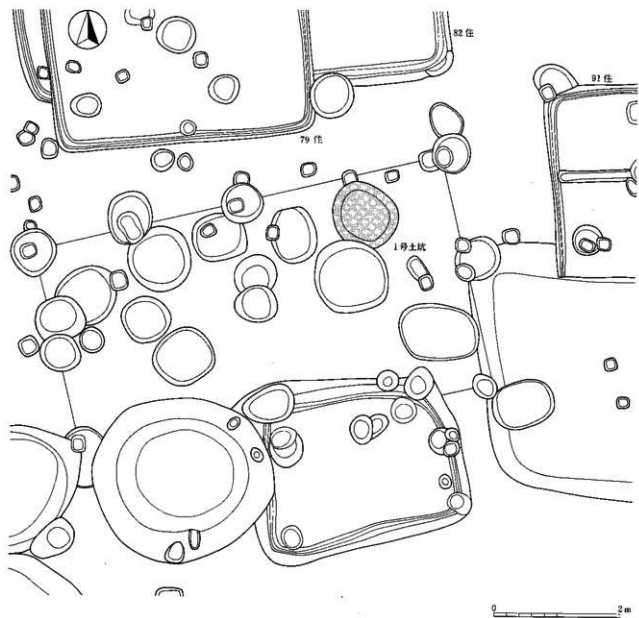
12月18日には現地説明会、12月27日には航空撮影を行い、1月6日にすべての作業が終了した。調査面積10,000㎡である。

調査日誌抄

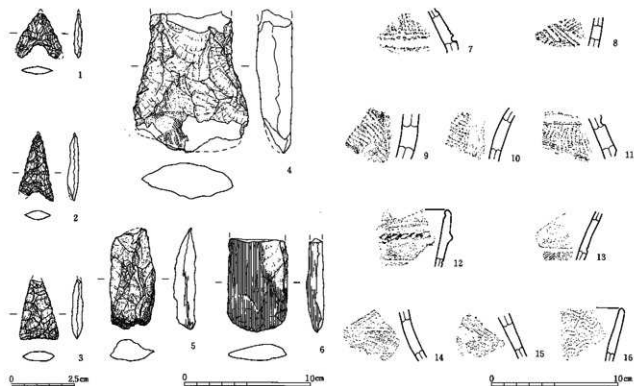
平成5年度	11月2日	原遺借宿・小諸線から排水路間の調査が終了し、J Vに明け渡す。	
9月1日	試掘調査開始。竪穴住居跡数棟を検出。	11月14日	集中豪雨のため、調査区全体が水没。ベルト・遺物などかなりの量喪失。
9月2日	試掘調査継続。竪穴住居跡を多数検出し、夥しい量の律令期集落であることが判明。	11月16日	排水路北側を埋め戻し、新しいプレハブの建設を再開。
9月3日	南隅から表土剥ぎを再開。	11月20日	旧プレハブ用地内の表土剥ぎに着手。
9月13日	作業員を投入。	11月23日	周囲を溝に囲まれた大規模な掘立柱建物跡が存在することが判明。周囲の状況からすれば古墳時代後期から奈良時代にかけての官衙跡と判断。
9月18日	一部中世の遺構が存在していることが判明。建物跡が存在することが判明。第1次表土剥ぎ終了。	11月26日	表土剥ぎ作業終了。
9月20日	基準杭設定開始。	11月30日	農道3183号線下の表土剥ぎに着手。
9月28日	中世の居館跡の存在が判明。	12月1日	第2次表土剥ぎ終了。
10月8日	排水路から農道3183号線間の残件部分の表土剥ぎ開始。	12月18日	現地説明会を開催。見学者100名。
10月12日	表土剥ぎ終了。掘立柱建物跡多数検出。	12月27日	航空撮影を実施。器材撤収開始。
10月13日	農道3183号線北側の表土剥ぎに着手。	1月6日	すべての作業が終了。
10月15日	表土剥ぎ終了。中世の遺構が密集。		



第1図 調査範囲



第2図 1号土坑



第3図 遺構外遺物

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代以前の遺構と遺物

1号土坑 (第2図)

唯一、縄文時代の遺構である。ほかにも存在するのだろうが、遺物がなく確認できていない。

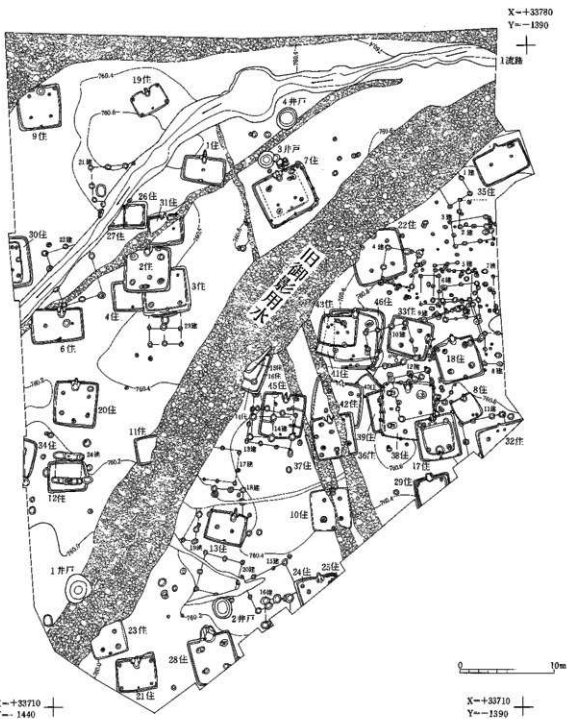
直径1.2 m前後の円形の土坑であり、深さは、現状で約30cmをはかる。若干なべ底状を呈する。覆土は観察していない。覆土中層に注口土器の破片が存在した。これ以外に遺物は出土していない。

後期前葉堀之内Ⅱ式の時期である。

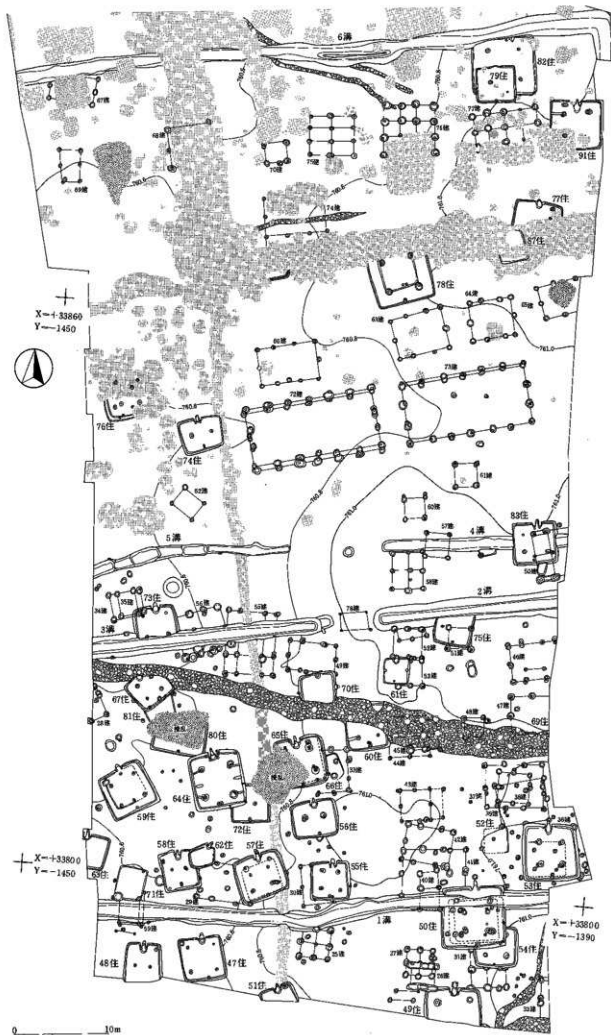
遺構外遺物 (第3図)

出土量は非常に少ない。提出した遺物を除けば、数点の土器破片が存在するに過ぎない。

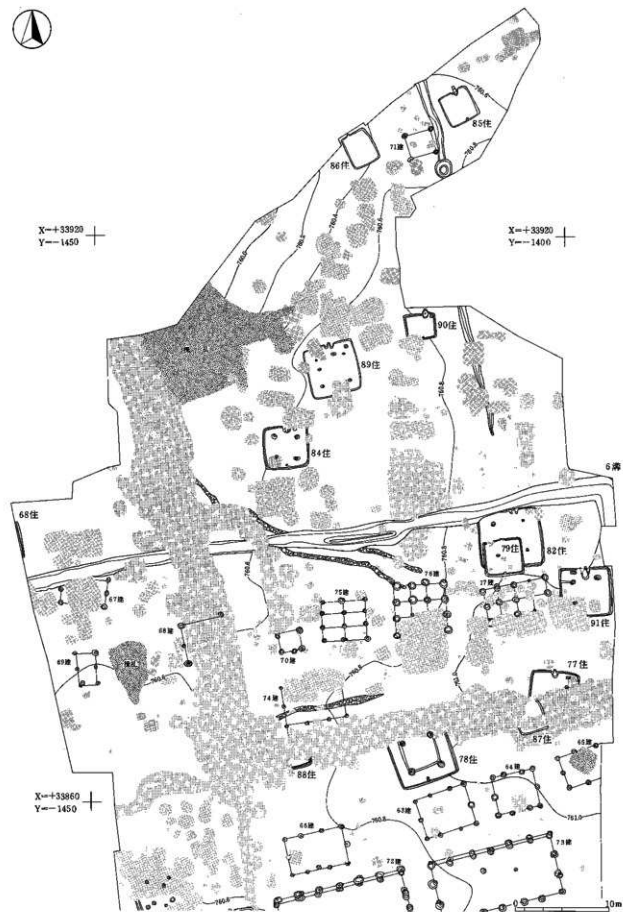
1～3は縄文時代の打製石鏃、4～6はやはり縄文時代の打製石斧である。7・8は縄文時代前期後葉の土器破片であるが型式名は不明である。9～11は縄文時代中期後葉加曾利E式から後期初頭称名寺式にかけてのものだろう。12・13は縄文時代後期前葉の堀之内式のものであるが、おそらくⅡ式の所産であろう。16は弥生時代後期後半の壘形土器の可能性が最も高いが、古墳時代前期初頭に下ることも考えられよう。



第4図 古代の遺構配置(1)



第5図 古代の遺構配置(2)



第6図 古代の遺構配置(3)

2 古墳時代後期から平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第7図、P L56)

出土遺物からみると7世紀前葉あるいは中葉とも捉えられるが、出土状況がわからず細かな時期は不明である。

覆土は、周溝部分を除き多少なりとも軽石流堆積物ないし黒色土のブロック層が混入したものであった。掘方は周囲が若干深めとなり、とくに南側が一段深かった。

カマドは、地山掘り残しの袖の一部が残存し、煙り出し部には赤色粘土を張り付けていた。カマド周辺には整形された軽石3個が床面から出土しているが、本来カマドの構築材として利用されたものだろう。住居中央には深さ53cm程の柱穴らしきものが存在する。そのすぐ南西側に軽石の白然礫が床面から2個出土している。

2号竪穴住居跡 (第7・8図、P L65)

7世紀後葉頃の住居跡である。3・4号竪穴住居跡と切り合すが、本跡がもっとも新しい。

覆土は、4層が黒色土の単純層、1・2層が軽石流堆積物と黒色土のブロック層である。掘方は周囲がわずかに深めとなり、とくに南東コーナーがさらに深めとなる。

カマドは右袖のみ良好に残っていた。袖奥は地山掘り残しとし、焚き口部には長方形に整形された軽石を置き全体を黄色粘土で覆っていた。また、煙り出し部には赤色粘土を充填している。

出土遺物のうち、5・8は貯蔵穴内に正位で埋設されていた。1は群馬県側からの搬入品と考えられる。3は、丸底甕域からの搬入品であろう。

3号竪穴住居跡 (第7・8図)

7世紀中葉の住居跡か。2号竪穴住居跡に切られ、4・5号竪穴住居跡を切っている。

覆土は、最初の堆積である7層が黒色土、つづく3～6層が軽石流堆積物・黒色土のブロック層である。掘方は、周縁部と中央部が浅く、また柱穴部分はとくに深めとなる。

4号竪穴住居跡 (第7・8図、P L65)

7世紀前葉から中葉にかけての所産である。2・3号竪穴住居跡と重複するが、もっとも古い遺構である。

覆土は、壁際に堆積する3層が黒色土であり、壁の構築材として何らかの関係があったことを想定させる。分厚く堆積する1層は、黒色土と軽石流堆積物のブロック層であった。掘方は全体に浅めだが、周縁部がわずかに深かった。

出土遺物のうち、3は明らかに有段口縁分布範囲からもたらされた土器であり、また2の土器についても佐久地方では認められないものである。

5号竪穴住居跡 (第7図)

遺物は土器破片すら出土しておらず、時期不明である。ただし、3号竪穴住居跡にその大半を切られているので、古墳時代後期後半であることには違いないだろう。

6号竪穴住居跡 (第9図、P L56)

7世紀前葉を中心とした時期に廃棄された住居である。

覆土は、4層が黒色土であり、1・2層については純軽石流堆積物・黒色土のブロック層であり、明らかに人為的な埋め戻しと考えた。掘方は、周囲がわずかに深くなり、とくに南西コーナーがより深めとなっていた。なお、カマド付近には、掘方から底部に赤色粘土を張り付けた小土坑が検出されている。

カマドは、袖を地山掘り残しとし、以後床面を形成した上で赤色粘土で覆っていた。焚き口部には軽石を置いていたのだろう、その痕跡がピットとして残っていた。燃焼部の掘方底面には黒色土が充填されていた。

7号竪穴住居跡 (第10図、P L56・65)

7世紀中葉頃に廃棄された住居跡か。住居北側を等しくしながらも、その他3方を拡張している。

覆土は、5層が黒色土、1層が黒色土ブロック層を多く混入、3層が軽石流堆積物ブロック層を部分的に混入するものである。掘方は、周縁部が一段深く、段差は明瞭である。ただし、カマド部分は掘方をもっていない。

カマドは、新旧の住居とも同じものを利用している。袖は地山掘り残し、床面形成後赤色粘土で覆ったものである。煙り出し部も同様に赤色粘土を充填していた。

2は、群馬県側からの搬入品、3・7も西からの搬入品と考えられよう。

8号竪穴住居跡 (第10図)

提示した資料だけではよくわからないが、カマドから武蔵甕の破片が出土しているので、7世紀中葉以降ということはまちがいない。また、8世紀以降でないことは確実である。孤立柱建物跡と重複しているが、その先後関係は不明である。

覆土は、5層が黒色土、ほか2層を除いて軽石流堆積物のブロック層を主体とするものである。掘方は周縁部が浅く、内部が極端に深くなるもので、その差は明瞭であった。カマドは袖を地山掘り残し→床面形成→赤色粘土被覆という順番をたどっている。

9号竪穴住居跡 (第11図、P L65)

提示した出土遺物では細かな時期はわからないが、覆土中から、7世紀末から8世紀初頭と目される群馬産の須恵器蓋の破片が出土している。

覆土は、ほかの住居跡と違い、第2層に砂の層が堆積していた。掘方は、周縁部が深く、とくに柱穴部分が深めとなっていた。

カマドは、左袖の一部が残存しており、板状の安山岩系の礫を立石させ、その外側を赤色粘土で覆っていた。

10号竪穴住居跡 (第11図)

岡化していないが、8世紀第1四半期を中心とした武蔵甕の破片が出土している。

覆土は、1層のみが純粋な軽石流堆積物のブロック層であった。掘方は周囲がわずかに深く、とくに南壁際が一段深かった。

11号竪穴住居跡 (第11図、P L66)

TK-209の新段階からTK-217古段階の須恵器が出土しているが、ほかの出土土器をみても武蔵窯や内屈口縁緑が認められないので、やはり7世紀前葉という表現が適当であろう。

12号竪穴住居跡 (第12図、P L56・66)

須恵器杯の内面底径から、9世紀第1四半期を中心とした時期と思われるが、中でもけして新しいものではない。掘立柱建物跡と重複するが、本跡の方が新しい。

覆土は、粘質の細砂壤土が堆積し、奈良時代以前の住居跡とは一見して異なっている。掘方も異質で、貼床するためだけの深さでしかない。

カマドは石袖の一部が残存していた。長方体に整形された軽石を並べ、その外側を赤色粘土で被覆するものであった。カマド内には遺物が多数残っており、住居廃絶時に祭祀が行われたことを物語っている。

13号竪穴住居跡 (第12図、P L56・66)

7世紀代の竪穴住居跡であろうが、武蔵窯の破片も出土しているので、中葉以降としておきたい。

覆土は、2層だけが黒色土のブロック層を多量に混入するものであった。掘方は周縁部が深めとなっていた。

カマドは、地山掘り残しとし、その上部及び煙り出し部に赤色粘土を被覆していた。

1の遺物は、関東地方からの搬入品と考えられるが地域は不明である。

14号竪穴住居跡 (第13図)

時期比定できる資料は少ないが、覆土中には8世紀代の武蔵窯破片が多数認められた。なお、15・16号竪穴住居跡と重複するが、16号竪穴住居跡を切り、15号竪穴住居跡とは新旧関係をつかんでいない。

覆土は、2層が軽石流堆積物のブロック層が主体となるものである。掘方は周縁部が深めとなるものである。

15号竪穴住居跡 (第13図)

本跡から出土遺物がなく、時期不明である。ただし、16号竪穴住居跡を切っているので8世紀初頭以後であることには違いない。

覆土は、黒色の細砂壤土である。

16号竪穴住居跡 (第13図)

7世紀末葉から8世紀初頭の年代が与えられよう。14・15号竪穴住居跡と重複し、もっとも古い。

覆土は、6層が黒色土、つづく5層が軽石流堆積物ブロック主体土である。

17号竪穴住居跡 (第13図、P L66)

提示していないが、回転ヘラケズリの須恵器杯が2点伴っており、8世紀中葉でも、比較的古い段階に位置するものと思われる。なお、38号竪穴住居跡と切り合い、本跡のほうがより新しい。

覆土は、3層がいわゆる黒色の細砂壤土であり、以後安定した土層が堆積している。掘方は、周縁部が高く、段を成すところに周溝状の落ち込みが存在し、そこから内部が一段下がるものであった。建て替えの可能性もあるが、カマドや柱穴は存在しなかった。

袖は、38号竪穴住居跡の覆土内に構築されているので、整形された軽石と橙色粘土でできている。また、焚き口部の天井石も崩壊した状態で残存していた。

出土遺物のうち、状況はあまりよくないが、4は煙道部に転用されたものである。

18号竪穴住居跡（第14図、P L66）

7世紀後半の住居跡である。

覆土は、5層が黒色を呈し不純物が少なく粘性の高い細砂壤土、3・4層がブロックを主体とするものである。掘方は、周縁10～20cmが高めとなり、ほかにカマド燃焼部も高めだった。

カマドは橙色粘土でつくられており、右袖には直方体に整形された軽石を埋め込んでいた。燃焼部には多角形に整形された軽石を支脚石として利用しており、7などは本来これに掛けられていたものかもしれない。

北西コーナーの柱穴脇には、整形を受けた軽石が床面から出土しているが、本来カマド石として利用されたものだろう。梯子穴右脇には、やはり床面から安山岩質の扁平な礫が出土しているものの、とくに使用痕は認められなかった。

19号竪穴住居跡（第15図、P L56・67）

武藏壘・内堀口縁環は存在せず、あわせて全体に古い様相を呈するものである。時期設定は困難だが、7世紀でも比較的古い段階以前の遺構ではないかと考えている。

覆土は、3層が黒色の細砂壤土、1層が黒色土のブロックを多分に含むものであった。掘方は存在するが、とくに特徴は認められない。カマドは、地山掘り残して袖とし、焚き口部に軽石の自然礫を置き、さらに天井部にやはり軽石の自然礫を置いて焚き口部を構成したらしい。

2はカマド構築材に転用したものか。4は、その遺存状況から貯蔵穴として機能していたものかもしれない。

20号竪穴住居跡（第15図、P L57・67）

遺物は非常に少量であったが、7世紀後半から8世紀初頭という年代を考えている。

覆土は、4層が不純物が少なく粘性の高い黒色を呈する細砂壤土、以後ブロック層が主体となるものであった。掘方は、周縁が深めだったが、とくに北側及び西側が深くなっていた。

カマドすべて白色粘土と橙色粘土の混合土からなっており、床面形成後構築し、左袖については長方体に整形された軽石を途中まで埋め込んでいた。

1は、中信地方からもたらされたものか。

21号竪穴住居跡（第16図、P L67）

7世紀後半の住居跡である。

覆土は、3層が黒色の細砂壤土、間層を挟んで1層がブロックを主体とするものである。掘方は、全体に深めだが周溝部分とカマド部分が若干浅かった。また、住居奥側が周溝部分よりも突出しているが、ここには掘方が存在せず、覆土もブロック層からなり、明らかに住居内の様相とは異なっていた。本来、棚状の施設が存在していたのかもしれない。

カマドは、地山掘り残して袖の基部を作出し、床面形成後、橙色粘土を被覆し袖を形作っている。燃焼部には、直方体に整形された軽石を支脚石として立石させていた。

2～5は、丸底甕域からの搬入品である。

22号竪穴住居跡（第16図）

初期の内屈口縁帯を伴っていることから、もっとも古くみれば7世紀中葉、若干新しくみても後葉でも比較的古い段階に納まるものだろう。なお、4号掘立柱建物跡と切り合い、本跡のほうが古い。

覆土は、壁際に堆積する4層が黒色の細砂壤土で、2層が黒色土のブロックを主体にするものであった。掘方は、住居中央部と周溝部分が一段高く、また掘方の時点で、袖の一部を掘り残していることも判明した。

23号竪穴住居跡（第16図）

7世紀代の遺構だが、その中でも比較的古い段階のものと思われる。本跡からは、提示資料以外にも出土していない。

覆土は、3層が黒色の細砂壤土で、1層が黒色土と軽石流堆積物のブロック層主体のもので、明らかに人為的な埋没土と考えられる。掘方は全体に浅めであるが、西壁及び南壁際が若干深くなっていた。カマドは壊されているものの、周囲には橙色粘土が散乱してしており、カマドの崩落土と考えられる。

24号竪穴住居跡（第17図、P L 68）

8世紀前葉の産物である。

掘方は、周縁部が深めとなっている。カマドは、一部、袖を地山掘り残しとしているが、基本的に床面形成後、橙色粘土で袖を構築している。燃焼部内には2本の多角形柱の軽石を置き、支脚石としている。P₁・P₂が本跡の柱穴だろう。

カマドの燃焼部から、4～6が一括して出土している。

25号竪穴住居跡（第17図）

遺物は出土しておらず時期不明である。ただし、24号竪穴住居跡に切られているので、8世紀前葉以前であることは確かである。

P₃・P₄が柱穴の一部と思われる。

26号竪穴住居跡（第17図）

伴出遺物から古墳時代後期のものと考えられるが、細かな時期は設定できない。なお、27号竪穴住居跡を埋め戻し、本跡を構築したものと思われる。

覆土は、ブロックを一切含まないものであった。掘方は存在するが、とくに特徴はない。カマドがなく、一般的な住居とは使い方が違うものと思われる。

27号竪穴住居跡（第17図）

出土遺物はないが、26号竪穴住居跡の建て替え前の住居と考えているので、やはり古墳時代後期の所産であろう。

覆土は、軽石流堆積物の小ブロックが主体となり、人為的な埋め戻しと考えた。住居規模・掘方・柱穴位置など26号竪穴住居跡の在り方に近い。おそらくカマドも存在しなかったものと思われる。

28号竪穴住居跡 (第18回、P L68)

8世紀中葉に廃棄された遺構である。本遺構は、一度拡張がなされている。

覆土は、いずれもブロック層が主体となっており、人為的な埋め戻しと考えられる。また3層には砂質土の堆積が認められた。掘方は中央部がやや浅めとなっていたが、周縁部が極端に浅く、これにより古段階と新段階との壁体の差を確認した。

カマドは、ほかに例をみないほど立派なもので、方形に掘り込んだ後、黒色土と軽石流堆積物のブロック層で周囲を版築し、内部に灰色粘土を充填し袖や天井部としているらしい。また、構造はわからないが、左袖の一部には橙色粘土が、両側にはビットが存在していた。

29号竪穴住居跡 (第18回)

実測可能なものはないが、土師器甕は8世紀中葉から9世紀第1四半期のものがみられ、須恵器坏では糸切り後周縁ヘラケズリするもの1点・手持ちヘラケズリするもの3点が出土しているので、8世紀後半でも、より中葉に近い時期の産物と考えられる。

本遺構は、一度建て替えを行っている。旧来の遺構の床面から10数cm上がったところに、新しく床を設定し、全体的に壁面を拡幅するものであった。カマドは、新段階のもので、燃焼部に想定される部分に長方形に整形された軽石を黒色土の上に立石するものであった。ただし、図右側については倒れていたものと思われる。焚き口部には礎を立たせるためのビットが存在していた。

30号竪穴住居跡 (第18回)

実測資料はないが、古い段階の内屈口縁環、それと武藏甕が出土しているので、7世紀中葉ないしは後半でもより中葉に近い時期と考えておきたい。

本跡は、建て替えを行った住居である。

31号竪穴住居跡 (第19回、P L57・68)

7世紀前葉以前のものである。なお、2号竪穴住居跡と重複し、本跡のほうが古い。

覆土は、2層が黒色土と軽石流堆積物のブロック層であった。掘方は全体に浅い。カマドは、地山掘り残して袖の基部とし、床面を形成した後、橙色粘土を用いて袖を形作っている。焚き口部分には、上面を調整した軽石が埋め込まれ、おそらく天井部の形態と一連のものとなっていたものと思われる。燃焼部には、整形痕のある軽石を支脚石として立石させていた。柱穴は、おそらく2本柱だろう。

32号竪穴住居跡 (第19回)

8世紀中葉から後葉のものである。須恵器坏は、残念ながら含まれていなかった。11号掘立柱建物跡と重複するが、本跡のほうが新しい。これは調査区外とのセクションで確認したことなのでまちがいない。

カマドは、焚き口部にビットを設け、左側には直方形に整形された軽石を置いていた。

33号竪穴住居跡 (第20回、P L69)

7世紀前葉以前の産物である。9・10号掘立柱建物跡と重複し、本跡のほうが古い。

掘方は、周縁が浅く、内部が深いものであったが、とくに南側の両コーナーがやや深くなっていた。カマドは、焚き口部にビットを設け、左側には整形された軽石を置いていた。煙り出し部分には白色粘土を敷き詰めており、その一部が残存していた。

覆土内には、遺物とともに整形を受けた多量の軽石が床面から浮いた状態で検出されている。多くはカマドに利用されたものと思われるが、すべて本跡に伴うものかどうかは不明である。

34号竪穴住居跡 (第20図)

7世紀後葉の時期である。土坑に切られているが、セクションからすると、南側に隣接するものと対になり、実際には大形の掘立柱建物跡になるかもしれない。

35号竪穴住居跡 (第21図、P L 69)

7世紀中葉の産物だが、武蔵甕及び内屈口縁環は一切認められなかった。したがって、より前半に近い時期のものと考えられる。

覆土は、2層を除きブロック層が主体であった。掘方は、周溝部分と住居中央部を除き深かった。

36号竪穴住居跡 (第21図)

8世紀中葉から後葉の住居跡であるが、須恵器環がなく時期設定ができない。37・42号竪穴住居跡と切り合い、本跡のほうが新しい。

覆土は、とくに変化が認められず一般的な自然堆積と考えられる。掘方は、周囲が若干深めとなり、とくに南壁側が一段深かった。カマドは42号竪穴住居跡の覆土中につくられているので、当初から床面構築後、橙色粘土で袖を形成していた。P₁~P₄が柱穴、P₅が梯子穴と考えられる。

37号竪穴住居跡 (第21図)

遺物が出土していないので時期不明だが、36号竪穴住居跡に切られているので、8世紀後葉以前のものであることはまちがいない。

4層が覆土だが、とくに変化は認められない。掘方は確認していない。P₁~P₃が柱穴だろう。

38号竪穴住居跡 (第22図、P L 70)

8世紀前半の諸様相を呈している。ちなみに、覆土中の須恵器環の底部破片をみても、回転糸切りを呈するものは1点もなかった。本跡は、17号竪穴住居跡・12号掘立柱建物跡に切られ、39・40・41号竪穴住居跡を切っている。

本跡は、柱穴が新旧2段階認められ、わずかながら壁体を拡張したものと思われる。また、二段掘り状の掘方を呈していたので、これを拡張住居の痕跡と考えれば、さらに回数は増えてくるものと考えられる。以下、新段階の住居跡のみ記述する。

覆土は、2層に黒色土のブロック層がわずかに混入していたが、全体に砂壤土が堆積しており自然的なもの判断した。掘方は、住居中央が明瞭に掘りくぼめられていたが、これを拡張住居の残骸と考えても、その時に柱穴は存在しない。掘方の一種であろうか。カマドは、地山掘り残して袖の基部を作出し、その上部に長方体に整形された軽石を立石させ、床面形成後、橙色粘土で被覆し袖を構築している。

39号竪穴住居跡 (第22図、P L 70)

1は7世紀前葉以前と考えているが、P₁から出土しており、本跡に伴うものかどうか不明である。覆土中からの遺物では、残念ながら細かな時期設定できる資料はない。なお、38号竪穴住居跡に切られ、40号竪穴住居跡を切っている。

覆土は、1・2層がブロック主体の土層であった。掘方は、北西コーナー付近がやや深めだった。

40号竪穴住居跡（第22図）

1以外には出土遺物がなく時期設定が困難だが、ヘラケズリの在り方から7世紀でも古い段階以前の所産ではないかと考えている。41号竪穴住居跡を切り、38・39・42号竪穴住居跡に切られている。

覆土は観察していない。掘方は、5～10cmの深さを有しており、比較的平坦に掘削されるものであった。カマドは北西コーナー側に位置していたものと考えられ、橙色粘土が散乱していた。

住居中央から、安山岩質の偏平な礫が床面から出土しているが、使用痕は認められなかった。

41号竪穴住居跡（第22図）

38・39・40・42・46号竪穴住居跡に切られており、重複関係の中でもっとも古いものである。出土遺物はないが、7世紀前葉以前の存在であることは疑う余地がないと思われる。

比較的大形の住居跡と考えられるが、切り合いがひどく、また西側に暗渠が存在するため、明確な平面形すら確認することができなかった。柱穴やカマドも確認していない。

42号竪穴住居跡（第23図、P L70）

7世紀後葉に廃棄された住居跡である。36号竪穴住居跡によって切られ、40・41号竪穴住居跡を切っている。

覆土は、3層が粗粒の茶褐色土、2層が軽石流堆積物ブロック主体土である。掘方は、周縁部がわずかに深めとなっていた。カマドは、41号竪穴住居跡の覆土内につくられているため、床面構築後、安山岩質の礫を袖の芯材とし、以後肌色粘土で被覆したものである。燃焼部には、軽石の自然礫を支脚石として立石させていた。梯子穴は36号竪穴住居跡のカマドによって壊されていた。

43号竪穴住居跡（第23図）

出土遺物はない。ただし、横長の平面形態をとり、あわせて2本柱となることから、7世紀でも比較的古い段階に位置付くことはまちがいない。なお、46号竪穴住居跡に切られ、44号竪穴住居跡を切っている。

覆土は2層に分層したが、いずれも細砂壤土で自然堆積と考えられる。掘方は、全体に5cm程掘り込まれていた。カマドは、本来周溝が塗切れた部分に位置するのだろうが、46号竪穴住居跡の掘方が入り込み明確に確認できなかった。

44号竪穴住居跡（第23図）

実測可能なものはないが、7世紀でも古い段階であることは確かである。住居構造から同様の時期と考えた43号竪穴住居跡に切られているのだから、これからみても確かなことだろう。ほかに46号竪穴住居跡にも切られている。

45号竪穴住居跡（第23・24図、P L57・70）

7世紀初頭に廃棄されたものか。なお、13・14号掘立柱建物跡と重複し、本跡のほうが古い。

覆土は、2層が堆積した後、ここで一度火を焚いており、焼土・炭化物層が認められた。以後、ブロック層主体の1層が堆積している。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分が高くなっていた。カマドは、地山掘り残して袖の基部を作り出し、床面構築後、焚き口部には安山岩質の自然礫を置き、内部に黒色

土・その周囲に橙色粘土を張り付けて袖を構築するものであった。間仕切り溝がみつまっているが、これは掘方で確認されたものである。

住居中央から、安山岩質の自然礫2点が出土した。ともに焼成を受けていたが使用痕は認められなかった。

46号竪穴住居跡 (第24図、P L71)

7世紀末葉から8世紀初頭に廃棄された遺構と考えられる。41・43・44号竪穴住居跡を切り、10号竪立柱建物跡に切られている。

拡張住居である。カマドの位置を変えずに三方を大きく広げている。床面レベル差は10cmにも満たない。出土遺物は、すべて新段階の住居跡のものである。以下、新段階の住居跡の記述のみ行う。

覆土は、1層だけだったが、ブロックは混入していなかった。掘方はわずかに認められる。カマドは、床面形成後、橙色粘土で袖が構築されていた。カマド周辺には、長方体に整形された軽石のカマド石が散乱していた。

47号竪穴住居跡 (第25図、P L57・71)

7世紀中葉段階に廃棄されたものと思われる。

覆土は、3層が不純物が少なく粘性の高い黒色の細砂壤土、2層が軽石流堆積物のブロックを主体的に含むものである。掘方は、住居中央部及び肩溝部が高く、またカマド燃焼部については一切認められなかった。カマドは、袖を地山掘り残しとし、以後橙色粘土で被覆する。焚き口部には、礫を置いたと思われるピットが確認されている。燃焼部には、六角柱に整形された軽石を支脚石として利用していた。

出土遺物のうち、3は丸底甕域からもたらされたものである。

48号竪穴住居跡 (第25図、P L71)

7世紀中葉でも、より前半に近い所産か。

覆土は、壁際に堆積する6層が黒色の細砂壤土、2・3・5層にブロック層が認められる。掘方は、住居中央部と肩溝部がやや高くなっており、逆にカマド部分は深めとなっていた。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作出し、床面形成後、周囲に橙色粘土を張り付け、煙り出し部に火山岩を置き、袖を形作っている。燃焼部には、五面体に整形された軽石を支脚石として置いていた。

6・7は、本来、周囲を粘土で埋設した貯蔵穴として利用されたものであろう。また、1・5は在地の土器である。

49号竪穴住居跡 (第26図、P L72)

7世紀後葉の所産である。26号竪立柱建物跡に切られているが、31号竪立柱建物跡とは不明である。

覆土は、安定した砂壤土が堆積しており自然堆積と思われる。掘方は全体に深めだが、住居中央部・肩溝部・カマド部分が高く、とくにカマド燃焼部については掘方は一切認められなかった。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作出し、床面形成後、橙色粘土で袖を構築している。先端部にはピットを設けており、おそらく礫を立石させていたのだろう。火山岩の礫がカマド南側から多数出土しているが、こうしたものがカマド石として利用されいたものと思われる。煙り出し部にも、同様に礫の利用が認められた。

遺物の出土状態については、極めて人為的な行為と見做されるが、意図は不明である。なお、11は丸底甕域からの搬入品、6は同地域の甎形土器である。

50号竪穴住居跡 (第27図、P L57・72)

7世紀後半に廃棄されたものである。54号竪穴住居跡を切り、1号溝に切られる。掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

本跡は、床面を等しくしながら、少なくとも2度に渡る建て替えを行っていることが、柱穴の位置で確認できた。

覆土は、周溝内に黒色の細砂壤土、以後いくつかの間層をおきながらブロック層が認められた。また、4層上面では一度火が焚かれており、薄い炭化物層を認めた。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分が深く、燃焼部に至っては一切存在しなかった。カマドは、地山掘り残して袖の基部とし、以後橙色粘土で被覆し袖全体を構築している。

4は有段口縁環で搬入品、5は飛鳥皿B、7・8は丸底甕域からの搬入品である。

51号竪穴住居跡 (第27図)

出土遺物がわずかで、時期設定できる資料がない。カマド内から出土した土師器甕から、7世紀代のものとしておこう。

カマドは、地山掘り残して基礎を形作った上に、燃焼部を中心としたところに黒色土を敷き、全体に橙色粘土を被覆しながら構築している。焚き口部にはビットが認められたので、先端には礫を配していたに相違ない。

52号竪穴住居跡 (第27図)

遺物が出土しておらず時期不明である。軽石流堆積物をわずかに削ったところを床面とし、また、南東隅にはカマドの残骸とおぼしき焼土が存在していた。もしかすると、ここでは唯一発見された古代末の住居跡かもしれない。

53号竪穴住居跡 (第28図、P L57・72)

7世紀末頃に廃棄された住居であろう。掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係はわかっていない。

本跡は、掘方で発見された柱穴の配置状況からして、少なくとも2度に渡る建て替えが行われたものと思われる。

覆土は、5層が黒色の細砂壤土、1層がブロック層で人為的な埋設土と考えられる。掘方は全体に深めだが、その中で住居中央部・周溝部・カマド部分が若干高くなっていた。カマドは、床面形成後、左袖に安山岩質の自然礫、右袖に調整された軽石を配し、その周囲を白色粘土で覆っている。煙り出し部には土器が置かれているが、煙突として用いられたのか、それとも単に補強材なのかかわからない。燃焼部には、六角形に調整された軽石が倒れながらも残存していた。なお、燃焼部については下部の住居跡のものも確認できた。

54号竪穴住居跡 (第28図、P L57)

土器は実測可能なものがないが、概ね7世紀中葉の所産である。50号竪穴住居跡に切られている。掘立柱建物跡とは新旧関係を把握していない。

覆土は、4層が不純物が少なく粘性の高い黒色の細砂壤土、2層がブロックを多量に含むものであった。掘方は、全体に浅めだが、住居中央部及び周溝部がさらに高かった。

55号竪穴住居跡 (第29図、P L57)

7世紀前葉以前のもと考えられる。30号掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係はわかっていない。

覆土は、2層に若干軽石流堆積物のブロックを含んでいるが、全体に安定した細砂壤土が認められ、自然堆積と捉えられる。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分が高く、取り分けカマド部分についてはほとんど認められず台状に飛び出していた。カマドは、地山を掘り残した上に橙色粘土を被覆して袖を構築していた。焚き口部にはピットを設け、右袖には長方体に整形された軽石を埋め込んでいた。

56号竪穴住居跡 (第29図、P L58・72)

7世紀中葉に比定される。

覆土は、3・4層がブロック主体土である。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分がわずかに高くなっていた。カマドは、左袖にはそれが認められなかったが、地山を掘り残し、床面形成後橙色粘土で被覆し袖を構築するものであった。支脚には7を逆転して利用している。

4は内湾口縁坏で搬入品、8は丸底甕域からの搬入品である。

57号竪穴住居跡 (第30図、P L72)

7世紀中葉に廃棄された住居跡である。29号掘立柱建物跡と重複するものの、新旧関係は把握していない。なお本跡は、掘方から旧段階の柱穴を確認し、建て替えを行ったことが判明している。

覆土は、2層が軽石流堆積物の小ブロックを多分に含むものであった。掘方は、住居中央部と周溝部が高くなるものであった。カマドは、地山をわずかに掘り残して袖の基礎とし、以後灰色粘土を被覆して袖を形作っている。焚き口部には、左に甕形土器11を、倒れているもの右に直方体の軽石を有しており、また燃焼部には黒色土を充填した後、六角形に整形された軽石を支脚石として立石させていた。

58号竪穴住居跡 (第31図、P L73)

7世紀前葉かそれ以前のもと思われる。62号竪穴住居跡に切られている。29号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は把握していない。

掘方は全体に浅く、またこれといって特徴がない。カマドは、地山を掘り残し、その上に橙色粘土を張り付けて袖とし、左袖先端には軽石が埋め込まれていた。

出土遺物のうち、5や6などは明らかに意図的な行為が読み取れる。

59号竪穴住居跡 (第32～35図、P L58・73～76)

7世紀後葉に廃棄された住居跡である。カマドは当時の生活のままだったし、北東コーナー付近には祭祀の跡らしいものが存在した。それ以外にも取り分け遺物量が多く、好材料となった。

掘方は、図面右のような構成になっている。梯子穴やカマドの残骸とおぼしき焼土も確認できているので、もしかすと拡張住居かもしれないが、柱穴が存在しないこと、ならびに新段階の梯子穴に対して掘方を気にするような住居がこれまでなかったことから、これを二段掘り特有の存在とみて住居の新旧関係は考えなかった。

カマドは、貼床をした後に橙色粘土で袖を作出し、焚き口部には直方体に整形された軽石を配し、さらに天井部には土師器甕を連結させてカマド本体としていた。カマド内には2個の土師器甕が掛かり、右側が括り付けの小形甕、左側が移動可能な大形甕であった。支脚は存在していない。

北東コーナーからは、祭祀の場所であろうか、長方体に整形された軽石の上に数点の土器が乗せられて

いた。なおこの時、9の須恵器蓋は身として利用されており、その南から出土した10の須恵器蓋もまた身として利用されていた。

14・15はいわゆる飛鳥の土器。37～40は丸底甕域からの搬入品である。

60号竪穴住居跡 (第35図)

7世紀前葉以前の所産と思われる。

覆土は、3・4層に黒色土のブロック層を多分に含んでいた。掘方は、住居中央部と周溝部が一段高いものであった。

南西コーナーの柱穴近くには、整形を受けた軽石製のカマド石が床面から5cm程浮いた状態で出土している。

61号竪穴住居跡 (第36図)

実測可能な土器はない。坏片は一切認められず、数片の鑿破片から読み取るしかないのだが、それでも7世紀代としかいいようがない。52・53号掘立柱建物跡を切って構築されている。

覆土は、2層が黒色の細砂壤土である。掘方は浅く掘られており、またとくに特徴は認められない。カマドは、掘立柱建物柱跡の覆土中につくられているため、すべて橙色粘土で構築されている。焼き口部には調整された軽石を配したと思われる、それらが散乱していた。

62号竪穴住居跡 (第36図、P L76)

I以外には時期決定できる資料がなく、細かな設定は困難である。ヘラケズリの状態からすれば、7世紀段階においてもそれほど新しいものとは思えないのだが、取り敢えず7世紀代としておく。なお、58号竪穴住居跡を切っている。

掘方は全体に浅く、また特徴も見当たらない。カマドは、焼き口部左に直方体の軽石、右に四角錐の自然の軽石を置き、袖から煙り出し部については橙色粘土を敷設している。燃焼部には、六角柱の軽石を支脚に利用していた。また、その下部には黒色土を充填した小土坑が存在した。

63号竪穴住居跡 (第36図、P L76)

遺物量は少ないが、提示したものの以外に、直立可能な土師器甕や7世紀中葉特有の坏蓋模倣坏などが出土している。住居の平面形態が横長になると予想されることもあわせて、7世紀中葉頃の所産と考えておきたい。

覆土は、4層が黒色の細砂壤土であり、3層が見事なブロック層で人為的な埋設土と思われる。掘方は存在するが、特徴はない。カマドは、地山を若干掘り残して袖の基部とし、その上部に橙色粘土を張り付け袖全体を構成している。

64号竪穴住居跡 (第37図、P L58)

7世紀末葉から8世紀初頃にかけて廃棄された住居である。72号竪穴住居跡を切って構築されている。

掘方は、住居中央部と周溝部が高く、取り分け東側面コーナー付近がとくに深かった。カマドは、地山を掘り残した上に橙色粘土を張り付け袖とし、先端部にはピットが設けられ礫を配していたものと思われる。また内部には六角柱に整形された軽石を埋め込み、袖両端脇には支柱痕が認められた。柱穴は、掘方はそれなりに大きいのだが、柱自身は小規模で、しかも角材が予想される。

出土遺物のうち、14は意図的な行為であり、しかもその上に礫で蓋をしたような恰好になっている。また6は搬入品と考えているが、少なくとも飛鳥地方ないしはその影響力を強く受ける地域ではない。

65号竪穴住居跡（第38図、P L77）

7世紀末葉から8世紀初頭の所産である。66号竪穴住居跡を切って構築されていることは確かだが、33号獨立柱建物跡との新旧関係は把握していない。

なお本跡は、掘方から旧段階の住居跡の柱穴が確認され、同一の床面レベルでカマド位置を変えずに、三方の壁を拡張していることが判明した。

覆土は、5層が黒色の細砂壤土であり、その他は全体に粗粒であるが夾雑物をほとんど含まない。掘方は全体に深い、住居中央部と周溝部が若干浅い。またカマド部分には、黒色土を充填した小土坑が存在した。カマドは、この小土坑の上に構築されており、基本的には橙色粘土でつくられ、煙り出し部まで完全に残っていた。袖部には調整された軽石と土器破片を補強材として挿入させていた。内部には14を逆位にして支脚に利用していた。袖両脇には角柱材用の支柱痕が認められる。柱穴の柱自体は小さく、しかも角柱が想定可能である。古段階のものも同様である。

66号竪穴住居跡（第38図）

出土遺物はないが、65号竪穴住居跡に切られているので7世紀代以前の住居であることは確かである。

掘方はないが、堅緻な床面が検出できた。また、軽石流堆積物上面を床とし、一般的な住居とは性格が違うものと考えられる。

67号竪穴住居跡（第39図、P L77）

提示された遺物では細かな時期はわからないが、4・5の胎土は7世紀後葉以後には認められないもので、やや不安定ながら6についても直立可能なものである。したがって、7世紀中頃前後の時期と広く捉えておきたい。なお、浅い81号竪穴住居跡に切られて構築している。

掘方は、住居中央部と周溝部が高くなっていた。カマドは、燃焼部が残るのみで橙色粘土が散乱している状態であった。なお、2を正位の状態で支脚に利用していた。

7は、丸底甕域からの搬入品である。

68号竪穴住居跡（第39図）

当初、中世の竪穴建物跡として調査したのだが、覆土が異なること、規模が大きいこと、掘方を有することから、途中からこれを竪穴住居跡として認定替えを行った。

出土遺物がなく、時期不明である。

69号竪穴住居跡（第39図）

遺物が出土していないので時期不明である。

左側に認められる出っ張り部分に橙色粘土が認められ、おそらくこれがカマドになるものと思われる。小形の住居であろう。

70号竪穴住居跡（第40図、P L77）

提示資料以外では、土器器甕は武藏甕が主流だが、古墳時代的な名残を呈するものも少量あり、須志器

環では明らかに8世紀代の口縁が外反するものが出現している。したがって、本跡を8世紀初頭に設定したい。

覆土は、2層及び柱穴内の4層にブロック層が数多く認められた。掘方は、住居中央部と周溝部が全体に高い。カマドは、橙色粘土が散乱するのみで、完全に崩壊したものと思われる。右側に存在する火山岩は、カマド石として利用されたものか。

1は、意図的な廃棄の行い方である。

71号竪穴住居跡（第40図）

提示した以外には数点の破片しかなく、時期の詳細は不明である。7世紀代としておきたいが、直立可能な2の底部からすれば少なくとも後葉以後のものではない可能性が高い。なお、59号掘立柱建物跡及び1号溝に切られている。

覆土は、すべて黒色の細砂壤土である。掘方は、全体に住居中央が高めだった。図面上方にみられる出っ張り部分に橙色粘土が散乱しており、これがカマドの残骸と考えられる。北東コーナー付近には貯蔵穴が認められ、周りの床面と同じレベルで1が正位の状態で置かれていた。本来、1は口縁部まで残存していたのだろうが、床面が浅いため圓場整備の段階で削られてしまった。

72号竪穴住居跡（第40図、P L77）

提示した以外の資料はごくわずかだが、およそ7世紀後葉の所産と思われる。なお、64号竪穴住居跡に切られている。

覆土は、2層が黒色の細砂壤土、1層が軽石洗堆積物のブロック層である。掘方は、住居中央部・周溝部・本来カマドが存在したと思われる図面上部が高くなっていた。

1・2とも、須恵器口縁部が床面及びピット内から完形で出土し、やはり意図的な行為が読み取れる。

73号竪穴住居跡（第41図、P L77）

提示した資料以外では、武藏甕が一定量混入しており、したがって7世紀後半代としておきたい。34・35号掘立柱建物跡及び3号溝に切られている。

覆土は、2層に分けられたがともに粗粒で、第1層には黒色土のブロック層が含まれていた。掘方は、住居中央が方形基段状に盛り上がっていた。カマドは、地山を掘り残し袖の基部を作出し、床面形成後、焚き口部に直方体に調整された軽石を配し、以後橙色粘土で被覆するものであった。

10・11は、丸底甕域からもたらされたものである。

74号竪穴住居跡（第41図、P L58・78）

提示した資料では詳細時期は不明であるが、全体の遺物をみても武藏甕や内屈口縁環は一切認められなかった。住居の平面形態が横長となっており、しかも2本柱であることから、少なくとも7世紀中葉を越えることがないとみおきたい。

覆土は、2・4層にブロック層が認められる。掘方は、住居中央部とカマド部分が高くカマド燃焼部については一切認められなかった。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作りだし、貼床した後、橙褐色粘土を張り付け袖全体を形作っている。焚き口部には、礎を埋め込むためのピットが確認された。

75号竪穴住居跡（第42図、P L78）

遺物は非常に少なく、唯一土師器鉢口縁1点のみ参考資料となった。これだけでは時期決定ができないので、取り敢えず7世紀代としておきたい。なお、51号掘立柱建物跡及び2号溝によって切られている。

覆土は、すべてブロック層からなり人為的な埋め戻しではないかと考えた。掘方は全体に浅めだったが、周辺がわずかに深くなっていた。

76号竪穴住居跡（第42図、P L78）

1は、須恵器瓮の模倣品であることから、7世紀後半以降の存在といえる。

本跡は、掘方から古段階の住居跡を確認した。柱穴らしきものも確認したが、中世の遺構と絡むため繋がりがよくわからず、したがって住居規模すら不明のままである。

77号竪穴住居跡（第43図）

7世紀前葉を中心とした所産である。

カマドは、地山を掘り残し、橙色粘土を張り付け袖を構築している。なお、2は有段口縁環で搬入品である。

78号竪穴住居跡（第43図）

7世紀前葉に廃棄された遺構と考えられる。

掘方から、拡張前の住居跡を確認した。

新段階の住居跡の覆土は、3層が黒色の細砂壤土、ほかがブロック層である。掘方は存在するものの、浅めで、また特徴がない。旧段階の掘方は一般的のもので、住居中央部が高くなっていた。

2は、比企型環で搬入品である。

79号竪穴住居跡（第44図）

9世紀第2四半期後半から第3四半期にかけての所産である。82号竪穴住居跡を切って構築されている。

覆土は暗褐色の細砂壤土、掘方は認められていない。3～4はカマドから出土しているので、木来煙り出し部に利用されたものだろう。2は軟質須恵器で、黒斑をもたないものである。

80号竪穴住居跡（第44図）

提示資料以外には10片程の土器破片しか出土しておらず、詳細な時期決定はできない。取り敢えず7世紀前葉を中心とした段階としておこう。なお、64号竪穴住居跡に切られている。

掘方らしきものはなく、1～2 cm程度の貼床が認められただけである。

81号竪穴住居跡（第44図）

遺物がなく時期不明である。67号竪穴住居跡を切っている。

覆土は暗褐色の細砂壤土が堆積している。掘方は存在するが、これといって特徴は見当たらない。柱穴やカマドなども存在せず、一般の竪穴住居とは性格が異なるのか、それとも古代末の住居なのかどちらかであろう。

82号竪穴住居跡 (第45図、P L 78)

6世紀後葉に廃棄されたものか。79号竪穴住居跡・6号溝に切られている。

覆土は、3層が黒色細砂壤土・2層が暗褐色細砂壤土・1層が黒色土ブロック主体土である。掘方は存在するが、冬期のため観察不能であった。カマドは、橙色粘土を袖とし、先端に長方体に調整された軽石を埋め込み、その前方には天井石の崩落と思われる軽石が散在していた。内部は多角柱の軽石を支脚に利用するものであった。

出土遺物のうち、7～9は奈良時代のものである。どうしてこのようなものが出土してしまうのか不明だが、虚言なく報告しておこう。

83号竪穴住居跡 (第45図、P L 79)

7世紀第4四半期に廃棄された住居跡である。50号掘立柱建物跡及び4号溝に切られている。

覆土は、3層が黒色の細砂壤土、2層は純粋な黒色土のブロック層であり人為的な埋め戻しと考えられる。掘方は存在するが、冬期であるがために図化することができなかった。カマドは、地山を掘り残し、その上に橙色粘土を被覆しており、先端には礎を埋め込むためのビットを設けていた。

84号竪穴住居跡 (第46図、P L 59・79)

6世紀後葉段階の産物か。

覆土及び掘方は観察していない。カマドは、地山を掘り残し、以後橙色粘土を張り付けて袖とし、焚き口部には、左側に調整を受けた軽石・右側に安山岩質の自然礎を埋め込んでいた。また多角形に整形された軽石を支脚石として利用したらしいが、焚き口部左側に移動していたものと思われる。

85号竪穴住居跡 (第46図)

6世紀後葉から7世紀前葉のものと思われる。

覆土及び掘方は、冬期のため観察不可能だった。袖は橙色粘土に換るものである。

86号竪穴住居跡 (第46図)

遺物がなく時期不明である。ただし、橙色粘土が散乱するカマドの痕跡を残しているので、6世紀から10世紀までの間の遺構であることはまちがいない。周辺の遺構から考えるなら、6世紀後葉から7世紀前葉の竪穴住居跡である公算が大きい。なお、覆土と掘方の観察は行っていない。

87号竪穴住居跡 (第46図)

遺物が出土しておらず、時期はまったく不明である。なお、覆土及び掘方の観察は行っていない。

88号竪穴住居跡 (第46図)

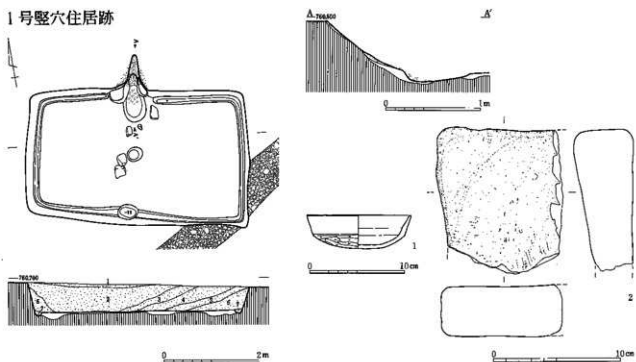
遺物が出土しておらず、時期はまったく不明である。なお、覆土及び掘方の観察は行っていない。

89号竪穴住居跡 (第47図、P L 59)

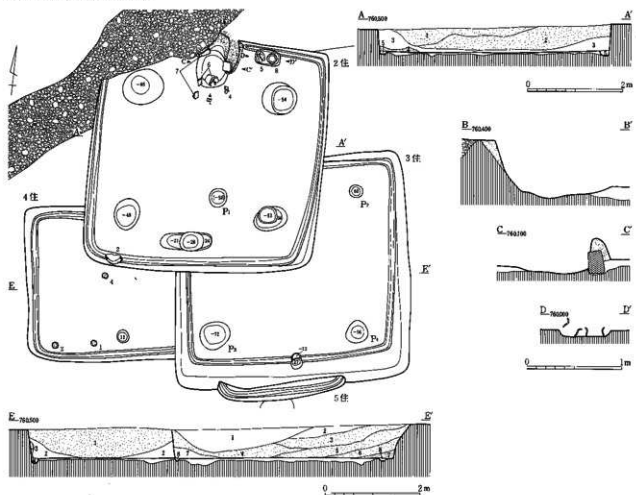
7世紀前葉以前の所産と思われる。

覆土及び掘方は冬期厳寒中の発掘のため、観察不能であった。カマドは、地山を掘り残し、薄く橙色粘土を張り付け袖とするものであった。

1号竪穴住居跡

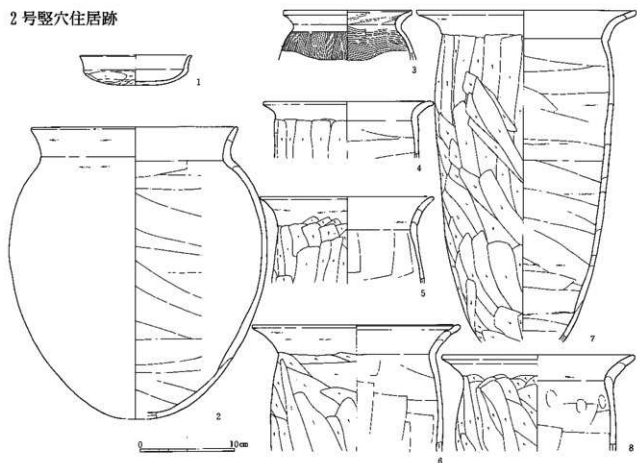


2・3・4・5号竪穴住居跡

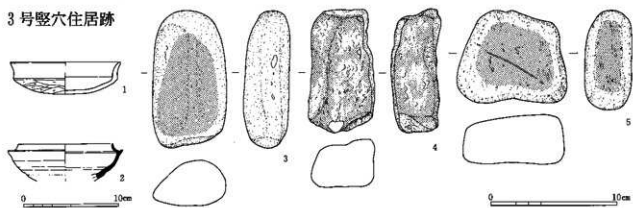


第7圖 竪穴住居跡(1)

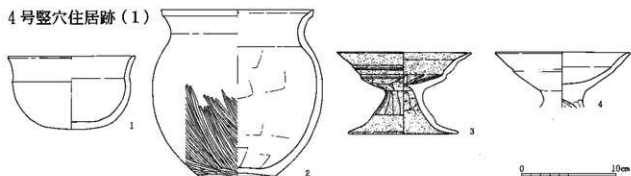
2号竪穴住居跡



3号竪穴住居跡

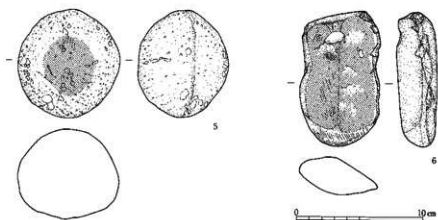


4号竪穴住居跡(1)

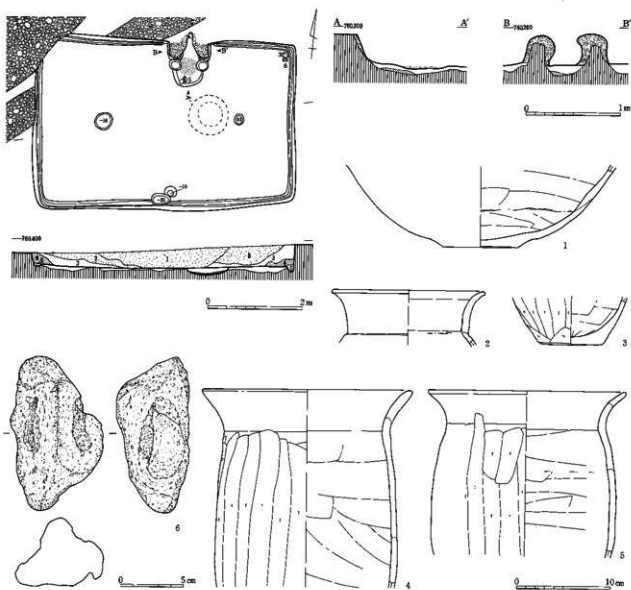


第8图 竪穴住居跡(2)

4号竪穴住居跡(2)

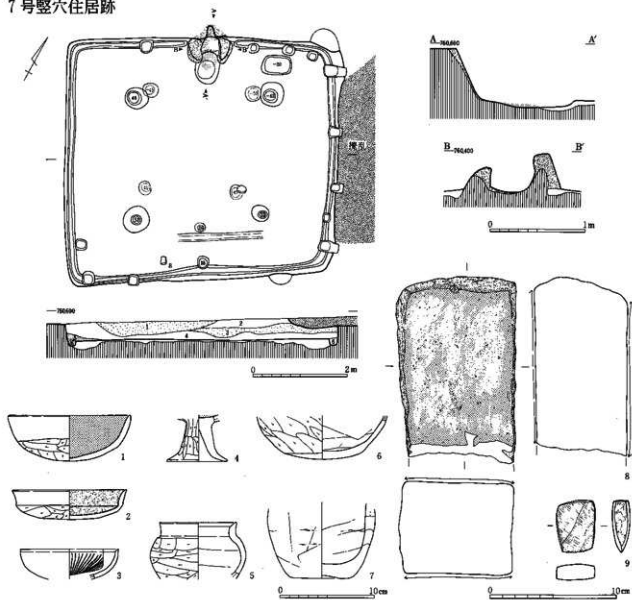


6号竪穴住居跡

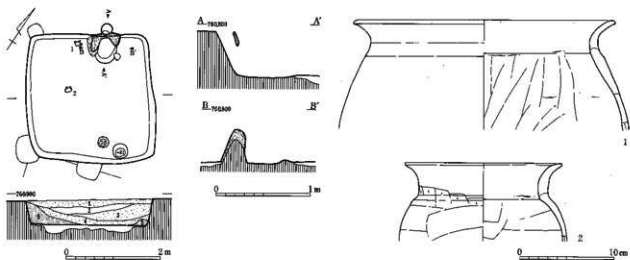


第9図 竪穴住居跡(3)

7号竖穴住居跡

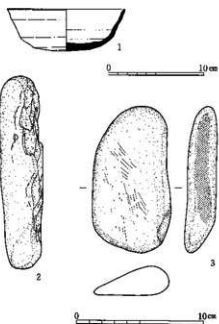
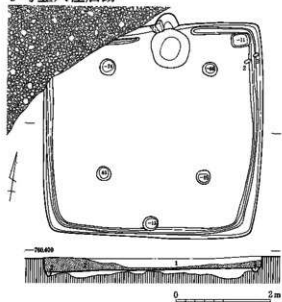


8号竖穴住居跡

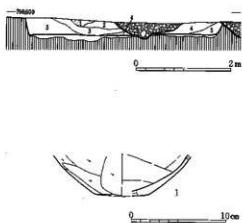
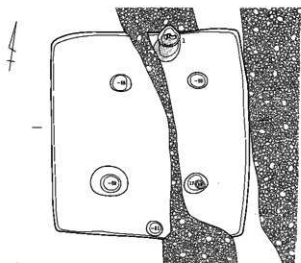


第10図 竖穴住居跡(4)

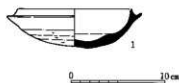
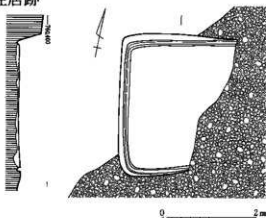
9号竪穴住居跡



10号竪穴住居跡

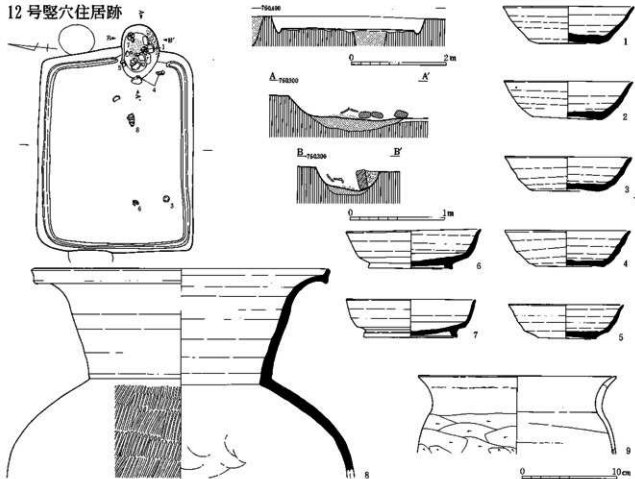


11号竪穴住居跡

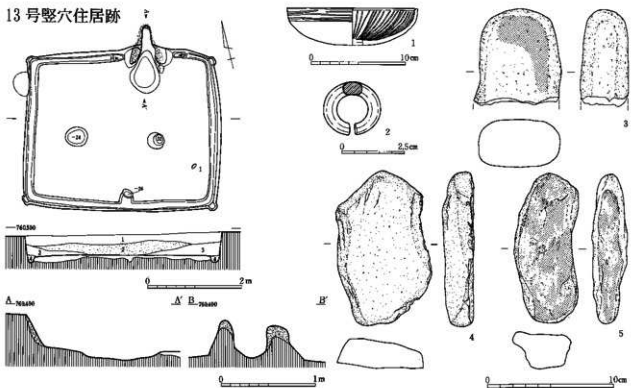


第11図 竪穴住居跡 (5)

12号竖穴住居跡

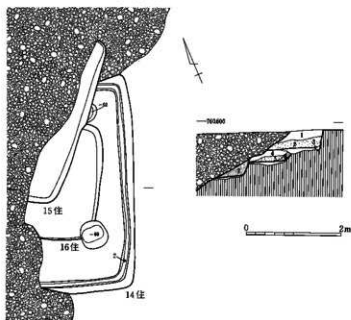


13号竖穴住居跡

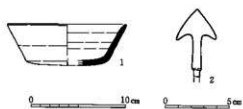


第12图 竖穴住居跡 (6)

14・15・16号竪穴住居跡



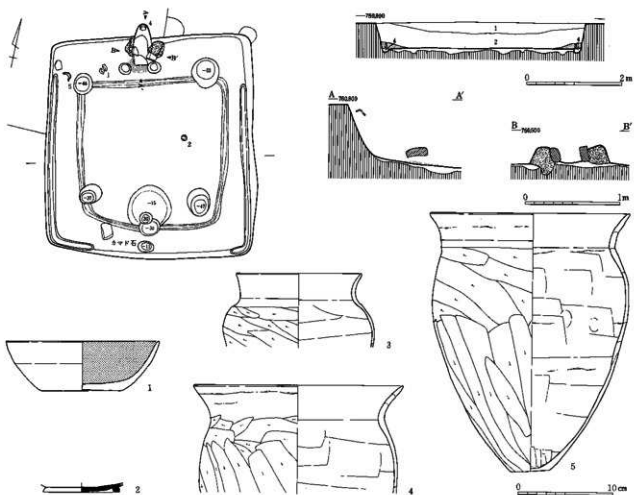
14号竪穴住居跡



16号竪穴住居跡

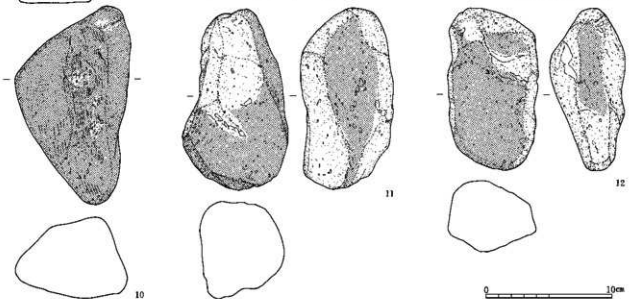
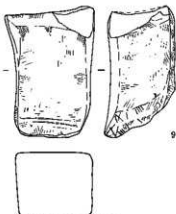
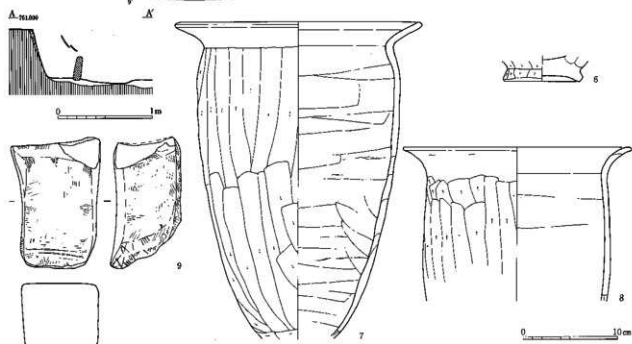
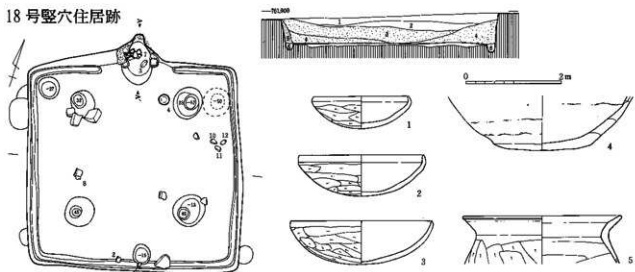


17号竪穴住居跡



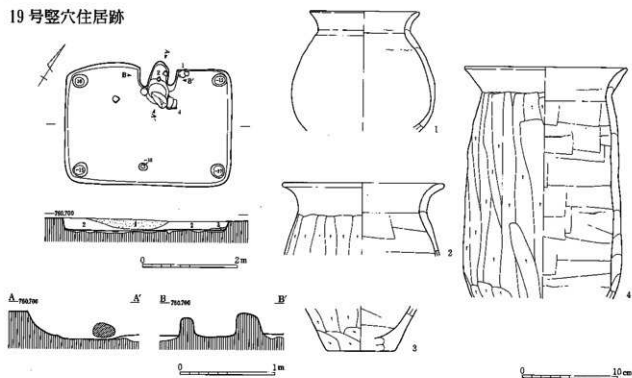
第13図 竪穴住居跡 (7)

18号竖穴住居跡

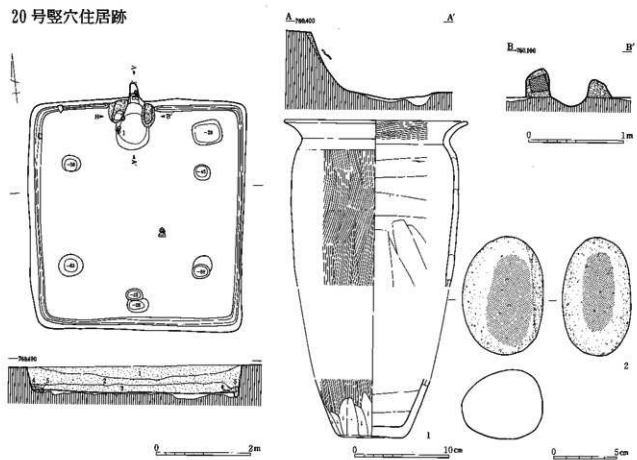


第14图 竖穴住居跡(8)

19号竪穴住居跡

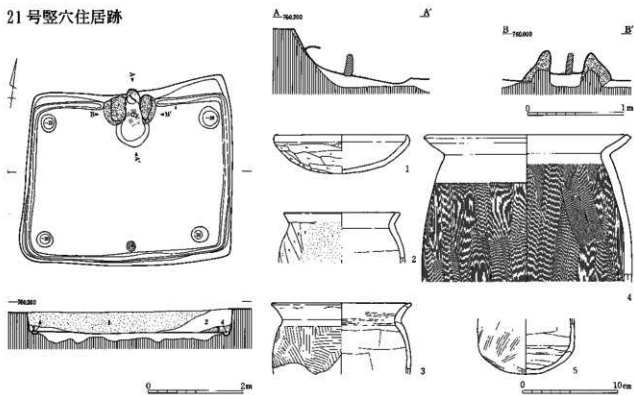


20号竪穴住居跡

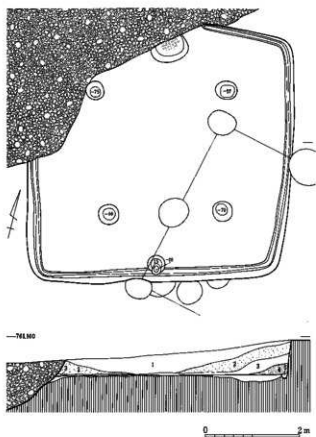


第15図 竪穴住居跡 (9)

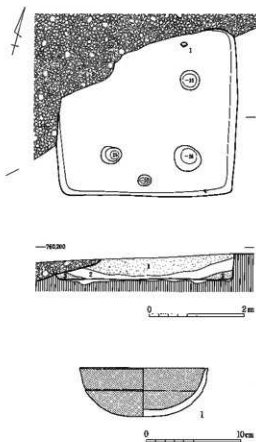
21号竖穴住居跡



22号竖穴住居跡

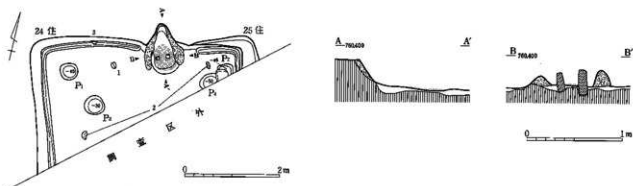


23号竖穴住居跡

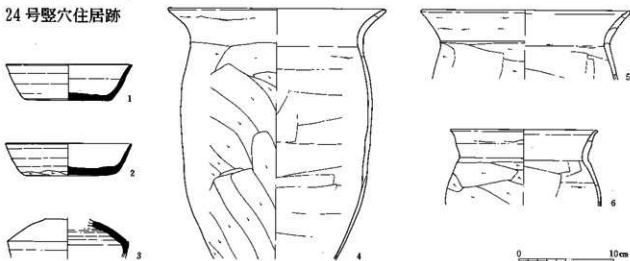


第16图 竖穴住居跡 (10)

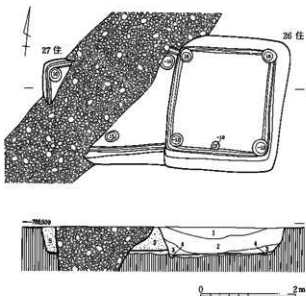
24-25号竪穴住居跡



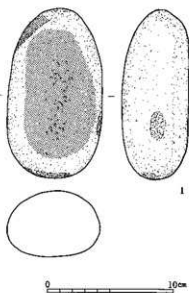
24号竪穴住居跡



26-27号竪穴住居跡

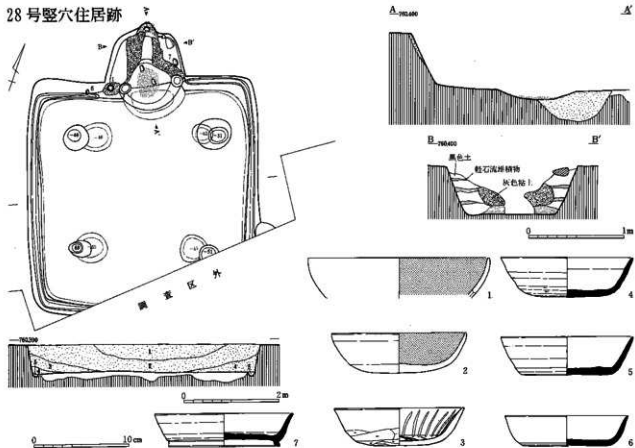


26号竪穴住居跡

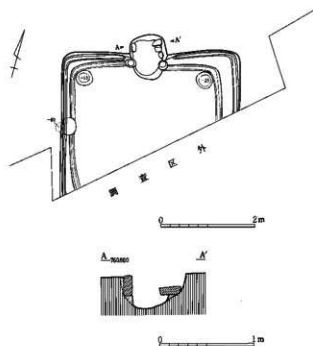


第17図 竪穴住居跡 (11)

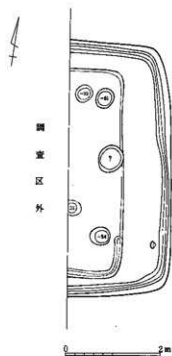
28号竖穴住居跡



29号竖穴住居跡

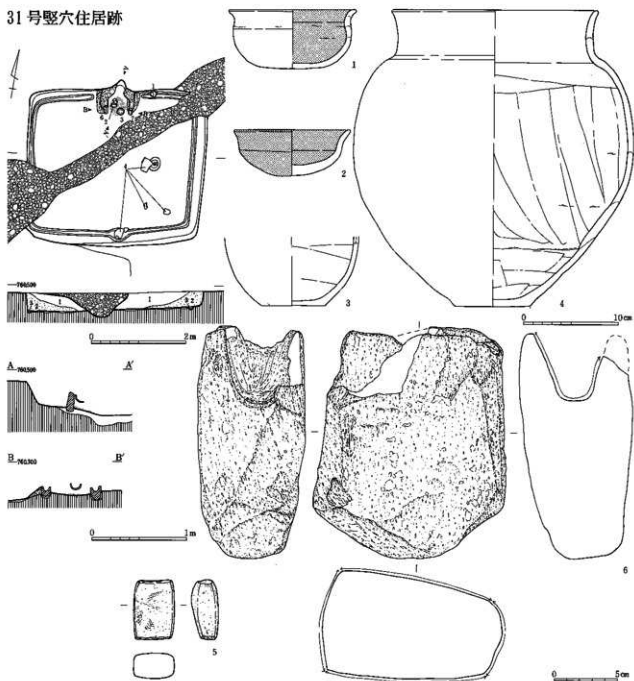


30号竖穴住居跡

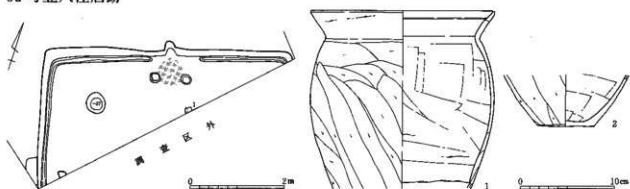


第18回 竖穴住居跡 (12)

31号竖穴住居跡

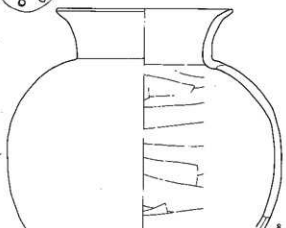
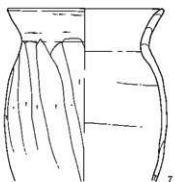
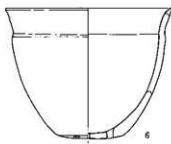
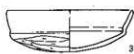
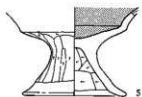
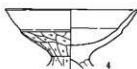
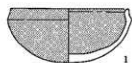
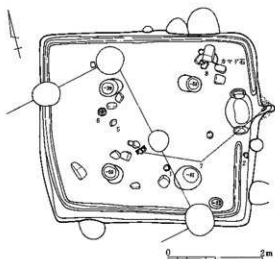


32号竖穴住居跡



第19図 竖穴住居跡 (13)

33号竖穴住居跡



0 2m

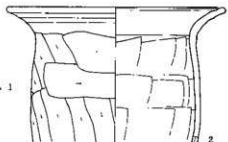
0 10cm

34号竖穴住居跡



調査区外

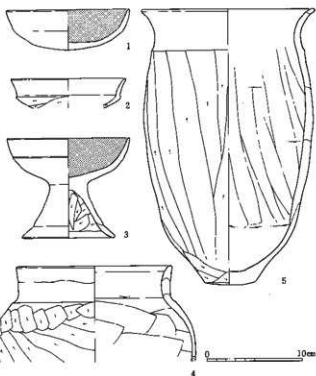
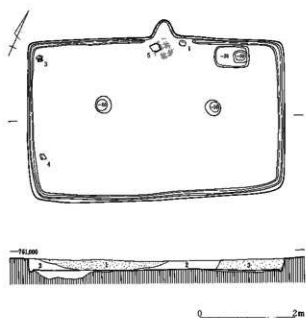
0 2m



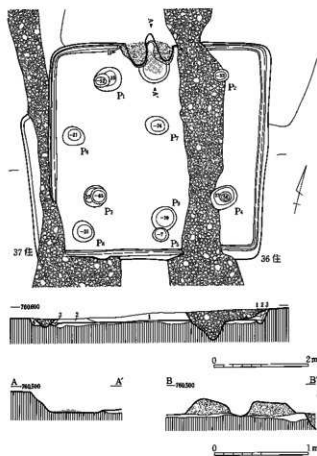
0 10cm

第20図 竖穴住居跡 (14)

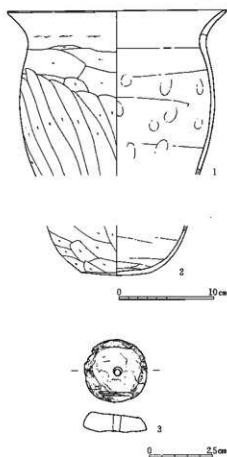
35号竪穴住居跡



36・37号竪穴住居跡

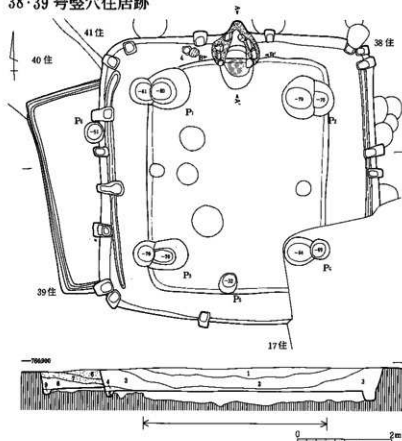


36号竪穴住居跡

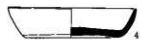
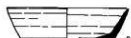
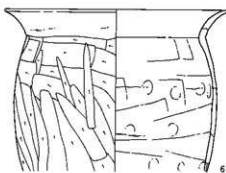
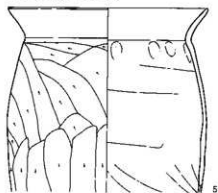


第21図 竪穴住居跡 (15)

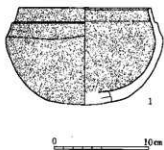
38・39号竪穴住居跡



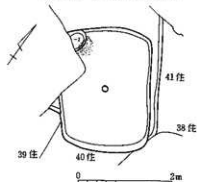
38号竪穴住居跡



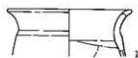
39号竪穴住居跡



40・41号竪穴住居跡

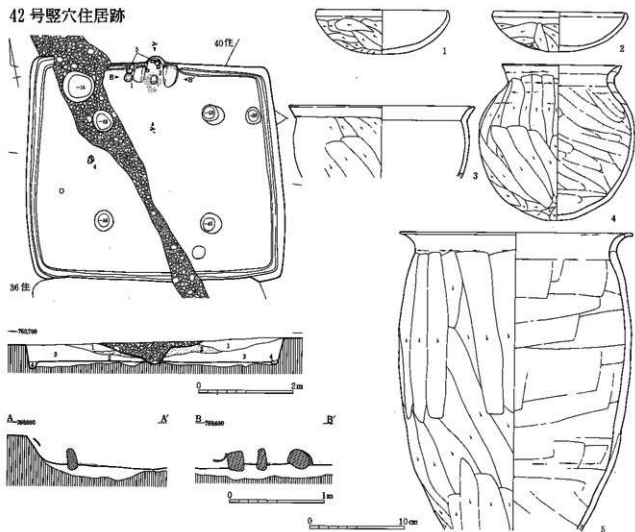


40号竪穴住居跡

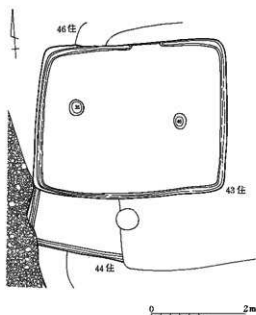


第22図 竪穴住居跡 (16)

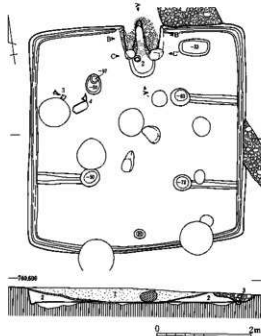
42号竪穴住居跡



43・44号竪穴住居跡

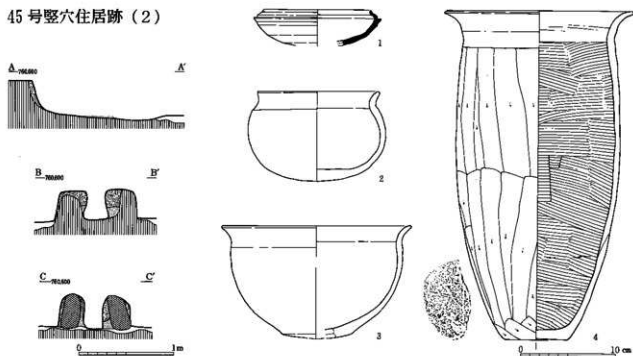


45号竪穴住居跡(1)

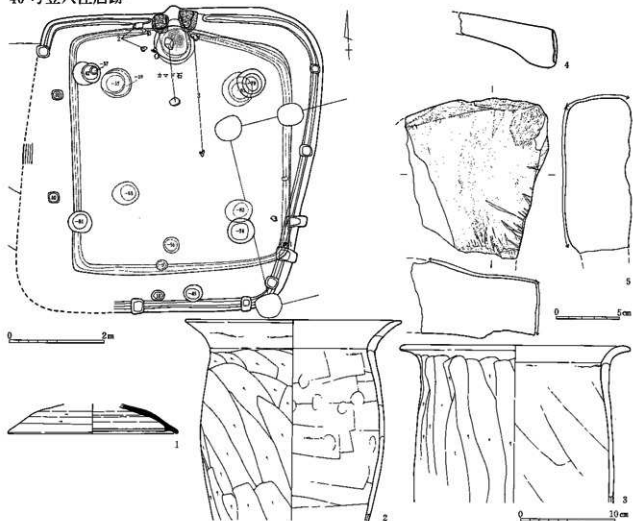


第23図 竪穴住居跡 (17)

45号竖穴住居跡(2)

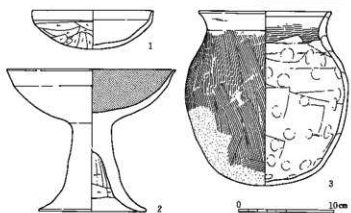
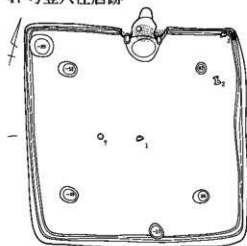


46号竖穴住居跡

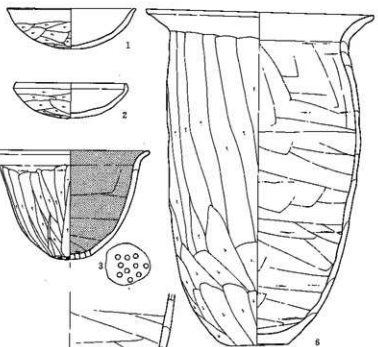
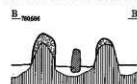
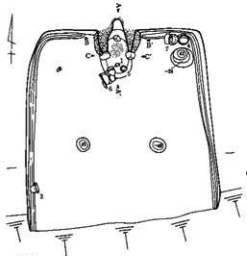


第24图 竖穴住居跡(18)

47号竪穴住居跡

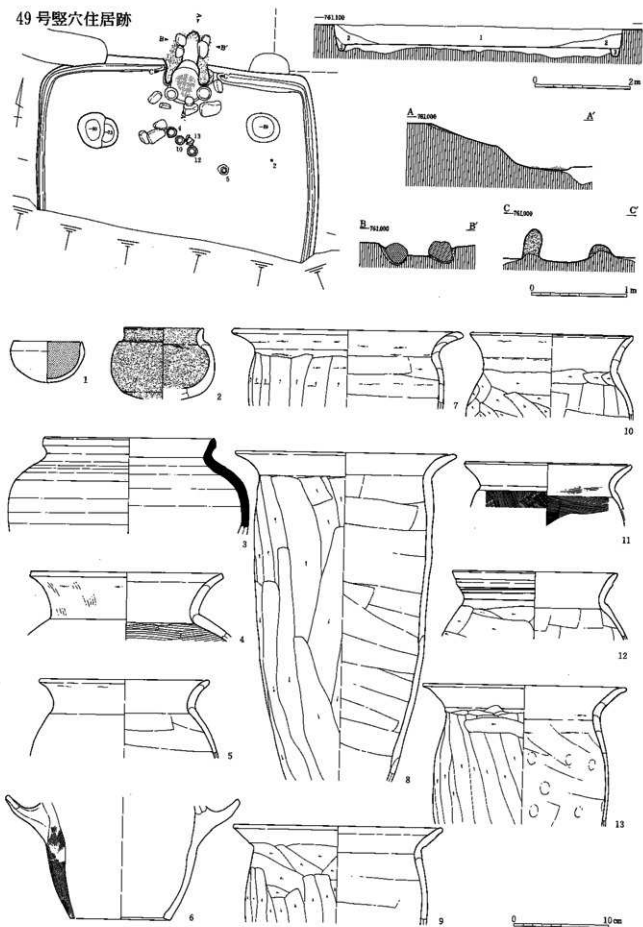


48号竪穴住居跡



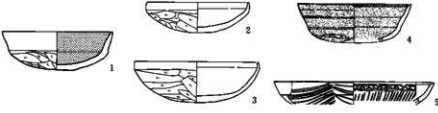
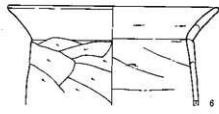
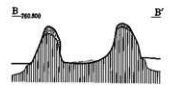
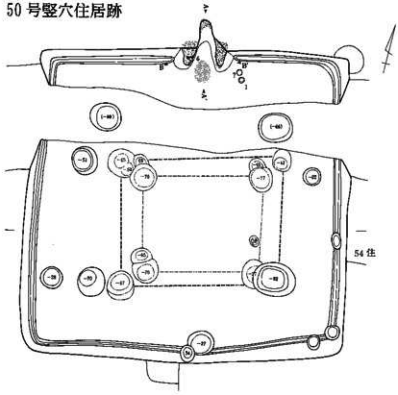
第25圖 竪穴住居跡 (19)

49号竪穴住居跡

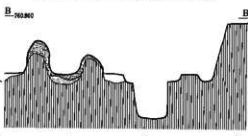
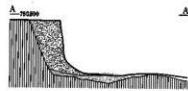
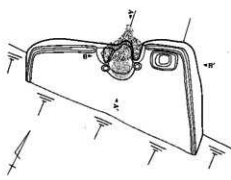


第26図 竪穴住居跡 (20)

50号竪穴住居跡



51号竪穴住居跡

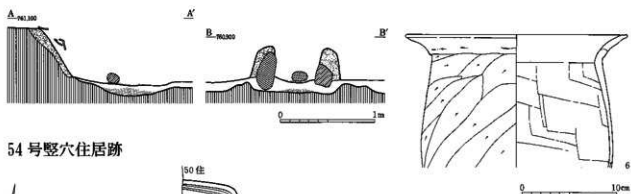
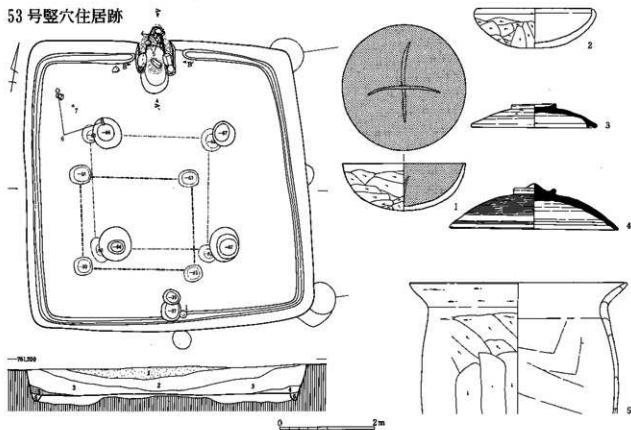


52号竪穴住居跡

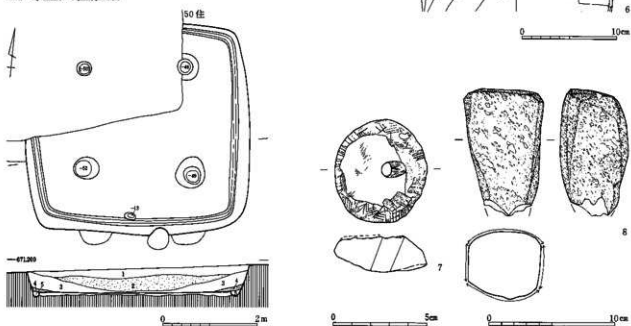


第27図 竪穴住居跡 (21)

53号竪穴住居跡

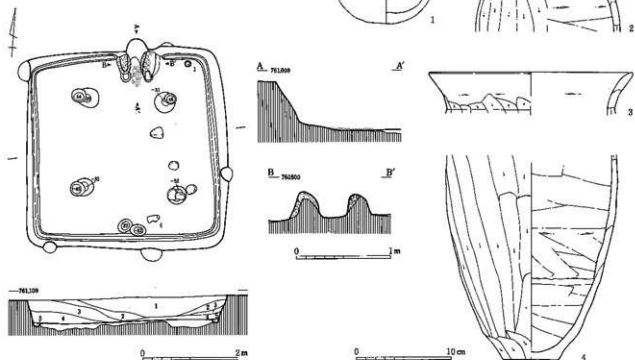


54号竪穴住居跡

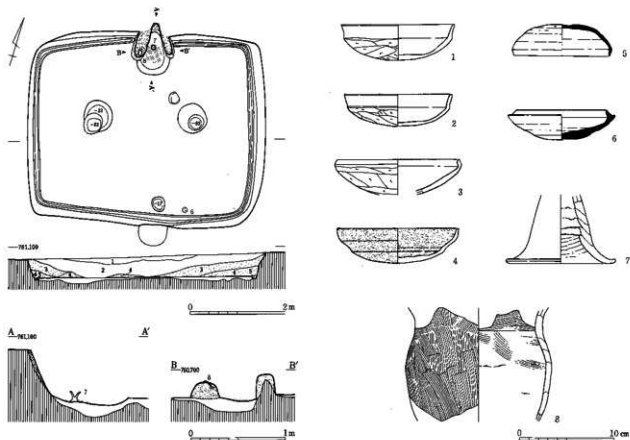


第28図 竪穴住居跡 (22)

55号竪穴住居跡

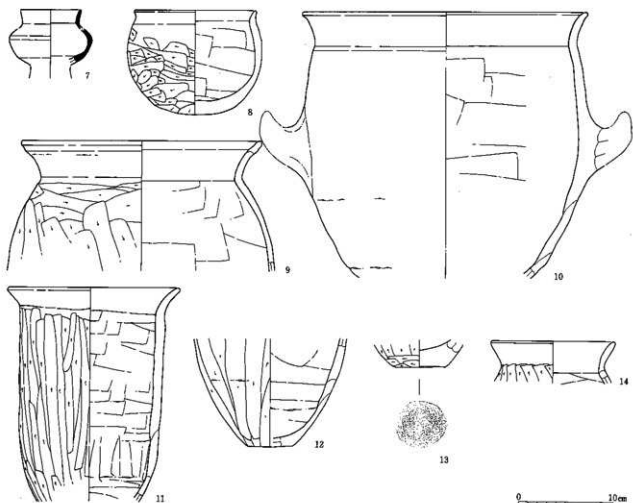
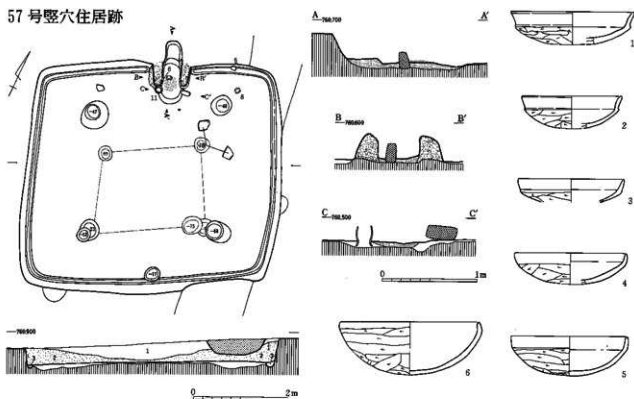


56号竪穴住居跡



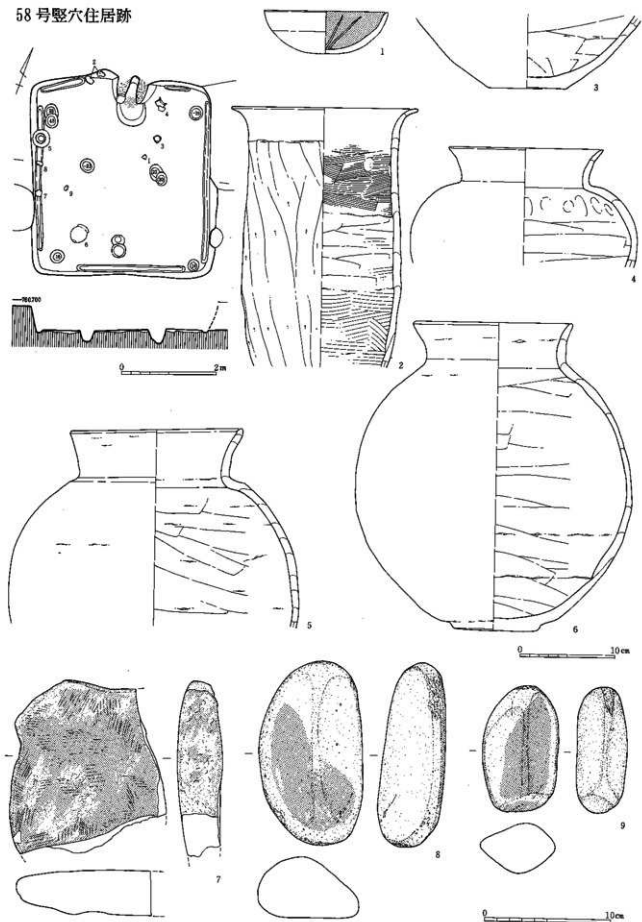
第29図 竪穴住居跡 (23)

57号竪穴住居跡



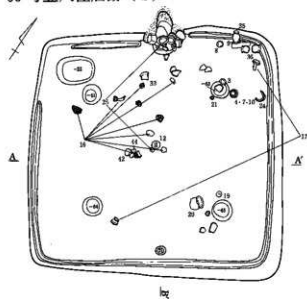
第30図 竪穴住居跡 (24)

58号竪穴住居跡

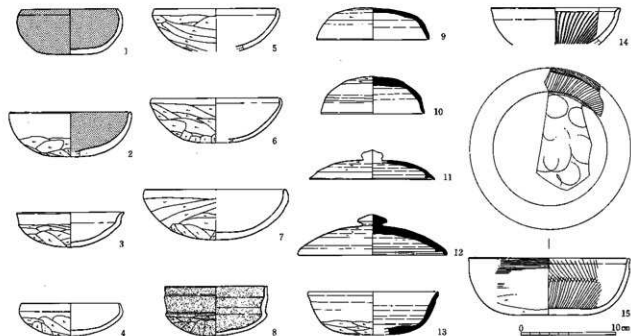
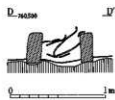
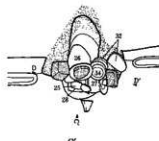
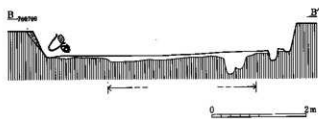
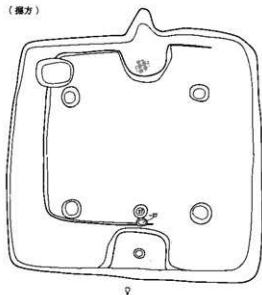


第31図 竪穴住居跡 (25)

59号竖穴住居跡(1) Ⅱ

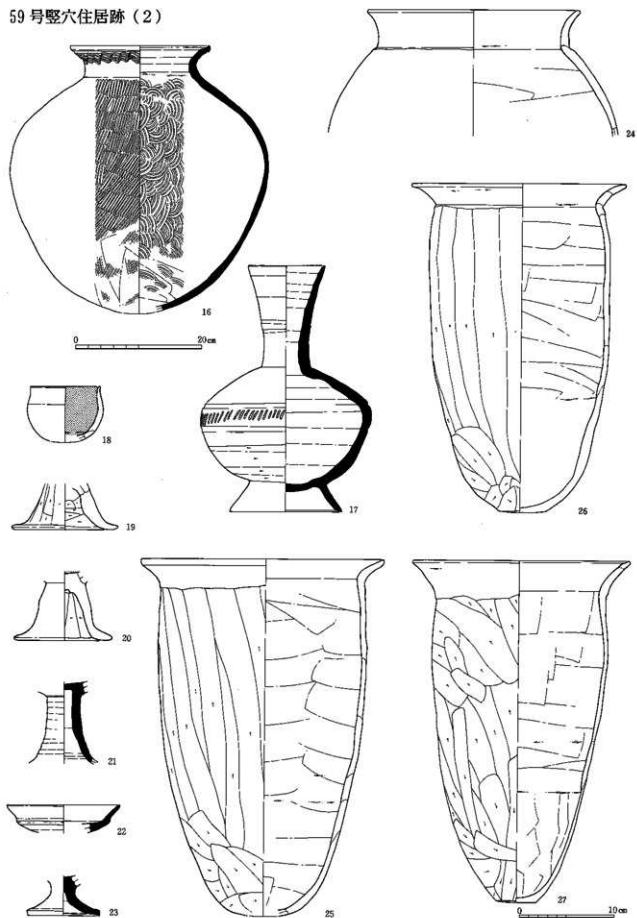


(攝方)



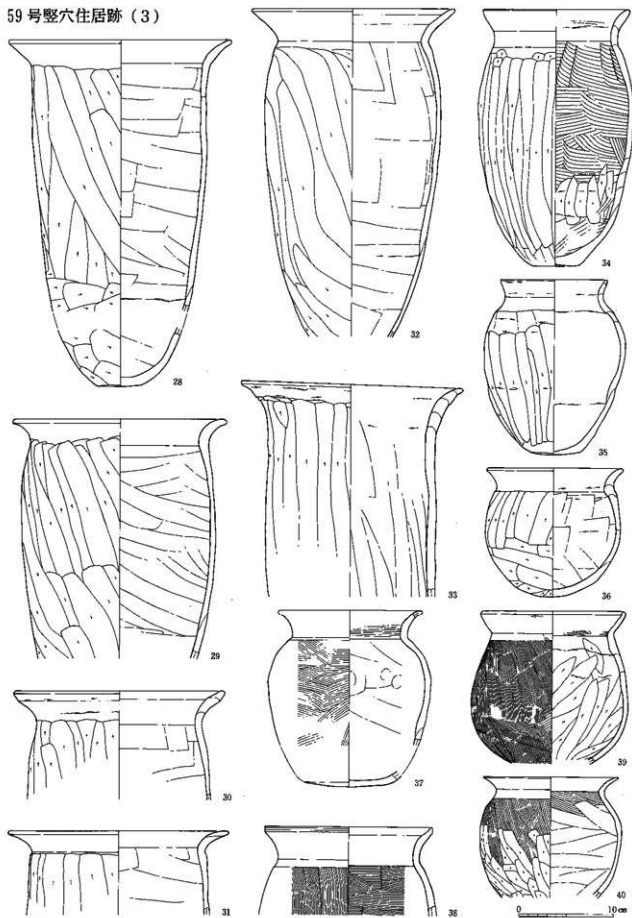
第32图 竖穴住居跡(26)

59号竪穴住居跡(2)



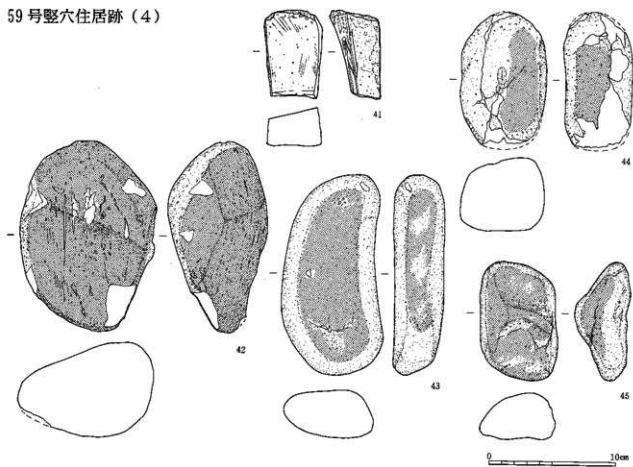
第33図 竪穴住居跡(27)

59号竖穴住居跡(3)

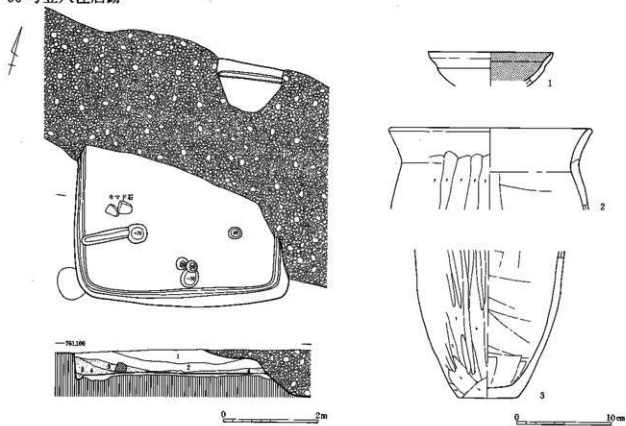


第34图 竖穴住居跡(28)

59号竪穴住居跡(4)

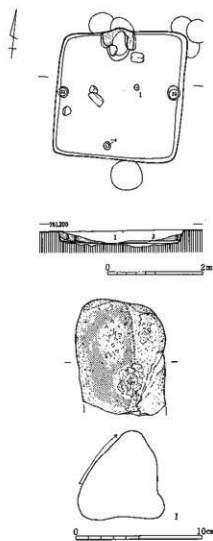


60号竪穴住居跡

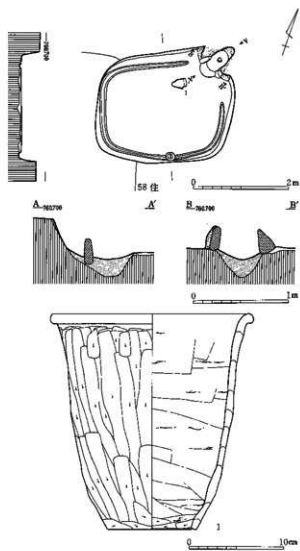


第35図 竪穴住居跡 (29)

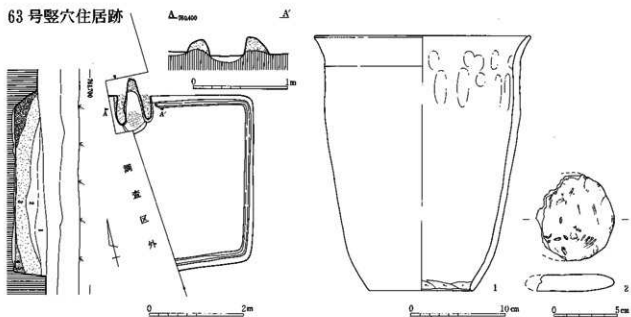
61号竪穴住居跡



62号竪穴住居跡

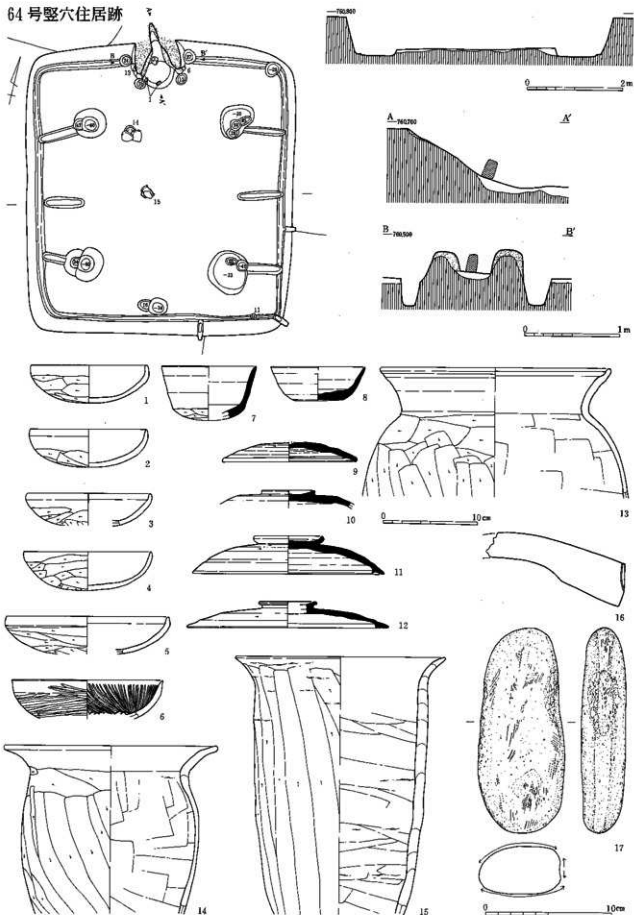


63号竪穴住居跡



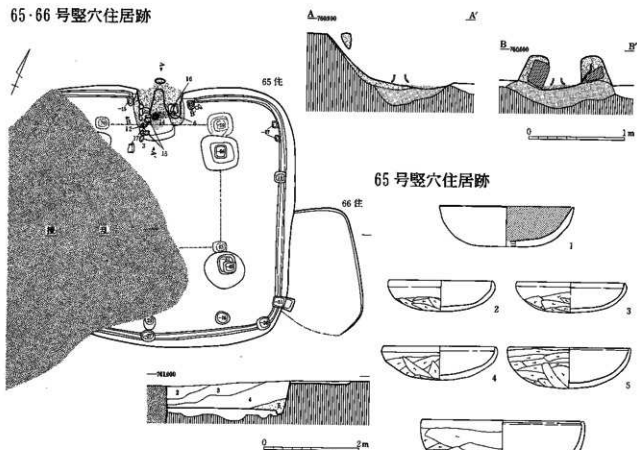
第36図 竪穴住居跡 (30)

64号竪穴住居跡

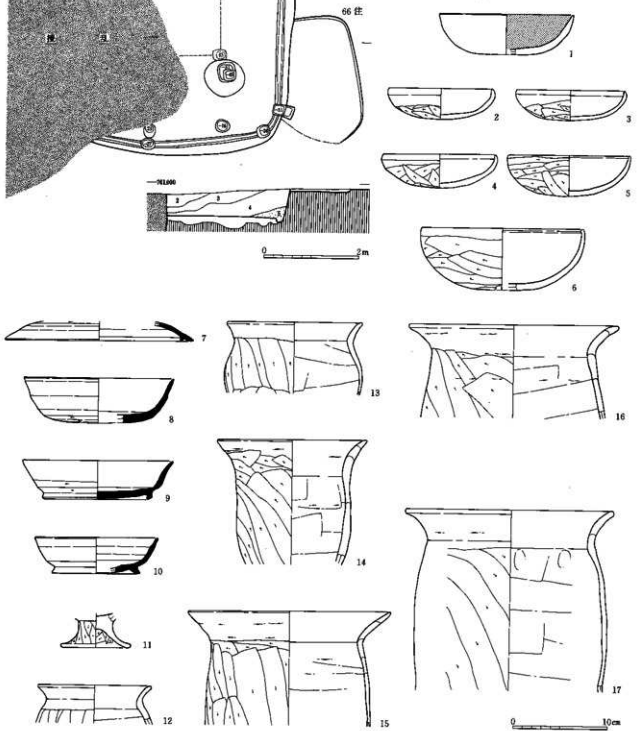


第37図 竪穴住居跡 (31)

65・66号竈穴住居跡

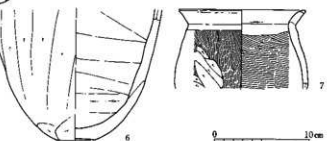
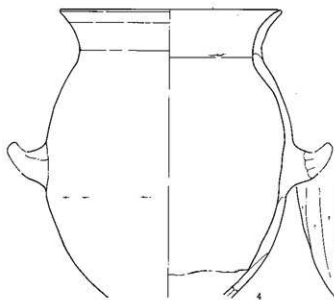
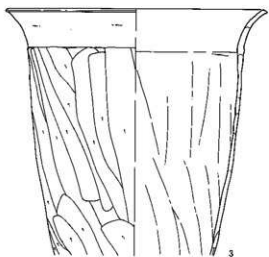
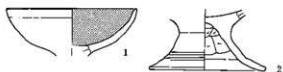
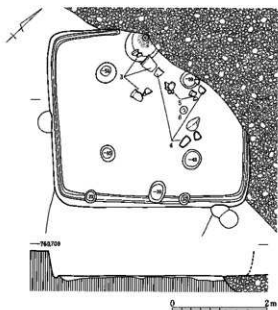


65号竈穴住居跡



第38図 竈穴住居跡 (32)

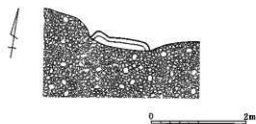
67号竪穴住居跡



68号竪穴住居跡

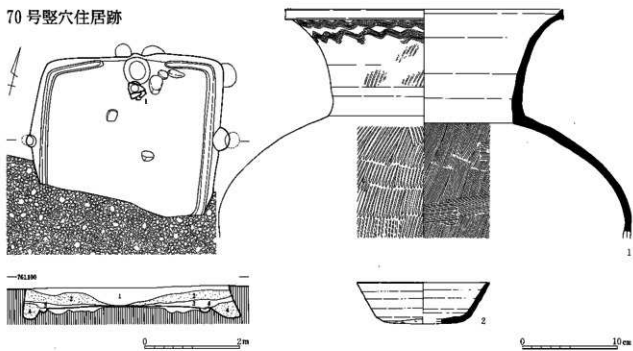


69号竪穴住居跡

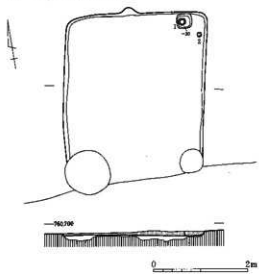


第39図 竪穴住居跡 (33)

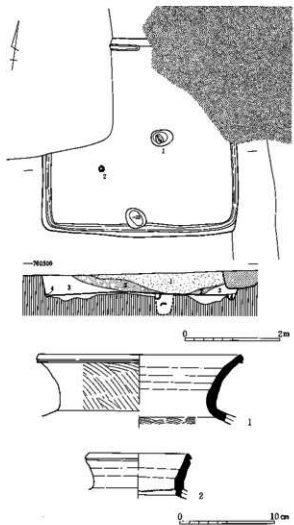
70号竪穴住居跡



71号竪穴住居跡

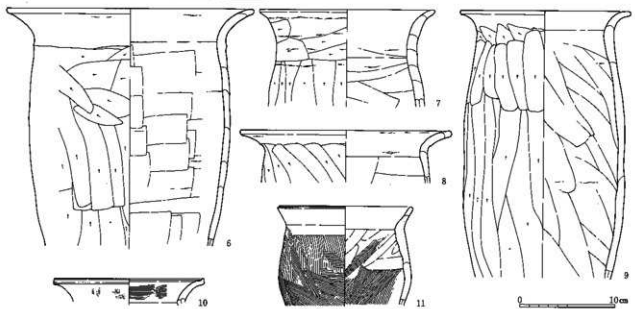
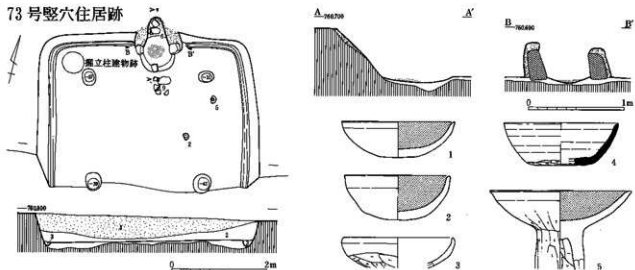


72号竪穴住居跡

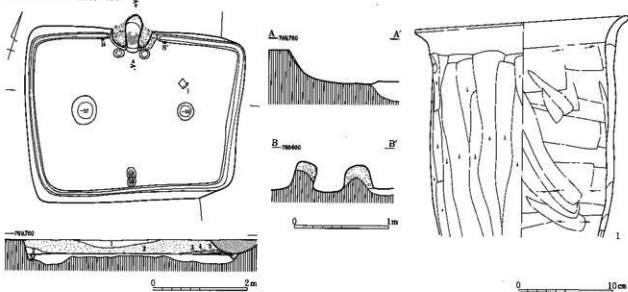


第40図 竪穴住居跡 (34)

73号竪穴住居跡

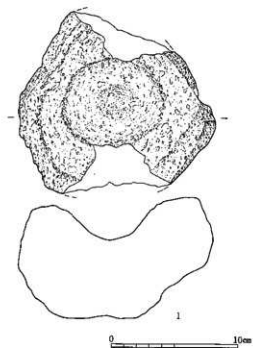
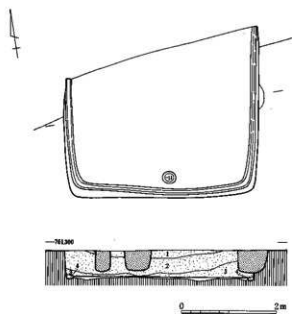


74号竪穴住居跡

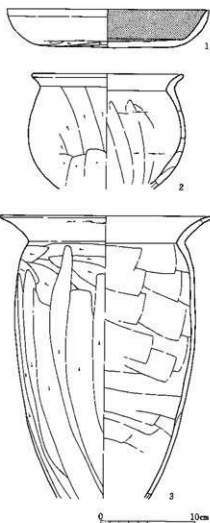
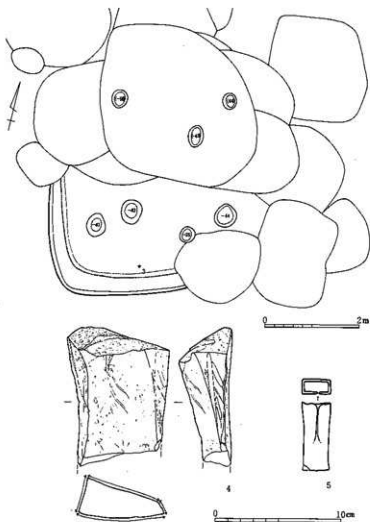


第41圖 竪穴住居跡 (35)

75 号竪穴住居跡

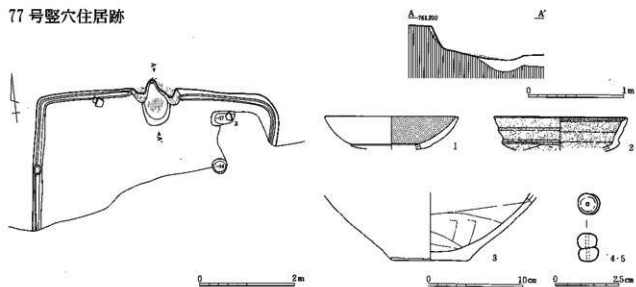


76 号竪穴住居跡

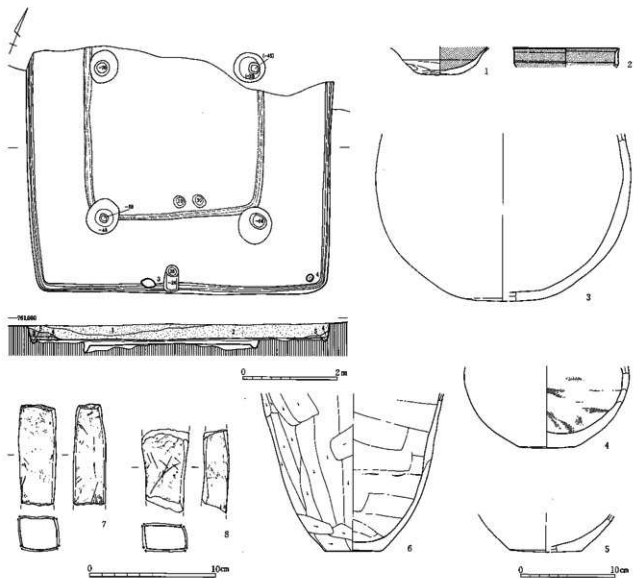


第42図 竪穴住居跡 (36)

77号竖穴住居跡

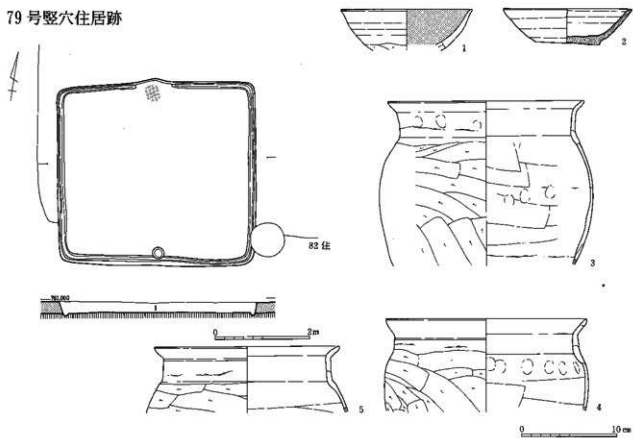


78号竖穴住居跡

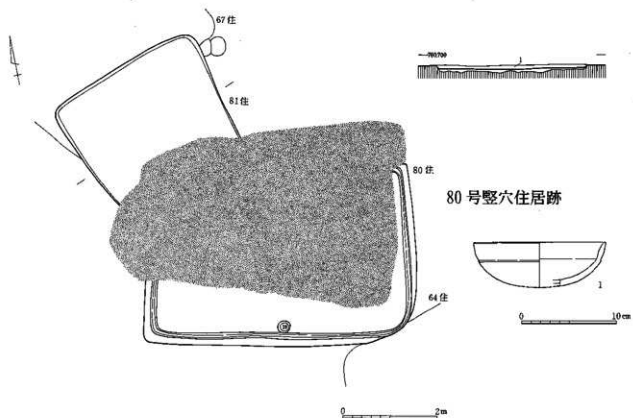


第43図 竖穴住居跡 (37)

79号竪穴住居跡



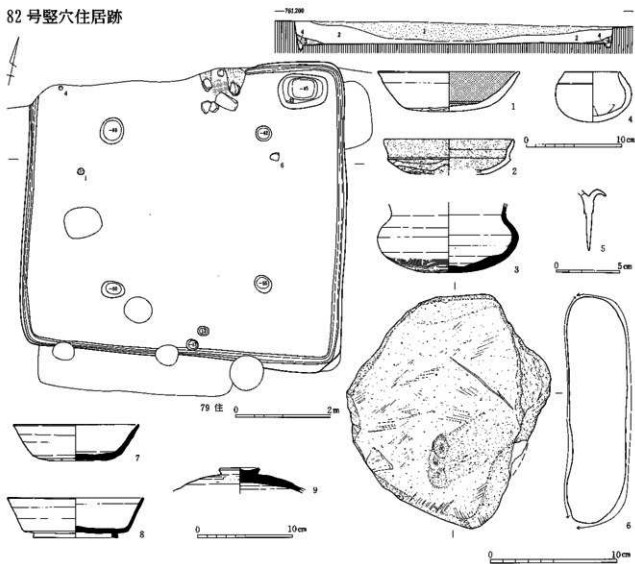
80・81号竪穴住居跡



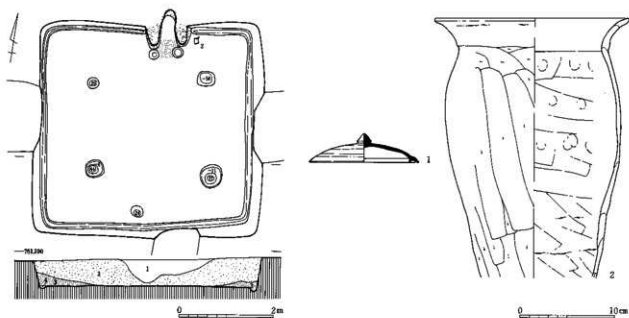
80号竪穴住居跡

第44図 竪穴住居跡 (38)

82号竪穴住居跡

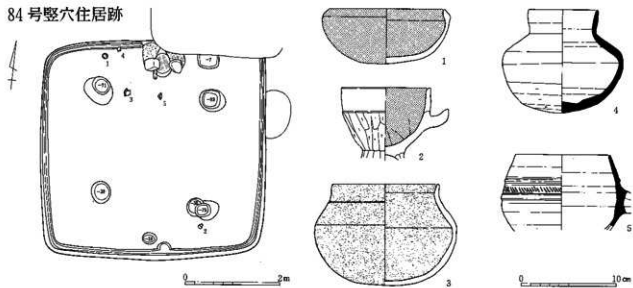


83号竪穴住居跡

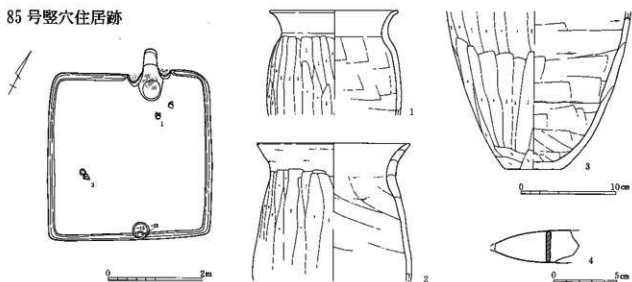


第45図 竪穴住居跡 (39)

84 号竪穴住居跡



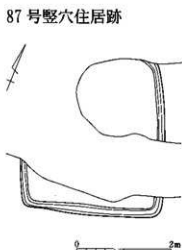
85 号竪穴住居跡



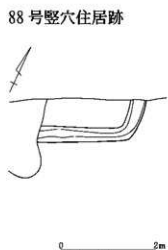
86 号竪穴住居跡



87 号竪穴住居跡

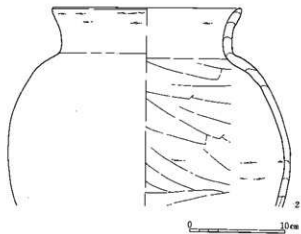
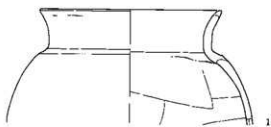
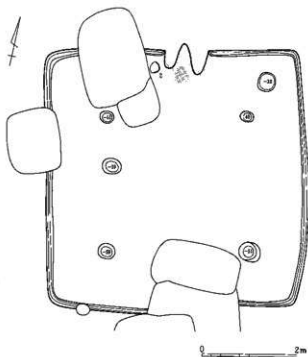


88 号竪穴住居跡

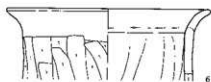
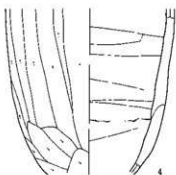
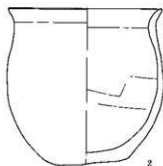
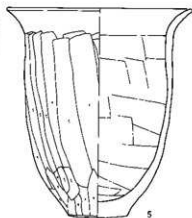
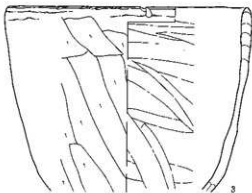
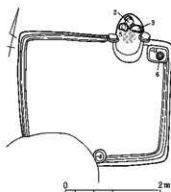


第46图 竪穴住居跡 (40)

89号竪穴住居跡

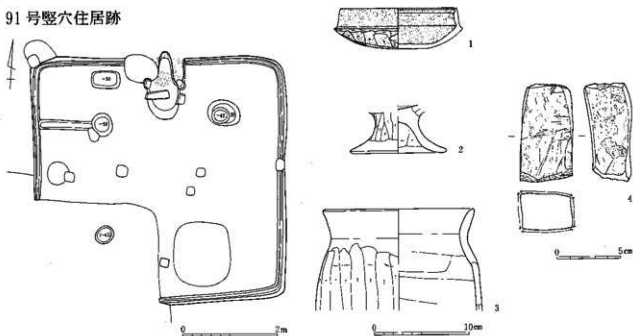


90号竪穴住居跡



第47図 竪穴住居跡 (41)

91号竪穴住居跡



第48図 竪穴住居跡 (42)

90号竪穴住居跡 (第47図、P L79)

7世紀前葉を中心とした時期に廃棄された遺構と考えられる。

覆土及び掘方の観察は残念ながら行っていない。カマドは、壁際に焚き口部があり、調整された軽石を左右に埋め込んでいた。燃焼部にはおよそ3個の土器が掛けられていたようだが、状況はよく判別できない。北東コーナーには貯蔵穴が存在し、2の土器が埋設されていた。

91号竪穴住居跡 (第48図)

6世紀後葉から7世紀初頭に廃棄されたものである。

覆土及び掘方は、冬期発掘のため確認できなかった。カマドは、地山を掘り残し、以後橙色粘土を被覆して袖とし、先端には調整された軽石を埋め込んでいた。また、天井石(軽石)が落下している状況であった。

(2) 掘立柱建物跡 (第49～65図)

柱穴の標高は、もっとも高位置の上端を0として算出してある。したがって、実際には10cmの深さしかなくとも、もっとも高位置の柱穴から10cm低ければ、その時は20cmという値になる。なお、複数の掘立柱建物跡が記されている場合は、各々の掘立柱建物跡間で行っている。

掘立柱建物跡の時期については、出土遺物がほとんどないに等しく不明なものが多い。ただし、竪穴住居跡や溝などの切り合い関係で多少想定可能なものもある。ちなみに、竪穴住居跡との切り合いは第3節2-(1)に記述してあるし、古代の官衙跡の区画施設である1～6号溝とでは、これを切る掘立柱建物跡が存在しなかった。ただし、24・26・50号掘立柱建物跡のような溝持ちの形態のものは、おそらく平安時代と考えられえられ、本来、溝よりも新しいものと思われる。

渠道借宿・小踏線～排水路

南東隅に集中して認められる。ここは微高地状となっているため、竪穴住居跡の分布も目立った状態にある。調査段階で確認されたものは少なく、多くは整理時点で検討し、掘立柱建物跡として認定した。したがって、本来、竪穴住居跡よりも新しいものについては少数しか確認していないし、また掘立柱建物跡そのものの認定に若干無理を生じているかもしれない。正確な掘立柱建物跡の実数及び形態は、残念ながら不明のままとなってしまった。

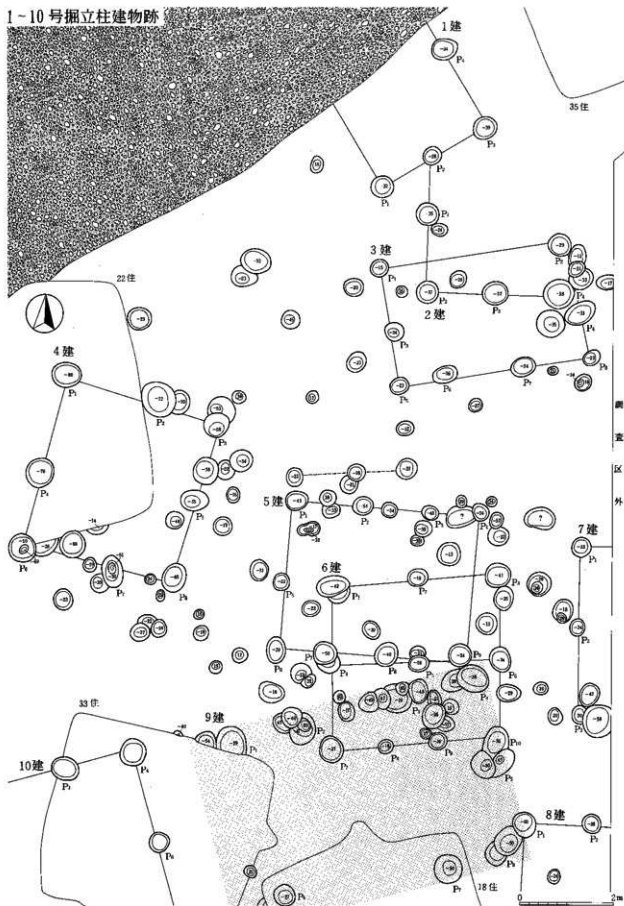
排水路～北端部

2・3号溝から南端は、概ね竪穴住居跡と分離するように東側に位置している。ここでも、29・32・36・40・59号掘立柱建物跡など、若干構造に今一つ無理が生じているものもあり、それ以外に49号竪穴住居跡西側や53号竪穴住居跡周辺についても掘立柱建物跡ができる可能性がある。

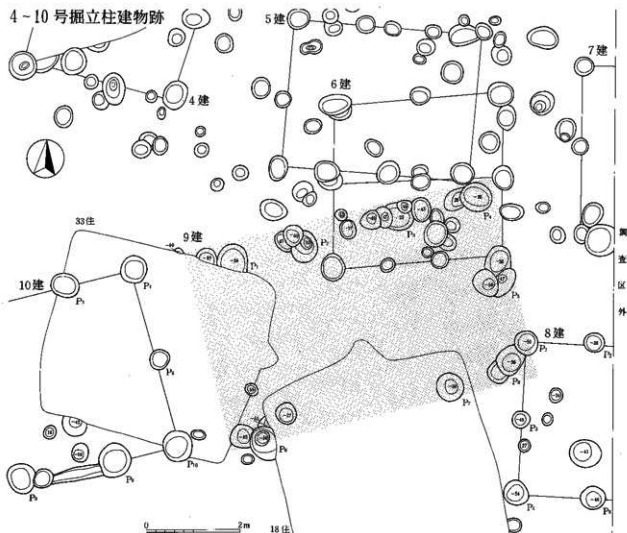
2・3号溝から6号溝間については、後述するが官衙跡の内部に相当する。東西に主軸をとる3間×6間の平地式建物である主屋(72号掘立柱建物跡)、その東側に同等の脇屋(73号掘立柱建物跡)を設け、ともに角柱の存在が予想されたが、72号掘立柱建物跡については掘方のみで柱痕は確認できなかった。また、それぞれわずかに北側に移動している。その北側にはおそらく時期差が存在するのだろう、通常規模の主屋(66号掘立柱建物跡)と脇屋群(63～65号掘立柱建物跡)が建ち並んでいる。6号溝南側には、これに伴う倉庫跡群75～77号掘立柱建物跡(それぞれ角柱を伴う)が南側を揃えて並んでいる。34・35・78についても同期のものと考えているが、それ以外については時期が異なるか、ないしは時期不明としかいえない。

6号溝以北については、1棟のみ確認できた。1間×1間の簡素なものである。周囲の竪穴住居跡は6世紀後葉から7世紀前葉のものであり、おそらく当該期の所産であるに違いない。

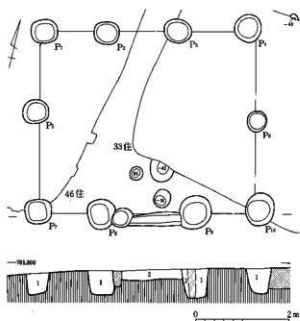
1-10号掘立柱建物跡



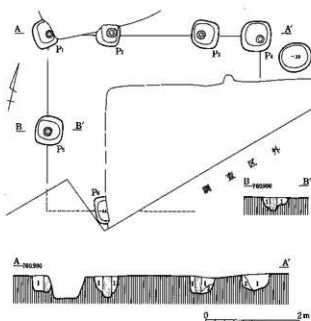
第49图 掘立柱建物跡 (1)



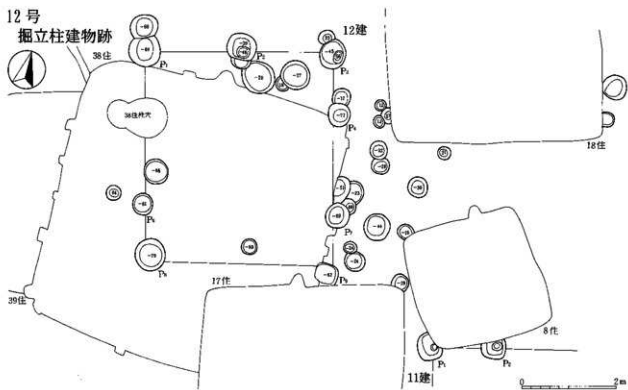
10号掘立柱建物跡



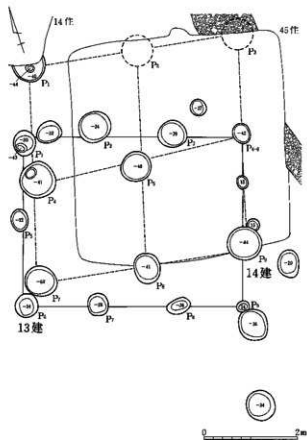
11号掘立柱建物跡



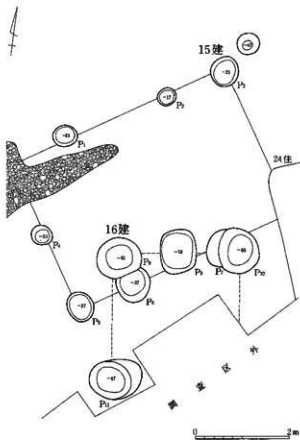
第50図 掘立柱建物跡(2)



13・14号掘立柱建物跡

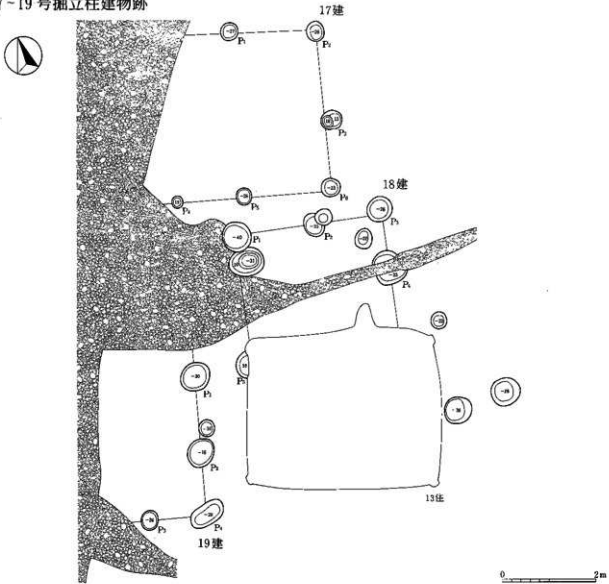


15・16号掘立柱建物跡

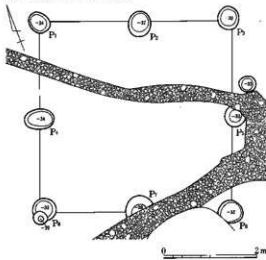


第51図 掘立柱建物跡 (3)

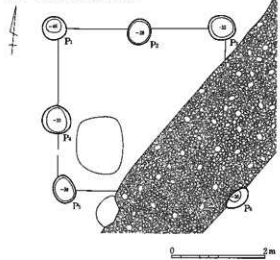
17-19号掘立柱建物跡



20号掘立柱建物跡

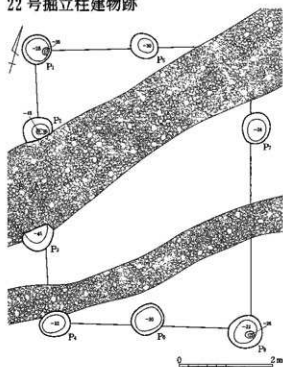


21号掘立柱建物跡

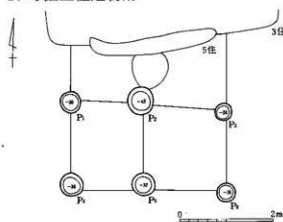


第52図 掘立柱建物跡(4)

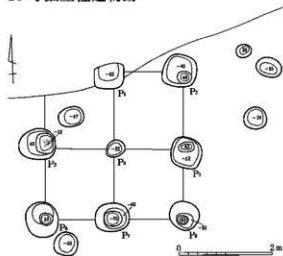
22号掘立柱建物跡



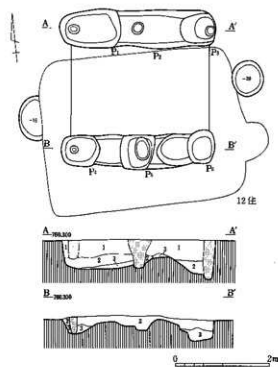
23号掘立柱建物跡



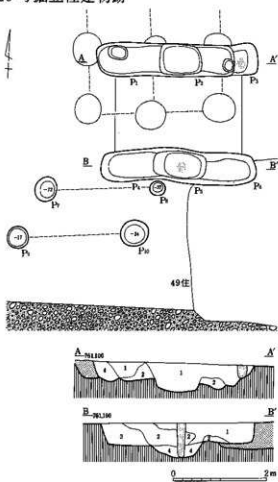
25号掘立柱建物跡



24号掘立柱建物跡

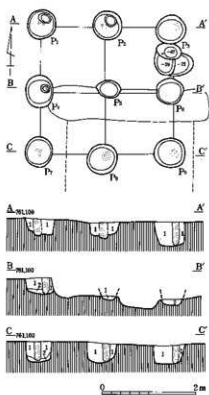


26号掘立柱建物跡

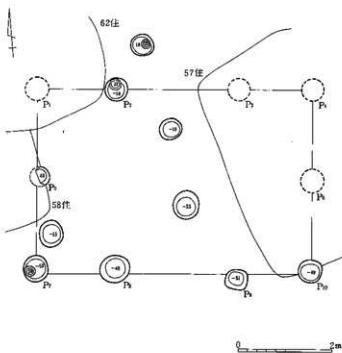


第53图 掘立柱建物跡(5)

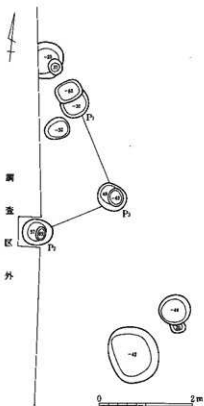
27号掘立柱建物跡



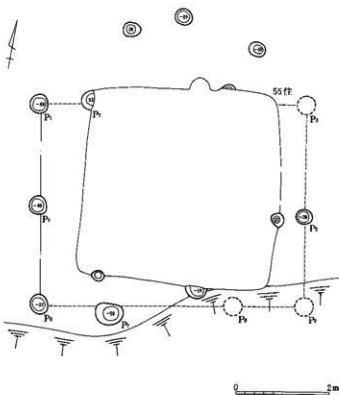
29号掘立柱建物跡



28号掘立柱建物跡

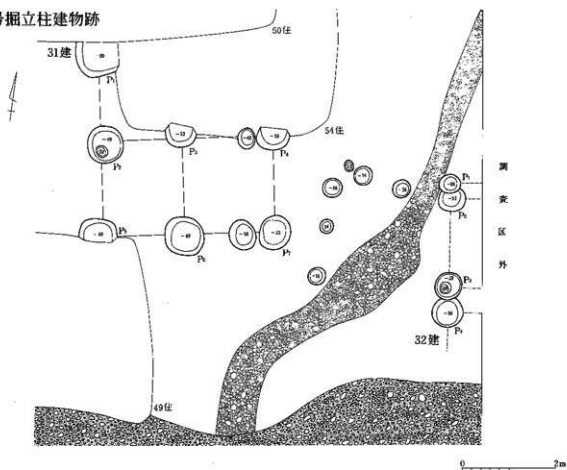


30号掘立柱建物跡

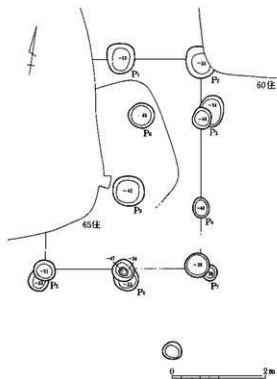


第54図 掘立柱建物跡(6)

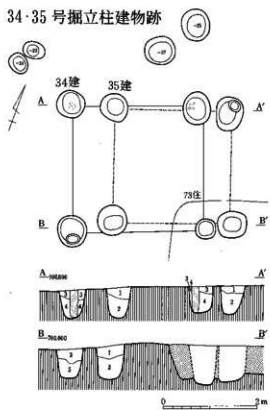
31-32号掘立柱建物跡



33号掘立柱建物跡

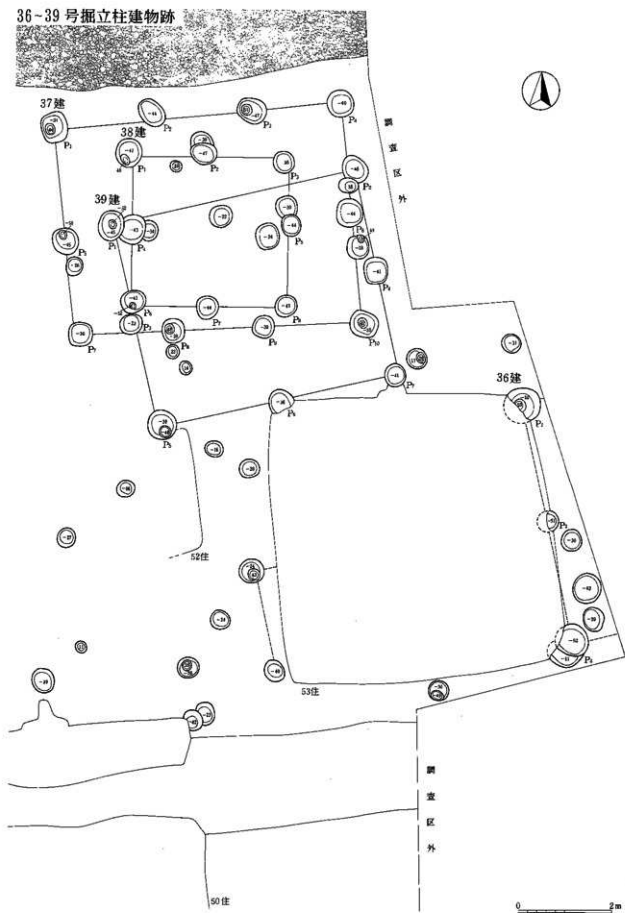


34-35号掘立柱建物跡



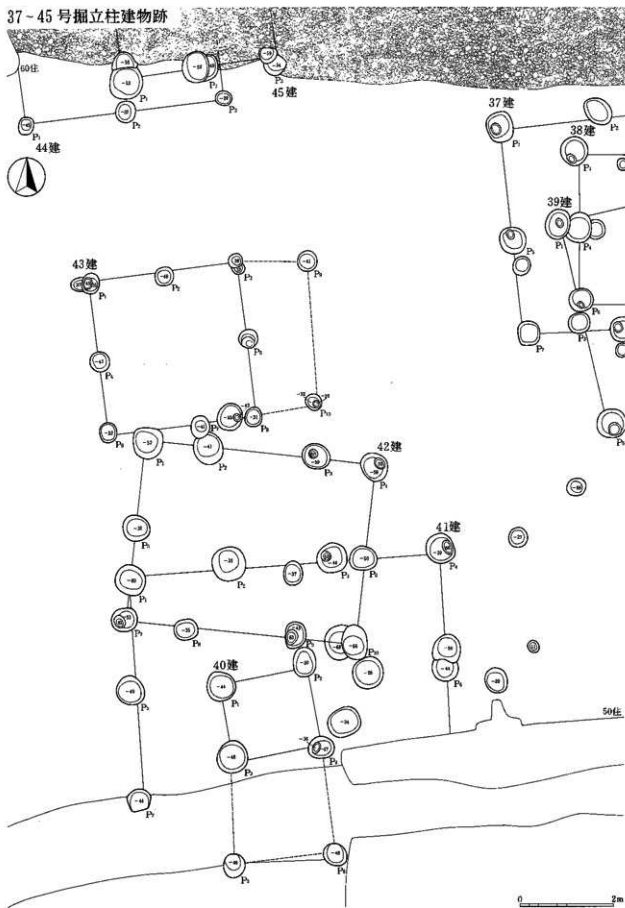
第55图 掘立柱建物跡(7)

36-39号掘立柱建物跡



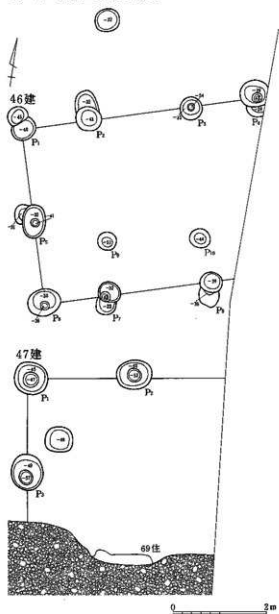
第56図 掘立柱建物跡(8)

37-45号掘立柱建物跡

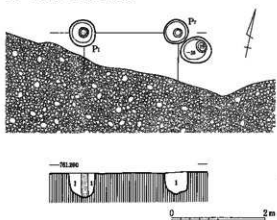


第57図 掘立柱建物跡 (9)

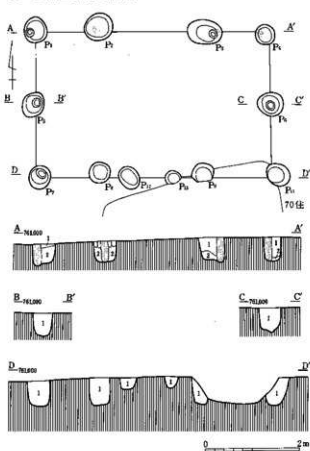
46・47号掘立柱建物跡



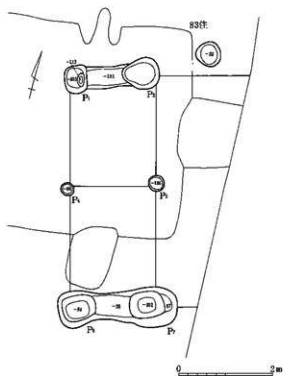
48号掘立柱建物跡



49号掘立柱建物跡

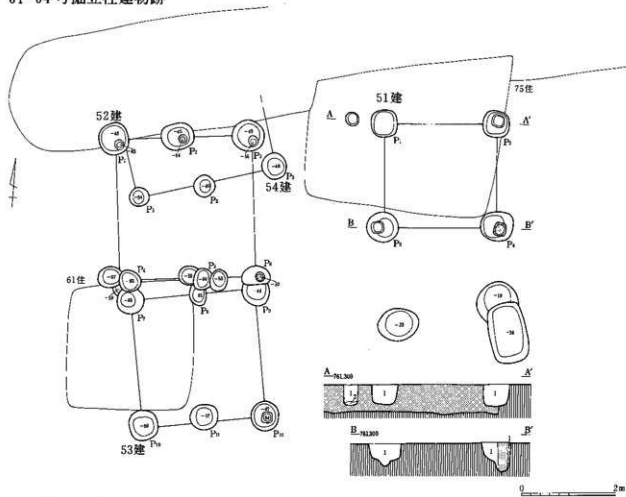


50号掘立柱建物跡

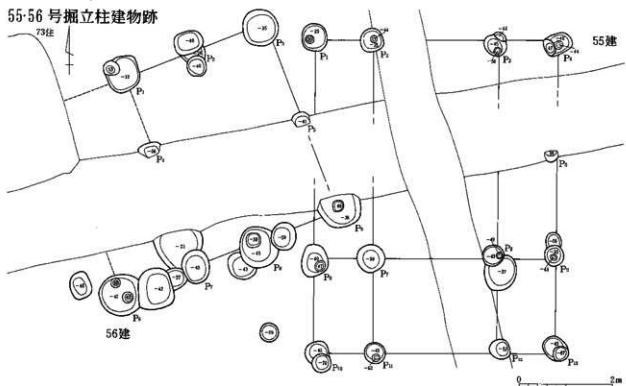


第58図 掘立柱建物跡 (10)

51-54号掘立柱建物跡

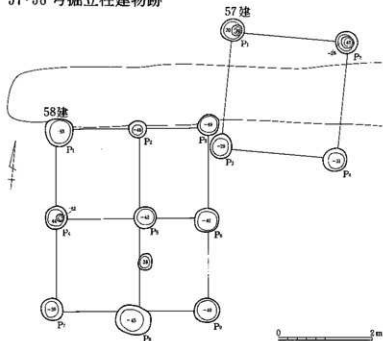


55-56号掘立柱建物跡

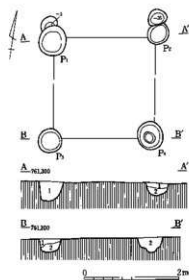


第59図 掘立柱建物跡 (11)

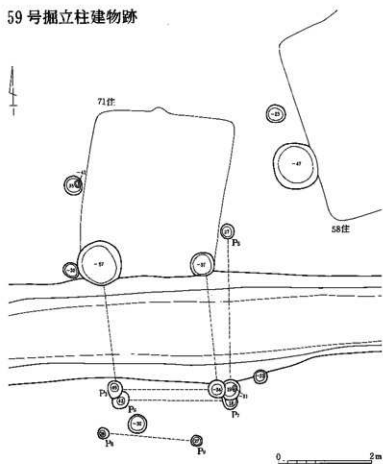
57・58号掘立柱建物跡



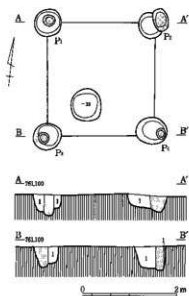
60号掘立柱建物跡



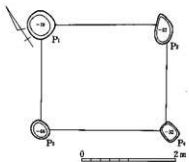
59号掘立柱建物跡



61号掘立柱建物跡

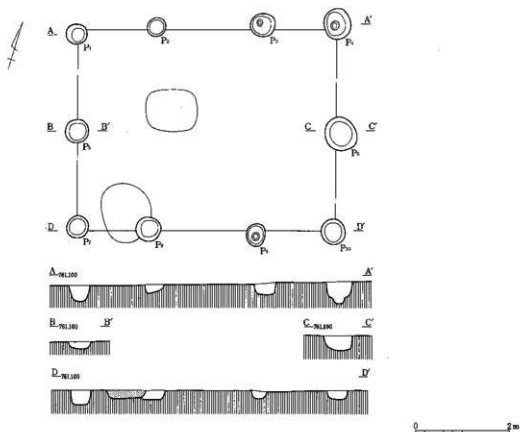


62号掘立柱建物跡

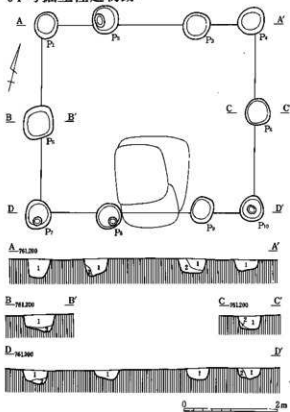


第60図 掘立柱建物跡 (12)

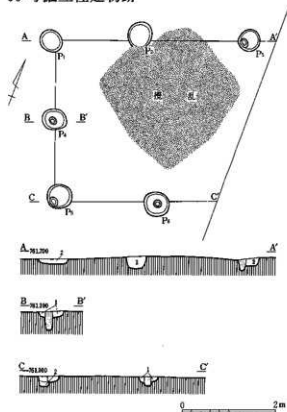
63号掘立柱建物跡



64号掘立柱建物跡

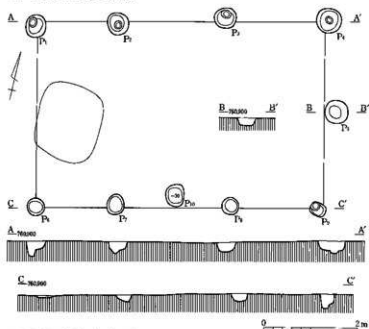


65号掘立柱建物跡

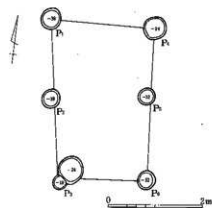


第61图 掘立柱建物跡 (13)

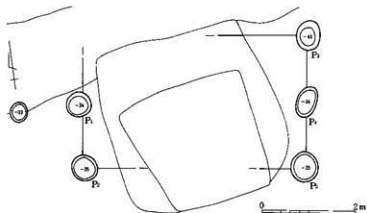
66号掘立柱建物跡



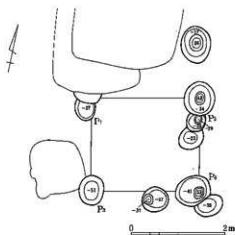
69号掘立柱建物跡



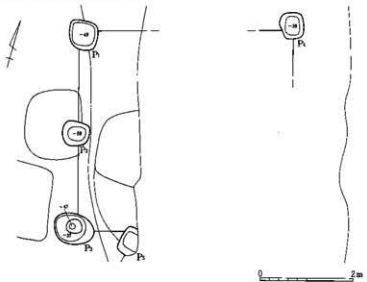
67号掘立柱建物跡



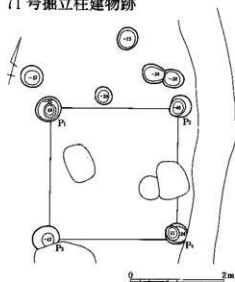
70号掘立柱建物跡



68号掘立柱建物跡

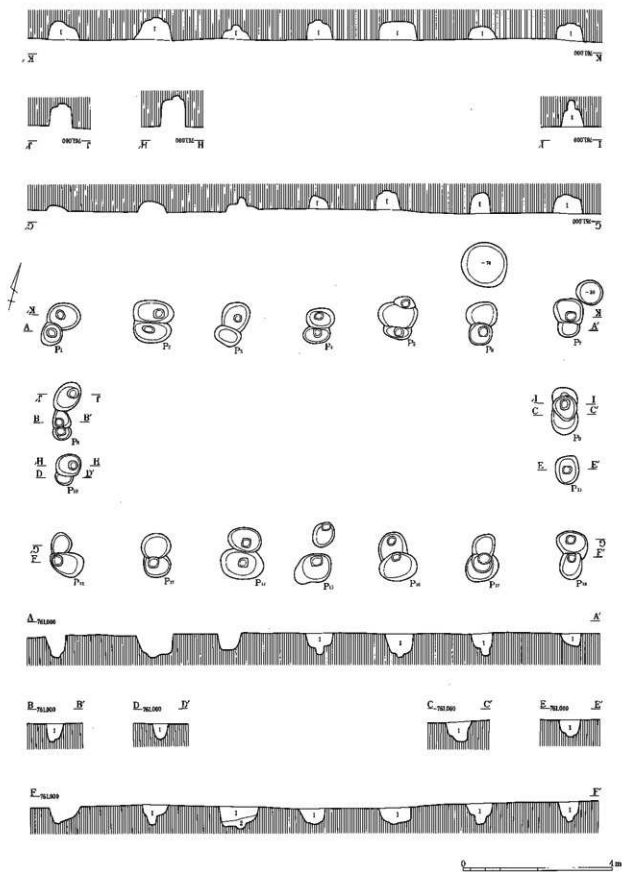


71号掘立柱建物跡



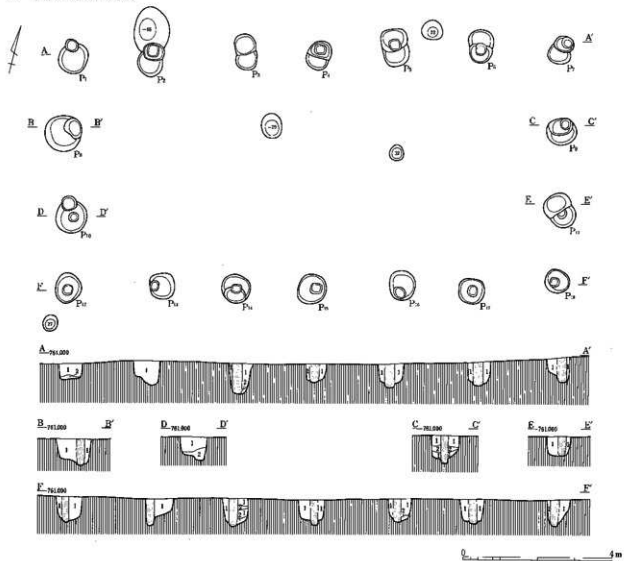
第62図 掘立柱建物跡 (14)

72号掘立柱建物跡

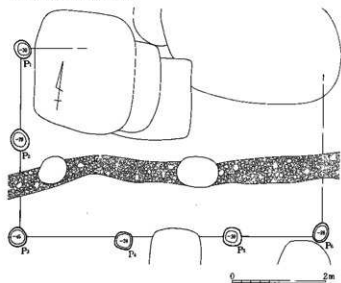


第63図 掘立柱建物跡 (15)

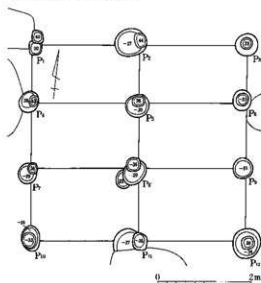
73号掘立柱建物跡



74号掘立柱建物跡

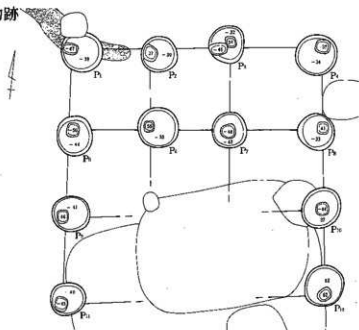


75号掘立柱建物跡

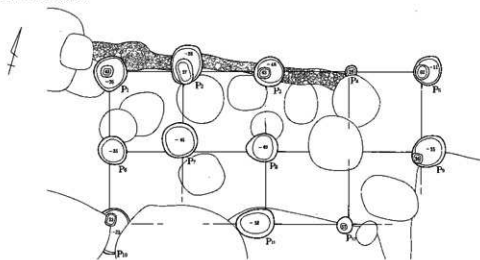


第64図 掘立柱建物跡 (16)

76号掘立柱建物跡



77号掘立柱建物跡

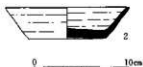
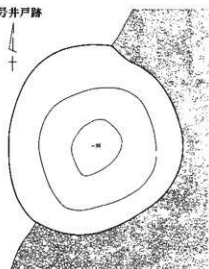


78号掘立柱建物跡

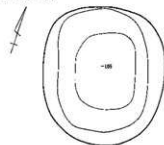


第65图 掘立柱建物跡 (17)

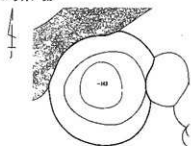
1号井戸跡



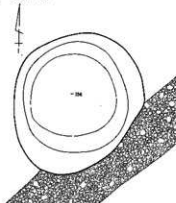
2号井戸跡



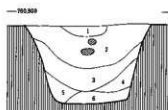
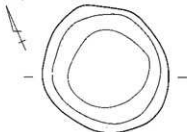
3号井戸跡



4号井戸跡



5号井戸跡



6号井戸跡



第66図 井戸跡

(3) 井戸跡

1号井戸跡 (第66図)

8世紀前半に廃棄されたものである。東側を旧御影用水によって切られているが、およそ直径3m程の略円形を呈している。断面は箱薬研状である。湧水地点に築かれており、土層観察は行えなかった。

2号井戸跡 (第66図)

出土遺物はないが、明らかに1号井戸跡に類似した覆土を呈していたので古代のものと考えられる。南北長2.2m、東西長2.0mをはかり、長方形を呈する。箱薬研状の断面だが、湧水地点に位置しており、断

面観察は不可能であった。

3号井戸跡 (第66図)

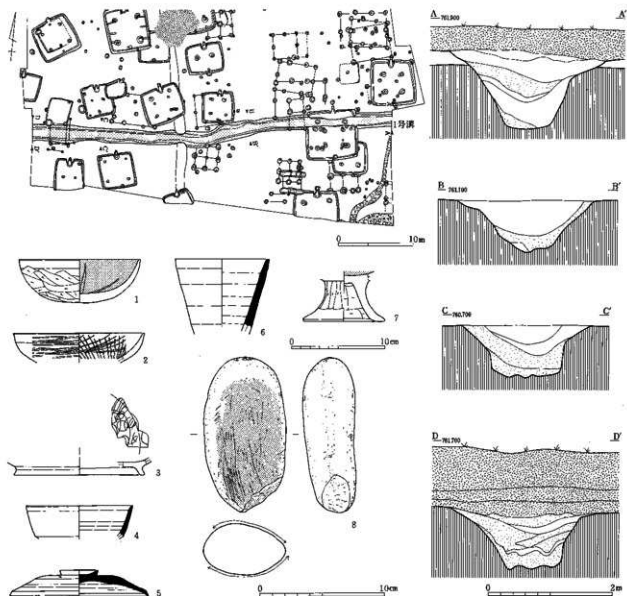
出土遺物はないが古代のものと思われる。直径は最大で1.85mをはかる略円形のもので、断面形態は箱葉研状を呈する。湧水地点に位置しており、断面観察は不可能であった。

4号井戸跡 (第66図)

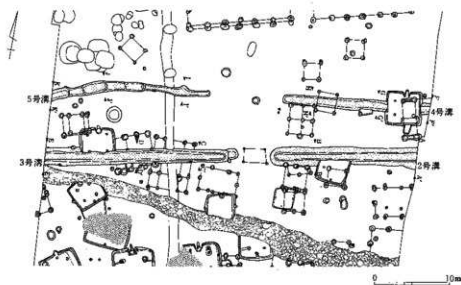
出土遺物はないが古代のものと思われる。直径2.1m前後で略円形を呈し、断面は箱葉研状である。湧水地点に位置しており、断面観察は不可能であった。

5号井戸跡 (第66図)

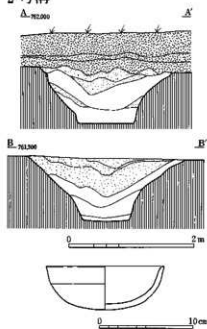
遺物はないが古代のものと思われる。最大で直径2.1mをはかる略円形で、断面はわずかに箱葉研状を



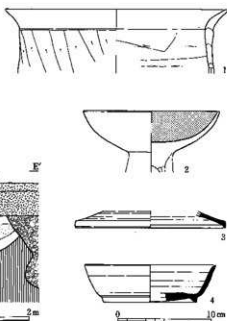
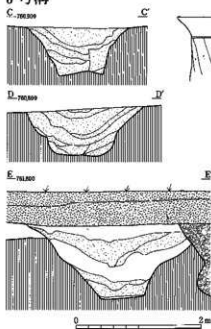
第67図 1号溝跡



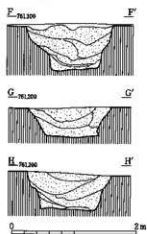
2号溝



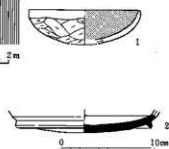
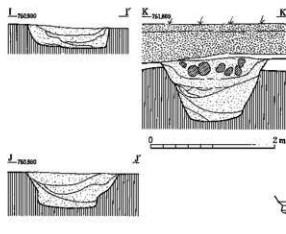
3号溝



4号溝



5号溝



第68図 2～5号溝跡

呈する。6層は、不純物の少ない黒褐色の細砂壤土であり、その他の土層をみても湧水が認められた形跡はない。

6号井戸跡 (第66図)

遺物はないものの、覆土から古代のものと考えられる。最大長2.0m前後と思われる略円形を呈し、断面形は二段掘り状となっている。冬期厳寒中の調査のため残念ながら断面の調査は行えなかった。

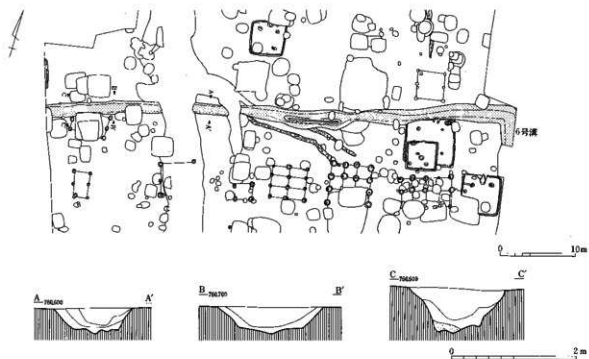
(4) 溝跡

1号溝から6号溝は、後述する官衙跡の屋敷地を区画するもので、およそこれらの時間的な先後関係、ならびにその実年代が見えつつある。

1号溝跡 (第67図)

8世紀前半に相当する。竪穴住居跡や掘立柱建物跡すべてを切っている。

最高で幅2.5m、深さ1.1mをはかり、箱梁研状の断面を呈する。屋敷地南側を東西に走っているのだが、調査対象域に陸橋部は存在しなかった。覆土は自然堆積したものと考えているが、セクションA-A'及びC-C'をみると、北側に土塁が存在していたものと思われる。



第69図 6号溝跡

2・3号溝跡 (第68図、PL59)

細かな時期は設定できないが、3号溝の出土遺物から概ね8世紀前半に廃棄されたものと思われる。すべての遺構を切って構築されている。

もっとも直線的に走り、また規模もやや大きい。セクションE-E'でみると、推定幅約3.0mをはかり、深さは1.2m程であった。断面形態は箱蓋研状、2号・3号溝間に陸橋部をもつ。覆土は自然堆積と考えており、またセクション図では判断できないが、調査時においては北側に土塁の存在が想定できた。

4・5号溝跡 (第68図、PL59)

5号溝の出土遺物から、7世紀末葉から8世紀初頭に廃棄されたものと思われる。すべての遺構を切っていると判断したが、おそらく50号獨立柱建物跡だけは本跡より新しいものと思われる。

2・3号溝と同様で、並行に走り、同様の位置に陸橋部を有している。ただし、規模が小さく、5号溝に至っては土坑を連続させた恰好のような状態で、しかも大きく北側へと歪んでいる。4号溝で幅約1.4m、深さ最大で0.75mをはかり、5号溝に至ってはまちまちであるが、より西側に行くほど深さを増す傾向があり、セクションK-K'では幅1.75m、深さ1.0mをはかっている。覆土は、いずれもブロック層が主体となっており、土塁を人為的に埋め戻したものと考えられる。なお、セクションK-K'の覆土上層には火山岩質の自然礫が多数存在していた。

6号溝跡 (第69図)

出土遺物は一切なく時期不明である。ただし、古代のどの遺構よりも新しく、しかも中世の遺構の覆土とは大きく異なることでここに掲載した。また実際には、古代官衙跡の区画施設であることは間違いないことだろう。

最大で幅1.65m、深さ0.7mをはかる。底面中央が若干窪んでいるが、これは水の浸食によるものか。覆土は自然堆積と考えられる。本来、土塁が存在していたと考えられるが、確認できなかった。北東端部では南側直角方向に折れる箇所が確認でき、方形囲繞施設である公算が高くなった。なお、中央近くには溝が浅く二股に分かれる部分が存在した。おそらく、裏への抜け道が存在したのだろう。

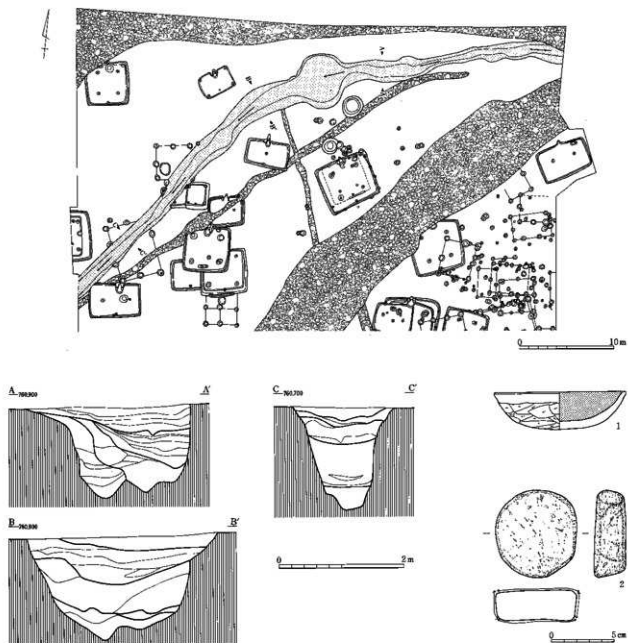
(5) 流路跡

1号流路跡 (第70図、PL55)

遺物はわずかにビニール袋ひとつしかでていないが、8世紀後半以降のものはまったく認められない。あらゆる遺構を切られてつくられているので、6号整穴住居跡以後、すなわち7世紀中葉以後の産物であることは間違いない。おそらく、居館跡とほぼ時間をともにするものではないかと考えている。

形態からして、本跡は人工の河川と考えられる。しかも管理が行き届いており、人間の掌を超えるような礫は一切含まれておらず、比較的細かな砂礫のみで埋まっていた。調査対象域の中央にも、堰状遺構が存在している。規模や時間的経過は不明だが、4回に分かれて埋没したものと思われる。

1は出土場所不明、2は堰状遺構底部から出土した。



第70図 1号流路跡

(6) 官衙跡

区画施設の正面施設である4・5号溝間は人為的に埋め戻されたもので、7世紀末葉から8世紀初頭、2・3号溝間は自然埋没で大きくみて8世紀前半とみた。区画施設は2時期認められるのである。

一方、内部の官衙跡群は2間×3間の一般的な掘立柱建物跡と3間×6間の非常に大規模な掘立柱建物跡に分類可能だが、両者は互いに切り合っていないものの、近接した位置関係にあることから、これについても時間的な先後関係があるのではないかと考えている。

官衙跡群については、どちらが先でどちらが後かという問題が生じてくるが、通常規模の一群はとくに

尺を用いていない、若しくは命名された尺を利用していないかのどちらかで、一方尺形の一群は6.0m×13.5mを平均規模とし、要するに唐尺の20尺×45尺という値が出てくる。唐尺使用のものを新段階とみておきたい。

旧官衙跡

4号溝は7世紀第4四半期の竪穴住居跡を切っており、また、廃棄されたのが7世紀末から8世紀初頭のことである。一世代に渡り使用されたものと思われる。

6号溝、4・5号溝を方形囲繞施設とするもので、東西に長い屋敷地が想定できる。66号掘立柱建物跡が主屋、63～65号掘立柱建物跡が脇屋である。77号掘立柱建物跡は、唐尺を使用しておらず、しかも75・76号掘立柱建物跡と軒先方向が若干ことなるため、おそらくこの時期の倉庫であったのではないかと考えている。

方形囲繞施設内に竪穴住居群は存在しないが、倉庫跡以外の掘立柱建物跡は不明である。

門状の施設は存在しない。望楼跡も認められなかったが、調査区外に存在するのかもしれない。

4・5号溝の陸橋部を出ると、方向を揃えて64・65・70号竪穴住居跡が建ち並んでいたはずで、また住居構造から61号竪穴住居跡も、70号竪穴住居跡と並んで建てたのではないかと考えている。陸橋部から出ると、まず61・70号竪穴住居の隙間をかいぐり、右手に64・65号竪穴住居をみ、左側にはおそらく掘立柱建物が存在したのだろう、そうした光景が読み取れるのである。

新官衙跡

8世紀前半に相当する。これも一世代限りの使用回数である。

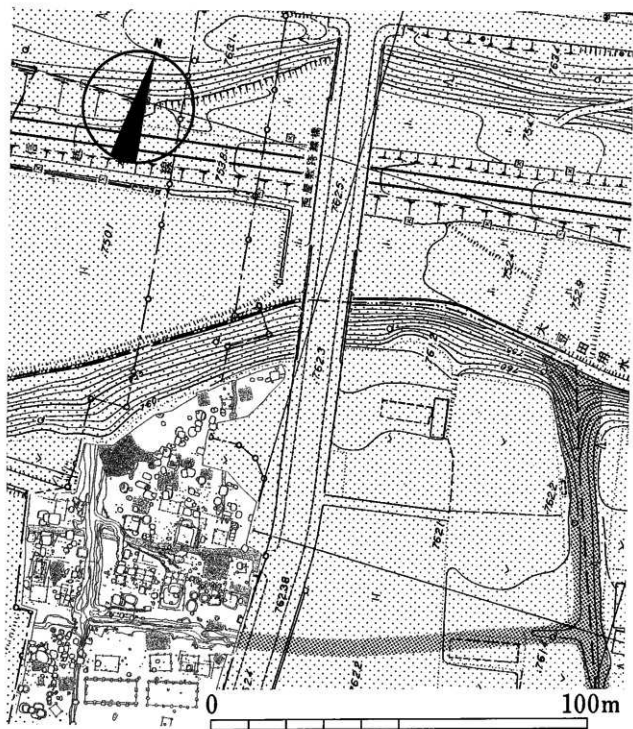
6号溝はそのまま区画溝として使用し、ここから60m、唐尺でいう200尺離れたところに2・3号溝を設けている。72号掘立柱建物跡が主屋、73号掘立柱建物跡が脇屋となり、ともに唐尺を使用している。また、互いの距離を3.0m、唐尺でいう10尺の位置に離している。76号掘立柱建物跡は唐尺を使用した倉庫跡と考えられ、そこから西に3m（唐尺=10尺）離れて位置する75号掘立柱建物跡についても、南北長を見れば唐尺が看取され軒先方向が揃っていることなどから、これについても倉庫跡と考えている。

方形囲繞施設内の南西隅にある34・35号掘立柱建物跡は、73号竪穴住居跡の貼床を切り、1間×1間の掘立柱建物としては非常に深い柱穴の掘方を呈していた。したがって、本跡を望楼跡と認定した。

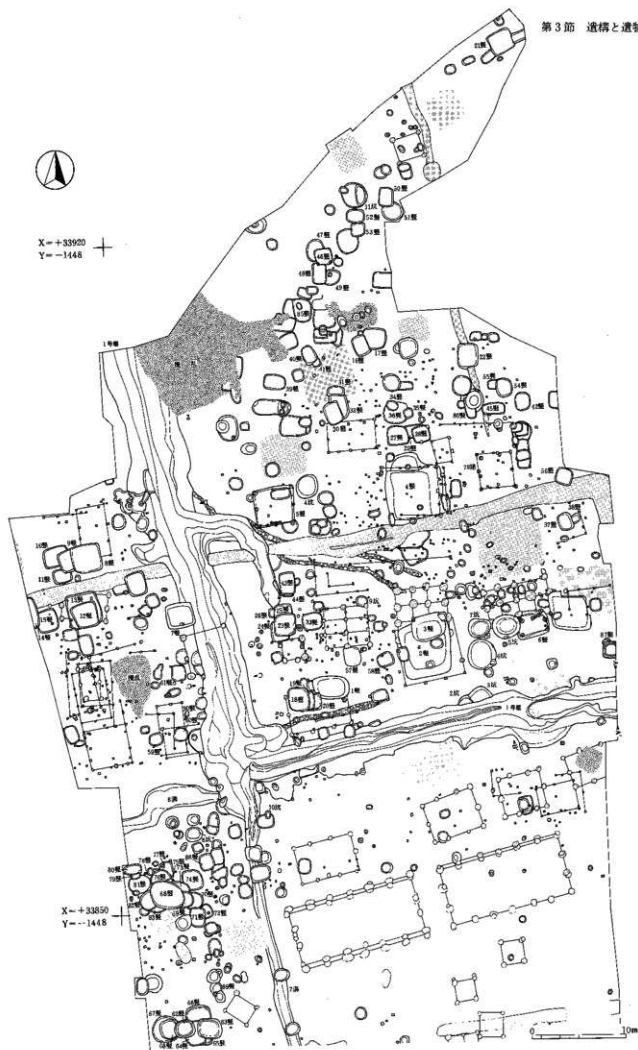
2・3号溝の陸橋部間にあるものは、いわゆる門状の施設である。掘方を持たず、角材をそのまま打ち込んだもので、正確には門になるやどうやもわからない。

方形囲繞施設内に竪穴住居群は存在しないが、倉庫跡群や望楼跡以外の掘立柱建物跡は不明である。

1号溝は、2・3号溝から30m、唐尺の100尺の位置にありこの時期のものと考えており、出土遺物からいっても問題ない。2・3号溝と1号溝間には竪穴住居跡は存在しないが、掘立柱建物跡については不明である。陸橋部が存在しないが、うまく把握できなかった40号掘立柱建物跡南側や59号掘立柱建物跡などが土橋として活用されたのかもしれない。



第71図 中世の居館跡



第72図 中世の遺構配置

3 中世の遺構と遺物

中世戦国期の居館跡を北端部で確認した。北側の急崖を自然の要害として利用し、その他三方を空堀で囲んだものである。新発見のものであるが、未発掘部分においても実際には堀に沿って落ち込みが認められるので、およそ規模が判明した。第73図に示すように、内法で東西長120m強をはかり、北側については浸食を受けているものと思われるが、それでも優に80mをこえている。また、東側にも7号溝、あるいはそれより規模の大きいものが走っていることもわかる。

遺物はわずかしか出ていないが、13世紀から認められる。これらは中国陶磁で、本来この時期まで遡りえるのかどうかわからない。15世紀中頃には退去しているらしい。

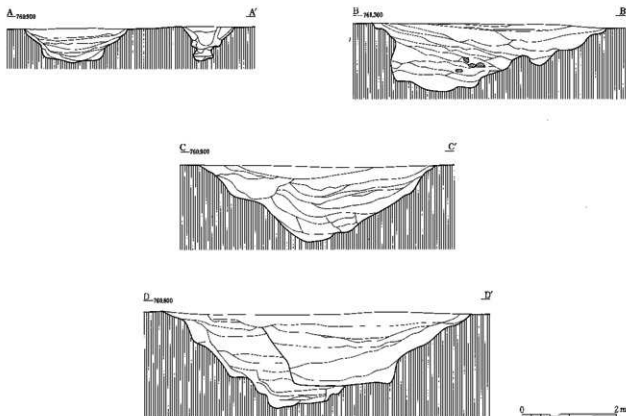
(1) 堀

1号堀 (第72・73図、P.L60・61)

幅は概ね5m、深さは北西隅に行くほど深くなり、最高では2mを優にこえている。南東隅は二股に分かれており、しかも浅い。セクションD-D'をみると、一度掘り返した痕跡が認められるが、ほかでは捉えられなかった。

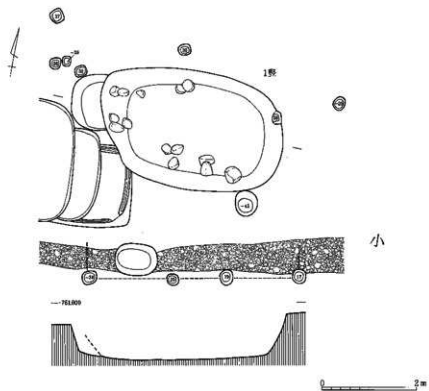
覆土は、いかようにも捉えられ、人為的なか自然埋没なのかよくわからない。おそらく両者が混在するものではなかろうか。また、堀の内側には土塁が想定でき、覆土に軽石流堆積物のブロック層が多分に含まれていた。

覆土中層には砂層が薄く堆積しており、その中にウマ・ウシの獣骨がやや散乱した状態でみつきり、時折イヌの骨類も確認できた。

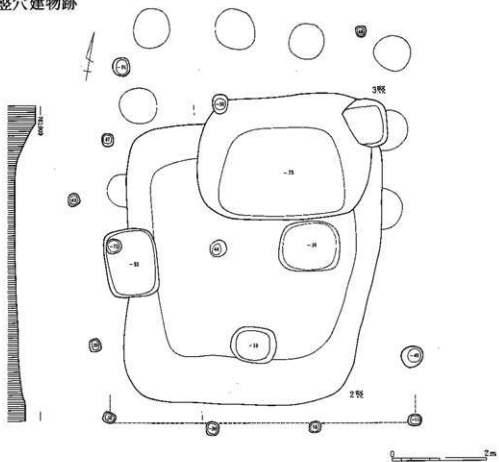


第73図 1号堀断面

1号竪穴建物跡

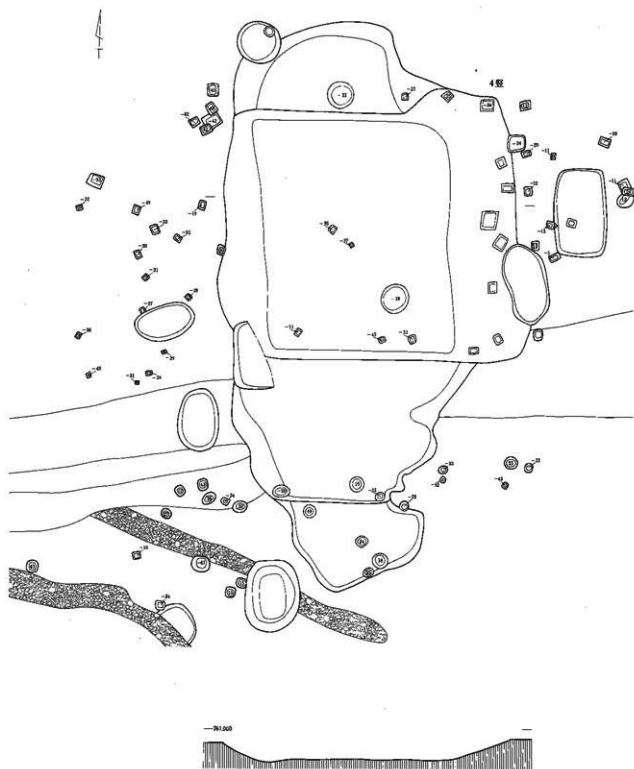


2・3号竪穴建物跡



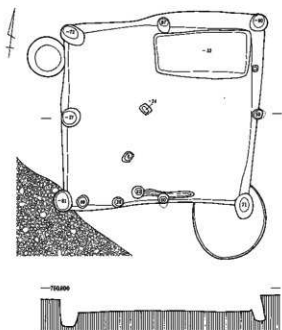
第74図 竪穴建物跡(1)

4号竪穴建物跡

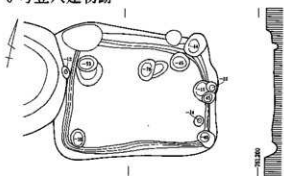


第75図 竪穴建物跡 (2)

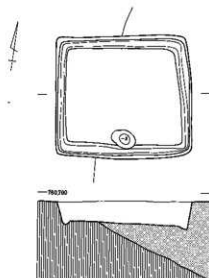
5号竖穴建物跡



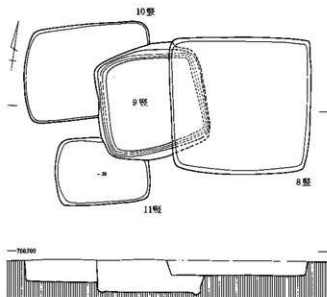
6号竖穴建物跡



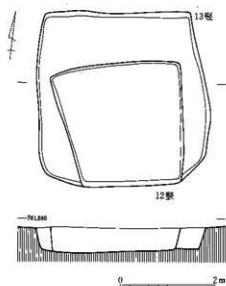
7号竖穴建物跡



8-11号竖穴建物跡

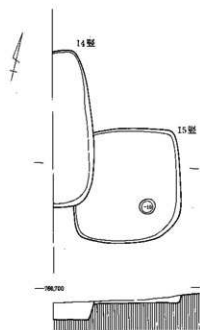


12-13号竖穴建物跡

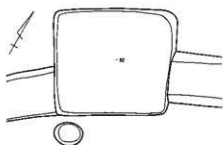


第76図 竖穴建物跡 (3)

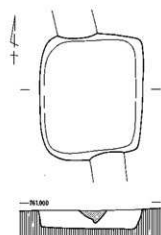
14・15号竪穴建物跡



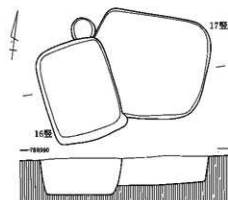
21号竪穴建物跡



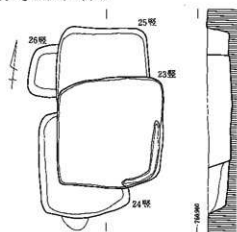
22号竪穴建物跡



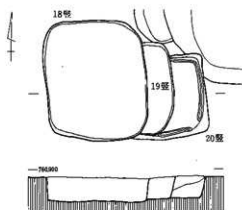
16・17号竪穴建物跡



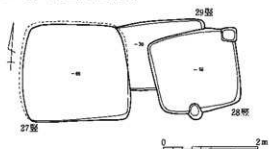
23-26号竪穴建物跡



18-20号竪穴建物跡

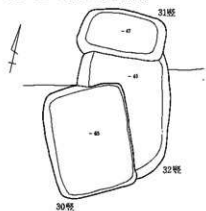


27-29号竪穴建物跡

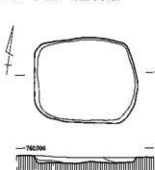


第77図 竪穴建物跡(4)

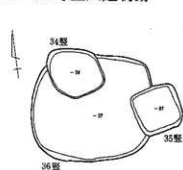
30-32号竪穴建物跡



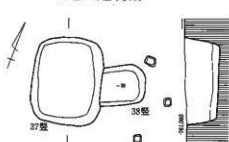
33号竪穴建物跡



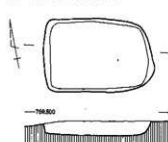
34-36号竪穴建物跡



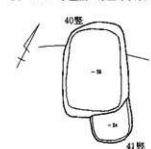
37-38号竪穴建物跡



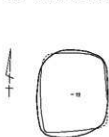
39号竪穴建物跡



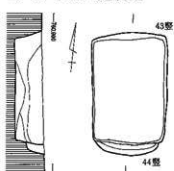
40-41号竪穴建物跡



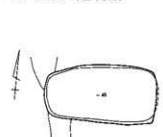
42号竪穴建物跡



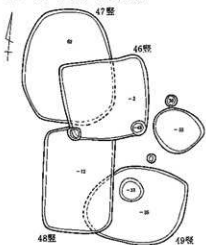
43-44号竪穴建物跡



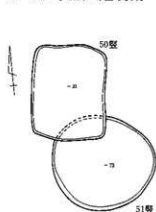
45号竪穴建物跡



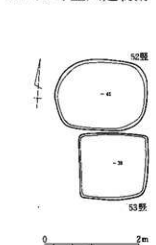
46-49号竪穴建物跡



50-51号竪穴建物跡

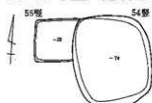


52-53号竪穴建物跡

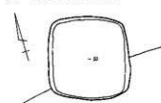


第78図 竪穴建物跡 (5)

54・55号竪穴建物跡



56号竪穴建物跡



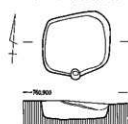
57号竪穴建物跡



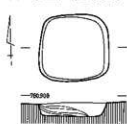
58号竪穴建物跡



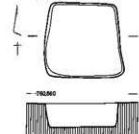
59号竪穴建物跡



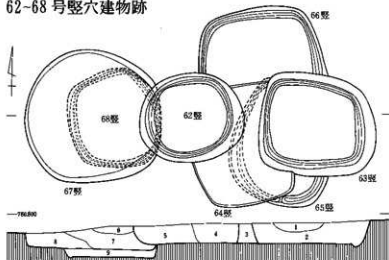
60号竪穴建物跡



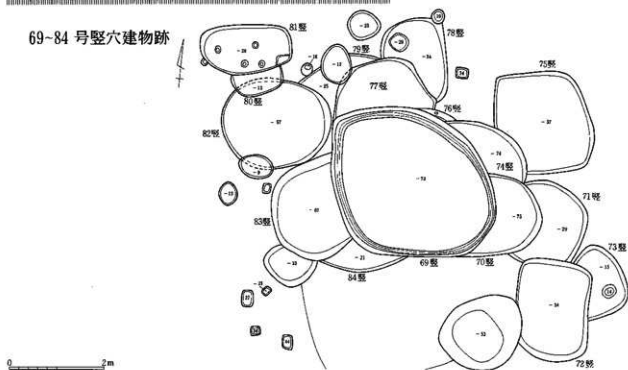
61号竪穴建物跡



62-68号竪穴建物跡



69-84号竪穴建物跡

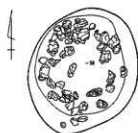


第79図 竪穴建物跡(6)

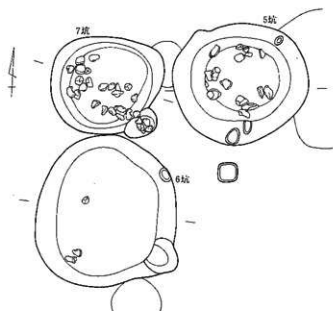
2·3号土坑



4号土坑



5-7号土坑



5号土坑



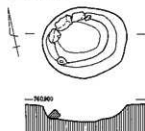
6号土坑



7号土坑



8号土坑



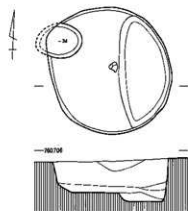
9号土坑



10号土坑

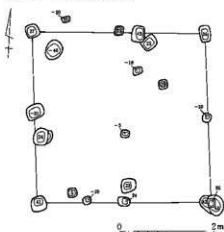


11号土坑



第80回 土坑





第81図 掘立柱建物跡

(2) 竪穴建物跡 (第74～79図、P.L62・63)

遺構の認定に当たっては、平面形方形を基本形態とし、一辺1m以上のものを指している。本来、上屋構造を持つか否かという点が問題となるところだが、それを証明する手立てはない。おそらく、一部には土坑やほかの機能に携わったものが含まれている可能性が高い。なお、1～4号竪穴建物跡を除いては、ほぼ人為的に埋め戻しが行われたと思われる。火床はない。

また、1～4号竪穴建物跡の場合、スロープ状の壁面を呈し、覆土も基本的に自然埋没している。掘立柱建物跡の内部に設け

られた大形土坑とも捉えられるかもしれませんが、一般的にいう竪穴建物跡とは正確が違うのではないかと考えている。今回、掘立柱建物跡が明確に捉えられなかったことから、ここに掲載した。推測だが、人が住まう場所ではなく、馬や牛の飼育場所ではないかと考えている。

(3) 土坑 (第80図、P.L64)

多数検出されたが、その代表的なものだけ紹介しておく。また、もっとも多いのは、一辺1mにも満たない方形の土坑だが、これについては省略する。

1～7号土坑は、大形で円形を呈し、断面はナベ底状を呈している。覆土は自然堆積をなし、中層から上層にかけて火山岩質の礫が散乱したものが多い。

8～10号土坑は、小形で平面形態円形、周囲に配石を有している。

11号土坑は、大形で円形を呈するが、底部に施設を有するものである。覆土は人為的な埋め戻しが行われている。

(4) 掘立柱建物跡

79号掘立柱建物跡 (第81図、P.L64)

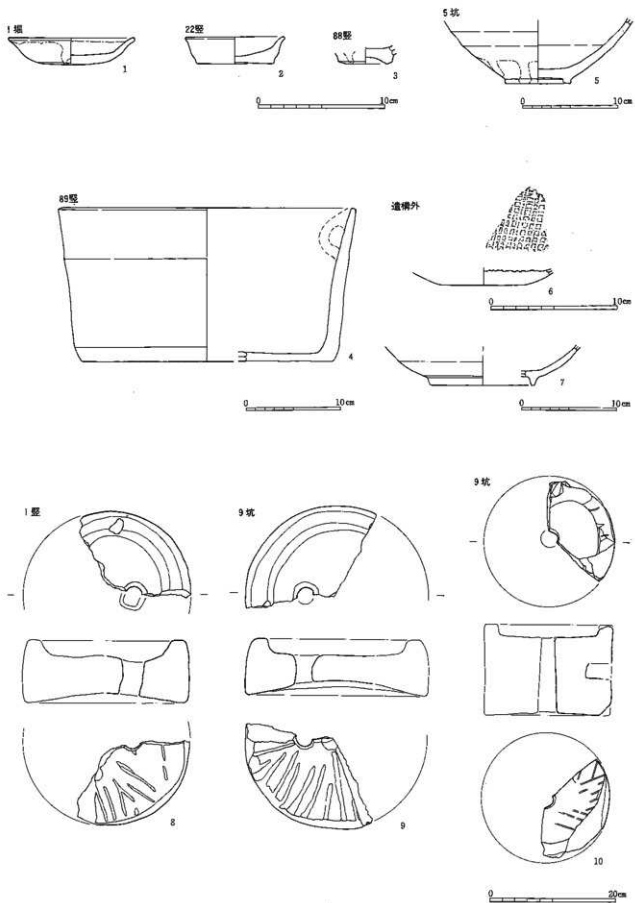
数ある候補の中でも、これが唯一掘立柱建物跡として認定されたものである。

2×2間の榑柱式のもので、南北・東西長ともに3.70mをはかる。角材を打ち込んだものである。

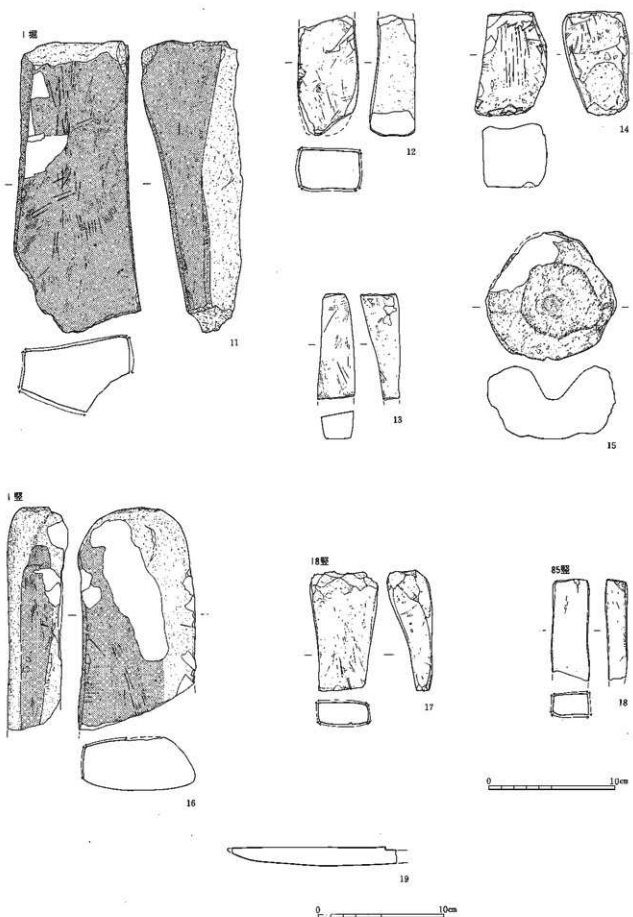
(5) 出土遺物

土器・陶磁器類 (第82図、P.L80)

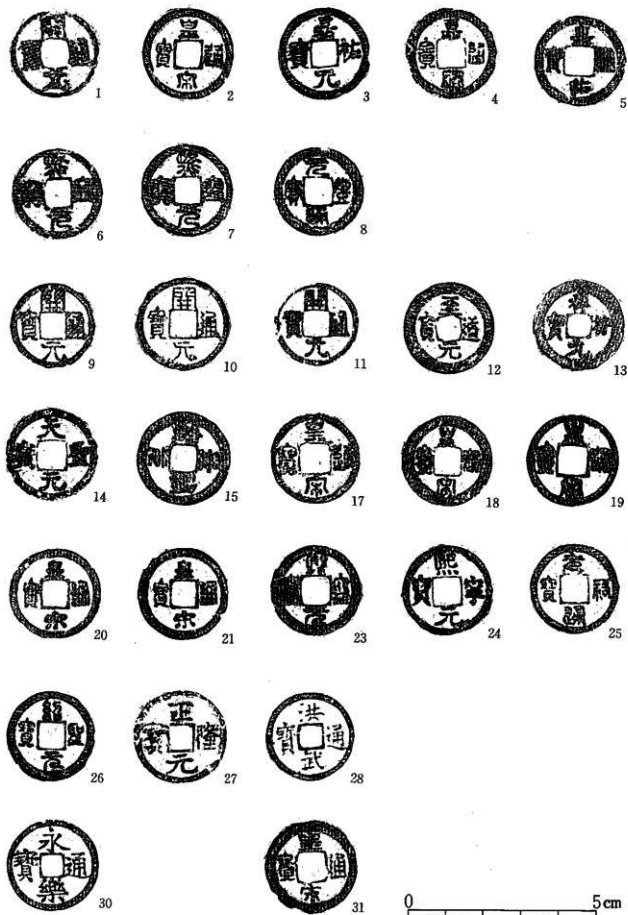
P.L80-1は、龍泉窯蓮弁紋碗で13世紀に位置付く。P.L80-2は、在地のすり鉢だが産地や時期は不明。P.L80-3 (第82図1) は、縁軸小皿で古瀬戸後期様式で15世紀に該当する。P.L80-4は、中国産の青磁であるが窯式名はわからない。13世紀前半のもので画花紋碗の一群といえる。P.L80-5 (第82図2) はかわらけ。P.L80-6は、龍泉窯雷紋碗で15世紀中頃の所産。P.L80-7は龍泉窯だが時期不明。P.L80-8は古瀬戸の水注であり、14世紀に位置付く。P.L80-9 (第82図3) も古瀬戸の天日茶碗で15世紀代のものである。P.L80-10 は中国産の青磁で15世紀前半のものである。P.L80-11 は、龍泉窯蓮弁紋碗で13世紀に位置付く。第82図4は内耳土器で15世紀中頃に相当するものと思われる。P.L80-12 (第82図5) は古瀬戸の平碗



第82図 中世出土遺物(1)



第83図 中世出土遺物(2)



第84図 錢貨拓影

第1表 錢貨一覽

番号	名称	時代	初铸年(西暦)	読み方	重量(克)	出土地点	備 考
1	開元通宝	唐	武徳4年(621)	対	3.0	1号堀	3枚接着
2	皇宋通宝	北宋	宝宋2年(1039)	〃	3.0	〃	
3	嘉祐元宝	〃	嘉祐元年(1056)	廻	3.2	〃	
4	〃	〃	〃	対	3.7	〃	
5	〃	〃	〃	〃	2.5	〃	
6	熙寧元宝	〃	熙寧元年(1068)	廻	2.5	〃	
7	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
8	元豐通宝	〃	元豐元年(1078)	〃	2.8	〃	
9	開元通宝	唐	武徳4年(621)	対	2.8	22号竪穴建物跡	
10	〃	〃	〃	〃	2.3	〃	
11	〃	〃	〃	〃	1.5	〃	
12	至道元宝	北宋	至道元年(995)	廻	3.0	〃	2枚接着
13	祥符元宝	〃	大中祥符元年(1008)	〃	2.5	〃	
14	天聖元宝	〃	天聖元年(1023)	〃	2.8	〃	
15	景祐元宝	〃	景祐元年(1034)	〃	3.1	〃	
16	皇宋通宝	北宋	宝宋2年(1039)	対	(1.8)	〃	
17	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
18	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
19	〃	〃	〃	〃	2.7	〃	
20	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
21	〃	〃	〃	〃	3.3	〃	
22	嘉祐元宝	〃	嘉祐元年(1056)	廻	(1.9)	〃	
23	〃	〃	〃	〃	2.7	〃	
24	熙寧元宝	〃	熙寧元年(1068)	〃	3.2	〃	
25	元祐通宝	〃	元祐元年(1086)	〃	2.9	〃	
26	紹聖元宝	〃	紹聖元年(1094)	〃	3.3	〃	
27	正隆元宝	金	正隆3年(1158)	〃	2.4	〃	
28	洪武通宝	明	洪武元年(1368)	対	3.3	〃	
29	不明				(1.7)	〃	
30	永樂通宝	明	永樂6年(1408)	対	3.5	29号竪穴建物跡	
31	皇宋通宝	北宋	宝宋2年(1039)	〃	2.5	86号竪穴建物跡	

で14世紀後半。P L 80-13 (第82図7)・14は中国産の青磁だが、窯式や時期など不明である。P L 80-15 (第82図6)は古瀬戸のおろし皿で14世紀から15世紀の年代が与えられる。

石白類品 (第82図、P L 80)

1号竪穴住居跡から粉挽き白の上白(安山岩)、9号土坑から粉挽き白の上白(安山岩)及び茶白の上白(安山岩・直径(204)mm 高さ144mm・ふくみ5mm 芯棒孔直径30mm・回転方向左)が出土した。

磁石・その他 (第83図、P L 80)

11は安山岩・16は砂岩とともに置き磁石、12・14は砂岩でできており荒磁石、13・17・18は緻密な凝灰岩でできているので仕上磁と思われる。15は用途不明の軽石製品である。

金属製品 (第83図)

刀子1点だけが出土した。

銭貨 (第84図、P L 81)

34枚の渡来銭が出土した。内訳は、中国の唐銭1種6枚・北宋銭9種24枚・金銭1種1枚・明銭2種2枚・判読不明銭1枚である。

22号竪穴建物跡からまとまって出土したほか、1号堀の覆土中・29号竪穴建物跡・86号竪穴建物跡からも出土した。

4 時期不明の遺構と遺物

(1) 陥し穴

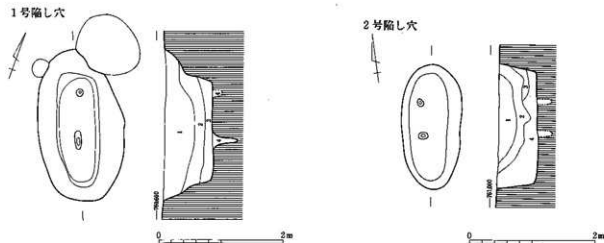
第4章-第3節-9と同じように、ここでも時期不明の遺構としておきたい。

1号陥し穴 (第85図)

長さ2.45m、幅1.4m前後、深さ0.85mをはかる。北側を中世の土坑に切られている。逆茂木は2個検出され、打ち込まれたものであった。

2号陥し穴 (第85図)

長さ2.0m、幅0.95m、深さ0.60m強をはかる。逆茂木は2個検出されたが、埋め込みの方法はわからなかった。



第85図 陥し穴

第4節 小結

調査されないまま園場整備が行われた地点であったが、いざ蓋を開けてみると、律令初期に栄えた初期銅師屋遺跡群の中核と、あわせて中世の居館跡が出現したのである。

初期銅師屋遺跡群は6世紀後葉からその出現をみている。これまで、この時期の竪穴住居跡はただ1棟のみの発見であったが、一応の規模で分布していることが判明した。

つづいて7世紀初頭・中葉・後葉という段階がはっきりなしに存続したようで、佐久地方にとって、これまで立ち遅れてきた6世紀後葉から7世紀代の土器編年については好適な材料となりえよう。

7世紀第4四半期の竪穴住居跡を切るようなかたちで、突如、官衙跡の出現をみている。区画溝内からは竪穴住居を追い去り、陸橋部前面だけに数棟の住居を配している。8世紀前半には規模を拡大し、こうした住居さえも見当たらなくなる。親子二代に跨がるものと考えているが、こうした古墳時代後期末葉から奈良時代前半にかけての官衙跡自体、長野県下では初めてのことなどで様々な興味深い事実が浮かびつつある。

ところで、この官衙跡は一体何を司るものだったのであろうか。西方の遺物は出ているが、これは周辺の律令期の計画村落でも同等のことがいえる。実をいうと、まったくなにも出土していないのである。規模からみて少なくとも郡衙ではない。それ以下の類で、郷衙や駅家関係の郷衙、あるいはさらにそれ以下という答えが出てくるが、いずれにしてもすべては憶測を超えるものではない。

この官衙跡が廃棄されると、人々はここに立ち入ることはなかったようで、9世紀にならなければ竪穴住居を構えることはしなかった。周辺も状況も似たようなもので、けっして集落の中心になることはなかったらしい。

中世の居館跡については、これまで文献には登場しなかった城營の居宅であり、これもまた貴重な発見であった。

第8章 ^{しもえだはら}下前田原遺跡群・^{ながのはら}長野原遺跡

第1節 遺跡の概観

下前田原遺跡群は佐久市大字小田井、長野原遺跡は小諸市大字平原に所在する。実際には同一の遺跡であるが、市界に位置するため行政区画によって別の名称が与えられている。公園との契約では、それぞれ別に結ばれているものの、ここでは分離する必要性が見つからないため同時に報告する。

遺跡は、浅間南麓の緩斜面に位置している。他章で報告した遺跡と同じように、南西に降下する台地部分に相当する。幅100m程の田切り谷を挟んで、南側に宮ノ反A遺跡群(第7章)、北側に赤沼遺跡(第9章)が分布する。現在では、調査対象範囲の東側にTDK千曲川テクニカルセンターや藤総業などの工業地帯になっているが、一般には荒涼とした畑作地帯が営まれている。

遺跡の範囲は、尾根軸でみればおよそ1,400m、幅は最大で500mをはかる。比較的規模の大きい遺跡であるが、もはや弥生時代や律令の計画村落をつくるには標高が高すぎるし、逆に縄文時代にとっては標高が低すぎるという欠点がある。至って遺構分布の少ない遺跡といえる。これまで2度にわたる調査が行われているが、昭和47年度に行われたものでは、古墳時代後期後半の下前田原古墳群後原1・2号墳及び中世の居居跡を調査し(佐久市教育委員会 1972)、さらに本来調査対象範囲となるべく調整池の範囲を、昭和57年度調査しており縄文時代の土坑らしきものが発見されているらしい(未報告)。その他、すでに消滅してしまったが、後期後半の長野原塚古墳が存在した。一般には、後期後半の終末期古墳が構築される場所であり、その他、縄文時代以後の小規模な遺物散布地として周知されている。

第2節 調査の概要

調査対象範囲の中央にTDK千曲川テクニカルセンターの駐車場が存在し、即調査できるような状況ではなく、またその南側には佐久市教育委員会が調査した調整池、さらに南側の台地縁片部は未買収地となっていた。したがって、調査可能な北半部を第1次として調査し、以後、問題が解決しだい、南半部を2次調査する予定であった。

第1次調査は無事終了したが、第2次については中々決着がつかず、代わりに調整池の代替地の調査まで行うという結果になった。ようやく駐車場部分と調整池代替地を調査できたものの、未だ未買収地は解決せず、これについては翌年の冬に対応した。結果的に、第3次まで調査を行ったことになる。

平成4年4月9日、第1次調査として表土剥ぎを開始した。遺構の分布が希薄であることから、始めから全面剥ぎを試みた。結局4月13日には終了し、結果的には遺構・遺物とも検出できなかった。

第2次調査は、同年12月21日に試掘調査として行った。TDK千曲川テクニカルセンター駐車場、及びその西側に広がる調整池代替地を同時に行った。計13本のトレンチを設定したが、ここでも遺構・遺物とも認められなかったため、面的に広げることなく調査を終了させた。

第3次調査は、平成6年1月14日から開始した。試掘調査から開始したのだが、堅穴住居跡を検出し、面的に広げたところ、計3棟の古墳時代後期の堅穴住居跡が確認できた。1月21日、すべての調査が終了した。

調査日誌抄

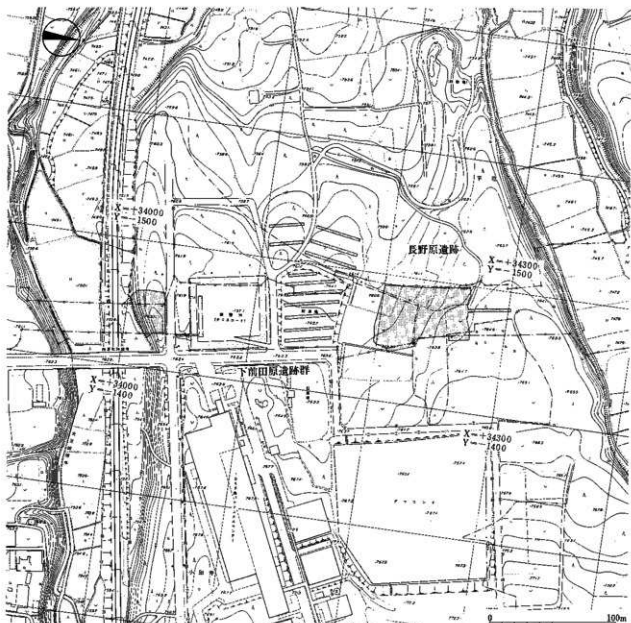
平成4年度

- 4月9日 表土剥ぎ開始。
- 4月13日 表土剥ぎ終了。作業員を投入し検出作業に入る。
- 4月14日 遺構・遺物とも検出できず。
- 5月7日～8日
コンタ図作成。第1次調査終了。
- 12月21日 第2次調査開始。TDK駐車場・副

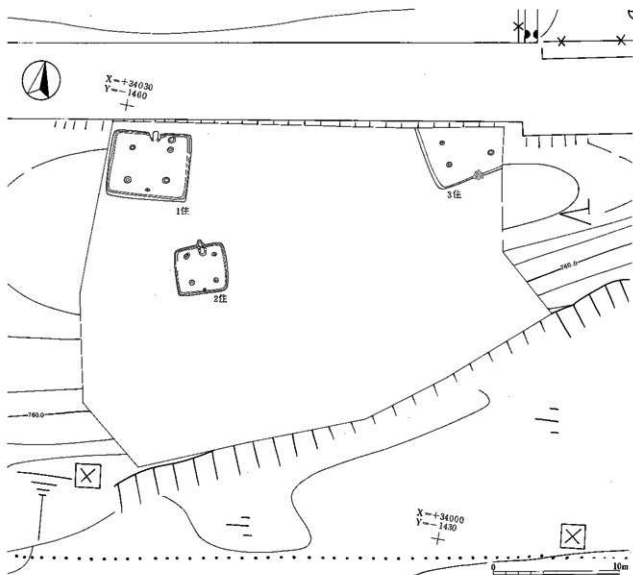
整池代替地を試掘。遺構・遺物ともなく終了。

平成5年度

- 1月14日 第3次調査開始。表土剥ぎを行い古墳時代後期の竪穴住居跡3棟を検出。
- 1月21日 調査終了。これを以て、下前田原遺跡群・長野原遺跡の調査はすべて終了する。



第1図 調査範囲



第2図 遺構配置

第3節 下前田原遺跡群の遺構と遺物

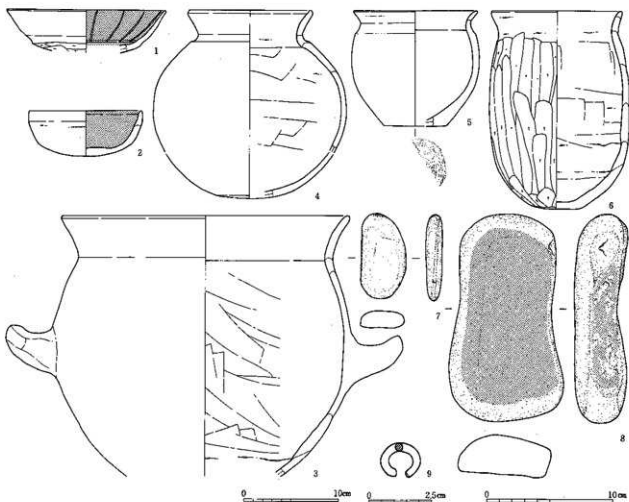
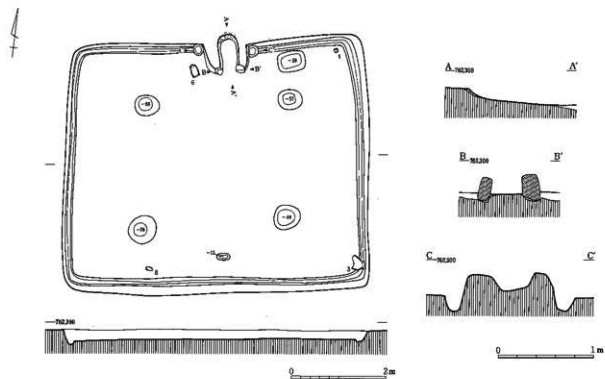
1 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第3図、PL83)

1の土師器坯の存在から、6世紀後葉頃に廃棄された住居跡と考えられる。

覆土は単層で、軽石流堆積物のブロックを多分に含んだ暗褐色細砂壤土からなる。カマドは、袖を地山掘り残しとし、焚口部には調整を受けた軽石を立石させていた。火床部は特に段を持たないが、床面よりも若干高めに設定しており、また煙り出し部分には赤色粘土を張り付けていた。カマド左右には壁に沿うように、深さ20cm弱の2本の柱穴が確認された。掘方は基本的にないが、カマド縁片部にのみ認められている。

出土遺物は非常に少ない。実測した遺物を除けば、わずかにビニール袋ひとつしか出ていない。



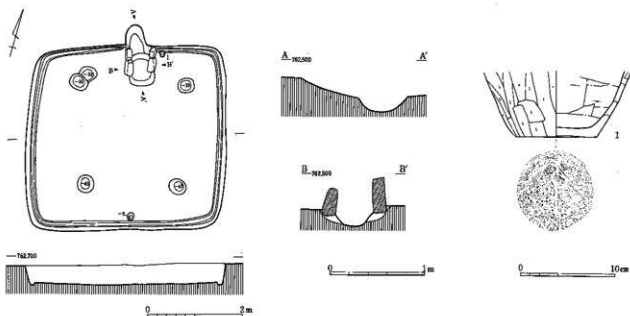
第 3 图 1 号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡 (第4図、P.L.83)

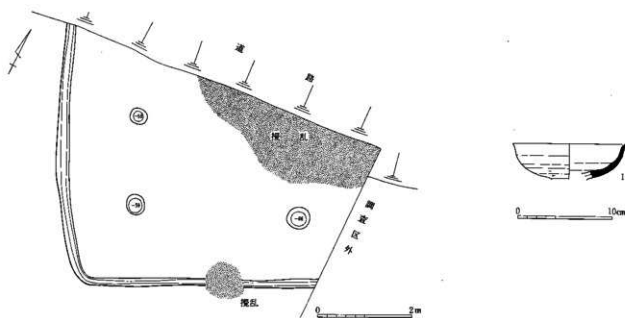
1の竪穴底部破片以外には実測可能なものがなく、古墳時代後期のものであることは確かだが、7世紀前葉以前のものとしかねない。ただし、1号竪穴住居跡とはほぼ等しい時期のものではないかと考えている。

覆土は単層で、1号竪穴住居跡のものに等しい。カマドは、袖に調整を受けた軽石を、左右2個づつ立石させ、壁との隙間に赤色粘土を張り込んでいた。火床部はない。掘方は一切なかった。

遺物は、1を除いては極めて微量である。少なくとも時期が判明するものは1点もなかった。



第4図 2号竪穴住居跡



第5図 3号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡（第5図）

実測可能なものは、1の須恵器高坏だけであり、古墳時代後期のものとはかいえない。ただし、2号竪穴住居跡同様、1号竪穴住居跡と近い位置にあるのではないかと考えている。

住居東縁片が調査区外となり、また北半部を既存道路によって破壊されていた。ただし、南側の柱穴が残存しているので、およそ東西が6.6m前後であることが判明している。比較的規模の大きい竪穴住居である。

覆土は単層で、これも1号竪穴住居跡に等しい。わずかながら掘方が認められたが、特に起伏がなく平坦に掘られていた。

遺物は微量で、1以外は数点の土師器破片しか出ていない。

第4節 小結

これまでの調査では、縄文時代の土坑、終末期古墳、中世の館跡の存在が明らかとなっていた。ところが今回の調査では、ちょうど律令の世の中を迎えるか迎えない頃の集落の姿が読み取れた。実はこうした傾向は以前にも認められ、例えば県埋文センターが調査した栗毛坂遺跡群A地区（県埋文センター1991）や中金井遺跡群（県埋文センター1998）もそうで、主に浅間南麓一帯でも、その後一般には人々が住まうことを嫌う場所に設けている。出土遺物が非常に少ないこと、ましてや前後する時期の遺物がまず見当たらないことが顕的に表現しているものと考えられる。その理由はなおも不明だが、こうした段階を踏まえて、例えば鑄師屋遺跡群などの律令期の計画村落が生まれたのである。今後、一考を要することであろう。

第9章 あかぬま 赤沼遺跡

第1節 遺跡の概観

小諸市大字平原赤沼に所在する。浅間火山南麓の田切りに挟まれた、南西に下る台地上に位置しており、幅300m弱、長さ450mほどが遺跡範囲となっている。ただし、遺跡東端は御代田町との境界となり御代田町は、ここを古墳時代後期後半の“下原古墳群”を有することで、範囲を明確にしないまま下原古墳群遺跡として称している。

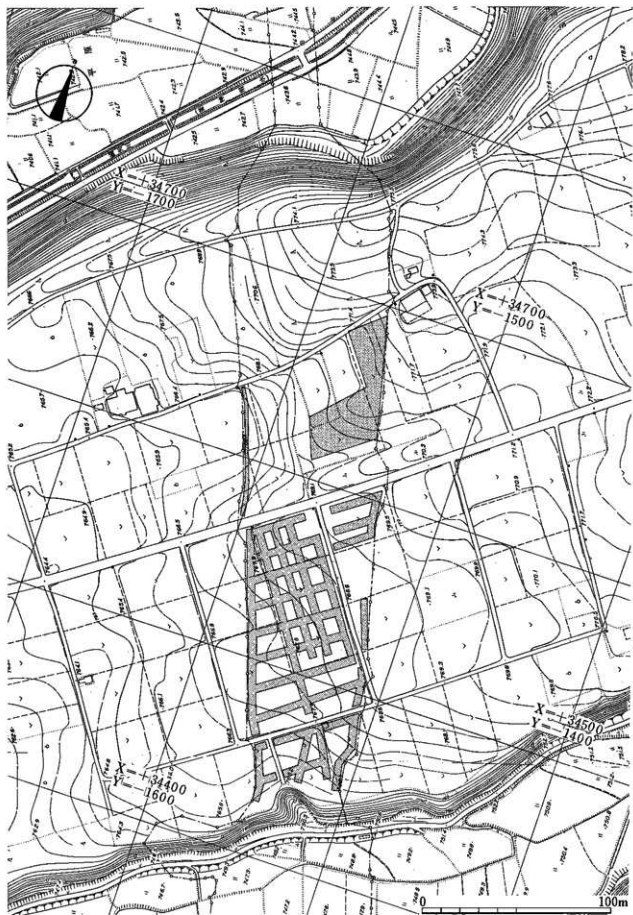
遺跡内は、かつて昭和初期に八幡一郎氏による下原古墳群以外は調査されたことがない。当時の様相とほぼ同じで、畑・果樹園などがそのままの状態で営まれている。南側の台地上には下前田原遺跡群・長野原遺跡（第8章）、北側には三子塚遺跡群（『小諸市内その3』平成11年度発刊予定）が位置している。台地上には遺跡群が広がる場所だが、付近の遺跡群同様、この場所では佐久平北縁に認められる律令期の計画村落や、浅間南麓の丘陵地帯に存在する縄文時代の大集落とは縁がなく、比較的小規模な展開しか想定できない。昭和49年に出版された『小諸市誌』考古編（小諸市誌編纂委員会 1974）では加曾利E式土器や打製石斧が表採され、さらに昭和62年の分布調査報告書（小諸市教育委員会 1987）では平安時代の遺物も採取されているらしい。しかしながら、副長野県埋蔵文化財センターとしては、事前踏査を行っているものの、残念ながら遺物は採取できなかった。

第2節 調査の概要

上信越自動車道は、小諸市分における遺跡中心部を南北に通過することとなり、約7,000mが調査対象面積となった。平成4年4月13日に調査を開始し、面的調査やトレンチ調査を行い、4月20日には全域に行き渡ったものの、縄文時代早期初頭の局部磨製石鏃1点と同中期初頭の土器片3点が出土しただけであり、遺構は皆無であった。これをもって調査を終了させた。

第3節 結語

これまで縄文時代中期後様及び平安時代の遺物しか採取できなかったが、今回の調査で、わずかながら縄文時代早期初頭や同中期初頭の遺物が認められた点は、新たな利用時期の発見である。ところが、全面的な調査を行っていないものの、やはり遺構の存在がなく、利用方法については疑問が残る。少なくとも集落として経営されたものではないことは確からしい。狩猟場、あるいはキャンプサイトのな遺跡ではないかと考えられる。



第1図 調査範囲

第3章～第9章の引用参考文献

- 一志 茂樹 1957 『御代田の古代史を探る』
- 小諸市教育委員会 1982 『野火付古墳』
- 〃 1985 『宮ノ反』
- 〃 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』
- 〃 1988 『銅師屋』
- 〃 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』
- 小諸市誌編纂委員会 1974 『小諸市誌考古編』
- 勤長野県埋蔵文化財センター 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 〃 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 佐久市教育委員会 1972 『下前田原古墳等発掘調査概報』
- 〃 1985 『銅師屋遺跡』
- 〃 1988 『銅師屋遺跡II』
- 〃 1989 『前田遺跡』
- 佐久市誌編纂委員会 1995 『佐久市志歴史編(一)』
- 桜井 秀雄 1998 『3 南平遺跡にみられる二種の陥し穴』『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会
- 堤 隆 1986 『野火付遺跡における平安時代の埋葬場をめぐって』『信濃』38-4
- 〃 1992 『信濃国佐久郡における奈良・平安時代の集落構造』『長野県考古学会誌』64
- 〃 1998 『第三章 奈良・平安時代』『御代田町誌歴史編上』御代田町誌編纂委員会
- 保坂 康夫 1990 『丘の公園第5遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会
- 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 〃 1987 『前田遺跡』
- 〃 1988 『十二遺跡』
- 〃 1989 『根岸遺跡』

第1表 栗毛坂遺跡群 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	陸高(m)	備	号
1号竪穴住居跡	N-15°W	3.60	3.06	0.20		
2号竪穴住居跡	N-9°W	4.25	4.10	0.35		
3号竪穴住居跡	N-26°W	4.50	3.90	0.60	自然況路を切る	
4号竪穴住居跡	N-33°E			0.15	自然況路に切られる	
5号竪穴住居跡	N-19°W	2.69	3.00	0.43		
1号孤立柱建物跡	N-21°W	3.96	3.24			
2号孤立柱建物跡	N-21°W	4.40	4.00			

第2表 長上呂遺跡群 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	陸高(m)	備	号
1号竪穴住居跡	N-55°W	3.72	3.74	0.63		
2号竪穴住居跡	N-15°W	5.61	5.04	0.17	3・4号孤立柱建物跡を切る	
3号竪穴住居跡	N-30°W	5.13	5.61	0.67	10・12号孤立柱建物跡に切られる	
4号竪穴住居跡	N-23°W	3.80	3.92	0.63		
5号竪穴住居跡	N-39°W	3.84	3.92	0.69	13号孤立柱建物跡に切られる	
6号竪穴住居跡	N-29°W	5.05	5.79	0.67		
7号竪穴住居跡	N-6°W	3.02	3.25	0.22		
8号竪穴住居跡	N-22°W	4.27	4.90	0.71		
9号竪穴住居跡	N-26°W	2.56	2.86	0.90		
10号竪穴住居跡	N-23°W	4.68	4.96	0.55	24号竪穴住居跡を切り、18号竪穴住居跡に切られる	
11号竪穴住居跡	N-6°W	3.52	3.59	0.61	20号竪穴住居跡を切り、14号竪穴住居跡・15号孤立柱建物跡に切られる	
12号竪穴住居跡	N-22°W	2.73	3.50	0.65		
13号竪穴住居跡	N-14°W	4.90	4.86	0.30		
14号竪穴住居跡	N-13°W	4.47	4.27	0.79		
15号竪穴住居跡	N-29°W	3.48	4.50	0.30	21号竪穴住居跡を切る	
16号竪穴住居跡	N-24°W	5.40	4.54	0.41		
17号竪穴住居跡	N-29°W	5.48	5.28	0.31	18・19号竪穴住居跡に切られる	
18号竪穴住居跡	N-9°W	4.53	4.47	0.67	19号竪穴住居跡を切る	
19号竪穴住居跡	N-26°W	3.67	3.67	0.32	17号竪穴住居跡を切り、18号竪穴住居跡に切られる	
20号竪穴住居跡	N-2°W	4.80	4.89	0.57	24号竪穴住居跡を切り、11号竪穴住居跡・15号孤立柱建物跡に切られる	
21号竪穴住居跡	N-25°W	2.70	3.20	0.31		
22号竪穴住居跡	N-45°W	4.38	4.02	0.18	23号竪穴住居跡を切る	
23号竪穴住居跡	N-48°W	4.11	4.17	0.83	22号竪穴住居跡に切られる	
24号竪穴住居跡	N-28°W	4.18	4.43	0.72	10・24号竪穴住居跡に切られる	
25号竪穴住居跡	N-38°W	3.62	4.38	0.59	35・39号竪穴住居跡を切る	
26号竪穴住居跡	N-13°W	2.18	2.86	0.72	2号孤立柱建物跡に切られる	
27号竪穴住居跡	N-7°W	3.62	4.30	0.67		
28号竪穴住居跡	N-24°W	3.62	4.79	0.28		
29号竪穴住居跡	N-28°W	5.92	5.74	0.63		
30号竪穴住居跡	N-24°W	3.41	3.48	0.46		
31号竪穴住居跡	N-27°W	3.87	3.93	0.79	33・34号竪穴住居跡に切られる	
32号竪穴住居跡	N-23°W	5.90	5.00	0.44	42・43号竪穴住居跡を切る	
33号竪穴住居跡	N-32°W	3.07	3.12	0.44	31号竪穴住居跡を切り、34号竪穴住居跡に切られる	
34号竪穴住居跡	N-34°W	4.46	4.62	0.66	31・33号竪穴住居跡を切る	
35号竪穴住居跡	N-46°W	4.90	5.20	0.67	39・40号竪穴住居跡を切る	
36号竪穴住居跡	N-36°W	4.15	4.41	0.74		
37号竪穴住居跡	N-43°W	5.08	4.42	0.20		
38号竪穴住居跡	N-26°W	3.34	3.54	0.46		
39号竪穴住居跡	N-15°W	3.89	3.95	0.77	25・35号竪穴住居跡に切られる	
40号竪穴住居跡	N-26°W	4.89		0.71	35号竪穴住居跡に切られる	
41号竪穴住居跡	N-36°W	4.87	4.48	0.32	44号竪穴住居跡に切られる	
42号竪穴住居跡	N-1°W	3.88	3.50	0.21	43号竪穴住居跡を切り、32号竪穴住居跡に切られる	

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備 考
43号竪穴住居跡	N-27°-W	2.78		0.60	32・42号竪穴住居跡に切られる
44号竪穴住居跡	N-33°-W	2.77	3.00	0.34	41号竪穴住居跡に切られる
45号竪穴住居跡	N-23°-W	3.17		0.33	46号竪穴住居跡に切られる
46号竪穴住居跡	N-32°-W	3.18	3.18	0.29	45・47号竪穴住居跡を切る
47号竪穴住居跡	N-21°-W			0.45	46号竪穴住居跡に切られる
48号竪穴住居跡	N-8°-W	4.10	4.43	0.24	
49号竪穴住居跡	N-10°-W	5.43	5.81		
50号竪穴住居跡	N-30°-W	3.44	2.90		1号竪穴住居跡に切られる
51号竪穴住居跡	N-39°-W	3.37	3.50	0.37	
52号竪穴住居跡	N-31°-W	2.47	2.14	0.43	
1号竪立柱建物跡	W-27°-S	4.79	3.75		
2号竪立柱建物跡	W-9°-S	7.06	4.50		26号竪穴住居跡を切る
3号竪立柱建物跡	W-2°-S	4.30	3.65		2号竪穴住居跡に切られる
4号竪立柱建物跡	W-13°-S	1.65	1.40		2号竪穴住居跡に切られる
5号竪立柱建物跡	W-5°-S	3.80	3.50		
6号竪立柱建物跡	W-22°-S	2.30	1.70		
7号竪立柱建物跡	W-23°-S	2.00	1.80		
8号竪立柱建物跡	W-43°-S	3.00	2.10		
9号竪立柱建物跡	W-10°-S	4.25	3.55		
10号竪立柱建物跡	W 3°-S	2.00	1.85		3号竪穴住居跡を切り、11号竪立柱建物に切られる
11号竪立柱建物跡	W-3°-S	2.70	2.40		10号竪立柱建物跡を切る
12号竪立柱建物跡	W 3° S	2.60	2.50		3号竪穴住居跡を切る
13号竪立柱建物跡	W-22°-S	4.25	4.05		5号竪穴住居跡を切る
14号竪立柱建物跡					7号竪穴住居跡に切られる
15号竪立柱建物跡	W-10°-S	5.10	3.70		11・20号竪穴住居跡を切る
16号竪立柱建物跡	W-26°-S	3.75	2.80		
17号竪立柱建物跡	W 20° S	3.00	2.70		
18号竪立柱建物跡	W-5°-S	2.50	1.90		
19号竪立柱建物跡	W-30°-S		3.30		

第3表 野火附遺跡 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備 考
1号竪穴住居跡	N 15° W	5.63	6.31	0.33	
2号竪穴住居跡	N-12°-W	4.03	4.52	0.22	
3号竪穴住居跡	N-23°-W	3.64	3.22	0.10	
4号竪穴住居跡	N-5°-W	4.96	5.30	0.40	
5号竪穴住居跡	N-10°-W	7.25	8.20	0.47	
6号竪穴住居跡	N-16°-W	6.43	6.80	0.43	
7号竪穴住居跡	N-19°-W	4.78	5.04	0.72	
8号竪穴住居跡	N-14°-W	3.30	2.80	0.14	
9号竪穴住居跡	N-7°-W	3.25	3.66	0.38	
10号竪穴住居跡	N 7° W	4.50	5.17	0.25	
11号竪穴住居跡	N-13°-W	3.89	4.44	0.35	
12号竪穴住居跡	N-27°-W	5.06	5.36	0.29	
13号竪穴住居跡	N-24°-W	6.12	6.94	0.52	
14号竪穴住居跡	N-5°-W	3.46	3.50	0.40	
15号竪穴住居跡	N-15°-W	4.97	4.53	0.20	
16号竪穴住居跡	N-5°-W	5.88	6.00	0.39	17号竪穴住居跡を切る
17号竪穴住居跡	N 20° W		4.17		16号竪穴住居跡に切られる
1号竪立柱建物跡	W-10°-S	3.45	3.38		
2号竪立柱建物跡	W 14° S	5.45	4.55		
3号竪立柱建物跡	N-15°-S	3.78			
4号竪立柱建物跡	W-8°-S	3.00	1.95		

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備	考
5号獨立柱建物跡	N-13°-W	3.97	3.86			
6号獨立柱建物跡	W-8°-S	3.80	3.60			

第4表 前田遺跡 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備	考
1号竪穴住居跡	N-27°-W	3.05	2.89	0.77		
2号竪穴住居跡	N-13°-W	3.23	3.16	0.36		
3号竪穴住居跡	N-12°-W	2.97	2.96	0.20		
4号竪穴住居跡	N-4°-W	3.56	3.72	0.25		2号獨立柱建物跡・粘土採掘坑に切られる
5号竪穴住居跡	N-2°-W	6.00	5.65	0.37		
6号竪穴住居跡	N-13°-W	5.52	5.53	0.28		
1号獨立柱建物跡	N-12°-W	5.21	4.40			
2号獨立柱建物跡	W-18°-S	4.85	3.30			粘土採掘坑・4号竪穴住居跡を切る
3号獨立柱建物跡	N-10°-W	2.19	2.19			
4号獨立柱建物跡	N-27°-W	2.20	2.20			
5号獨立柱建物跡	N-17°-W	2.67	2.53			

第5表 宮ノ反A遺跡群 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備	考
1号竪穴住居跡	N-9°-E	2.31	4.20	0.49		
2号竪穴住居跡	N	4.43	4.59	0.68		3・4号竪穴住居跡を切る
3号竪穴住居跡	N-6°-W	4.47	4.62	0.57		2号竪穴住居跡を切り、4・5号竪穴住居跡に切られる
4号竪穴住居跡	N-6°-W	3.07	3.10	0.70		2・3号竪穴住居跡に切られる
5号竪穴住居跡	N-6°-W	4.14	4.36	0.05		3号竪穴住居跡に切られる
6号竪穴住居跡	N-2°-W	3.28	5.22	0.43		
7号竪穴住居跡	N-26°-W	4.64	5.40	0.43		
8号竪穴住居跡	N-28°-W	2.45	2.47	0.44		
9号竪穴住居跡	N-7°-W	4.10	4.23	0.37		
10号竪穴住居跡	N-7°-W	4.16	4.04	0.39		
11号竪穴住居跡	N-7°-W	2.56		0.48		
12号竪穴住居跡	N-3°-W	2.78	3.80	0.22		24号獨立柱建物跡を切る
13号竪穴住居跡	N-14°-E	3.27	4.05	0.50		
14号竪穴住居跡	N-20°-E	4.27		0.35		16号竪穴住居跡を切る
15号竪穴住居跡	N-41°-E	3.49		0.91		16号竪穴住居跡を切る
16号竪穴住居跡	N-26°-E	2.28		0.60		14・15号竪穴住居跡に切られる
17号竪穴住居跡	N-13°-W	4.48	4.23	0.66		38号竪穴住居跡を切る
18号竪穴住居跡	N-18°-W	4.31	4.37	0.66		
19号竪穴住居跡	N-29°-W	2.37	3.38	0.22		
20号竪穴住居跡	N-4°-E	4.35	4.20	0.61		
21号竪穴住居跡	N-6°-W	3.40	4.23	0.48		
22号竪穴住居跡	N-14°-W	5.23	5.55	0.71		4号獨立柱建物跡を切る
23号竪穴住居跡	N-15°-W	3.34	3.64	0.57		
24号竪穴住居跡	N-17°-W	4.98	4.20	0.59		25号竪穴住居跡を切る
25号竪穴住居跡	N-17°-W		4.59	0.44		24号竪穴住居跡に切られる
26号竪穴住居跡	N	2.03	1.89	0.55		27号竪穴住居跡を切る
27号竪穴住居跡	N	1.90	2.60	0.50		26号竪穴住居跡に切られる
28号竪穴住居跡	N-16°-W	4.60	4.75	0.58		
28号竪穴住居跡	N-16°-W	4.30	4.29	0.58		
29号竪穴住居跡	N-14°-W		3.74	0.36		
29号竪穴住居跡	N-14°-W		3.18	0.55		
30号竪穴住居跡	N-3°-W	4.28		0.25		
31号竪穴住居跡	N-5°-W	3.18	3.68	0.37		
32号竪穴住居跡	N-15°-W		5.06	0.57		11号獨立柱建物跡を切る

階層番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	厚さ(m)	備 考
33号型穴住居跡	N-13°-E	3.88	4.45	0.56	9・10号孤立柱建物跡に切られる
34号型穴住居跡	N-13°-E	3.88		0.64	
35号型穴住居跡	N-25°-W	3.30	5.36	0.28	
36号型穴住居跡	N-10°-W	4.46	4.55	0.29	37・42号型穴住居跡を切る
37号型穴住居跡	N-19°-W			0.12	36号型穴住居跡に切られる
38号型穴住居跡	N	5.78	5.56	0.50	39～41号型穴住居跡を切り、17号型穴住居跡-12号孤立柱建物跡に切られる
39号型穴住居跡	N-11°-W	4.05		0.33	40号型穴住居跡を切り、38号型穴住居跡に切られる
40号型穴住居跡	N-43°-W	2.42	1.83	0.19	41号型穴住居跡を切り、38・39・42号型穴住居跡に切られる
41号型穴住居跡	N-41°-W			0.26	38～40・42・46号型穴住居跡に切られる
42号型穴住居跡	N-7°-E	4.35	5.13	0.46	40・41号型穴住居跡を切り、36号型穴住居跡に切られる
43号型穴住居跡	N-6°-E	3.18	3.98	0.35	44号型穴住居跡を切り、46号型穴住居跡に切られる
44号型穴住居跡	N-6°-E			0.09	43・46号型穴住居跡に切られる
45号型穴住居跡	N-8°-E	4.60	4.48	0.36	13・14号孤立柱建物跡に切られる
46号型穴住居跡(断)	N	6.00	5.58	0.35	41・43・44号型穴住居跡を切り、10号孤立柱建物跡に切られる
46号型穴住居跡(旧)	N	5.10	4.59	0.49	
47号型穴住居跡	N-13°-W	4.45	4.44	0.48	
48号型穴住居跡	N		3.82	0.41	
49号型穴住居跡	N-6°-W		5.89	0.43	26号孤立柱建物跡に切られる
50号型穴住居跡	N-6°-W	6.20	6.50	0.71	54号型穴住居跡を切り、1号溝に切られる
51号型穴住居跡	N-25°-W		3.46	0.64	
52号型穴住居跡	N-8°-W			0.05	
53号型穴住居跡	N-6°-W	5.56	5.48	0.71	
54号型穴住居跡	N-5°-W	4.13	4.36	0.52	50号型穴住居跡に切られる
55号型穴住居跡	N-7°-W	3.93	3.88	0.57	
56号型穴住居跡	N-14°-W	3.78	4.73	0.51	
57号型穴住居跡	N-24°-W	4.63	5.19	0.56	
58号型穴住居跡	N-16°-W	4.09	3.67	0.53	62号型穴住居跡に切られる
59号型穴住居跡	N-30°-W	4.73	5.10	0.58	
60号型穴住居跡	N-10°-W	4.68	4.30	0.55	
61号型穴住居跡	N	2.62	2.47	0.27	52・53号孤立柱建物跡を切る
62号型穴住居跡	N-14°-W	2.15	2.71	0.35	
63号型穴住居跡	N-11°-E	3.33		0.66	
64号型穴住居跡	N-13°-W	5.58	5.27	0.66	72号型穴住居跡を切る
65号型穴住居跡	N-19°-W	5.03		0.59	66号型穴住居跡を切る
66号型穴住居跡	N-28°-W			0.02	65号型穴住居跡に切られる
67号型穴住居跡	N-45°-W	3.63	4.50	0.58	
68号型穴住居跡	N-15°-W			0.55	
69号型穴住居跡	N-2°-W			0.16	
70号型穴住居跡	N-9°-W		3.62	0.50	
71号型穴住居跡	N-7°-E		2.83	0.09	59号孤立柱建物跡・1号溝に切られる
72号型穴住居跡	N-8°-W	3.91	4.02	0.42	54号型穴住居跡に切られる
73号型穴住居跡	N-14°-W		4.23	0.63	34・35号孤立柱建物跡・3号溝に切られる
74号型穴住居跡	N-19°-W	3.31	4.35	0.40	
75号型穴住居跡	N-7°-E		3.96	0.59	
76号型穴住居跡	N-21°-W			0.34	
77号型穴住居跡	N-7°-E		4.95	0.33	
78号型穴住居跡	N-17°-W		6.33	0.37	
79号型穴住居跡	N-7°-W	3.75	4.14	0.22	82号型穴住居跡を切る
80号型穴住居跡	N-2°-E		5.56	0.56	64号型穴住居跡に切られる
81号型穴住居跡	N-25°-W		3.10	0.05	67号型穴住居跡を切る
82号型穴住居跡	N-9°-W	6.00	6.62	0.62	79号型穴住居跡・6号溝に切られる
83号型穴住居跡	N-10°-W	4.24	4.43	0.70	50号孤立柱建物跡・4号溝に切られる
84号型穴住居跡	N-5°-W	4.45	4.65	0.44	
85号型穴住居跡	N-29°-W	3.46	3.37	0.26	

道幅番号	方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備 考
86号壁穴住居跡	N-27°W	3.67	2.98		
87号壁穴住居跡	N-20°W		2.70	0.33	
88号壁穴住居跡	N-14°W		0.12		
89号壁穴住居跡	N 14°W	5.35	5.50	0.13	
90号壁穴住居跡	N-10°W	2.50	3.10	0.23	
91号壁穴住居跡	N-6°W	4.97	5.24	0.49	
1号掘立柱建物跡	N-29°W		2.55		
2号掘立柱建物跡	N	2.86	2.86		
3号掘立柱建物跡	W-8°S	4.13	2.56		
4号掘立柱建物跡	W-77°S	3.50	3.30		22号壁穴住居跡に切られる
5号掘立柱建物跡	N-89°W	3.95	3.20		
6号掘立柱建物跡	W-7°S	3.60	3.53		
7号掘立柱建物跡	W-88°S	3.60			
8号掘立柱建物跡	W-70°S	3.25			
9号掘立柱建物跡	W-13°S				33号壁穴住居跡を切る
10号掘立柱建物跡	W 10°S	4.30	3.90		33・46号壁穴住居跡を切る
11号掘立柱建物跡	W-73°S	4.33			32号壁穴住居跡に切られる
12号掘立柱建物跡	N-10°W	4.60	4.10		38号壁穴住居跡を切る
13号掘立柱建物跡	N-11°W	4.60	3.70		45号壁穴住居跡を切る
14号掘立柱建物跡	N-1°W	4.50	4.50		45号壁穴住居跡を切る
15号掘立柱建物跡	W-30°S				
16号掘立柱建物跡	N-4°W	2.60	2.60		
17号掘立柱建物跡	W-80°S	3.54	3.32		
18号掘立柱建物跡			3.20		
19号掘立柱建物跡	W 80°S				
20号掘立柱建物跡	W-73°S		4.05		
21号掘立柱建物跡	W-3°S	3.60	3.50		1号流路に切られる
22号掘立柱建物跡	N-20°W	5.89	4.22		1号流路に切られる
23号掘立柱建物跡	N-4°W		3.33		
24号掘立柱建物跡	N-84°W	2.96	2.60		12号壁穴住居跡に切られる
25号掘立柱建物跡	N-3°W	3.15	3.10		1号溝に切られる
26号掘立柱建物跡	W 1°N	2.65	2.35		49号壁穴住居跡を切る
27号掘立柱建物跡	W-2°S	2.80	2.70		
28号掘立柱建物跡	N-24°W				
29号掘立柱建物跡	W-3°N	5.85			
30号掘立柱建物跡	N-80°W				
31号掘立柱建物跡	N-5°W		3.75		
32号掘立柱建物跡	N-5°W				
33号掘立柱建物跡	N-8°W	4.38	3.25		
34号掘立柱建物跡	W-12°S	2.73	2.70		73号壁穴住居跡を切る
35号掘立柱建物跡	W-13°S	2.52	2.40		73号壁穴住居跡を切る
36号掘立柱建物跡	N-13°W	5.27			
37号掘立柱建物跡	W-5°S	6.15	4.50		
38号掘立柱建物跡	W-1°S	3.27	3.20		
39号掘立柱建物跡	W 13°S	5.33	4.50		
40号掘立柱建物跡	W-14°S	1.75	1.55		
41号掘立柱建物跡	W 6°S	7.25			1号溝に切られる
42号掘立柱建物跡	N-7°W	4.95	3.80		
43号掘立柱建物跡	W-6°S	4.71	3.23		
44号掘立柱建物跡	N-6°W		4.30		
45号掘立柱建物跡	N-6°W		3.25		
46号掘立柱建物跡	W-13°S	5.07	3.82		
47号掘立柱建物跡	W-8°S				
47号掘立柱建物跡	W-8°S				

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	高さ(m)	備 考
48号竪立柱建物跡	N-6°-W				
49号竪立柱建物跡	N-88°-W	5.05	3.10		
50号竪立柱建物跡	W-17°-S		4.90		83号竪穴住居跡を切る
51号竪立柱建物跡	W-4°-S	2.43	2.30		
52号竪立柱建物跡	N-6°-W	3.00	2.96		61号竪穴住居跡に切られる
53号竪立柱建物跡	W-5°-S	2.80	2.63		61号竪穴住居跡・2号溝に切られる
54号竪立柱建物跡	N-14°-W		2.98		2号溝に切られる
55号竪立柱建物跡	N-2°-W				3号溝に切られる
56号竪立柱建物跡	N-20°-W		3.30		3号溝に切られる
57号竪立柱建物跡	N-2°-W	2.50	2.46		
58号竪立柱建物跡	N-5°-W	3.98	3.33		4号溝に切られる
59号竪立柱建物跡	N-1°-W	3.50	2.50		71号竪穴住居跡を切る
60号竪立柱建物跡	N-12°-W	2.25	2.20		
61号竪立柱建物跡	N-8°-W	2.40	2.25		
62号竪立柱建物跡	N-55°-W	2.61	2.26		
63号竪立柱建物跡	W-18°-S	5.33	4.12		
64号竪立柱建物跡	W-13°-S	4.60	4.10		
65号竪立柱建物跡	W-20°-S		3.38		
66号竪立柱建物跡	W-13°-S	6.50	3.85		
67号竪立柱建物跡	W-7°-S	4.60	2.80		
68号竪立柱建物跡	W-74°-S	4.56	4.27		
69号竪立柱建物跡	N-2°-W	3.50	2.25		
70号竪立柱建物跡	W-73°-S	2.47	1.76		
71号竪立柱建物跡	N-25°-W	2.83	2.73		
72号竪立柱建物跡	W-75°-S	10.80	4.86		
73号竪立柱建物跡	W-77°-S	10.46	4.93		
74号竪立柱建物跡	W-83°-S	6.46	4.00		
75号竪立柱建物跡	W-84°-S	4.53	4.13		
76号竪立柱建物跡	N-5°-W	5.30	5.00		
77号竪立柱建物跡	W-75°-S	6.66	3.26		
78号竪立柱建物跡	W-10°-S	3.10	1.73		

第6表 下前田原遺跡群 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	高さ(m)	備 考
1号竪穴住居跡	N-3°-W	4.76	5.96	0.35	
2号竪穴住居跡	N-16°-W	3.60	3.83	0.78	
3号竪穴住居跡	N-30°-W			0.15	

第7表 栗毛板遺跡群 古代遺物観察表

調査年度	発掘	遺物	土質	土層 (m)	観察	土質	備考
1位-1	上海部	口縁部1/9次	にぶい黄砂	1116.4 底7.9 高5.3	回転ナデ・底部回転糸切り→内面入念ミギキ	灰底	内面黒色地埋 破損後の二次焼成痕あり
#-2	上海部	1/3残	黄	1114.0 底7.2 高4.3	回転ナデ・底部下持ちヘラズリ→内面ミギキ	+10cm	内面黒色地埋
#-3	土師部	光形	にぶい黄	1113.8 底6.4 高3.7	*	灰底	内面黒色地埋 灯明部に転写
#-4	土師部	口縁部1/8次	黄	1113.5 底6.0 高4.3	回転ナデ・底部回転糸切りの後刻線部下持ちヘラズリ→内面ミギキ	灰底	内面黒色地埋 灯明部に転写
#-5	土師部	口縁部破片	黄		回転ナデ・内面ミギキ	+8cm	内面黒色地埋 修繕土跡
#-6	須恵部	口縁部1/9次	淡黄	1114.0 底7.3 高3.3 内底6.9	回転ナデ・底部回転糸切り	灰底	
#-7	須恵部	口縁部1/4次	灰	113.4 底6.1 高3.4 内底6.6	*	灰底	
#-8	上海部	透形光形	黄	高5.6	回転ナデ・底部下持ちヘラズリ→内面ミギキ	灰底	内面黒色地埋 焼成後外側から穿孔
#-9	須恵部	胴部1/4残			回転ナデ→胴部下位外側削ヘラズリ	灰底	
#-10	須恵部	底部光形	暗赤粘	109.2	回転ナデ・底部回転糸切り→胴部外側回転ヘラズリ	灰底	
#-11	土師部	3/4残	赤	1120.4 胴22.2 底4.3 高127.7	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面削ヘラズリ、胴部内面ヘラズリ	灰底 カマド内	
#-12	上海部	胴部上位以上1/12光形	黄	1120.3 胴(22.5 以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外側削ヘラズリ、胴部内面ヘラズリ	灰底 カマド内	外面全体に粘土付着 破損部に転写?
#-13	土師部	口縁部3/4残	黄	1118.3	*	灰底 カマド内	
3位-1	土師部	光形	黄	1114.6 底5.8 高4.2	回転ナデ・底部削ヘラズリの後下持ちヘラズリ→内面ミギキ	灰底	内面黒色地埋
#-2	須恵部	光形	灰	1114.7 高5.6	回転ナデ・天井部外面回転糸切りの後刻線部削ヘラズリ	灰底	
#-3	須恵部	口縁部1/4残	灰	1113.0	回転ナデ	灰底	遺書1跡
#-4	須恵部	1/3残	にぶい黄砂	1114.0 底7.0 高3.7 内底7.3	回転ナデ・底部削糸切り	+10cm	
#-5	須恵部	1/12光形	淡黄	1114.0 底7.0 高3.4 内底6.6	*	灰底	
#-6	須恵部	口縁部2/3次	灰	1113.8 底6.0 高3.7 内底6.3	*	灰底	
#-7	須恵部	1/12光形	灰	1112.7 底6.5 高3.5 内底6.3	*	1-8cm	秋葉須恵部
#-8	須恵部	2/3残	灰	1113.4 底6.4 高3.8 内底7.9		カマド天井部	秋葉須恵部
#-9	土師部	胴部中位以上1/4残	黄	1120.9 胴(22.7)	口縁部ヨコナデ、胴部外側削ヘラズリ、胴部内面ヘラズリ	カマド天井部	胴部全体外面に粘土付着
#-10	土師部	胴部上半以上1/2残	にぶい黄	1111.4 胴13.8	*	灰底	
4位-1	上海部	口縁部7/8次	にぶい黄砂	1114.0 底3.8 高4.7	回転ナデ・底部回転糸切り→内面ミギキ		内面黒色地埋
#-2	土師部	口縁部2/3次	にぶい黄砂	1114.0 底5.5 高4.7	回転ナデ→体部下以下削ヘラズリ→内面ミギキ	灰底	内面黒色地埋
#-3	土師部	光形	黄	1113.8 底7.0 高3.7	回転ナデ・底部回転糸切り→内面ミギキ	灰底	
#-4	須恵部	口縁部7/8次	灰	1114.2 底5.5 高3.7 内底5.7	回転ナデ・底部回転糸切り	灰底	
#-5	須恵部	口縁部1/3次	灰	1114.0 底5.8 高3.7 内底5.4	*	灰底	
#-6	須恵部	光形	灰	1113.9 底5.8 高3.3 内底4.8	*	灰底	秋葉須恵部 灯明部(転写?)
#-7	須恵部	1/4光形	灰	1112.6 底6.2 高3.5 内底4.3	*	カマド内	秋葉須恵部 灯明部(転写?)
#-8	須恵部	口縁部7/8次	にぶい黄砂	1114.6 底6.4 高3.9 内底5.5	*	灰底	秋葉須恵部
#-9	須恵部	口縁部3/4次	にぶい黄砂	1114.2 底5.7 高4.3 内底6.1	*	灰底	秋葉須恵部
#-10	土師部	胴部上位以上1/4残	暗赤粘	1120.0 胴(22.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外側削ヘラズリ、胴部内面ヘラズリ	灰底	破損後の二次焼成痕あり
#-11	上海部	1/4次	黄	1118.7 底7.6 高16.0	回転ナデ・体部下以下削下持ちヘラズリ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり
#-12	土師部	体部以上1/4残	黄	1118.0	回転ナデ・体部下以下削下持ちヘラズリ	カマド内	11と同一個体か?
5位-1	須恵部	光形	灰	1114.2 底6.6 高3.8 内底7.2	回転ナデ・底部回転糸切り	灰底	
#-2	須恵部	口縁部2/3次	灰	1113.5 底7.0 高3.5 内底6.6	回転ナデ・底部削ヘラズリ	灰底	
#-3	須恵部	1/2残	灰	1113.4 底6.9 高3.8 内底6.6	回転ナデ・底部回転糸切り	灰底	
#-4	須恵部	口縁部1/3次	灰	1113.2 底6.2 高3.6 内底6.9	*	灰底	
#-5	須恵部	口縁部1/3残	灰	1117.0	回転ナデ・体外側削ヘラズリ		
#-6	土師部	光形	暗赤粘	109.2 高2.7	口縁部ヨコナデ・底部外削ヘラズリ→底部外削糸切り→内面ミギキ	灰底	内面黒色地埋 灯明部
#-7	土師部	1/2残	黄	1120.7 胴(21.5) 高5.5 高127.3	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面削ヘラズリ、胴部内面ヘラズリ	カマド内 灰底	
#-8	土師部	底部次	黄	1121.2 胴13.2	口縁部ヨコナデ、胴部外削ヘラズリ、胴部内面ヘラズリ	灰底	口縁部近口縁部

第8表 長土呂遺跡群 古代遺物観察表

調査番号	種別	形状	材質	寸法 (mm)	特徴	出土位置	備考
遺物-1	打製石類	蓋形欠		軸1.8 厚0.4			(1.13g) 黒曜石
*-2	打製石類	尖形		長2.5 幅1.5 厚0.3			0.77g 黒曜石
*-3	打製石類	蓋形欠					(9.39g) 黒曜石
*-4	打製石類	尖形		長3.4 幅1.9 厚0.2			1.44g 粘板岩
*-5	打製石片	方形欠					(31.57g) 千枚岩質粘板岩
*-6	打製石片	四角欠					(26.54g) 粘板岩
*-7	打製石片	蓋形欠					(30.33g) 粘板岩
*-8	打製石片	蓋形欠					(29.56g) 千枚岩質粘板岩
*-9	打製石片	蓋形欠					(40.45g) 材質不明
1住-1	土師器	1/3残	灰	口(13.0) 体(7.8) 高(4.0)	口縁部コナナテ。体部以下外面ヘラズリの特徴なきが、内面短文	+4cm	畿内流域からの贈入品
*-2	須恵器	ほぼ定形	オリブ灰	口(3.0) 高(4.7) 内径7.7	筒状ナテ。底部回転痕あり	1.5cm	
*-3	須恵器	ほぼ定形	灰	口(3.0) 高(4.2) 内径8.5		灰産	
*-4	須恵器	1/2残	灰産	口(12.4) 高(4.0) 内径8.1	*	1.38cm	
*-5	須恵器	定形(細底四角欠)	灰	長17.2		灰産	
2住-1	土師器	1/3残	にふい青焼	口(9.2) 底(5.0) 高1.9	短筒ナテ。底部外面ヘラズリナ		
*-2	土師器	1/3残	灰	口(8.2) 底(5.2) 高1.6	筒状ナテ。底部回転痕あり		
*-3	土師器	1/2残	灰	口(8.0) 底(5.6) 高1.6	*		
*-4	土師器	2/3残	灰	口(8.4) 底(5.9) 高1.7	*		
*-5	土師器	定形	灰産	口(8.4) 底(6.3) 高2.0	*	+10cm	
*-6	土師器	1/3残	灰	口(8.0) 底(5.0) 高(2.8)	*		
*-7	土師器	11縁部1/4残	灰	口(10.2)	短筒ナテ		
*-8	土師器	ほぼ定形	灰	底(6.4)	筒状ナテ。底部回転痕あり		
*-9	土師器	高脚定形	にふい青焼	高7.9	*	灰産	
*-10	須恵器	蓋形欠	灰	長2.9 幅2.6		+14cm	中央に痕からの穿孔あり
*-11	瓦	定形	灰	長2.0 厚0.8			1.29g 滑石
*-12	ガラス小玉	定形	コバルトブルー	長0.5 厚0.4			0.13g
3住-1	土師器	ほぼ定形	灰産	口(11.6) 体(10.1) 高(5.3)	口縁部コナナテ。体部外面ヘラズリ。全面コミダシ。内面短文	カマド内	全面に焼色処理
*-2	土師器	1/3残	灰産	口(11.9) 体(10.6) 高(4.7)	口縁部コナナテ。体部内面ヘラズリ。内面コミダシ	カマド内	内面黒色処理
*-3	土師器	1/2残	にふい青焼	口(12.4) 体(11.7) 高(4.1)	口縁部コナナテ。体部内面ヘラズリ	+8cm	褐色土層
*-4	土師器	1/2残	灰	口(12.2) 体(12.0) 高(4.7)	*	貯蔵穴内	褐色土層
*-5	土師器	1/2残	黒焼	口(12.8) 高(3.8)	口縁部コナナテ。体部外面ヘラズリ。内面短文		全面に焼色処理
*-6	土師器	胴部以下1/3残	にふい青焼	底(8.0)	口縁部コナナテ。胴部以下外面ヘラズリ。胴部内面ヘラズリ。胴部内面を彫りこミダシ	カマド内 床面	焼後の二次焼成痕あり カマド構造に配用?
*-7	土師器	1/4残	灰	口(20.0) 高(17.0)	口縁部コナナテ。胴部以下外面ヘラズリ。胴部内面ヘラズリ	カマド内	実測値より厚積でナテ 胴部中心以下に粘土付
*-8	土師器	底部定形 胴部下1/4残	明黄焼	底(3.4)	外面ヘラズリ。内面ヘラズリ	貯蔵穴内	
*-9	管玉	定形	オリブ灰	長2.6 厚1.0		カマド内	3.96g 石灰下層 実測値より厚積再燃痕
*-10	石製品	一部残			胴部面に磨痕あり	カマド内	(53.96g) 磁石
*-11	石製品	定形		長(5.6) 幅(4.0) 厚(1.3)	表面に磨痕。断面に磨痕あり	カマド内	16.41g 磁石
4住-1	土師器	口縁部・胴部1/4欠	黄黄焼	口(21.7) 高(16.6)	口縁部コナナテ。胴部以下外面ヘラズリ。胴部内面ヘラズリ。胴部内面を彫りこミダシ	カマド内	焼後の二次焼成痕あり カマド構造に配用
*-2	耳環	定形(芯付のみ)	灰産	外径1.6 外径1.5 内径0.2			3.97g
5住-1	土師器	1/2残	にふい青焼	口(12.1) 高(4.9)	口縁部コナナテ。体部外面ヘラズリ。全面コミダシ		内面黒色処理
*-2	土師器	定形	赤明焼	口(16.9) 体(10.5) 高(3.8)	口縁部コナナテ。体部外面ヘラズリ	+35cm	褐色土層
*-3	土師器	定形	灰	口(16.2) 高(3.4)	*	+5cm	褐色土層
*-4	土師器	2/3残	灰	口(19.1) 高(6.6)	*	+3cm	内面に磨痕
*-5	須恵器	定形	灰オリブ灰	口(11.4) 高(3.6) 内径8.2	筒状ナテ。底部回転痕あり	-2cm	
*-6	須恵器	11縁部1/2欠	灰	口(13.8) 高(4.0) 内径8.7	短筒ナテ。底部回転痕あり		
*-7	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口(13.8) 高(3.9) 内径7.7	*		
*-8	須恵器	定形	灰オリブ灰	口(17.4) 高(3.9) 高(3.2)	短筒ナテ。底部外面磨痕ヘラズリ	床面	
*-9	須恵器	蓋形欠	灰	口(15.2) 高(9.1)	筒状ナテ。体部下半以下外面持ちヘラズリ	床面	
*-10	土師器	特形部1/4・耳環欠	灰	脚(8.1)	脚部コナナテ。脚部内面上半部以下外面ヘラズリ。内面短文とナテ		内面に黒色処理
*-11	土師器	胴部上半以上1/5欠	灰	口(12.0) 高(4.1)	口縁部コナナテ。胴部以下外面ヘラズリ。胴部内面を磨き人土をミダシ	釜山 カマド内	
*-12	土師器	口縁部1/4残	黄黄焼	口(22.2)	口縁部コナナテ。胴部内面ヘラズリ。胴部内面ヘラズリ。胴部外面を磨き人土をミダシ	カマド内	全面に粘土付 カマド構造に配用

管理番号	種別	尺	寸	色	調	寸法(mm)	特 徴	高さ位置	備 考
#-4	七輪窓	口縁部1/3残	残			口(20.5)	口縁部ヨコナテ、扉部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナテ	+8cm	
#-5	七輪窓	口縁部1/3残	明赤色			口(21.0)	*		
#-6	土師器	口縁部1/2残	黒赤褐色			口(16.0)	*	+8cm	
#-7	鉄器	一部欠				長さ約16.5 幅約6.3		+28cm	
#-8	刀丁	変形				全長16.4 身部長11.9 身幅約2.1		扉底	
#-9	硝子	一部残							(34.0g) 硝灰質
#-10	石製品	変形				長16.1 幅12.8 厚3.9	中央に伊禮宮・中央尖部に痕跡あり	-13cm	300.2g 硝石
#-11	粘土石?	変形				長17.3 幅6.7 厚4.6	上下両端に打ち欠きあり	扉底	695.4g 安山岩
11位-1	土師器	1/3残	にぶい黄褐色			口(14.0) 高(9.8) 胴14.9	胴縁ナテ、内面ミダキ、底部回転糸切り、胴部内面ヘラケズリ	+3cm	内面黒色焼痕
#-2	須恵器	1/2残	灰オリーブ			口(13.0) 高7.7 胴15.3 内径6.3	胴縁ナテ、底部回転糸切り	+9cm	
#-3	須恵器	変形	灰オリーブ			口(16.8) 高3.5	胴縁ナテ、大井部外面回転ヘラケズリ	カマド内	
#-4	須恵器	高内欠	灰			口(16.0)	胴縁ナテ、底部・体部下位外面回転ヘラケズリ	扉底	
#-5	十輪窓	口縁部1/4残	橙			口(24.0)	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナテ		
#-6	十輪窓	胴部中央以上1/4残	にぶい黄褐色			口(22.0) 胴(22.0)	*		胴部中央外面に粘土付着
#-7	硝	変形				長16.2 高約2.8		+17cm	基部角11°前後
12位-1	十輪窓	1/3残	にぶい黄褐色			口(13.0) 体(11.0)	口縁部ヨコナテ・胴部外面ヘラケズリ・内面ヨコミダキ		内面黒色焼痕
#-2	土師器	9/10残	にぶい赤			口(21.8) 高29.5	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナテ	カマド内	黄銅線状硝 胴部下位付着に粘土付着
#-3	土師器	胴部以上1/2残	にぶい黄			口(24.0)	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面下位ヘラキ及び中央位以上ヘラナテ	カマド内	胴部下位付着に粘土付着 胴部中央の“文”状痕跡あり カマド具材等に転用?
#-4	石製品	変形				長7.9 幅6.1 厚2.6	表裏面に溝あり	カマド内	73.4g 硝石
13位-1	土師器	胴部以上完形 口縁部1/4残	にぶい赤褐色			口(21.5) 高20.4	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナテ	カマド内	
#-2	十輪窓	口縁部1/2残	明赤色			口(20.4)		カマド内	
#-3	型ハ鉄器?	一部欠				長6.9 幅2.3 厚1.2			
#-4	硝?	両端欠							流注面と端の形跡はやや不揃い
#-5	石製品	一部欠				長4.5 幅4.3 厚4.7			(103.34g) 硝灰質
14位-1	須恵器	口縁部1/3残	暗黒質			口(16.0) 高3.2	胴縁ナテ、大井部外面回転ヘラケズリ	-30cm	
#-2	刀丁	変形				全長18.1 身部長11.8 身幅約1.6		+8cm	
#-3	石製品	一部欠				長16.3 幅(11.2) 厚4.0	表裏面硝痕あり		(305.5g) 硝石
15位-1	十輪窓	1/3残	橙			口(15.4) 高(8.0) 胴2.5	胴縁ナテ・底部外面付着手持ちヘラケズリ・内面ミダキ	カマド内	内面黒色焼痕 胴部中央の“文”状痕跡あり カマド具材等に転用?
#-2	須恵器	2/3・つまみ部欠	灰オリーブ			口(13.3)	胴縁ナテ、大井部外面回転ヘラケズリ		
#-3	須恵器	口縁部1/3残	灰オリーブ			口(11.6) 高3.8	*		
#-4	須恵器	口縁部3/4欠	灰内			口(12.5) 体部4.6 高4.1 内径約2.0	胴縁ナテ、体部外面付着手持ちヘラケズリ	カマド内	
#-5	須恵器	口縁部2/3欠	黄灰			口(15.6) 体部12.0 高10.5 胴7.1	胴縁ナテ、底部回転糸切り	カマド内	
#-6	鉄製具	一部残							
16位-1	硝石	変形				長19.0 幅5.3 厚3.3		扉底	533.3g 硝灰質
17位-1	土師器	2/3残	にぶい黄			口(13.7) 高3.9 高4.2	口縁部ヨコナテ・体部以下ヘラケズリ・内面隅文	扉底	硝石塊からの贈入品
#-2	須恵器	1/2残	灰オリーブ			口(14.2) 高8.1 高3.8 内径8.0	胴縁ナテ、底部回転糸切り	+10cm	
#-3	須恵器	口縁部1/2欠	灰口			口(13.4) 高8.6 高3.6 内径7.2	*	扉底	
#-4	須恵器	1/2残	灰			口(13.9) 高8.4 高3.2 内径6.7	*		
#-5	須恵器	胴部中央以下1/4残	灰			高15.0	胴部外面ミダキの底部部分付着手持ちヘラケズリ 胴部内面ミダキの底部部分付着ヘラケズリ	-7cm	
#-6	土師器	胴部中央以上2/3残	明赤			口(23.7) 高22.8	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナテ	カマド内	外周全体及び口縁部内面に粘土付着 底部部に転用?
#-7	土師器	胴部中央以上1/3残	橙			口(22.1) 高(23.1)		カマド内	転用部に転用?
#-8	土師器	胴部中央以上2/3残	にぶい赤褐色			口(21.5) 高20.2	*	カマド内	底部部に転用?
#-9	土師器	胴部中央以上1/2残	橙			口(20.4) 高(20.5) 高1.1	*		
#-10	銅製道具	一部欠				長さ2.6 幅2.7 厚0.5 孔径0.4 孔幅1.7		+8cm	
#-11	鉄製具	一部欠				幅0.4 厚0.6		+21cm	
18位-1	須恵器	口縁部1/8欠	オリーブ黄			口(12.4) 高6.0 高4.1 内径6.2	胴縁ナテ、底部回転糸切り		遺跡土師(オリーブ黄)
#-2	須恵器	1/2残	灰内			口(13.4) 高6.0 高3.8 内径6.0	*		黄銅線状硝
#-3	須恵器	口縁部1/6・底部欠	オリーブ黄			口(12.6) 内径6.2	胴縁ナテ		表裏面硝痕
#-4	須恵器	口縁部1/4残	灰内			口(14.0) 高(7.0) 高4.1 内径(6.0)	胴縁ナテ、底部回転糸切り		黄銅線状硝

部品名	種類	品名	仕様	寸法(mm)	用途	加工状況	備考
# 5	土脚部	鋼板11/3板	にぶい板	口19.7 鋼(20.4)	口縁部コナテ、鋼部外面へラケズリ、鋼部内面へラケナテ		
# 6	土脚部	鋼板11/3板	赤板	口20.4 鋼22.5	*		カマド内
# 7	土脚部	鋼部定形	にぶい赤板	高4.8	外面へラケズリ、内面へラケナテ		
# 8	刀子	刃先欠					+10mm
# 9	(鉄)針	落穴		幅0.5 厚0.4			+15mm
# 10	筋	一筋欠		長9.8 高さ 幅0.6 厚0.4			段縁内
19号-1	鋼部品	一筋欠		幅0.4 厚0.5			床内
20位-1	鋼部品	口縁部1/3欠	オリープ戻	口13.6 高7.6 鋼3.8 内高8.8	鋼部コナテ、底部鋼板糸切り後の後縁部鋼板へラケズリ		床直
# 2	土脚部	口縁部1/3板	炭	口(20.2)	口縁部コナテ、鋼部内面へラケズリ、鋼部内面へラケナテ		
# 3	土脚部	口縁部1/4板	明赤板	口(20.0)	*		
# 4	鉄部	両端欠					+18mm
21位-1	土脚部	口縁部1/2板	明赤板	口(14.0) 鋼(15.6 以上)	口縁部コナテ、鋼部外面へラケズリ、鋼部内面へラケナテ		鋼部内面に除き粘土付着後塗部に転用?
# 2	土脚部	鋼部中位以上1/3板	炭	口21.0 鋼19.9	*		カマド内
# 3	土脚部	鋼部中位以上1/2板	炭	口21.0 鋼21.6	*		
22号-1	土脚部	定形	にぶい黄板	口9.0 鋼5.1 高3.3	口縁コナテ、底部鋼板糸切り		床内
# 2	土脚部	定形	黒板	116.0 高4.0	鋼コナテ		
# 3	刀子	両端欠		身幅2.1			
23位-1	土脚部	1/3板	炭	口(14.0) 高(14.4)	口縁部コナテ、外面へラケズリ		内面口縁平
# 2	土脚部	1/2板	赤板	口18.7 高7.8	口縁部コナテ・底部以下へラケズリ・底部外面を除き入念なヨミダシ		
# 3	土脚部	2/3板	にぶい板	口(12.0) 高(8.0) 鋼14.0	口縁部コナテ、鋼部内面へラケズリ、鋼部外面へラケズリ・鋼部内面へラケナテ・鋼部内面へラケナテ		黄漆塗り 焼加なし
# 4	土脚部	1/3板	炭	口(18.8) 高11.8	口縁部コナテ・鋼部外面以下へラケズリ・鋼部内面へラケナテ		+16mm 黄漆塗り
# 5	土脚部	鋼部中位以上定形	炭	口11.0	口縁部コナテ、鋼部外面へラケズリ、鋼部内面へラケナテ		+5mm 鋼部中位外側に粘土付着後塗部に転用
# 6	土脚部	鋼部1/4以上定形	にぶい赤板	口21.3	*		+5cm 外面全体に粘土付着カマド焼結材に転用?
# 7	土脚部	口縁部1/3板	炭	口(23.0)	*		
# 8	土脚部	口縁部定形	炭	口14.2 高14.0	*		+5cm 破損後の二次焼成済み焼結なし
24位-1	刀子	両端欠		身部長7.8 身幅幅1.3			+66mm 両部材色不明
25位-1	土脚部	1/2板	にぶい板	口(14.6) 高7.7 高4.7	口縁コナテ・鋼部外面以下へラケズリ・内面ヨミダシ		内面黒色成煙 黒片生漆
# 2	土脚部	1/2板	黄板	口14.2 高6.4 高4.4	*		内面黒色成煙 黒片生漆
# 3	鋼部品	1/2板	炭	口(14.2) 高8.4 鋼3.8 内高7.0	鋼部コナテ、底部鋼板糸切り		
# 4	鋼部品	口縁部1/2欠	にぶい炭	口(14.2) 高7.4 高3.8 内高7.3	*		
# 5	鋼部品	1/2板	炭オリープ	口(14.0) 高6.0 高4.2 内高8.0	*		
# 6	鋼部品	口縁部1/8欠	炭オリープ	口13.2 高7.0 高4.2 内高7.9	*		床直
# 7	鋼部品	口縁部2/3欠	炭	口(13.2) 高6.7 高3.7 内高8.1	*		床直
# 8	鋼部品	1/2板	炭	口(13.2) 高7.9 高4.2 内高7.8	*		
# 9	鋼部品	口縁部1/4欠	明黄板	口(13.1) 高6.3 高3.9 内高6.6	*		
# 10	鋼部品	口縁部1/3欠	炭オリープ	口17.0 高3.8	鋼部コナテ、天井部外面鋼板へラケズリ		110mm
# 11	鋼部品	口縁部1/4欠	黒板	口(16.6) 高4.2	*		
# 12	鋼部品	定形	炭	口15.2 高3.4	口縁コナテ、天井部外面鋼板糸切り後の縁部鋼板へラケズリ		床直
# 13	鋼部品	1/2板	炭	口(14.8) 体12.0 高10.6 高6.1	鋼部コナテ、底部鋼板糸切り後の縁部鋼板へラケズリ		床直
# 14	鋼部品	定形定形	炭オリープ	体11.4 高9.9	鋼部コナテ、鋼部外面鋼板へラケズリ		床直
# 15	鋼部品	鋼部1/4板	オリープ戻		鋼部コナテ、内外面タテタテ		カマド内 焼結材に転用?
# 16	鋼部品	鋼部1/4板	オリープ戻		鋼部コナテ、内外面タテタテ		+5cm カマド内
# 17	土脚部	鋼部1/3欠	にぶい黄板	口16.0 高19.0	口縁部コナテ、鋼部外面へラケズリ、鋼部内面へラケナテ		カマド内 カマド焼結材に転用?
# 18	刀子	両端欠		身幅幅1.1			+13cm
# 19	火打石	定形?		長3.4 幅2.0 厚1.5			10.21g 玉置(右高)
26位-1	土脚部	鋼部中位以上1/2定形	にぶい板		口縁部コナテ、鋼部外面へラケズリ、鋼部内面へラケナテ		+5cm 外面全体及び鋼部内面に粘土付着後塗部に転用?
# 2	土脚部	鋼部1/2板	炭	高5.0	外面へラケズリ、内面へラケナテ		外面全体に粘土付着後塗部の二次焼成済み焼結なしカマド焼結材に転用?
27位-1	鋼部品	口縁部1/5欠	炭青	口19.4 高3.6	口縁コナテ、天井部外面鋼板へラケズリ		床直
# 2	土脚部	鋼部第一筋で欠	炭	口12.2	口縁部及び鋼部コナテ、鋼部内面及びその他外面へラケズリ・底部入念なヨミダシ		床直 外面内面に再処理 欠損部を研削(再処理)

種別番号	種別	構造	形状	材料	寸法 高さ(10m)	構造	位置	備考
#-3	縦巻部	口縁部1/4次	流質		φ21.8 高13.3	回転ナデ、胴部外蓋付ナデ	床底	
#-4	流巻部	11縁部1/3次	流		14.8 高6.4 高11.3	回転ナデ、胴部下半部回転ナデ付、胴部外蓋付ナデ付	床底	
#-5	土押部	胴部から胴部1/4次	流			11縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	カマド内	流巻部あり カマド縁部に転用?
#-6	土押部	口縁部1/6次	にぶい質焼		φ11.0 高6.6 高7.1	口縁部コナテ、胴部以下外蓋付ナデ	床底	流巻部あり
#-7	土押部	底部1/3次	明巻		高7.2	外蓋付ナデ		
#-8	土押部	胴部1/2以下1次付	明巻焼				+18cm	欠損部を補修(再利用)
#-9	土押部	胴部中位以上1/2次	にぶい質		φ22.4 高29.7	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	カマド内	
#-10	鉄製品				長(1.7) 幅(7.3) 厚(0.2)			木蓋付
#-11	石製品	一部欠			長9.4 幅4.9 厚3.0	3孔穿孔		(43.3g) 軽石
28位-1	横巻部	丸形	流		φ7.3 高9.7 高2.8	回転ナデ+胴部外蓋付ナデ付	床底	
#-2	土押部	口縁部1/3次	にぶい質焼		φ22.4	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付		
#-3	土押部	1/3次	流		φ(20.4) 高5.3 高12.8	口縁部コナテ、その他ヘラナデ	カマド内	底面外周にへう記号あり
#-4	土押部	胴部上半以上1/3次	流		φ(16.2)	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付		
#-5	土押部	1/3次	灰白		11(12.7) 高(6.3) 高16.2	11縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ、胴部内蓋付ナデ	カマド内	平皿が四方からの輸入品 縁部後の二次造成品あり カマド縁部に転用? 胴部トホに粘土付着
29位-1	土押部	はけ交野	流		φ11.2 高10.2 高3.3	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ	床底	右が口縁部か? 全面覆いた黒色焼
#-2	縦巻部	1/3次	黒		φ(9.2) 高5.0	回転ナデ、胴部外蓋付ナデ		
#-3	土押部	胴部上半以上1/3次	流		11(13.0)	11縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	カマド内	
#-4	土押部	口縁部1/2次	流		φ12.4 高7.3 高7.0	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	床底	縦巻部土押
#-5	土押部	口縁部1/3次	にぶい質焼		φ20.0	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	カマド内	
#-6	土押部	胴部下半以下1/2次	にぶい質焼			胴部1/2ハケ+胴部下半付ナデ付、内蓋付ナデ	カマド内	長狭丸縁部からの輸入品 縁部後の二次造成品あり カマド縁部に転用?
#-7	土押部	胴部上半以上1/3次	にぶい質		φ14.0	11縁部コナテ、胴部ヘラナデ	カマド内	縦巻部土押
#-8	石製品	丸形			長15.7 幅4.8 厚3.7	1上面のみ張り蓋あり		40g 2g 雲出留
#-9	瓦焼	丸形			外径1.8 外径1.9 内径0.2		覆土	全覆
#-10	土製品	一部欠	流		長2.0 厚0.7			(1.80g)
30位-1	縦巻部	口縁部1/4次	オリーブ灰		φ113.7 高6.8 高4.3 内径7.4	回転ナデ、胴部回転ナデ付	カマド内	
#-2	縦巻部	口縁部1/4次	灰白		φ(13.0) 高7.0 高3.9 内径6.6		床底	
#-3	土押部	口縁部1/3次	にぶい質焼		φ(20.4)	11縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	煙道部壁	外周全体に粘土付着
#-4	土押部	胴部中位以上1/3次	明巻焼		φ21.0 高21.0		煙道部壁	外周全体に粘土付着
#-5	土押部	胴部中位以上1/3次	にぶい質		φ21.8 高21.5		煙道部壁	外周全体に粘土付着
31位-1	土押部	はけ交野	流		φ17.4 高7.1 高28.8	口縁部コナテ、胴部以下外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付	カマド内	
32位-1	土押部	高合部1/2次	にぶい質		φ8.0	回転ナデ、胴部回転ナデ付		
#-2	鉄製品	角欠						
#-3	砥石	一部欠						(90.1g) 磁石
33位-1	土押部	底部1/2次	明巻焼		高5.5	外蓋付ナデ、内蓋付ナデ	カマド内	内周縁部に付着 カマド縁部に転用? 底面外周にへう記号あり
#-2	火打石?	丸形?						114.90g 玉磨 (2枚)
34位-1	縦巻部	口縁部1/10次	灰オリーブ		φ113.6 高7.4 高3.6 内径8.3	回転ナデ、胴部回転ナデ付の下半付ナデ付		
#-2	縦巻部	口縁部1/2次	灰オリーブ		φ114.2 高3.1	回転ナデ、天井部外蓋付ナデ付	床底	
#-3	土押部	胴部中位以上1/3次	にぶい質焼		φ19.7 高19.0	口縁部コナテ、胴部外蓋付ナデ付、胴部内蓋付ナデ付		煙道部下から5番目
#-4	土押部	胴部中位以上1/3次	流		φ20.2 高21.2			煙道部下から2番目
#-5	土押部	胴部中位以上1/3次	明巻焼		φ20.7 高22.0			煙道部下から3番目
#-6	土押部	胴部中位以上1/3次	流		φ21.2 高20.8			煙道部下から4番目
#-7	土押部	胴部上半以上1/3次	流		φ(22.0) 高(23.3)			煙道部下から5番目
#-8	土押部	胴部上半以上1/3次	流		φ(20.4) 高(20.4)			カマド内
#-9	刀子	一部欠			幅1.1			φ12mm
#-10	毛織り布製品?	一部欠			幅0.5 厚0.1			+8cm

調査番号	品名	形状	色	寸法 (mm)	特徴	出土地	備考
#-11	鉄製品	一部欠					
35位-1	土師器	体部上半以上1/3残	にじみ黄緑	口(13.0)	口縁部ヨコナテ、体部外面ヘラケズリ		内面黒色処理
36位-1	土師器	完整	緑	113.5 高さ10.0 高さ4.3	口縁部ヨコナテ・体部以下外面ヘラケズリ→内面黒文		瀬川流域からの購入品
#-2	灰土器	口縁部1/2欠	灰	114.5 高さ4.0 内径8.7	頸部ナテ、底部回転糸切り		+23cm
#-3	灰土器	完整	褐色黄	口12.0 高さ3.0 高さ3.6 内径7.9	頸部ナテ、底部回転ヘラケズリ		灰土
#-4	灰土器	口縁部一部欠	にじみ黄緑	119.0 高さ2.2 高さ3.7	頸部ナテ、底部回転糸切り		
#-5	灰土器	完整	灰	口18.5 高さ2.8	口縁ナテ、天井部外面回転ヘラケズリ		+14cm
#-6	灰土器	口縁部1/3残	暗緑灰	口(12.0)	頸部ナテ		
#-7	灰土器	胴部3/4残	灰		口縁部→胴部ト位外面回転ヘラケズリ→文様		灰土
#-8	土師器	1212形	淡黄緑	口19.8 高さ4.9 高さ10.1	口縁部ヨコナテ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		灰土
#-9	土師器	胴部中央以上1/3残	緑	口(26.0)	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		灰土 外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
#-10	土師器	胴部中央以上完整	緑	口22.9			灰土 胴部上半外面に粘土付着 胴部一足器で火葬 お墓等に転用か?
#-11	土師器	口縁部1/2残	にじみ黄	口(24.0)			
#-12	土師器	胴部中央以下完整	にじみ黄	口23.9 高さ20.2			灰土 胴部中央外面に粘土付着
#-13	土師器	胴部中央以下1/3残	緑	1122.8 高さ19.6			灰土 胴部内面に転用?
#-14	土師器	口縁部1/3残	緑	口(21.0)			外周全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
37位-1	灰土器	胴部1/4残	灰白	胴(6.0)	頸部ナテ→灰釉		東濃産(北七E)号式
#-2	灰土器	胴部中央以上1/3残	黒	1114.4)	頸部ナテ		
39位-1	土師器	胴部中央以下一部欠	にじみ黄緑	口19.8 高さ(6.0) 高さ16.1	口縁部ヨコナテ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		灰土 念寺遺人跡土器類(輸入品?) 胴部中央外面に粘土付着
40位-1	土師器	口縁部1/3欠	にじみ黄	口(13.0) 高さ1.7 高さ4.9	口縁部ヨコナテ、体部内面ヘラケズリ		灰色土器
#-2	土師器	1/2残	褐色	口(13.4) 体径7.0 高さ4.9	口縁部ヨコナテ・体部外面ヘラケズリ→緑文		内外面に付いた黒色地泥
#-3	土師器	口縁部1/3残	緑	口(18.4)	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		
#-4	土師器	胴部中央以上1/3残	赤褐色	口(20.0)			胴部外面に粘土付着
#-5	一部残						灰土 (2.4g) 灰石
41位-1	土師器	口縁部1/5残	緑	口(13.0)	頸部ナテ		
#-2	土師器	高部2/3残	緑	高さ7.2	頸部ナテ、底部回転糸切り		
42位-1	土師器	口縁部1/3残	黄	口(11.0)	口縁部ヨコナテ・体部外面ヘラケズリ→内面念寺土器		
#-2	土師器	口縁部4/5欠	にじみ黄緑	口(16.4) 高さ10.0 高さ13.7	口縁部及び頸部ヨコナテ、その他外面及び胴部内面ヘラケズリ→口縁部外面及び胴部内面念寺土器		外面内面黒色地泥
#-3	土師器	1/3残	淡黄	口(16.0) 高さ7.0 高さ(14.4)	口縁部ヨコナテ・胴部以下外面ヘラケナテ・胴部内面ヘラケナテ→口縁部内面念寺土器		灰土
#-4	土師器	口縁部1/2残	にじみ黄緑	口(21.0)	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		灰土
43位-1	石製品	完整		長さ6.6 幅7.2 厚3.5			+33cm 76.2g 輝石
44位-1	埴輪器	完整	淡黄	1112.6 高さ7.2 高さ4.0 内径6.5	口縁ナテ、底部回転糸切り		灰土 築瓦一部
#-2	土師器	口縁部完整	緑	口11.2 高さ12.5 高さ5.3 高さ10.3	口縁部ヨコナテ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		灰土
45位-1	灰土器	口縁部5/6欠	灰オリーブ	口(14.0) 高さ6.6 高さ4.2 内径8.3	頸部ナテ、底部回転糸切り		カマド内
#-2	灰土器	1/2残	灰オリーブ	口(13.0) 高さ6.6 高さ3.8 内径6.3			カマド内
#-3	灰土器	口縁部1/2欠	灰	口17.8 高さ3.6	頸部ナテ、天井部外面回転ヘラケズリ		カマド内
#-4	灰土器	1/2残	にじみ黄緑	口(13.0) 高さ0.0 高さ6.3	口縁ナテ、底部回転糸切り		
#-5	土師器	胴部中央以上1/4残	にじみ黄	口(22.0) 胴(21.0)	口縁部ヨコナテ、胴部内面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		カマド内
#-6	土師器	胴部上半以上1/3残	緑	11(21.0) 胴(21.2)			
#-7	石製品	完整		長さ7.4 幅4.4 厚1.3	表面に磨耗痕あり		27.3g 輝石
46位-1	灰土器	1/2残	灰	11(14.4) 高さ7.2 高さ3.6 内径6.5	頸部ナテ、底部回転糸切り		
#-2	灰土器	口縁部1/4欠	灰	口14.2 高さ7.0 高さ3.8 内径5.8			
#-3	灰土器	口縁部1/2欠	にじみ黄緑	口14.0 高さ7.0 高さ4.0 内径6.9			
#-4	灰土器	口縁部1/10欠	灰	口(13.0) 高さ7.2 高さ4.0 内径7.3			
#-5	灰土器	1/2残	オリーブ灰	口13.0 高さ7.0 高さ3.7 内径6.4			
#-6	灰土器	口縁部7/8欠	灰	口(12.0) 高さ7.3 高さ3.0 内径7.1			教育用遺器
#-7	埴輪器	1/4残	黒	口(14.0) 高さ(10.4) 高さ3.6			カマド内
#-8	灰土器	完整	灰	口15.0 高さ10.1 高さ6.5	口縁ナテ、底部回転ヘラケズリ		カマド内
#-9	埴輪器	胴部以下1/3欠	灰	口9.0	頸部ナテ		
#-10	土師器	口縁部2/3残	にじみ黄	11(20.0) 胴(20.4 以上)	口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ		カマド内
#-11	土師器	口縁部1/3残	にじみ黄	口(26.0) 胴(21.7 以上)			

機軸番号	機 種	規 格	色 相	大 小 (mm)	特 徴	出土状況	備 考
99F-1	土師器	1/2丸	黄	口(15.8) 高4.9	口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ		内面1線付
#-2	土師器	1/4丸	明赤黒	口(13.6) 高4.1	*		内面口縁付
#-3	灰土器	丸形	灰	口11.6 高3.3	同軸ナデ、天井部外側蓋痕調整	床底	
#-4	灰土器	1/2 丸	灰黒	口9.4 高3.8	*		
#-5	灰土器	口縁部1/3次	暗青灰	口9.6 高3.2	同軸ナデ、底部外側蓋痕調整		
#-6	灰土器	胴部上半のみ2/7次	灰		同軸ナデ・丸縁		
#-7	土師器	外縁1/2・胴部割欠	黄	口(16.0)	同軸ナデナリ、耳部底外面同軸ヘラケズリ・胴部内面を輪入念入りガキ		外部内面黒色色埋調整に転用?
#-8	土師器	胴部3/4丸	黄		口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ・念入りガキ	カマド内	外面に粘土付着カマド構築材に転用
#-9	土師器	胴部中位以上1/2丸形	黄	口21.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ・胴部外面ミガキ・口縁部不明	カマド内	破損後の二次造成品ありカマド構築材に転用
#-10	土師器	口縁部1/3丸	黄	口(22.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナデ		外面念入りに粘土付着カマド構築材に転用?
#-11	土師器	口縁部1/3丸	黄	口(22.3)	*		外面念入りに粘土付着カマド構築材に転用?
#-12	土師器	胴部中位以上1/2丸	念入り黄	口119.8	*	カマド内	破損後の二次造成品ありカマド構築材に転用
#-13	土師器	胴部中位以上1/2丸	黄	口(22.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ	カマド内	破損後の二次造成品あり内外面に粘土付着カマド構築材に転用・表面丸縁部からの転入品
#-14	土師器	胴部上半以上1/4丸	灰内	口(13.0)	口縁部ヘラケ後ヨコナデ、胴部外面ヘラケ、胴部内面ヘラケナデ		
#-15	灰製品	丸形		長4.4 幅1.6 厚0.1			
#-16	刀子	丸端欠		長幅1.3			胴部形態不明
#-17	刀子	丸端欠		長幅1.5			
#-18	鉄線串	丸形		長3.9 厚2.0			45.2g 石付不明
#-19	灰製品	丸形		長8.3 幅2.7 厚4.2	一面のみ磨面痕あり		73.9g 粘土付
#-20	石製鉢	丸形		長25.8 幅10.7 厚9.1	磨面痕及び凹み痕あり		99.5g 粘土付 実測寸?
99F-1	土師器	口縁部	黄	口14.4 高3.9 内径27.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下外側ヘラケズリの痕ありミガキ、胴部内面ヘラケナデ	カマド内	破損後の二次造成品ありカマド構築材として転用
#-2	土師器	口縁部	念入り黄	口17.2 高26.8	口縁部ヨコナデ・胴部以下外側ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ・内面ミガキ	カマド内	外面の一部に粘土付着破損後の二次造成品ありカマド構築材として転用
#-3	土師器	3/4丸	明赤黒	口20.6 高12.0 内径26.1	口縁部ヨコナデ・胴部以下外側ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ・念入りガキ	カマド内	破損後の二次造成品ありカマド構築材として転用
99F-2	灰土器	口縁部	灰黒	口14.3 高7.9 内径7.1	同軸ナデ、底部同軸未切り		
#-1	灰土器	口縁部	灰	口17.4 高8.6 内径7.0	*		約4cm
#-3	灰土器	口縁部1/4欠	灰黄	口13.9 高7.8 内径7.4	*		
#-4	灰土器	口縁部	灰黄	口13.8 高7.0 内径6.4	*	床底	
#-5	灰土器	口縁部	灰内	口13.5 高7.0 内径6.2	*		約3cm
#-6	灰土器	1/2丸	灰	口11.8 高3.1	同軸ナデ、天井部外側同軸ヘラケズリ		
#-7	灰土器	口縁部1/3欠	黄	口4.3 高5.2 高11.1	同軸ナデ、胴部下位外側同軸ヘラケズリ	床底	
#-8	土師器	口縁部	明赤黒	口19.6 高11.2 高5.4 高9.4	口縁部ヨコナデ、胴部以下外側ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナデ	+15cm	
#-9	土師器	口縁部1/3丸	念入り黄	口(20.7) 高(22.2 高11)			外面念入りに粘土付着カマド構築材に転用?
99F-1	土師器	口縁部1/2欠	黄	口14.9 高7.7 高4.6	同軸ナデ、底部同軸未切りの後縁部厚手持ちヘラケズリ・内面ミガキ	+10cm	内面彩色色埋
#-2	土師器	3/4丸	明赤黒	口13.3 高7.9 高5.2	同軸ナデ、底部同軸未切りの後縁部同軸未切り・底部外側ミガキ・底部内面黄灰地文		甲斐型杯
#-3	土師器	高部1/4丸	明赤黒	高(7.4)			甲斐型杯
#-4	灰土器	2/5 丸	黄灰	口(14.8) 高(9.6) 高4.3	同軸ナデ、底部厚手持ちヘラケズリ	カマド内	
#-5	灰土器	口縁部1/4欠	灰内	口14.6 高4.7 内径8.7	同軸ナデ、底部同軸未切り	カマド内	
#-6	灰土器	2/5丸	灰黄	口(14.3) 高(8.2) 高3.8 内径(8.2)	同軸ナデ、底部同軸未切り	カマド内	
#-7	灰土器	丸形	灰オリーブ	口14.1 高4.9 高3.7 内径8.8	同軸ナデ、底部同軸未切りの後手持ちヘラケズリ	床底	
#-8	灰土器	口縁部1/4欠	灰内	口(14.0) 高7.8 高4.1 内径8.1	同軸ナデ、底部同軸未切りの後手持ちヘラケズリ	+6cm	
#-9	灰土器	3/4丸	灰	口13.3 高8.1 高3.8 内径6.7	同軸ナデ、底部同軸未切り	カマド内	
#-10	灰土器	2/3丸	灰内	口12.4 高7.9 高3.5 内径6.6	同軸ナデ、底部同軸ヘラケズリ	カマド内	
#-11	土師器	口縁部1/4欠	黄	口10.2 高11.6 高3.6 高9.5	口縁部ヨコナデ、胴部以下外側ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナデ		
#-12	灰土器	口縁部1/3欠	灰内	口12.2 高6.5 高4.3 内径7.7	同軸ナデ、底部同軸未切り		ガラス付着 石製鉢転用
1 缶 1	鉄片	丸形		長6.8 厚部幅4.0			雑土
1 缶 1	灰土器	3/2丸	灰内	口12.8 高3.7 内径7.7	同軸ナデ、底部下持ちヘラケズリ		
#-2	灰土器	丸形	灰	口13.9 高8.2 高3.4 内径7.3	同軸ナデ、底部同軸未切り		

原簿番号	種 別	造 形	色 調	大 小 (mm)	特 徴	出 所	備 考
# 4	灰物取器	胴部下以下定形	灰白	長4.6		皿転ナデ、胴部内面皿転ナデ	
# 5	灰取器	口縁部1/3残	灰白	口(30.0)		皿転ナデ、胴部外面ツタテ、胴部内面ヘラナデ	
# 6	灰取器	口縁部1/2残	黒	口(24.4)		皿転ナデ、胴部内面同心円文表ツタテ	
2井-1	灰取器	1/2残	灰	口(9.4) 高さ3.5		皿転ナデ、大井部外面皿転ナデ	大井部外面にヘラ記号
# 2	灰取器	1/3残	灰	口(14.0) 高さ4.6 胴3.9 内底6.4		皿転ナデ、胴部皿転ナデ	
# 3	灰取器	1/2残	灰	口(7.2)		皿転ナデ	
# 4	灰取器	胴部定形・胴部1/3残	灰	高さ10.6		皿転ナデ、胴部外面ツタテの後端部付手持ちヘラナデ、胴部内面同心円文表ツタテの皿転ナデ並びに胴部付手ツタテ	
# 5	石取器	定形		長さ6.0 幅5.6 厚2.4			48.5g 黒石
1溝-1	灰取器	胴部の一部欠	灰	口4.4 高さ11.7 胴12.0		皿転ナデ、胴部下位外面皿転ナデ	下段床底 胴部とつながりかいたものか
# 2	土師器	胴部1/4欠	橙	口14.0 胴11.2 高さ13.7		口縁部及び胴部ココナデ、体部下から胴部内面及び胴部1/3内面ヘラナデ、胴部内面ヘラナデ口縁部外周及び内面内面ミダキ	下段床底 内面黒色地埋
# 3	土師器	胴部半分以上1/4欠	黄橙	口(24.2) 高さ23.8		口縁部(ハケ線) ココナデ、胴部外面ヘラナデ下位ヘラナデ、胴部内面ヘラナデ	下段床底 丸底裏面からの掘入品
# 4	土師器	ほぼ定形	橙	口14.2 高さ4.6		口縁部ココナデ、体部外面ヘラナデ、内面凹文	上段 横川流域からの掘入品
# 5	土師器	1/3 残	暗灰	口(16.0) 高さ(11.9) 高さ(4.2)		皿転ナデ、底部手持ちヘラナデ	上段
# 6	灰取器	胴部下以下定形	灰	高さ10.6		皿転ナデ、胴部外周一部ツタテ、胴部下位外面皿転ナデヘラナデ文埋	上段
# 7	灰取器	胴部定形	灰白			皿転ナデ、胴部上段外面のみ皿転ナデ下段外面ヘラナデ	上段
# 8	灰取器	口縁部3/4・胴部1/2欠	灰	口(7.1) 高さ6.6 高さ12.6		皿転ナデ、胴部下位外面以下手持ちヘラナデ	上段
# 9	土師器	4/5残	橙	口12.5 胴14.2 高さ6.6		口縁部ココナデ、胴部以下外ヘラナデ、胴部内面ヘラナデ	上段
2溝-1	灰取器	2/3 残	オリーブ灰	口13.2 高さ8.8 高さ3.5 内底9.7		皿転ナデ、底部不明だが皿転ナデではない	
# 2	土師器	胴部定形	灰			皿転ナデ	
# 3	灰取器	1/2残	灰白	口16.0 高さ5.5 高さ7.4		皿転ナデ、胴部下位以下外面皿転ナデ	
# 4	土師器	胴部半分以上1/3欠	橙	口19.4 胴11.3 高さ9.4 高さ10.0		皿転ナデ、底部皿転ナデ一部胴部下外面手持ちヘラナデ	黄赤灰 切なし
# 5	赤灰器	胴部下以下1/2残	灰	高さ4.0		胴部内面ツタテの皿転ナデ	
1溝-1	土師器	定形	灰	口15.2 高さ5.9		口縁部ココナデ、体部外面ヘラナデ内面入念ツタテミダキ	砂層 内面黒色地埋内面口縁部の埋没
# 2	土師器	1/2残	明赤色	口(12.6) 高さ4.4		口縁部ココナデ、体部外面ヘラナデ	砂層 内面口縁部
# 3	土師器	1/4残	橙	口(11.8)			砂層 内面口縁部
# 4	土師器	ほぼ定形	橙	口(13.0) 高さ6.2 高さ4.3		皿転ナデ、体部下以下以下外周手持ちヘラナデ、内面ミダキ	砂層 内面黒色地埋
# 5	土師器	口縁部1/3欠	におい質埋	口(12.4) 高さ6.5 高さ3.5		皿転ナデ、底部皿転ナデ手持ちヘラナデ、内面ミダキ	砂層 内面黒色地埋
# 6	土師器	定形	明赤色	口13.8 高さ6.4 高さ4.1		皿転ナデ、底部皿転ナデ手持ち内面ミダキ	砂層 内面黒色地埋 赤雲土器
# 7	土師器	ほぼ定形	橙	口13.4 高さ4.2		口縁部ココナデ、体部外面ヘラナデ内面凹文	砂層 横川流域からの掘入品
# 8	土師器	ほぼ定形	明赤色	口15.4 高さ8.4 高さ4.6			砂層 横川流域からの掘入品
# 9	土師器	定形	明赤	口14.1 高さ8.3 高さ4.0			砂層 横川流域からの掘入品
# 10	土師器	2/3残	橙	口15.5 高さ10.0 高さ4.5			砂層 横川流域からの掘入品
# 11	灰取器	1/4残	灰	口(12.4) 高さ(7.6) 高さ(4.3)		皿転ナデ、底部無調整	砂層
# 12	灰取器	口縁部2/3欠	灰	口(13.1) 高さ3.9 高さ9.8		皿転ナデ、底部皿転ナデ	砂層
# 13	灰取器	ほぼ定形	灰白	口(13.6) 高さ6.8 高さ4.1 内底7.5		*	砂層
# 14	灰取器	1/2残	灰	口(14.5) 高さ4.6 内底7.9		皿転ナデ、底部手持ちヘラナデ	砂層
# 15	灰取器	ほぼ定形	暗灰黄	口(14.0) 高さ6.6 内底8.7		皿転ナデ、底部不明だが皿転ナデではない	砂層
# 16	灰取器	口縁部1/3欠	灰オリーブ	口(12.8) 高さ3.5 内底8.1			砂層
# 17	灰取器	ほぼ定形	灰オリーブ	口(13.8) 高さ7.6 高さ4.1 内底7.5			砂層
# 18	灰取器	ほぼ定形	灰オリーブ	口(12.4) 高さ9.0 高さ3.5 内底8.5			砂層
# 19	灰取器	口縁部1/5欠	灰オリーブ	口(14.9) 高さ7.9 高さ4.6 内底9.6		皿転ナデ、底部皿転ナデ手持ち(内面) 手持ちヘラナデ	砂層
# 20	灰取器	口縁部1/4欠	灰オリーブ	口(14.0) 高さ1.1 高さ2.1 内底6.6		皿転ナデ、底部皿転ナデ	砂層
# 21	灰取器	1/4残	灰	口(13.6) 高さ(6.0) 高さ(4.2) 内底(5.4)		*	砂層
# 22	灰取器	口縁部1/5欠	灰オリーブ	口(13.2) 高さ6.8 高さ3.6 内底7.1		*	砂層
# 23	灰取器	1/3残	灰オリーブ	口(13.2) 高さ5.8 高さ3.8 内底7.4		*	砂層
# 24	灰取器	2/3残	灰	口(13.2) 高さ7.0 高さ4.9 内底7.6		*	砂層
# 25	灰取器	ほぼ定形	灰オリーブ	口(13.5) 高さ2.8		皿転ナデ、大井部外面皿転ナデ	砂層
# 26	灰取器	2/5残	灰	口(18.6)		*	砂層
# 27	灰取器	1/2残	灰オリーブ	口(18.1) 高さ4.5		*	砂層
# 28	灰取器	1/4残	灰オリーブ	口(17.5) 高さ3.3		*	砂層
# 29	灰取器	定形	灰オリーブ	口(14.0) 高さ7.9		*	砂層
# 30	灰取器	口縁部1/2欠	灰	口(15.3) 高さ11.2 高さ5.7		皿転ナデ、底部皿転ナデ	砂層

採種番号	産地	産物	産種	大きさ (mm)	備考	加工法	備 考
#-31	須磨産	17縁部2/8欠	灰	11(11.6) 高7.0 高3.9	*	*	砂層
#-32	須磨産	17縁部3・口縁部欠	黒		割断ナテ、底部外面割断ヘラケズリ	*	砂層
#-33	須磨産	17縁部1/6残	黒灰	11(12.2)	*	*	砂層
#-34	須磨産	17縁部1/3残	黒	11(11.0)		割断ナテ、胴部片割断ナテ	砂層
#-35	須磨産	胴部1/4・口縁部欠	灰	割断3.6		割断ナテ、胴部一部ナテキ、胴縁部外面割断ヘラケズリ	砂層
#-36	須磨産	胴部中位以下1/2残	灰オリーブ			割断ナテ、胴部ナテキ、底部外面平削	砂層
#-37	須磨産	胴部中位以上1/3残	灰オリーブ	11(22.0)		割断ナテ、胴部ナテキ	砂層
#-38	須磨産	胴部中位以上1/3残	黒	11(24.2)		*	砂層
#-39	須磨産	胴部中位以下1/2残	オリーブ黒	割断14.8		割断ナテ、底部割断未切り	砂層
#-40	須磨産	胴部1/3/4欠	灰	11(9.9) 高12.6 高16.9		割断ナテ、底部1/4ヘラケズリ→胴部下位外面割断ヘラケズリ	砂層
#-41	須磨産	胴部1/4・口縁部欠	黒	割断2.2		*	砂層
#-42	土師産	胴部中位以上1/3残	赤褐色	11(21.5) 割(22.4)(21.1)		口縁部ヨコナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ	砂層
#-43	土師産	口縁部1/4残	黒	11(22.0)		*	砂層
#-44	土師産	口縁部1/3残	12.2(11.6)赤黒	11(12.2)		*	砂層
#-45	砥石	産部片割欠		幅4.3 厚3.3			砂層 (188.6g) 産灰岩
#-46	須磨産	1/2残	浅黄	11(14.6) 高7.8 高4.1 内底2.5		胴断ナテ、底部割断ヘラケナテ	上層
#-47	須磨産	1/4残	灰オリーブ	11(14.8) 高(9.1) 高3.9		胴断ナテ、胴部ナテヘラケズリ	1層
#-48	須磨産	1/4残	灰	11(12.1) 高(6.9) 高3.6		胴断ナテ、胴部割断未切りの後胴縁部ナテヘラケズリ	上層
#-49	須磨産	1/2残	灰オリーブ	11(24.7) 高7.0 高4.4 内底8.9		胴断ナテ、底部割断未切り	上層
#-50	須磨産	1/3残	灰白	11(14.4) 高(3.4) 高4.0		*	上層
#-51	須磨産	口縁部1/4欠	灰オリーブ	11(14.4) 高(6.3) 高4.2 内底6.8		*	上層
#-52	須磨産	底部	浅黄	11(4.2) 高(6.9) 高4.5 内底6.7		*	上層
#-53	須磨産	1/2 残	灰	11(18.0) 高(6.0) 高3.7 内底6.2		*	上層
#-54	須磨産	口縁部4/5欠	灰オリーブ	11(13.4) 高(5.2) 高(6.6) 内底6.3		*	上層
#-55	須磨産	1/2残	浅黄褐色	11(11.0) 高7.2 高4.6		胴断ナテ、底部割断ヘラケズリ	
#-56	灰地陶器	1/2残	灰白	11(15.7) 高7.0 高2.5		胴断ナテ、胴部割断ヘラケズリ	上層 管状器(K-14)
#-57	灰地陶器	底部1/残	灰白	割(7.0)		胴断ナテ、底部割断未切り	上層 未磨製(光ヶ丘1〜3号遺跡)
#-58	土師産	口縁部1/3欠	にじみ質焼	11(18.8) 高(5.3) 高4.4		胴断ナテ、底部割断未切り→内面粗ミグキ	上層 内面黒色処理
#-59	土師産	1/12欠部	所製黄	11(12.3) 高(6.4) 高3.6		胴断ナテ、底部割断未切り→内面1号焼文	上層 内面黒色処理
#-60	土師産	口縁部1/4欠	黄褐色	11(14.6) 高7.7 高6.0		胴断ナテ	上層
#-61	土師産	口縁部5/6欠	産	11(14.2) 高(3.6) 高3.8		胴断ナテ、底部割断未切り	上層
#-62	土師産	口縁部5/6欠	にじみ質焼	11(8.9) 高(4.3) 高2.4		*	上層
2枚-1	須磨産	口縁部1/2欠	灰黒	11(12.8) 高(3.8) 内底8.3		胴断ナテ、底部無割断	
#-2	須磨産	1/5残	灰オリーブ	11(16.6) 割(12.6) 高3.5		胴断ナテ	
#-3	須磨産	底部	灰オリーブ	11(9.4) 高(9.7) 高(9.2) 高2.6		胴断ナテ、胴部片割断ヘラケズリ	
#-4	須磨産	口縁部欠	灰オリーブ			割断ナテ、底部ナテヘラケズリ→文部	
#-5	須磨産	口縁部欠	灰オリーブ			割断ナテ・胴部外面ナテキ→胴部下位以下外面ナテヘラケズリ→内面1号焼文	
#-6	土師産	片割欠	産	割断11.0		胴断部ヨコナテ、ほか内面を磨きヘラケズリ、底部内底ミグキ	底部内面黒色処理
#-7	土師産	胴部中位以下1/2欠	産	11(19.0) 高(9.7) 高(4.0) 高(8.6)		口縁部ヨコナテ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケナテ	
#-8	石製品	部欠	産	長16.1 幅12.6 厚(7.0)		3穴の凹みあり	(772.7g) 砥石
層上-1	土師産	1/4残	産	11(11.6) 高4.6		口縁部ヨコナテ・底部外面ヘラケズリ→全面ヨコミグキ	
#-2	土師産	口縁部1/3欠	産	11(13.0) 高(8.0) 高4.8		胴断ナテ、底部未切りの後胴縁部ナテヘラケズリ、内面ヨコミグキ	内面黒色処理
#-3	土師産	口縁部1/4欠	均焼	11(13.2) 高(5.9) 高(5.8)		割断ナテ・底部割断未切り→胴部下位外面ナテヘラケズリ→内面1号焼文	内面黒色処理
#-4	土師産	1/4欠部	産	11(11.1) 高(10.6) 高(4.0)		口縁部ヨコナテ、底部外面ヘラケズリ	褐色土着
#-5	土師産	1/3残	産	11(16.0) 高(3.3)		*	灰黒層
#-6	土師産	口縁部1/5残	産	11(14.0)		*	灰口層
#-7	土師産	口縁部1/4欠	産	11(11.0) 高(3.7)		口縁部ヨコナテ、ほか内面無割断	灰口層
#-8	土師産	1/2残	産	11(4.2) 高(10.9) 高(4.9)		11縁部ヨコナテ、底部以下外面ヘラケズリ→内面焼文	溝川遺跡からの埋入品
#-9	土師産	1/3残	産	11(16.0) 高(8.0) 高(4.0)		*	溝川遺跡からの埋入品
#-10	須磨産	1/3残	灰	11(13.0) 高(13.0) 内底(7.7)		胴断ナテ、底部無割断	
#-11	須磨産	1/2残	明赤褐色	11(14.2) 高(4.4) 内底(8.4)		胴断ナテ、底部割断未切り	
#-12	須磨産	1/4欠部	浅黄	11(13.8) 高(4.3) 内底(7.8)		*	
#-13	須磨産	1/3残	灰オリーブ	11(14.0) 高(8.9) 高(3.5) 内底(8.6)		*	
#-14	須磨産	1/2残	灰	11(12.6) 高(8.8) 高(3.5) 内底(8.2)		*	

発見番号	種別	形状	色澤	大きさ(mm)	特徴	出土位置	備考
#-15	灰磁器	口縁部1/4次	灰白	口13.2 高さ7.6 底3.8 内径8.0	回転ナデ、底部144°ヘラケズリ		
#-16	滑石器	1/4次	灰白	11(12.0) 底(8.0) 高さ3.1	*		
#-17	灰磁器	口縁部3/4次	灰	口(14.0) 高さ4.4 底4.0 内径9.0	回転ナデ、底部回転未切り		
#-18	灰磁器	口縁部1/2次	灰	口(14.0) 高さ7.9 底4.3 内径8.0			
#-19	灰磁器	口縁部7/8次	灰	口(14.2) 高さ7.2 底3.8 内径7.3			
#-20	灰磁器	11線部一部残	灰		回転ナデ、底部不明		曇色土器
#-21	灰磁器	底部残	灰(オリーブ)	高さ9 内径8.3	回転ナデ、底部下持ちヘラケズリ		曇色土器
#-22	灰磁器	1/2残	灰	口(11.0) 口(9.5)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
#-23	滑石器	1/2残	灰白	口(10.0) 高さ3.0	*		
#-24	灰磁器	1/3残	灰	口(10.0)	回転ナデ		
#-25	滑石器	口縁部1/2次	灰	口9.1 高さ7.7 底2.7	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
#-26	灰磁器	口縁部3/4次	灰	口(16.0) 高さより(13.7) 高さ1.8			
#-27	滑石器	完整	オリーブ灰	114.5 高さ3.1	*		
#-28	灰磁器	口縁部2/3残	暗灰黄	口14.3			
#-29	滑石器	口縁部1/3残	オリーブ灰	口(10.5)	回転ナデ		
#-30	灰磁器	1/3残*	オリーブ灰	口(13.0) 高さ(9.2) 高さ3.2	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
#-31	灰磁器	胴部下半1/3・口縁部欠	灰	高さ13.3	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ		
#-32	灰磁器	胴部1/8・口縁部欠	灰白	高さ14.6	回転ナデ、胴部外面回転ヘラケズリ		
#-33	灰磁器	1/2残	灰	口(7.0)	回転ナデ、胴部下半以下外面回転ヘラケズリ		
#-34	滑石器	口縁部1/4残	灰白	口(17.8)	回転ナデ		
#-35	灰磁器	口縁部1/4残	灰(オリーブ)	口(14.2)	回転ナデ、口縁部外面のみ白		
#-36	滑石器	口縁部完整	にょい赤	111.0	回転ナデ		
#-37	灰磁器	1/2残	暗黄灰	口(13.0) 高さ29.9	回転ナデ、胴部内外面タタキ		
#-38	灰磁器	胴部上半以上1/2残	にょい黄灰	1123.8	回転ナデ、胴部外面タタキ、胴部内面不明		器表面の割傷痕あり
#-39	灰磁器	口縁部1/3残	灰	口(24.0)	回転ナデ		
#-40	灰磁器	口縁部1/4残	灰	口(24.0)	回転ナデ、胴部外面タタキ		
#-41	灰磁器	胴部上半以上1/3残	暗灰黄	口(20.0)	回転ナデ		
#-42	灰磁器	胴部1/2残	暗灰		回転ナデ、胴部下位外面タタキの縁部外面回転ヘラケズリ		
#-43	灰磁器	1/3残	灰	口(18.0) 高さ10.2 高さ13.9	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、胴部下位外面タタキ		
#-44	滑石器	口縁部1/3残	白	口(11.0)	回転ナデ		45°同一側面
#-45	灰磁器	胴部下半以下1/3残	黒	高さ(13.0)	回転ナデ、胴部下位以下外面回転ヘラケズリ		44°同一側面
#-46	滑石器	胴部下半以下1/3残	にょい赤	高さ(18.0)	回転ナデ		
#-47	土師器	口縁部1/2残	灰	口(14.2)	口縁部ヨコナテ・外面外面ヘラケズリ・全周人念々ミギキ		胴部内外面黒色処理 胴部欠損部を平準に磨削
#-48	土師器	胴部1/2残	にょい黄灰	高さ(9.4)	胴部ヨコナテ・その他胴部内外面ヘラケズリ →胴部内面及び外縁ミギキ		胴部内外面黒色処理
#-49	土師器	口縁部1/4残	黄	口(14.2)	口縁部ヨコナテ、胴部内面ヘラケズリ、胴部外面磨減		全周磨減人 磨入品(治域不明)
#-50	灰胎陶器	口縁部1/4残	灰白	口(14.0)	回転ナデ		緑黄帯 (K-14)
#-51	灰胎陶器	底部完整	暗灰黄	高さ9.0	回転ナデ		黄帯帯 (K-14)
#-52	河河硯	上半部1/4残	暗緑灰	高さ(16.0)	回転ナデ		灰帯帯
#-53	磁石	片断残		幅(3.2) 厚(1.0)			(35.0g) 磁石片
#-54	石鏝	片断残		幅(5.7) 厚(3.5)			(222.9g) 安山岩
#-55	磁石?	完整		長さ18.0 幅3.1 厚1.5			81.2g 磁石片
#-56	新磁石?	1/2残		厚1.8			(6.4g) 磁石
#-57	石製品	片断残		幅7.8 厚4.8			両面に磨削痕、表面に円形痕あり
#-58	石製品	完整		長さ15.9 幅2.2 厚5.2			表面に円形痕あり、部分に磨削痕あり

第9表 野火附遺跡 古代遺物観察表

発見番号	種別	形状	色澤	大きさ(mm)	特徴	出土位置	備考
#1-1	土師器	ほぼ完整	黄	口12.0 体11.4 高さ3.8	口縁部ヨコナテ、外面外面ヘラケズリ	床座	黄色土器
#-2	土師器	1/2 残	黄	口12.4 体11.7 高さ(4.0)	*	カマド内	黄色土器
#-3	灰磁器	完整	灰	口11.2 体12.6 高さ3.7	回転ナデ、底部外面不定方向手持ちヘラケズリ	+3cm	
#-4	土師器	ほぼ完整	暗赤褐	口14.8 体11.3 高さ9.6	外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケズリ・口縁部・胴部底ヨコナテ・胴部内面1/2を磨きミギキ	-8cm	胴部内外面黒色処理
#-5	土師器	底部完整 胴部下半1/3 残	暗黄褐	高さ3.3	片面ヘラケズリ・内面ヘラケズリ・外面ヘラケズリ	-8 cm	成立可能
#-6	磁石	一部残		幅(13.4)	2面に磨削痕あり	床座	(542.0g) 磁石片?
#-7	磁石	完整		長さ17.0 幅6.6 厚4.3	両面に磨削痕・上下に粗打痕あり	床座	836.4g 磁石片?
#-8	?	完整		長さ11.4 幅9.8 厚8.6	上下に磨削痕あり	床座	1265.7g 安山岩
#-9	磁石	一部残		幅(13.0) 厚(4.3)	一面のみ磨削痕あり	床座	(700.0g) 磁石片?

序号	名称	规格	单位	数量	单价 (元)	总价 (元)	品牌	产地
#-10	石球	圆形	个	1	1035.0	1035.0	泰山岩	泰山岩
#-11	石球	圆形	个	1	955.0	955.0	泰山岩	泰山岩
#-12	石球	圆形	个	1	594.0	594.0	泰山岩	泰山岩
#-13	石球	圆形	个	1	348.0	348.0	泰山岩	泰山岩
#-14	石球	圆形	个	1	208.0	208.0	泰山岩	泰山岩
#-15	石球	圆形	个	1	247.0	247.0	泰山岩	泰山岩
#-16	石球	圆形	个	1	234.0	234.0	泰山岩	泰山岩
#-17	石球	圆形	个	1	245.0	245.0	泰山岩	泰山岩
#-18	石球	圆形	个	1	310.0	310.0	泰山岩	泰山岩
#-19	石球	圆形	个	1	267.0	267.0	泰山岩	泰山岩
#-20	石球	一停欠	个	1	258.0	258.0	泰山岩	泰山岩
#-21	石球	圆形	个	1	1031.0	1031.0	泰山岩	泰山岩
#-22	石球	圆形	个	1	499.0	499.0	泰山岩	泰山岩
#-23	石球	圆形	个	1	729.0	729.0	泰山岩	泰山岩
#-24	石球	圆形	个	1	328.0	328.0	泰山岩	泰山岩
#-25	石球	圆形	个	1	344.0	344.0	泰山岩	泰山岩
#-26	石球	圆形	个	1	284.0	284.0	泰山岩	泰山岩
#-27	石球	圆形	个	1	457.0	457.0	泰山岩	泰山岩
#-28	石球	圆形	个	1	295.0	295.0	泰山岩	泰山岩
#-29	石球	圆形	个	1	304.0	304.0	泰山岩	泰山岩
#-30	石球	圆形	个	1	419.0	419.0	泰山岩	泰山岩
#-31	石球	圆形	个	1	296.0	296.0	泰山岩	泰山岩
#-32	石球	圆形	个	1	346.0	346.0	泰山岩	泰山岩
#-33	石球	圆形	个	1	302.0	302.0	泰山岩	泰山岩
#-34	石球	圆形	个	1	472.0	472.0	泰山岩	泰山岩
#-35	石球	圆形	个	1	337.0	337.0	泰山岩	泰山岩
#-36	石球	圆形	个	1	343.0	343.0	泰山岩	泰山岩
#-37	石球	一停欠	个	1	1237.0	1237.0	泰山岩	泰山岩
#-38	石球	圆形	个	1	235.0	235.0	泰山岩	泰山岩
#-39	石球	圆形	个	1	844.0	844.0	泰山岩	泰山岩
#-40	石球	圆形	个	1	419.0	419.0	泰山岩	泰山岩
#-41	石球	圆形	个	1	883.0	883.0	泰山岩	泰山岩
#-42	石球	圆形	个	1	637.0	637.0	泰山岩	泰山岩
#-43	石球	圆形	个	1	882.0	882.0	泰山岩	泰山岩
#-44	石球	圆形	个	1	723.0	723.0	泰山岩	泰山岩
#-45	石球	圆形	个	1	423.0	423.0	泰山岩	泰山岩
#-46	石球	圆形	个	1	963.0	963.0	泰山岩	泰山岩
#-47	石球	圆形	个	1	1017.0	1017.0	泰山岩	泰山岩
#-48	石球	圆形	个	1	341.0	341.0	泰山岩	泰山岩
#-49	石球	圆形	个	1	856.0	856.0	泰山岩	泰山岩
#-50	石球	圆形	个	1	967.0	967.0	泰山岩	泰山岩
#-51	石球	圆形	个	1	963.0	963.0	泰山岩	泰山岩
#-52	石球	圆形	个	1	827.0	827.0	泰山岩	泰山岩
#-53	石球	圆形	个	1	972.0	972.0	泰山岩	泰山岩
#-54	石球	圆形	个	1	1021.0	1021.0	泰山岩	泰山岩
#-55	石球	圆形	个	1	239.0	239.0	泰山岩	泰山岩
#-56	石球	圆形	个	1	636.0	636.0	泰山岩	泰山岩
#-57	石球	圆形	个	1	507.0	507.0	泰山岩	泰山岩
#-58	石球	圆形	个	1	726.0	726.0	泰山岩	泰山岩
#-59	石球	圆形	个	1	676.0	676.0	泰山岩	泰山岩
#-60	石球	圆形	个	1	793.0	793.0	泰山岩	泰山岩
#-61	石球	圆形	个	1	381.0	381.0	泰山岩	泰山岩
#-62	石球	圆形	个	1	207.0	207.0	泰山岩	泰山岩
#-63	石球	圆形	个	1	168.0	168.0	泰山岩	泰山岩
#-64	石球	圆形	个	1	1233.0	1233.0	泰山岩	泰山岩
#-65	石球	圆形	个	1	379.0	379.0	泰山岩	泰山岩
#-66	石球	圆形	个	1	779.0	779.0	泰山岩	泰山岩
#-67	石球	圆形	个	1	748.0	748.0	泰山岩	泰山岩
#-68	石球	圆形	个	1	689.0	689.0	泰山岩	泰山岩
#-69	石球	圆形	个	1	593.0	593.0	泰山岩	泰山岩
#-70	石球	圆形	个	1	445.0	445.0	泰山岩	泰山岩

種別番号	種別	種	寸	色	尺	規格	用途	土仕位置	備 考
#-71	石飾	兜形				長12.5 幅7.0 厚2.9		床底	386.7g #
#-72	石飾	兜形				長12.2 幅6.8 厚4.0		床底	476.2g #
#-73	石飾	兜形				長11.9 幅7.3 厚4.2		床底	465.0g #
#-74	石飾	兜形				長10.4 幅5.5 厚4.2		床底	364.7g #
#-75	石飾	兜形				長11.1 幅5.9 厚5.0		床底	448.2g #
#-76	石飾	兜形				長8.7 幅5.9 厚3.2		床底	273.2g #
#-77	石飾	兜形				長17.1 幅7.5 厚3.6		床底	568.1g #
30位-1	土師器	1/2焼				焼	胴部外面ハケ・全面ヨコミダキ		床底
#-2	土師器	ほぼ兜形				明赤褐色	口縁部ヨコナデ→口唇部ヨコナデ→口縁部外面ヨコミダキ・その他ヨコミダキ		床底
#-3	土師器	胴部4/5・厚部欠				明黄褐色	胴部ヨコナデ→胴部外面ハケ→外側及び胴部内面ヨコミダキ		床底
4位-1	土師器	ほぼ兜形				明赤褐色	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		床底
#-2	土師器	2/3焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		カマド内
#-3	黄褐色	2/3焼				灰	胴部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		内腹口縁付
#-4	土師器	胴部欠				明黄褐色	胴部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		内腹内面黄色地肌
#-5	土師器	3/4焼				にぶい黄	胴部以下ハケ→内面ヨコミダキ・胴部内面ハケ→内面ヨコミダキ		床底
#-6	土師器	胴部下半以下兜形				明赤褐色	外側ハケ→内面ハケ		埋設土器
#-7	赤土	兜形				長8.5 幅6.8 厚2.1	縁部付あり		212.2g 磯砂岩
50位-1	土師器	1/4焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		カマド内
#-2	土師器	ほぼ兜形				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		内腹黄色地肌
#-3	土師器	3/4焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		黄色土器
#-4	土師器	1/3焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		黄色土器
#-5	黄褐色	口縁部1/3欠				灰赤	胴部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		黄色土器
#-6	黄褐色	1/4焼				灰赤	胴部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		カマド内
#-7	土師器	ほぼ兜形				赤	口縁部ヨコナデ・胴部内面ハケ→内面ヨコミダキ		床底
#-8	土師器	口縁部1/4焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部内面ハケ→内面ヨコミダキ		+ 4cm
#-9	土師器	口縁部1/3焼				にぶい黄	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		埋設
#-10	土師器	3/4焼				黄褐色	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ハケ→内面ヨコミダキ・胴部以下内面ハケ→内面ヨコミダキ		床底
#-11	土師器	胴部上半以上1/2焼				黄褐色	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		110cm
#-12	土師器	胴部上半以上1/3焼				にぶい黄			+12cm
#-13	土師器	胴部上半以上1/4焼				明赤褐色			+3cm
#-14	土師器	胴部中位以上1/3焼				にぶい赤黄			カマド内
#-15	土師器	胴部中位以上1/2焼				にぶい黄褐色			#
#-16	土師器	胴部中位以上1/4/3焼				にぶい赤黄			#
#-17	土師器	胴部以上1/4焼				灰赤褐色	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		#
#-18	石飾	兜形				長11.8 幅5.5 厚4.1	縁部付あり		293.3g 雲山岩
#-19	石飾	一部欠				長10.2 幅5.4 厚2.5	縁部付あり		165.6g 磯砂岩
#-20	石飾	兜形				長12.9 幅4.3 厚2.6			195.8g 石材不明
#-21	石飾	兜形				長13.9 幅5.0 厚2.8			312.4g 磯砂岩
#-22	石飾	兜形				長8.6 幅4.8 厚2.4			158.1g 雲山岩
#-23	石飾	兜形				長17.9 幅6.9 厚3.3			+38cm 562.4g #
#-24	石飾	兜形				長13.9 幅5.5 厚2.5			+ 7cm 261.8g 磯砂岩
60位-1	土師器	2/3焼				にぶい赤黄	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		内腹黄色地肌
#-2	土師器	4/5焼				灰	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		床底
#-3	土師器	1/2焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		内腹口縁付
#-4	黄褐色	ほぼ兜形				灰	胴部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		床底
#-5	土師器	胴部上位以上1/4焼				黄褐色	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		内腹口縁付
#-6	土師器	口縁部1/5焼				黄褐色	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		丸蓋付
#-7	土師器	ほぼ兜形				焼	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ハケ→内面ヨコミダキ		丸蓋付
#-8	土師器	胴部中位以上1/2焼				焼	口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ→内面ヨコミダキ		埋設土器

測候番号	標 高	地 方	色 澤	大 小 (mm)	備 考	重 量	備 考
#-9	土輝部	断面以上3/4残	紅白	口22.4	#	片重	黄銅部部材は信頼度低い
#-10	土輝部	断面以上完形	灰白	119.4	断面ナデ	+8mm	
#-11	土輝部	断面完形	黄橙	脚13.5	断面上半内外面へラズリ・断面部ヨコナデ→ 外面及び断面内面ミダキ	-15mm	断面内面黒色処理
#-12	土輝部	断面1/2残	橙	脚(9.6)	断面部ヨコナデ→内面上半を除きミダキ		
#-13	石錐	完形	長15.4 幅9.3 厚3.0		打製石斧刃部破損品を転用	片重	633.8g グラス質安山岩
#-14	石錐	完形	長13.6 幅6.8 厚4.9		磨製・磨削け痕あり	片重	566.2g 安山岩
#-15	石錐	完形	長12.7 幅6.8 厚3.8		磨削け痕あり	-13mm	452.4g #
#-16	石錐	完形	長11.3 幅6.7 厚4.2		磨削け痕あり	+13mm	451.3g #
#-17	石錐	完形	長12.4 幅7.7 厚3.3		磨削け痕あり	+14mm	565.5g #
#-18	石錐	完形	長13.3 幅6.2 厚3.1		磨削け痕あり	片重	512.5g 磁粒磁砂否?
#-19	石錐	完形	長14.3 幅7.8 厚3.7		磨削け痕あり	片重	572.4g 安山岩
#-20	石錐	完形	長14.8 幅5.3 厚4.1		磨削痕あり?	+13mm	491.4g #
#-21	石錐	完形	長13.1 幅6.1 厚4.8		磨削け痕あり	片重	467.3g #
#-22	石錐	完形	長16.9 幅6.5 厚2.8			+25mm	471.7g #
#-23	石錐	完形	長19.8 幅3.6 厚3.6			片重	211.8g 磁粒磁砂
#-24	石錐	完形	長12.8 幅6.6 厚4.9			-13mm	589.4g 安山岩
#-25	石錐	完形	長11.3 幅4.5 厚2.7			+3mm	228.0g 粘板岩
#-26	石錐	完形	長13.7 幅7.0 厚4.7			片重	513.7g 安山岩
#-27	石錐	完形	長13.3 幅3.1 厚3.8			片重	410.7g 樹皮質中硬鉄片
#-28	石錐	一部欠?	長11.7 幅6.7 厚1.5			+15mm	199.2g グラス質安山岩
#-29	石錐	完形	長10.1 幅5.2 厚1.5			+8mm	158.3g 安山岩
#-30	石錐	完形	長10.8 幅4.1 厚2.8			片重	173.5g #
#-31	石錐	一部欠	長(8.7) 幅6.0 厚4.4			片重	(236.3g) #
#-32	石錐	完形	長11.4 幅7.1 厚3.3			片重	381.3g 安山岩?
#-33	石錐	完形	長14.4 幅7.4 厚2.0			片重	840.6g 安山岩
#-34	石錐	完形	長13.3 幅6.2 厚3.3		磨削け痕あり		545.7g #
7位-1	土輝部	3/4残	橙	口13.0 保11.4 高(4.7)	口縁部ヨコナデ・外面外面へラズリ→口縁部 断面部を除きヨコミダキ		
# 2	土輝部	断面完形 断面1/2 残	黄赤橙	底8.2	外面へラズリ・内面へラズリ→断面を除き ミダキ	片重 -30mm	
# 3	土輝部	断面完形	橙	1)27.5 高11.2 高31.7	口縁部ヨコナデ・断面以下外面へラズリ・断面 部以下内面へラズリ→断面部を除きミダキ	片重	
# 4	土輝部	口縁部1/3残 断面中位以下1/2残	赤褐	口(33.2) 底6.3 高(14.2)	口縁部ヨコナデ・断面外面へラズリ・断面部 内面へラズリ・断面外面未磨削	カマド内	東京大学 異断面部高は信頼度低い
# 5	礫石	一部欠	長(5.5) 幅(4.4) 厚(4.0)		全面に磨りあり		(82.1g) 磁粒 質低品を再利用
# 6	打製石斧	断面欠	長(21.7) 幅9.8 厚2.7				(651.4g) 磁粒 質低品に転用?
# 7	打製石斧	完形	長15.9 幅11.0 厚1.2			片重	262.5g グラス質安山岩 石錐に転用?
# 8	石錐	完形	長14.8 幅7.6 厚5.0		磨削け痕あり	片重	622.7g 安山岩
# 9	石錐	完形	長13.5 幅7.9 厚2.7		磨削け痕あり	片重	349.3g #
#-10	石錐	完形	長12.0 幅4.4 厚2.2		磨削け痕あり	片重	407.3g #
#-11	石錐	完形	長16.4 幅7.2 厚4.0			片重	524.3g #
#-12	石錐	一部欠	長9.7 幅6.6 厚2.9			-35mm	(246.5g) #
#-13	石錐	完形	長14.1 幅6.9 厚4.7			片重	684.7g #
#-14	石錐	完形	長13.5 幅6.1 厚4.8			片重	633.6g #
#-15	石錐	完形	長14.4 幅6.6 厚3.7			片重	386.0g #
#-16	石錐	完形	長9.5 幅6.7 厚3.9			片重	392.0g #
#-17	石錐	一部欠	長(13.5) 幅6.2 厚2.0			片重	(639.1g) #
#-18	石錐	一部欠	長(9.8) 幅6.5 厚4.4			片重	(396.5g) #
#-19	石錐	完形	長10.3 幅6.0 厚4.0			片重	351.8g #
#-20	石錐	完形	長11.0 幅6.3 厚4.5			片重	407.6g #
#-21	石錐	完形	長14.3 幅7.7 厚5.2			片重	482.3g 多孔質安山岩
#-22	石錐	完形	長11.7 幅6.2 厚5.8			片重	537.4g 安山岩?
#-23	石錐	完形	長9.9 幅6.2 厚4.9			片重	315.4g #
#-24	石錐	完形	長10.8 幅6.1 厚3.5			片重	453.3g #
#-25	石錐	完形	長13.9 幅6.2 厚4.5			片重	710.4g #
#-26	石錐	完形	長11.8 幅7.6 厚5.1			片重	574.0g #
# 27	石錐	完形	長14.0 幅7.3 厚3.9			片重	588.0g #
#-28	石錐	完形	長13.5 幅6.5 厚4.1			片重	560.7g 粘板安山岩
# 29	石錐	完形	長11.6 幅6.9 厚4.9			片重	325.4g 安山岩
#-30	石錐	完形	長13.3 幅5.6 厚4.7			片重	553.4g #

種別番号	種別	形状	寸法	重量 (kg)	備考	取上位置	備考
F-31	石塊	塊形		長10.3 幅6.8 厚5.4		覆土	286.7g *
F-32	石塊	塊形		長11.1 幅5.2 厚4.0		覆土	414.7g 難取(安山岩)
F-33	石塊	塊形		長10.8 幅5.9 厚5.0		覆土	396.6g 安山岩
F-34	石塊	塊形		長14.6 幅6.8 厚4.8		覆土	507.9g *
F-35	石塊	塊形		長14.5 幅7.2 厚5.3		覆土	652.5g *
F-36	石塊	塊形		長11.1 幅6.6 厚4.8		覆土	463.2g *
F-37	石塊	塊形		長10.7 幅5.4 厚4.1		覆土	445.9g *
F-38	石塊	塊形		長10.5 幅6.4 厚3.2		覆土	327.8g *
F-39	石塊	塊形		長10.4 幅6.0 厚3.5		覆土	328.3g *
F-40	石塊	塊形		長11.8 幅7.2 厚4.8		覆土	519.5g *
F-41	石塊	塊形		長9.9 幅6.3 厚4.3		覆土	355.9g *
F-42	石塊	塊形		長10.4 幅7.2 厚5.9		覆土	514.2g *
F-43	石塊	塊形		長12.0 幅7.5 厚6.1		覆土	829.9g *
F-44	石塊	塊形		長12.3 幅8.2 厚4.0		覆土	476.2g *
F-45	石塊	塊形		長13.6 幅8.8 厚5.3		覆土	471.2g *
F-46	石塊	塊形		長11.3 幅6.3 厚5.2		覆土	463.2g *
F-47	石塊	塊形		長9.4 幅5.2 厚4.8		覆土	332.4g *
F-48	石塊	塊形		長14.1 幅6.2 厚6.2		覆土	606.7g 多孔質(安山岩)
F-49	石塊	塊形		長13.9 幅6.8 厚6.0		覆土	724.9g 安山岩
F-50	石塊	塊形		長11.9 幅7.6 厚5.3		覆土	471.2g *
F-51	石塊	塊形		長8.8 幅5.4 厚4.8		覆土	282.2g *
F-52	石塊	塊形		長15.2 幅8.5 厚4.9		覆土	705.1g *
99位-1	土師器	高脚1/2碗	横溝	幅6.8	黒部外壁木製版、その他ヘラナデ	+25cm	広大可也
10位-1	土師器	口皿2枚	赤	径9.3 脚12.6 高さ10.2	器全体内外面ヨコミガキ、脚部内面ヘラナデ、脚部ヨコナデ→脚部外面ヨコミガキ→脚部外面ヨコミガキ	覆土	脚部内面を焼き塗布
F-2	土師器	杯脚1/2碗	横溝	径14.5	全面入金タガキ	覆土	
F-3	土師器	脚中央部塊形	横		中央部ヘラナデ→脚部外面ヘケ→脚部ヨコナデ→外面タガキ	覆土	
F-4	土師器	脚中央部塊形 脚脚部1/3残	横	径(11.5)	脚部ヨコナデ→外面タガキ	覆土	
F-5	土師器	口縁部1/4残	横溝溝	径(13.6)	全面タガキ	覆土	
F-6	土師器	2/3碗	横溝	径12.2 体9.7 高さ4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ→全面タガキ	覆土	内面黒色処理
F-7	土師器	3/4碗	横	径12.0 体10.6 高さ3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ	覆土	褐色土部
F-8	横溝器	塊形	横白	径12.2 高さ3.7	両面ナデ→内外面黒版ヘラナデ	覆土	
F-9	横溝器	口縁部1/2残	横	径(8.2)	黒版ナデ、脚部手打ちヘラナデ	覆土	
F-10	土師器	脚部中央以上1/3残	径(10.5)横溝	径(10.4)	口縁部ヨコナデ、脚部外面ヘラナデ、脚部内面ヘラナデ→脚部内面を焼きヨコミガキ	覆土	
F-11	土師器	口縁部1/3欠	赤溝	径12.2 高さ6.6	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ→脚部内面を焼きヨコミガキ	覆土	
F-12	土師器	脚部中央以上1/2残	横	径(11.6)	口縁部ヨコナデ、脚部外面ヘラナデ、脚部内面ナデ	覆土	
F-13	土師器	ほぼ完形	赤溝	径19.4 高さ6.4 高さ31.8	口縁部ヨコナデ、脚部外面ヘラナデ、脚部内面ヘラナデ、器部外面黒版	覆土	広大可也
F-14	鉄片	刀部一部欠		長さ9.7			
11位-1	土師器	脚部中央以上1/3残	径(10.5)横溝	径(17.6)	口縁部ヨコナデ、脚部外面ヘラナデ、脚部内面ヘラナデ	床底	
F-2	土師器	底部完形 脚部中央以上1/3残	赤溝	高さ9.0	外面ヘラナデ→内面ヘラナデ→底部外面を焼きヨコミガキ	床底	
12位-1	土師器	1/2碗	横	径(11.3) 体10.6 高さ4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ		褐色土部
F-2	土師器	脚部中央以下完形 脚部上半1/3残	径(10.5)横溝	高さ6.5	外面ヘラナデ→内面ヘラナデ→脚部外面を焼きヨコミガキ		
F-3	土師器	口縁部1/2欠	赤溝	径(14.7) 高さ5.2 高さ11.0	口縁部ヨコナデ、脚部以下外面ヘラナデ、脚部内面ヘラナデ	床底	黒版ナデ黒版
F-4	土師器	ほぼ完形	横	径(11.2) 高さ14.7			
F-5	土師器	脚部上半完形	径(10.5)横溝				
13位-1	土師器	塊形	横溝溝	径(12.0) 体11.6 高さ6.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ→内面入金タガキ	床底	黒色処理(片脚は黒版によるもの)
F-2	土師器	口縁部1/3欠	横	径(12.6) 体10.8 高さ3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ	床底	褐色土部
F-3	土師器	口縁部1/4残	横	径(20.4)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ→内面入金タガキ、脚部外面を焼きヨコミガキ		
F-4	土師器	口縁部1/2欠	横溝	径(10.2) 高さ9.9	口縁部ヨコナデ、体部内面以下ヘラナデ、体部内面ヘラナデ→脚部内面を焼きヨコミガキ	床底	内面黒色処理
F-5	土師器	1/2碗	横	径9.7 高さ5.4 高さ3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、脚部内面ヘラナデ、器部外面黒版		
F-6	土師器	口縁部1/4残	横	径(20.8)	口縁部外面ヘラナデ→ヨコナデ、脚部外面ヘラナデ、脚部内面ヘケ	床底	

発掘番号	期	種	形	色	高	径	備	出土位置	備
#-7	土師器	口縁部彩色	楕	白7.6			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周ヨコナデ	床直	外周に粘土付着
#-8	土師器	胴部上平光形	浅黄楕				胴部ヨコナデ、中央部外周へラケ、中央部内周へラケズリ→内面ミダキ	床直	しぼり痕有り 何らかに使用
#-9	土師器	胴部上平光形	浅黄楕				#	床直	#
#-10	灰土器	深鉢					#		刀子でないことは確実
#-11	石皿	浅鉢		長13.0 幅7.3 厚3.5			磨削付底有り	床直	444.3g 安山岩
15区-1	土師器	彩色	楕	111.5 高3.8			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ		内周口縁弁
#-2	土師器	胴部彩色光形	楕				口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ→内面ミダキ、内面 楕ミダキ	床直	
#-3	灰土器	口縁部彩色	オリーブ状	1018.4			口縁部ナデ、胴部外周タタキ、胴部内周へラケ	床直	
16区-1	土師器	浅鉢彩色	楕	1112.7 径12.3 高4.8			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ		復けた白色地味
#-2	土師器	1/4残	明輪	1013.0 高3.8			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ→全面ミダキ		内面黒色地味
#-3	土師器	一部欠	楕	1011.0 径10.3 高3.3			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ		産色上緑
#-4	土師器	口縁部1/5残	明赤楕	1024.0			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ、体部内周へラケ→体部内面ミダキ		内面彩色地味
#-5	土師器	口縁部1/4欠	赤	1016.2 高5.3			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ、体部内周へラケ→全面ミダキ		北端割付穴内
#-6	土師器	口縁部1/4残	にじい黄楕	1024.0			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ		
#-7	土師器	胴部中央以上1/2残	楕	1113.4			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ→胴部内面ミダキ	← 6cm	産色軟黄帯
#-8	土師器	口縁部彩色 胴部1/2残	赤楕	1114.8 高6.4			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ、底部内面ミダキ		黄土可能 灰黄帯高は信頼できず

第10表 前田遺跡 古代遺物観察表

発掘番号	期	種	形	色	高	径	備	出土位置	備
15区-1	土師器	胴部中央欠	楕	1013.3 高5.9			口縁部ヨコナデ、体部外周へラケズリ	カマド内	二次地産成あり 腹に灰粉付 内周口縁弁
#-2	土師器	1/2残	楕	1012.6 高(3.8)			#	カマド内	内周口縁弁
#-3	土師器	胴部中央以上10/9残	明赤楕	1115.0			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ	カマド内	胴部外周に粘土付着
#-4	土師器	口縁部彩色 胴部1/2残	にじい楕	1021.7			#	カマド内	
2区-1	灰土器	口縁部1/2欠	灰	1013.6 高6.6 内径4.0			口縁部ナデ、底部同様に赤切り	1 3cm	
#-2	土師器	胴部中央以上2/3残	明赤楕	1020.9 高(22.4)			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ	産直部	
#-3	土師器	浅鉢彩色	赤楕	1022.9 径23.2 底4.0 高28.0			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ	カマド内	破損後の二次地産成あり
4区-1	灰土器	1/3残	にじい黄楕	1014.6 高3.3 内径(9.4)			口縁部ナデ、底部同様に赤切り	カマド内	
#-2	灰土器	口縁部1/4欠	灰	1013.7 高3.6 内径3.1			#	+3cm	
#-3	灰土器	1/3残	灰オリーブ	1032.0			口縁部ナデ、胴部外周明赤	床直	
#-4	土師器	彩色	楕	1115.2 径17.2 高15.0			口縁部ヨコナデ、胴部以下外周へラケズリ、胴部内周へラケ	床直	
#-5	土師器	底部欠 胴部中央以上一部欠	楕	1022.8 径21.3			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ	床直 カマド内	貯蔵穴に灰黄 製下層はカマド内
5区-1	土師器	1/3残	楕	1014.8 高7.6 内径4.8			口縁部ナデ、底部同様に赤切り	貯蔵穴内	内面彩色地味
#-2	灰土器	1/2残	灰	1013.4 底7.6 高4.0 内径6.5			胴部ナデ、底部同様に赤切り	床上	
#-3	灰土器	彩色	灰	1013.2 底6.4 高4.0 内径6.1			#	床直	
#-4	灰土器	1/3残	灰	1014.0 底(6.6) 高3.8 内径(6.0)			#	北内隅付穴内	軟黄帯黄帯
#-5	灰土器	口縁部1/4欠	灰黄	1113.8 高6.9 高4.0 内径5.7			#	貯蔵穴内	軟黄帯黄帯
#-6	灰土器	1/3残	灰内	1016.2 径(7.0) 高6.0			口縁部ナデ	貯蔵穴内	
#-7	灰土器	口縁部彩色	黄	113.4			胴部ナデ	瓦十	
#-8	土師器	胴部中央以上2/3残	にじい黄楕	1020.2 高22.1			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ	カマド内 床内	
#-9	土師器	浅鉢彩色	赤黄	底4.8			外周へラケズリ、内周へラケ	カマド内	
6区-1	土師器	口縁部2/3欠	黄楕	1015.3 高7.0 内径4.6			口縁部ナデ、底部同様に赤切り 胴部ナデ、底部同様に赤切り	左側貯蔵穴内	内面黒色地味
#-2	土師器	浅鉢	楕	1014.5 底6.6 高4.0			#	#	内面黒色地味
#-3	灰土器	口縁部2/3欠	灰内	1012.8 高7.2 径3.8 内径7.1			胴部ナデ、底部同様に赤切り	瓦十	
#-4	灰土器	1/2残	灰内	1013.4 底6.7 高4.0 内径6.6			胴部ナデ、底部同様に赤切り	床直	軟黄帯黄帯
#-5	灰土器	1/4残	灰	1013.6			胴部ナデ、天井部同様に赤切り	瓦十	
#-6	灰土器	1/4残	にじい黄楕	1016.2			#	カマド内	
#-7	土師器	底部彩色 胴部1/2残	浅黄	底6.3			胴部ナデ、胴部下部外周以下手持ちへラケズリ	床直	
#-8	土師器	口縁部1/5残 胴部1/2残	赤楕	1020.4 高(20.8)			口縁部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケ	カマド内	
#-9	土師器	胴部中央以上1/4残	明輪	1017.8 高(20.7)			#	カマド内	

第11表 宮ノ反A遺跡群 古代遺物観察表

内周番号	器物	形状	材質	寸法	特徴	出土位置	備考
遺跡外-1	石碇	先端部・脚部欠	楕	幅1.8 厚0.2			0.54g 出庫1
#-2	石碇	先端部・脚部欠	楕	幅2.6 厚0.4			0.93g 庫内貯
#-3	石碇	先端部欠	楕	幅1.6 厚0.4			1.44g ガラス質雲山石
#-4	打製石斧	両面欠	楕	幅0.9			312.75g 千枚岩質雲山石
#-5	打製石斧	基部欠	楕	幅3.6 厚1.8			51.16g 千枚岩質雲山石
#-6	打製石斧	基部欠	楕	幅4.7 厚1.3			65.16g 粘板岩?
1位-1	土師器	1/3 残	楕	口(11.2) 体(9.7) 高3.5	口縁部ココナテ、体部外面ヘラケズリ		褐色土師
#-2	磁石	一部残	楕		上下2面に磨りあり		666.3g 雲山石
2位-1	土師器	1/3 残	楕	口(11.8) 体(11.0) 高3.1	口縁部ココナテ、体部外面ヘラケズリ		褐色土師
#-2	土師器	胴部以下1/5欠	楕	口21.8 高(30.7)	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリの後、他に1/3欠。胴部内面ヘラケズリ	甕上段上層	赤黒陶片
#-3	土師器	口縁部1/3残	淡黄砂	口(12.4)	全周ヘラケ→口縁部ココナテ		丸底甕域からの個人品
#-4	土師器	口縁部2/3 残	明赤焼	口18.0	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ	+18cm	
#-5	土師器	胴部上位以上1/2残	楕	口18.3	#	貯蔵穴内	
#-6	土師器	胴部上位以上完形	楕	口21.9	#	片煮 丸底甕内	胴部外面に粘土付着 カマドに転用?
#-7	土師器	底部欠	にじみ焼	口23.1	#	左接赤帯 +30cm	全面に粘土付着 カマド芯材に転用
#-8	土師器	胴部上位以上完形	楕	口20.4	#	貯蔵穴内	外周全体に粘土付着
3位-1	土師器	1/3 残	楕	口(11.8) 体(11.0) 高3.4	口縁部ココナテ、体部外面ヘラケズリ		褐色土師
#-2	滑石鉢	1/3 残	灰	口(10.0) 体(12.2)	磁胎ナテ、底部外面磨削ヘラケズリ		
#-3	石製鉢	完形	長10.9 幅5.9 厚3.6	磨り面あり			367.6g 雲山石
#-4	石製鉢	完形	長9.8 幅5.3 厚3.6	磨り面あり			361.9g #
#-5	石製鉢	完形	長7.9 幅8.7 厚3.7	磨り面あり			348.8g #
4位-1	土師器	完形	明赤焼	口13.6 高7.7	口縁部ココナテ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラケズリ、ヒゲキ	+29cm	
#-2	土師器	1/4残	明赤焼	口(16.0) 高8.0 厚17.6	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、底部外面ヘラケズリ→胴部下半外面ヒゲキ	-15cm	全周に、石碇混入 丸底甕域からの個人品
#-3	土師器	口縁部1/5欠	淡黄	口14.4 脚11.6 高8.6	口縁部及び胴部ココナテ、耳部接合部外面及び胴部上半内面ヘラケズリ→底部内面ヒゲキ→短文		全周に粘土付着 有破口跡
#-4	土師器	脚部欠	楕	口14.2	口縁部ココナテ、その他口縁部内面をヒゲキヘラケズリ→胴部内面をヒゲキ	+45cm	
#-5	石製鉢	完形	長6.8 幅7.2 厚7.1	磨り面あり			125.6g 磁石
#-6	石製鉢	完形	長10.9 幅6.3 厚3.1	磨り面あり			272.6g 磁砂質
6位-1	土師器	底部1/4残	明赤	高(8.0)	胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ→外面ヒゲキ		真土寄泥
#-2	土師器	口縁部1/4残	楕	口(16.0)	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、全面ヒゲキ		
#-3	土師器	底部完形	明赤焼	高7.1	外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ	片煮	外面全体に粘土付着 真土可能
#-4	土師器	胴部上半以上1/4残	楕	口(22.4)	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ		胴部外面に粘土付着
#-5	土師器	胴部上半以上1/4残	にじみ焼	口(25.0)	#	片煮	
#-6	石製鉢	完形	長12.4 幅6.8 厚5.4	磨り面あり			396.5g 多孔質雲山石
7位-1	土師器	口縁部1/4 欠	黄焼	口(13.6) 高4.8	口縁部ココナテ、体部外面ヘラケズリ→内面ヒゲキ		内面黄色処理
#-2	土師器	2/3残	楕	口(12.2) 体(11.4) 高3.1	口縁部ココナテ、体部外面ヘラケズリ		内面塗った黄色処理? 褐色土師
#-3	土師器	口縁部1/4残	赤	口(16.4)	ココナテ→短文		飛鳥時代C
#-4	土師器	脚部完形	楕	脚6.6	短文ココナテ、その他外面ヘラケズリ、内面ヒゲキ		内面黄色処理
#-5	土師器	胴部中位以上1/3残	出焼	口(8.2)	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ		
#-6	土師器	底部完形	楕		外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ		
#-7	土師器	胴部中位以下1/2残	赤	高6.3	全周ヘラケズリ		輸入品か油焼不明
#-8	磁石	一端欠	長(14.7) 幅(9.5) 厚(7.5)	2面に磨り面あり		片煮	2169.1g 雲山石
#-9	磁石	先端欠	長(14.1) 幅(3.1) 厚(1.4)	片面に磨り面あり			23.5g 炭灰?
8位-1	土師器	口縁部1/4残	にじみ灰焼	口(27.8)	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ→外面ヒゲキ	+36cm	
#-2	土師器	口縁部1/4残	淡黄	口(18.8)	口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内外面ヘラケズリ	+40cm	
#-3	滑石鉢	口縁部1/4欠	灰	口(12.4) 高4.4 内径7.8	短文ナテ、底部外面磨削ヘラケズリ		
#-4	磁石?	完形	長15.4 幅(5.6) 厚(3.6)	磨り面あり		片煮	395.6g 磁砂質
#-5	磁石?	完形	長11.6 幅(6.1) 厚(2.3)	磨り面あり		片煮	250.3g #
10位-1	土師器	底部1/4残	楕	幅5.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ		丸底甕内
11位-1	滑石鉢	口縁部1/3欠	灰	口(12.2) 体(14.3) 高4.9	短文ナテ、底部外面磨削ヘラケズリ		

調査番号	種別	種名	色澤	寸法(mm)	備考	出所	備考
12位-1	供出器	口縁部1/2穴	灰	口13.8 底6.5 高さ9.0 内径7.0	回転ナデ、底部回転点有り	カマド内	
*-3	供出器	口縁部1/8穴	灰オリーブ	口13.6 底7.2 高さ9.0 内径7.5	*		
*-3	供出器	定形	オリーブ灰	口13.4 底7.6 高さ9.5 内径7.5	*	床産	
*-4	供出器	口縁部1/2穴	灰	口13.2 底7.3 高さ9.8 内径6.8	*	床産	
*-5	供出器	口縁部1/2穴	灰	口12.6 底6.1 高さ9.6 内径6.9	*	カマド内	
*-6	供出器	口縁部・底部一部穴	灰	口14.3 底9.1 高さ9.4	回転ナデ、底部回転点有りの焼酎器同様にヘラナデ	-5cm	
*-7	供出器	口縁部2/3穴	灰	口(13.8) 底9.0 高さ4.0	*	カマド内	
*-8	供出器	胴部上半以上1/2穴	灰	口(21.0)	回転ナデ、口縁部外面へラ、胴部内外面ナデ	カマド内 床産	
*-9	土師器	口縁部1/3穴	橙	口(21.0) 胴(20.0以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデ、胴部内面へラナデ		
13位-1	土師器	1/2穴	橙	口(14.0) 高さ9.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面へラナデリ・内面ナ デキ・内面焼文	+16cm	個人品だが記録不明
*-2	金環	定形	青7.2 幅2.2 厚40.2				
*-3	石製品	一部穴	長(7.5) 幅(6.8) 厚(3.8)		上下2面に磨り面あり		(286.7g) 安山岩
*-4	石製品	定形	長12.8 幅7.5 厚2.5				301.3g *
*-5	石製品	定形	長12.0 幅4.6 厚2.8		磨り面あり		217.0g *
14位-1	供出器	1/3穴	オリーブ灰	口(12.0) 高さ(4.3)	回転ナデ、底部手持ちへラナデ		
-2	供出器	底部穴	鎌倉産長2.4 厚4.0			+20cm	レントゲン撮影
16位-1	供出器	天井部1/2穴	灰		回転ナデ、天井部外面へラナデ		
17位-1	土師器	口縁部1/2穴	橙	口16.2 底8.7 高さ3.2	回転ナデ、底部手持ちへラナデリ、内面ヨコ ナデ	+5cm	内面黒色処理
*-2	供出器	筒内面穴	灰	胴8.3	回転ナデ、底部回転点有りの焼酎器同様にヘラ ナデ	床産	
*-2	土師器	胴部上半以上1/2穴	灰	口13.2 胴14.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ、胴部内 面へラナデ		
*-4	土師器	胴部上半以上1/3穴	橙	口22.3 胴21.0	*	床産内	
*-5	土師器	口縁部	橙	口21.2 胴20.9 底4.1 高さ27.1		+12cm	
18位-1	土師器	口縁部1/6穴	橙	口10.0 高さ3.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデ		内面口縁部
*-2	土師器	口縁部1/3穴	橙	口12.2 高さ4.3	*	床産	内面に黒色 塗料あり
*-3	土師器	定形	黄褐色	口15.0 高さ4.4	*	カマド内	内面口縁部
*-4	土師器	底部定形	灰10.2		外面へラナデの狭いナデ、内面不明	+5cm	一般で灰 この底面が再利用か?
*-5	土師器	口縁部1/3 穴	灰16.8		口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ、胴部内 面へラナデ	カマド内	
*-6	土師器	底部定形	橙	底8.3	外面へラナデリ、底面へラナデ		灰地品だが記録不明
*-7	土師器	胴部上半1/2穴	灰126.2		口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ、胴部内 面へラナデ	カマド内	
*-8	土師器	胴部上半以上1/4穴	灰12.2		*	床産	外面全体に粘土付着
*-9	磁石	一部穴	長10.4 幅7.1 厚5.3		磨り面あり	床産	(522.3g) 遠成岩
*-10	石製品	定形	長13.7 幅9.0 厚7.5		磨り面あり	+12cm	1057.0g 安山岩
*-11	石製品	定形	長14.4 幅8.4 厚7.4		磨り面あり	+8cm	752.8g *
*-12	石製品	定形	長12.9 幅7.3 厚6.0		磨り面あり	+12cm	507.5g *
19位-1	土師器	胴部上半以上1/3穴	橙赤褐色	口11.7	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ・胴部内 面へラナデ・全面ニダキ	+8cm	焼酎器類
*-2	土師器	口縁部2/3穴	灰11(17.1)		口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ、胴部内 面へラナデ	カマド内	内面に粘土層 マダ高素材に転用
*-3	土師器	底部1/3穴	黄褐色	底(7.0)	胴部外面へラナデリ、底部外面不明、内面へラ ナデ		転用可能
*-4	土師器	胴部上半以上1/2穴	灰17.2		*	床産	外面全体に粘土付着 貯蔵に転用!
20位-1	土師器	胴部上半以上1/2穴 底部定形	橙	口(19.2) 底6.8	口縁部ヨコナデの筒内面ハケ、胴部外面ハケの 下部以下へラナデリ、胴部内面へラナデ	床産 大塚遺跡	中津地方からの輸入品?
*-2	石製品	定形	長9.4 幅4.5 厚9.5		磨り面あり		418.8g 安山岩
21位-1	土師器	1/2穴	橙	口(14.0) 高さ4.1	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデ		内面口縁部
*-2	土師器	胴部上半以上1/4穴	灰112.2		口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ、胴部内 面へラナデ		九波遺跡からの輸入品
*-3	土師器	胴部上半以上1/3穴	灰口	口(14.8)	口縁部内面ハケ後口縁部ヨコナデ、胴部外面ハ ケ、胴部内面へラナデ		九波遺跡からの輸入品
*-4	土師器	胴部上半以上1/4穴	黄褐色	口(22.0)	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ		九波遺跡からの輸入品
*-5	土師器	底部2/3穴	橙		外面ハケ、内面へラナデ		九波遺跡からの輸入品
22位-1	土師器	口縁部	黄褐色	口13.8 底12.5 高さ6.1	口縁部ヨコナデ・胴部外面へラナデリ・内面 ナデ	床産	全面(底付)黒色処理
23位-1	供出器	口縁部1/3穴	灰	口13.4 底9.5 高さ9.8 内径6.8	回転ナデ、底部手持ちへラナデ	13cm	
*-2	供出器	口縁部	灰	口13.4 底9.7 高さ9.4 内径6.6	*	床産	
*-3	供出器	胴部上半定形	灰口		回転ナデ	黄褐色	
*-4	土師器	胴部上半1/2穴	灰120.2		口縁部ヨコナデ、胴部外面へラナデリ、胴部内 面へラナデ	カマド内	

標高(米)	地 名	地 質	寸 法 (m)	寸 法 (cm)	特 徴	出 産 地	備 考
#-5	土師窯	口縁部1/3残	段	14(22.2)	*	カマド内	
#-3	土師窯	口縁部1/2残	壇	113.7 高16.4	*	カマド内	
26位-1	内窯品	完形	段	131.4 高7.6 厚5.8	縁取り・縁打痕あり		546.0g 安山片
26位-1	土師窯	口縁部1/4 残	壇	11(19.0)	口縁部ナデ→内面ヨコミギキ		内面黒色処理
#-2	土師窯	口縁部1/4 欠	段	114.4 高4.2	*	床底	内面黒色処理
#-3	土師窯	1/3残	壇	11(13.6) 高(9.4) 高4.0	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→隅文		焼付窯城からの搬入品
#-4	内窯品	口縁部7/8欠	片	11(14.0) 高4.2 内径9.2	口縁部ナデ、底部縁部ヘラケズリ		
#-5	内窯品	口縁部1/10欠	灰口	114.0 高9.6 高4.1 内径9.6	*	床底	
#-6	内窯品	1/2残	片	113.0 高3.2 内径9.3	口縁部ナデ、底部縁部糸取りの縁部縁部縁部ヘラケズリ	→13cm	
#-7	内窯品	2/3残	灰	114.8 高11.9 高3.5	口縁部ナデ、底部縁部ヘラケズリ	カマド内方上段	
31位-1	土師窯	2/3残	壇	113.4 高6.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミギキ	+14cm	内面黒色処理
#-2	土師窯	完形	によい・灰燻	112.4 高4.8	*	カマド内	全面黒色処理?
#-3	土師窯	底部完形	赤褐色	高6.8	外面ヘラケズリ(縁ミギキ?)、内面ヘラナデ	カマド内	直立可能 縁部上段
#-4	土師窯	胴部以上1/3欠	によい・赤燻	111.7 高7.8 高31.2	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミギキ	床底	縁部縁の二次焼成痕あり
#-5	磁石	完形	段	147.7 高3.3 厚2.1	全面に縁取りあり		51.9g 磁石片
#-6	か7磁石片	一部欠	段	138.3 高13.2 厚2.8		焼充満	(300.4g) 磁石
32位-1	土師窯	胴部中位以上2/3残	赤褐色	119.7 高19.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	114cm	
#-2	土師窯	底部完形	赤褐色	高6.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		
33位-1	土師窯	口縁部1/2欠	黒褐色	112.5 高5.7	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミギキ	床底	全面黒色処理
#-2	土師窯	口縁部1/8欠	段	113.5 高12.1 高6.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミギキ	床底	内面黒色処理
#-3	土師窯	2/3残	壇	113.1 高11.3 高4.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		褐色土粉
#-4	土師窯	口縁部1/2残	壇	113.8	口縁部ヨコナデ・その他外面及び胴部内面ヘラケズリ→内面内面ミギキ		
#-5	土師窯	口縁部1/2欠	赤褐色	高11.0	口縁部及び胴部ヨコナデ・その他外面及び胴部内面ヘラケズリ→内面内面ミギキ	→13cm	胴部内面黒色処理
#-6	土師窯	ほぼ完形	段	117.6 高7.9 高13.8	口縁部ヨコナデ・体部以下外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ→内面・外面ミギキ? ミギキ	+8cm	
#-7	土師窯	胴部中位以上完形	によい・赤燻	116.3	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内 4-6cm	胴部中位外面に粘土付着
#-8	土師窯	胴部中位以上1/3残	によい・赤燻	118.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面及び口縁部内面ミギキ	→13cm	
#-9	鉄製品	溝欠	段	長4.4			レントゲン撮影 魚・炭灰か?
#-10	石製鉢	完形	柱11.2 高6.6 厚5.8	縁取りあり			626.3g 安山片
#-11	石製品	一部欠	段	長9.9 高6.8	縁取りあり		(442.7g) 煎灰岩
34位-1	内窯品	完形	110.3 高2.9 高2.6 高3.1	口縁部ナデ、天井部内面縁部ヘラケズリ	床底		
#-2	土師窯	胴部1位以上1/2残	によい・灰燻	11(23.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床底	
35位-1	土師窯	口縁部1/2 欠	によい・灰	11(23.9) 高4.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミギキ	床底	内面黒色処理 見込み不明
#-2	土師窯	口縁部1/2残	壇	11(12.0) 高(11.1)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		褐色土粉
#-3	土師窯	口縁部1/2欠	黄褐色	113.9 高(9.8) 高10.5	口縁部及び胴部ヨコナデ・その他外面及び胴部内面ヘラケズリ→胴部内面を縁ミギキ	床底	胴部内面黒色処理
#-4	土師窯	胴部1位以上1/4残	によい・赤	11(16.6)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+6cm	
#-5	土師窯	胴部以上2/3欠	壇	11(16.3) 高(5.4) 高19.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
36位-1	土師窯	胴部中位以上1/4残	段	11(23.4) 高(29.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
#-2	土師窯	底部完形	壇	高7.7	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		
#-3	磁製平 完形?	完形?	段	長2.5 高2.5 厚0.7			6.6g 磁石
38位-1	土師窯	1/3残	明赤褐色	11(12.0) 高(5.0) 高3.9	口縁部ナデ、底部縁部糸取り、口縁部ヨコナデ	カマド内	縁部の上段
#-2	内窯品	1/3残	床底	11(14.4) 高4.6 内径8.1	口縁部ナデ、底部縁部ヘラケズリ		
#-3	内窯品	2/5残	灰褐色	11(12.0) 高(9.2) 高3.7 内径(8.2)	口縁部ナデ、底部縁部ヘラケズリ		
#-4	内窯品	口縁部1/2 欠	灰褐色	113.6 高10.8 高3.2 内径10.0	口縁部ナデ、底部縁部ヘラケズリ	床底	胴部中位外面に粘土付着
#-5	土師窯	胴部中位以上1/2残	明赤褐色	11(21.2) 高(21.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		胴部中位外面に粘土付着
#-6	土師窯	胴部中位以上1/2残	壇	11(23.7) 高(21.7)	*		胴部中位外面に粘土付着
39位-1	土師窯	1/4残	段	11(14.0) 高(10.2)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面及び胴部内面ミギキ	柱穴内	内面黒色処理
40位-1	土師窯	口縁部1/3残	赤	11(13.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
42位-1	土師窯	1/5欠	粗褐色	113.8 高4.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床底	内面口縁部
#-2	土師窯	1/4残	段	11(13.8) 高4.2	*	カマド内	内面口縁部
#-3	土師窯	胴部中位以上1/2残	赤褐色	119.4	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミギキ	床底	

種別番号	種別	規格	色別	寸法 (mm)	特 徴	注記事項	備 考
※-4	土師器	胴部下1/3穴	にじい赤焼	112.5 高16.4	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	+50c	
※-5	土師器	胴部以上1/3焼	赤焼	112.6	#	カマド内	
45位-1	土師器	1/4焼	埋灰	11(11.2) 径(13.4)	短輪コナデ、胴部外周部へラケズリ	床底	
※-2	土師器	口唇部1/2穴	焼	11(12.8) 高9.5	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ+内周ミダギ	カマド内	内周黒色処理?
※-3	土師器	1/4焼	明黄焼	11(29.0) 高(7.2) 径(11.9)	#	-60c	
※-4	土師器	1/2焼	にじい焼	11(29.2) 高6.6 高34.6	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部外周深凹、胴部内周へラケ	+60c	
46位-1	須恵器	11線部1/4焼	灰	14(18.0) かより(15.4)	短輪コナデ、火弁部外周部へラケズリ	床底	
※-2	土師器	胴部中位以上1/2焼	焼	11(23.0) 高(19.5)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	カマド内	
※-3	土師器	胴部中位以上1/2焼	焼	11(24.5)	#	床底 カマド内	
※-4	土師器	方部欠	赤部焼3.1				レントゲン撮影
※-5	磁石	一部焼			焼り面あり		1177.3g 砂着
47位-1	土師器	2/3焼	焼	11(12.8) 高4.1	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ	+70c	褐色土器
※-2	土師器	口唇部3/4穴	灰	11(18.3) 高11.4	11線部及び胴部ヨコナデ、胴部上半内周へラケズリ+胴部内周を除く入金ミダギ	床底	内周黒色処理
※-3	土師器	ほぼ完成	にじい焼	11(14.1) 高18.4	胴部内周へラケコナデヨコナデ、胴部外周へラケ、胴部内周へラケナデ	床底	胴部外周部黒色焼
48位-1	土師器	1/4穴	明焼	11(15.6) 高4.3	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ、内周ミダギ	カマド内	内周口縁の修復
※-2	土師器	口唇部7/8穴	焼	11(11.2) 高3.8	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ		内周口縁付
※-3	土師器	口唇部1/3穴	明焼	11(16.6) 高11.4	11線部ヨコナデ、体部以下外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	+150c	内周黒色処理
※-4	土師器	底面劣形	焼	高11.0	外周及び内周下位へラケズリ、胴部内周へラケナデ+外周ミダギ	床底	
※-5	土師器	底面劣形	赤焼		外周へラケズリ、内周へラケナデ	カマド内	胎上は白地
※-6	土師器	ほぼ完成	焼	11(24.1) 高6.2 高34.8	11線部ヨコナデ、胴部以下外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	床底	胴部中央部に粘土付着 修正可能
※-7	土師器	口唇部2/3及び胴部中央以下ミダギに穴	赤焼	11(18.8)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ+胴部内周ミダギ	床底	外周全体に粘土付着
49位-1	土師器	2/3焼	にじい赤焼	11(17.4) 高4.3	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ、ミダギ		内周黒色処理
※-2	土師器	胴部以上1/2焼	焼	11(8.4)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ+ミダギ	床底	内(内)面磨けた黒色処理
※-3	須恵器	胴部上段以上1/4焼	灰	11(18.3)	短輪コナデ、胴部中位以下外周部へラケズリ	カマド内	
※-4	土師器	口唇部ほぼ完成	焼	11(20.2)	胴部外周へラケズリ、その他へラケ+11線部ヨコナデ+胴部外周及び口唇部内周ミダギ	床底	胎痕1.5mm
※-5	土師器	11線部ほぼ完成	明黄焼	11(18.2)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ+胴部外周ミダギ	床底	
※-6	土師器	体部下1/3焼	にじい焼	高(19.6)	外周へラケ、内周へラケナデ(後ミダギ?)		西方からの搬入品
※-7	土師器	口唇部1/2焼	焼	11(24.6)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ		
※-8	土師器	胴部以上2/3焼	にじい赤焼	11(23.6)	#		
※-9	土師器	口唇部1/2焼	焼	11(22.1)	#		
※-10	土師器	11線部完成	にじい焼	11(17.3)	#	床底	
※-11	土師器	口唇部1/6焼	焼	11(17.6)	11線部ヨコナデ、胴部内周へラケ		丸底痕からの搬入品
※-12	土師器	11線部完成	焼	11(17.4)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	床底	
※-13	土師器	胴部上段以上完成	焼	11(23.6)	#	床底	
50位-1	土師器	完成	にじい赤焼	11(11.6) 径10.5 高4.0	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ+内周ミダギ	+150c	内周黒色処理
※-2	土師器	1/4焼	焼	11(18.7) 高3.2	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ		内周口縁付
※-3	土師器	4/5焼	焼	11(13.0) 高4.5	#		内周口縁付
※-4	土師器	1/2焼	明黄焼	14(12.0) 径9.8 高(4.1)	#	床底	青白口縁付 倉庫取付た黒色処理
※-5	土師器	口唇部1/4焼	焼	11(17.0)	ヨコナデ+焼文		丸底痕5か?
※-6	土師器	口唇部1/2焼	焼	11(22.4)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	カマド内	胎痕
※-7	土師器	11線部1/3焼	焼	11(20.9)	胴部外周及び胴部内周へラケ+11線部ヨコナデ、胴部内周へラケズリ	カマド内	丸底痕からの搬入品
※-8	土師器	口唇部1/6焼	焼	11(16.0)	ヨコナデ		丸底痕からの搬入品
51位-1	土師器	完成	焼	11(13.0) 径5.0	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ+内周ミダギ+焼文	床底	内周黒色処理
※-2	土師器	1/3 焼	焼	11(12.0) 高4.2	11線部ヨコナデ、体部外周へラケズリ		内周口縁付
※-3	須恵器	ほぼ完成	灰	11(13.3) かより11.2 高2.3	短輪コナデ、天井部外周部へラケズリ		
※-4	須恵器	口唇部2/3穴	灰	11(12.8) かより15.6 高4.8	短輪コナデ、天井部外周部ミダギ	カマド内	胎痕部に転用
※-5	土師器	胴部1段以上1/4焼	焼	11(23.0)	11線部ヨコナデ、胴部外周へラケズリ、胴部内周へラケナデ	カマド内	胎痕部に転用
※-6	土師器	胴部上段以上完成	明黄焼	11(23.4)	#	床底	製作否不明

増設番号	種別	位置	色	厚	寸法(φ)	取付	取付位置	備	注
#-7	鉛線床	一部欠?			長4.1 短3.7 厚(1.3)			床底	(27.1c) 線石
#-8	石製基	丸形断面			長(10.0) 幅6.4 厚5.4		磨り面あり		(156kg) 線石
59E-1	土線部	口縁部1/2欠	黒		111.1 高さ5.7		11線部ヨコナデ・体部ヘラケズリ→ミダキ	+3cm	標準全土部
#-2	土線部	11線部1/3残	灰黄黒		口(13.0)		口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ		
#-3	土線部	11線部1/3残	黒		口(21.4)		*		
#-4	土線部	底部定形 胴部下1/2残	灰黒	実5.8			11線部ヨコナデ・胴部内面以下ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ	+8cm	底部外面に粘土付着 見立可能
59E-1	土線部	1/2残	黒		口(22.0) 体11.4 高さ3.8		口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ		褐色土部
#-2	土線部	口縁部1/2欠	黒		口11.4 体10.9 高さ3.4		*		褐色土部
#-3	土線部	1/4残	黒		口(13.0)		*		カマド内 内面口縁外
#-4	土線部	1/2残	明黄黒		口(13.0) 体(9.8) 高さ3.7		口縁部ヨコナデ→全面磨りミダキ		内面口縁外
#-5	灰塗部	定形	灰		口10.0 高さ3.3		回転ナデ、火井部外面回転ヘラケズリ		
#-6	灰塗部	定形	灰		口9.4 体11.4 高さ3.4		回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ		床底 芯みの著しい土部
#-7	土線部	胴中空部光形 胴部1/8 残	灰黄	厚(11.0)			胴部下部内面ハケ・外面ヘラケズリ→胴部部ヨコナデ→外面ミダキ		文庫に収用
#-8	土線部	胴部1/8以上1/3残	黒				外面及び胴部内面ハケ		線内 丸底壁からの搬入品
57E-1	土線部	1/2残	黒		口(13.0) 体(12.0) 高(3.5)		口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ		褐色土部
#-2	土線部	1/4残	黒		口(16.0) 体(10.0) 高(3.5)		*		褐色土部
#-3	土線部	口縁部1/3残	黒		口(11.0) 体(10.0)		*		褐色土部
#-4	土線部	1/2 残	黒		口11.6 高さ(3.5)		*		褐色土部
#-5	土線部	定形	黒		口12.0 高さ4.2		*		床底 褐色土部
#-6	土線部	口縁部1/3欠	明黄黒		口14.0 高さ5.6		*		袖巻部 内面口縁外
#-7	灰塗部	胴部以上1/4残	灰		口(6.4)		回転ナデ		奥側同様に僅かな程度欠け
#-8	土線部	定形	にぶい赤黒		口11.6 高さ11.0		口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラケナデ	+8cm	表層崩壊部
#-9	土線部	胴部1/8以上1/4残	黒		口(26.4)		*		カマド内
#-10	土線部	胴部中位以上1/3残	にぶい黄黒		口(30.3)		口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ→胴部外面ミダキ		床底
#-11	土線部	底部欠	黒		118.2		11線部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ	カマド袖	外側全体に粘土付着 標準全土部
#-12	土線部	底部1/4残	暗灰黄	実(5.0)			胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ、底部外面未築成		見立可能
#-13	土線部	底部定形	黒		実5.8		*		見立可能
#-14	土線部	口縁部1/2残					口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ		
59E-1	土線部	1/4残	黒		口(13.0) 高さ4.5		11線部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミダキ→短文	+8cm	内面至色処理
#-2	土線部	胴部中位以上1/2残	にぶい黒		口(19.0)		口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデの短ヘケ	+12cm	
#-3	土線部	底部1/4残	黒		実8.2		外面ミダキ、内面ヘラケナデ	床底	見立可能
#-4	土線部	胴部中位以上1/2残	黒		口16.3		11線部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ→胴部内面全面ミダキ	+8cm	
#-5	土線部	口縁部1/2及び胴部 下半以下欠	黒		口18.3		*		床底
#-6	土線部	12欠定形	にぶい赤黒		口17.0 高さ9.0 高さ3.4		口縁部ヨコナデ・胴部外面以下ヘラケズリ・胴部内面ヘラケナデ→胴部内面及び底部外面を磨りミダキ	+3cm	
#-7	砥石	一部欠?			縦12.5 厚3.7		磨り面あり	床底	(940.8g) 雲山岩
#-8	石製基	光形			縦14.6 幅8.2 厚5.1		磨り面・取付痕あり	+5cm	831.4g
#-9	石製基	定形			長10.0 幅6.0 厚4.0		磨り面・取付痕あり	+20cm	314.8g 雲山岩
59E-1	土線部	1/4残	にぶい黄黒		口(10.0) 高さ6.8		口縁部ヨコナデ→全面ミダキ	カマド内	全面至色処理
#-2	土線部	1/2残	にぶい黄黒		口(13.0) 高さ(4.7)		口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ・内面ミダキ	カマド内	内面至色処理
#-3	土線部	定形	黒		口11.3 体10.8 高さ3.7		11線部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ	+6cm	褐色土部
#-4	土線部	定形	黒		口10.4 高さ3.5		*		床底 3枚重おの壁下段 内面口縁外
#-5	土線部	2/5残	黒		口(13.0) 高さ(4.7)		*		カマド内 内面口縁外
#-6	土線部	1/3残	黒		口(13.0)		*		内面口縁外
#-7	土線部	定形	明黄黒		口15.0 高さ5.3		*		床底 3枚重おの壁下段 内面口縁外
#-8	土線部	定形	黒		口10.8 体10.8 高さ3.2			床底	
#-9	灰塗部	定形	灰白		口12.0 高さ3.4		回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床底	
#-10	灰塗部	定形	灰白		口11.0 高さ3.3		*		床底 3枚重おの中段
#-11	灰塗部	つまみ断面	灰		口13.4 高さ9.1 11.4		*		
#-12	灰塗部	柱付定形	灰		口15.8 高さ9.1 13.4 高さ4.3		*		+45cm
#-13	灰塗部	1/2残	灰白		口(13.0) 高さ(4.5)		回転ナデ、底部外面手付面ヘラケズリ		
#-14	土線部	口縁部1/8残	赤黒		口(13.0)		ヨコナデ→短文		飛鳥坪C
#-15	土線部	1/4残	赤黒		口(17.2) 高さ6.0		口縁部ヨコナデ・体部以下外面ヘラケズリ→体部内面ミダキ→短文		飛鳥坪A

標高(標高)	種別	形状	色	色調	高さ(m)	特徴	備考
# 16	栴檀部	口唇部一部欠 胴部1/5欠	灰黄	灰黄	1122.1 高(42.5)	回転ナデ、基部付近ヘラナデの後傾部ナデキ ナデ	床底
# 17	栴檀部	口唇部1/2・胴部 1/3欠	灰	灰	1128.0 高12.0 高25.9	回転ナデ、胴部下面回転ナデ	床底 +30cm
# 18	土庫部	2/3残	明赤褐色	明赤褐色	117.5 高(5.9)	口唇部コナデ・体部外面ヘラケズリ	内面黒色地埋
# 19	土庫部	胴部全部	黄	黄	111.2	ヘラケズリ→胴部コナデ	床底
# 20	土庫部	胴部1/2以上欠	黄赤	黄赤	110.4	口唇部コナデ・中下部ヘラケズリ→外面及び 胴部内面ミダキ	外面内面黒色地埋
# 21	栴檀部	胴部1/2完全欠	灰	灰		回転ナデ	床底
# 22	栴檀部	口唇部1/4残	灰内	灰内	1112.0	回転ナデ	
# 23	栴檀部	胴部全部・胴部欠	灰白	灰白	117.0	回転ナデ	
# 24	土庫部	胴部以上の1/2成	灰白	灰白	122.4	口唇部コナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内 面ヘラケズリ・胴部外面及び口唇部内面ミダキ	床底
# 25	土庫部	口唇部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1125.7 高(37.6)	口唇部コナデ・胴部以下外部ヘラケズリ、胴 部内面ヘラケズリ	外側に柱十付
# 26	土庫部	口唇部	赤褐色	赤褐色	1122.5 高5.0 高34.5		カマド左
# 27	土庫部	口唇部	黄	黄	123.0 高4.4 高36.8		式部内
# 28	土庫部	口唇部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1123.5 高4.6 高36.5	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内 面ヘラケズリ、胴部外面赤褐色	カマド構 造付
# 29	土庫部	口唇部一部欠 胴部下半以下欠	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1122.6	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内 面ヘラケズリ	床底
# 30	土庫部	口唇部1/2残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1122.4		
# 31	土庫部	口唇部1/3残	明赤褐色	明赤褐色	1123.2		カマド内
# 32	土庫部	胴部以上3/4残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1121.6		カマド構 造付
# 33	土庫部	胴部中位以上3/4残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1123.5		カマド内 +25cm
# 34	土庫部	完全欠	黄	黄	115.3 高4.6 高27.0	口唇部コナデ、胴部内面ヘラケズリ、胴部外 面不明、胴部内面ヘラケズリ	カマド右
# 35	土庫部	胴部1/2欠	黄	黄	111.2 高5.3 高18.5	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴 部内面ヘラケズリ後ミダキ	床底
# 36	土庫部	完全欠	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1114.4 高33.5	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内 面ヘラケズリ	床底
# 37	土庫部	口唇部 胴部一部1/4・基部 3/4欠	黄赤	黄赤	高(38.5)	口唇部内面ヘラケズリ後口唇部コナデ、胴部以下 部ヘラケズリ・胴部外面赤褐色・胴部内面 ヘラケズリ	西方からの搬入品
# 38	土庫部	胴部以上1/3以上残	黄	黄	1118.0	口唇部コナデ、胴部ヘ ラケズリ	先施地からの搬入品
# 39	土庫部	胴部以上4/5残	黄褐色	黄褐色	1135.4	外面及び口唇部内面ヘラケズリ後口唇部コナデ、胴 部内面ヘラケズリ	先施地からの搬入品
# 40	土庫部	胴部以上2/3残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1144.0	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ後下半ヘラケ ズリ、胴部内面ヘラケズリ	先施地からの搬入品
# 41	石製品	完全欠	25.8 幅4.5 厚4.0	磨り面あり			130.5g 磁州製
# 42	石製品	一部欠	25.1 幅10.7 厚7.9	磨り面あり			(747.1g) 多利質山崎
# 43	石製品	完全欠	16.0 幅6.8 厚4.0	磨り面あり			774.9g 安田製
# 44	石製品	一部欠	幅6.8 厚5.3	磨り面・凹みあり			(529.3g) #
# 45	石製品	完全欠	幅9.4 幅6.1 厚4.1	磨り面あり			黄赤 245.3g #
60位-1	土庫部	口唇部1/5残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1113.2 体(11.2)	口唇部コナデ・体部外面ヘラケズリ→ミダキ	床底
# 2	土庫部	口唇部1/4残	赤褐色	赤褐色	1122.0	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内 面ヘラケズリ	床底
# 3	土庫部	胴部中位以下2/3残	黄	黄	高6.2	胴部外面ヘラケズリ・胴部外面赤褐色ナデ?・胴 部内面ヘラケズリ→胴部外面ミダキ	床底
61位-1	石製品	一部欠	幅7.1 厚6.9	磨り面あり			-10cm 874.6g 安田製
62位-1	土庫部	2/3残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1121.4 高(9.0) 高22.7	口唇部コナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内 面ヘラケズリの後傾部付近ヘラケズリ	+4cm
63位-1	土庫部	1/3残	黄	黄	1123.0 高(11.0) 高26.8	口唇部コナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内 面ヘラケズリの後傾部付近ヘラケズリ→ミダキ	カマド内
# 2	土製品	筒状部一部欠	明赤褐色	黄(6.9) 厚1.4		ユビナデ	カマド内 (56.8g)
64位-1	土庫部	完全欠	黄	黄	112.4 高4.0	口唇部コナデ・体部外面ヘラケズリ	内面口唇部
# 2	土庫部	1/4残	黄	黄	1112.4 高4.0		カマド内
# 3	土庫部	口唇部1/4残	黄	黄	1113.0		内面口唇部
# 4	土庫部	口唇部1/2欠	黄	黄	1113.7 高4.1		内面口唇部
# 5	土庫部	口唇部1/4残	黄	黄	1117.0		内面口唇部
# 6	土庫部	口唇部1/4残	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1116.0	コナデ→外面ミダキ・内面黄褐色	床底
# 7	栴檀部	1/4残	灰内	灰内	1110.0 高(7.0)	回転ナデ、胴部外面ヘラケズリ	
# 8	栴檀部	1/3残	灰	灰	1110.0	回転ナデ、胴部外面ヘラケズリ	
# 9	栴檀部	口唇部一部欠 つまみ部欠	灰	灰	114.3 かえり11.4	回転ナデ、天井部回転ナデヘラケズリ	
# 10	栴檀部	1/4残					
# 11	栴檀部	口唇部1/2欠	灰	灰	1120.4 かえり(18.0) 高4.0		床底
# 12	栴檀部	2/5残	灰	灰	1122.0 かえり(18.0) 高2.8		

機内番号	機内	機外	機内	機外	機内	機外	機内	機外	機内	機外
#-13	土俵部	口縁部/5枚	段	口24.6	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ			カマド内		
#-14	土俵部	胴部中位以上/5枚	にょい筒	口22.7		*		床蓋		胴部外蓋に粘土付帯 貯藏水に転用?
#-15	土俵部	胴部以上/4/5枚	楕	口22.3		*		床蓋		胴部外蓋に粘土付帯 貯藏水に転用?
#-16	扉	方部欠	碓部	高63.3						レントゲン撮影
#-17	石製品	瓦形	碓	長16.1 幅0.9 厚3.5	磨り面・段行溝あり					662.7g 雲山岩
65位-1	土俵部	1/5枚	楕	口(14.2) 高(4.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ→ミガキ					内蓋黒色処理
#-2	土俵部	2/3枚	楕	口11.0 高2.2	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ					内蓋口縁部
#-3	土俵部	突形	楕	口11.4 高3.2				カマド内		内蓋口縁部
#-4	土俵部	1/4枚	楕	口(11.8) 高3.6		*				内蓋口縁部
#-5	土俵部	口内側/2枚	楕	口12.8 高4.3		*				内蓋口縁部
#-6	土俵部	1/6枚	楕	口(17.0) 高(6.5)		*		カマド内		機蓋部に転用 内蓋口縁部
#-7	扉	口縁部/2枚	段	口(20.0) 高さ(17.2)	口縁部ナデ、外蓋外蓋面側ヘラケズリ					
#-8	扉	1/1枚	段	口(15.8) 高(4.8)	口縁部ナデ、底蓋外蓋面側ヘラケズリ					
#-9	扉	口縁部/4枚	段	高16.0 幅16.8 厚4.1						
#-10	扉	1/2枚	段	口(13.0) 高9.4 厚3.8		*				
#-11	土俵部	胴部中位/3・胴部欠	楕	高7.4	外蓋内蓋を抜きヘラケズリ・胴部ヨコナデ・胴部内蓋ミガキ					外蓋内蓋黒色処理
#-12	土俵部	口縁部/4枚	にょい筒	口(12.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ			カマド内		
#-13	土俵部	胴部上位以上/4/5枚	楕	口14.4		*				
#-14	土俵部	胴部中位以上/1枚	楕	口15.9		*		支脚転用		
#-15	土俵部	口縁部/3枚	楕	口21.5		*		カマド内		
#-16	土俵部	口縁部/3枚	楕	口22.2		*		カマド内		外蓋に粘土付帯 カマド機蓋部に転用?
#-17	土俵部	胴部中位以上/4/5枚	明赤陶	口22.0		*		カマド内		
67位-1	土俵部	口縁部/2枚	楕	口13.8	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ→ミガキ					内蓋黒色処理
#-2	土俵部	突形	楕	高12.2	胴部ヨコナデ、その他外蓋及び胴部上半内蓋ヘラケズリ→胴部内蓋を抜きミガキ			支脚に転用		胴部下半外蓋に粘土付帯
#-3	土俵部	胴部以上/口縁部	にょい筒	口27.6	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ			15cm		砥形土器
#-4	土俵部	胴部以上/1/3枚	にょい筒	口(23.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ・胴部内蓋ヘラナデ→ミガキ			床蓋		砥形土器
#-5	土俵部	胴部上位以上/1/2枚	楕	口25.4	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ→胴部外蓋ミガキ			15cm		
#-6	土俵部	突形	赤黒	高4.9	胴部外蓋ヘラケズリ、底部外蓋不明、胴部外蓋ヘラナデ			床蓋		直立可能
#-7	土俵部	胴部中位以上/1/5枚	にょい筒	口(13.4)	胴部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ・胴部外蓋ヘラケズリ					丸底製成からの搬入品
70位-1	扉	口縁部突形 胴部上半1/3枚	段	口29.4	胴部ナデ、外蓋及び胴部内蓋ナキ→胴部内蓋ヘラケズリ			床蓋		
#-2	扉	1/6枚	段	口(14.0) 高(4.4) 内蓋(9.3)	胴部ナデ、底部外蓋面側ヘラケズリ			カマド内		
71位-1	土俵部	胴部下半1/4/5枚	楕		外蓋ヘラケズリ、内蓋ヘラナデ			床蓋		外蓋全体に粘土付帯 貯藏水に転用
#-2	土俵部	突形	にょい筒	高6.1	外蓋ヘラケズリ、内蓋ヘラナデ			床蓋		
72位-1	扉	口縁部突形	段	口21.4	胴部ナデ、口縁部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋タキ			ヒット内		
#-2	扉	口縁部突形	段	口11.4	胴部ナデ			床蓋		
73位-1	土俵部	1/3枚	赤黒	口(12.0) 高3.8	口縁部ヨコナデ・胴部外蓋ヘラケズリ→ミガキ					内蓋黒色処理
#-2	土俵部	口内側/2枚	碓部	口11.3 高4.7		*		+ 4cm		内蓋黒色処理
#-3	土俵部	口縁部/1枚	楕	口(11.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ					
#-4	扉	1/3枚	黄灰	口(12.0) 高(4.5)	胴部ナデ、底部外蓋面側ヘラケズリ					
#-5	土俵部	口縁部/1/3・胴部欠	楕	口15.8	口縁部ヨコナデ・胴部以下外蓋及び胴部内蓋ヘラケズリ→口内側外蓋及び胴部内蓋ミガキ			床蓋		外蓋内蓋黒色処理
#-6	土俵部	胴部中位以上/1枚	碓部	口(26.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ			機蓋部		外蓋に粘土付帯 突形部は機蓋部転用
#-7	土俵部	口縁部/3枚	楕	口(18.6)		*				
#-8	土俵部	口縁部/2枚	楕	口22.4		*				
#-9	土俵部	胴部中位以上/4/5枚	楕	口(17.9)		*		15cm		胴部中位外蓋に粘土付帯 機蓋部は機蓋部転用
#-10	土俵部	口縁部/8枚	楕	口(15.8)	ヘラケズリ					丸底製成からの搬入品
#-11	土俵部	胴部中位以上/1/4枚	にょい筒	口(14.2)	胴部ヘラケズリ・胴部内蓋ヘラナデ・口縁部ヨコナデ			+25cm		胴部外蓋に粘土付帯
74位-1	土俵部	胴部中位以上/3/4枚	にょい筒	口22.8	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ					
75位-1	石製品	碓部	碓部	高15.6 厚9.6	研ぎされた内蓋あり					(809.9g) 砥石
76位-1	土俵部	1/3枚	楕	口(21.4) 高4.6	口縁部ヨコナデ・底部から底部外蓋ヘラケズリ→胴部外蓋及び内蓋ミガキ					砥石研ぎの機蓋
#-2	土俵部	胴部以上/1/3枚	にょい筒	口(16.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外蓋ヘラケズリ、胴部内蓋ヘラナデ					

種別番号	種別	形状	寸法	色澤	長さ(mm)	特徴	産地	備考
7-3	七脚器	胴部以上1/3欠形	明焼	口22.3		*	床室	胴部中央位内面に粘土付着
7-4	磁石	完整		表11.1 幅7.8 厚4.1		裏面あり		321.9g 磁灰岩
7-5	鉄斧	刃部一部欠		長5.3 刃部幅(2.2) 巻柄部幅2.5				
7711	土師器	口縁部1/3残	橙	口14.0		口縁部ココナテ、底部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
7712	土師器	口縁部1/3残	明焼	口14.0 径12.4		口縁部ココナテ、底部外面ヘラケズリ		内面黒色処理 右縁口縁付
7713	土師器	底部1/3残	橙	底8.0		外面ヘラケズリの後ミガキ、内面ヘラケテ	貯蔵穴内	真立可能
7714	丸玉	完整	黒	径6.7 -0.8 厚0.5 -0.6				0.75g(2個)
7715-1	土師器	口縁部欠	橙			口縁部ココナテ、底部外面ヘラケズリ		内面黒色処理
7716	土師器	口縁部一部欠	赤	口11.3		ココナテ		片全体付・赤部 裏面内1/3は右縁度狭い
7717	土師器	胴部下半以下1/2残	にぶい赤	長8.4		外面ヘラケズリ・内面ヘラケテ・ミガキ	床室	
7718	土師器	底部完整	橙	底6.0		外面ヘラケズリ・内面ヘラケテ・底部外面を除くミガキ	床室	右縁度あり
7719	土師器	底部1/2残	明赤黒	底7.5		外面ヘラケズリ・内面ヘラケテ→ミガキ		真立可能
7720	土師器	胴部下半以下4/5残	にぶい赤黒	底6.0		外面ヘラケズリ、内面ヘラケテ		片全体に粘土付着 貯蔵穴にも用? 真立可能
7721	磁石	一端欠		幅2.9 厚2.5		裏面あり		(107.9g) 磁灰岩
7722	磁石	一端欠		幅2.7 厚2.0		裏面あり		(68.7g) *
7723	土師器	口縁部1/4残	赤黒	口14.0		口縁部ココナテ、底部付着外面ヘラケズリ、内面ミガキ	カマド内	内面黒色処理
7724	灰器器	口縁部1/4欠	灰	口13.6 底6.8 高3.7 内径7.1		口縁部ココナテ、底部付着赤黒		右縁度あり
7725	土師器	胴部中央位以上1/3残	赤黒	口20.7 脚22.5		口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケテ	カマド内	縁部部に使用
7726	土師器	口縁部完整	橙	口12.1 脚21.5		*	カマド内	貯蔵部に使用
7727	土師器	口縁部4/5残	橙	口19.7 脚21.8(1)		*	カマド内	貯蔵部に使用
8011-1	土師器	2/5残	明赤黒	口14.0 径13.0 高(4.8)		口縁部ココナテ・底部外面ヘラケズリ→ミガキ		
8211-1	土師器	口縁部	灰青	口15.0 高4.2		口縁部ココナテ、底部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	床室	
7728	土師器	口縁部1/5残	橙	口13.8 径13.0		口縁部ココナテ、底部外面ヘラケズリ		金剛砂付した黒色処理 輸入品か?
7729	酒壺器	口縁部欠	灰			口縁部ココナテ、底部外面手持ちヘラケズリ→ハケ		
7730	土師器	完整	橙	口13.6 高5.3		口縁部ココナテ・底部外面ヘラケズリ・底部内面ヘラケテ→外面ミガキ	床室	
7731	鉄製品	一端欠		長4.8				レントゲン撮影
7732	磁石	一端欠		長18.4 幅16.0 厚4.5		裏面・凹みあり	床室	(2132.8g) 安山岩
7733	灰器器	口縁部1/3欠	灰白	口13.3 高3.8 内径3.2		口縁部ココナテ、底部付着赤黒の後縁部手持ちヘラケズリ		
7734	灰器器	口縁部2/5欠	灰	口14.4 脚10.0 高4.2		口縁部ココナテ、底部付着赤黒ヘラケズリ		
7735	灰器器	文井部完整	灰			口縁部ココナテ、文井部外面付着ヘラケズリ		
8211-2	灰器器	口縁部2/5欠	灰	口11.7 高さ9.6 高3.0		口縁部ココナテ、文井部外面付着ヘラケズリ		
7736	土師器	口縁部2/5残	明赤黒	口120.6		口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ココナテ	→6cm カマド内	
8411-1	土師器	口縁部1/2残	黒	口12.2 高6.8		口縁部ココナテ・底部外面ヘラケズリ→ミガキ	床室	全面黒色処理
7737	土師器	胴部	赤黒	口9.5		口縁部ココナテ、底部以下外面ヘラケズリ、底部内面及び胴部内面ヘラケテ	床室	内面黒色処理
7738	土師器	口縁部完整	橙	口11.2 高30.6		口縁部ココナテ・底部外面ヘラケズリ→ミガキ	床室	全面黒色処理
7739	灰器器	口縁部7/8欠	オリーブ灰	口(7.4) 高10.9		口縁部ココナテ、底部外面付着ヘラケズリ	→30cm	
7740	灰器器	口縁部1/2残	赤灰	口10.0		口縁部ココナテ、底部外面付着ヘラケズリ	→14cm	
8211-3	土師器	胴部上位以上1/4残	暗赤	口13.6		口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケテ	床室	
7741	土師器	胴部上位以上1/4残	暗赤黒	口16.2		*		
7742	土師器	底部完整	にぶい赤	底6.3		胴部外面ヘラケズリ、底部外面ナテ、胴部内面ヘラケテ	床室	真立可能 外全体に粘土付着
7743	鉄製品	両端欠		厚0.4				
8211-4	土師器	口縁部2/5残	赤黒	口19.2		口縁部ココナテ・胴部内面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケテ→胴部内面を除く赤黒ミガキ		
7744	土師器	胴部中央位以上4/5残	にぶい赤黒	口120.6		口縁部ココナテ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケテ→外面赤黒ミガキ	床室	
9011-1	土師器	2/3残	橙	口12.0 径10.8 高4.1		口縁部ココナテ、底部外面ヘラケズリ		棕色土師
7745	土師器	口縁部	赤黒	口16.3 底6.0 高16.5		口縁部ココナテ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラケテ→胴部内面を除く赤黒ミガキ	床室	真立可能 貯蔵穴にも用?
7746	土師器	胴部以上1/2残	にぶい赤黒	口25.4		口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケテ	カマド内	口唇部に凹凸目あり カマド縁部に使用?
7747	土師器	胴部下半以下1/2残	にぶい赤黒			外面ヘラケズリ、内面ヘラケテ	カマド内	胴部中央位内面に粘土付着
7748	土師器	胴部中央位以上1/2残	にぶい赤黒	口19.6 底6.4 高22.0		口縁部ココナテ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケテ	カマド内	
7749	土師器	口縁部1/3残	にぶい赤黒	口21.6		口縁部ココナテ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケテ	カマド内	

調査番号	遺物	形状	材質	数量	長さ(㎝)	幅(㎝)	高さ(㎝)	重量(g)	調査内容	備考
91B-1	土師器	2/3残	土	1	112.3	43.6	高4.3		口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ	全周黒けた黒色地味
※-1	土師器	残部欠 胴部1/3欠	明赤褐色	1	110.2				胴部ヨコナデ、その他外部内面を除くヘラケズリ→内部内面ミダキ	内部内面は黒色地味
※-2	土師器	口縁部1/2残	土	1	116.0				口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ	ホマト内
※-4	磁石	一破欠	灰	1	幅4.2	厚3.5			裏面あり	(176.8g) 磁石片
1号F-1	須恵器	1/3残	灰	1	口13.0	高4.5			回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
※-2	須恵器	口縁部1/3欠	灰	1	口13.9	底3.2	高3.4	内径7.7	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
1号-1	土師器	1/3残	赤黄	1	口13.0	高4.6			口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ→内面ヨコミダキ、内面短文	内面黒色地味
※-2	土師器	口縁部1/6残	土	1	口14.0				口縁部ヨコナデ→外蓋ミダキ、内面短文	西方からの舶来品
※-3	土師器	胴部1/8残	土	1	口14.0				内外面ヨコナデ→内面短文	西方からの舶来品
※-4	須恵器	口縁部1/4残	灰	1	口11.4				回転ナデ	
※-5	須恵器	1/4残	灰	1	口14.8	高2.8			回転ナデ、天舟部外面回転ヘラケズリ	
※-6	須恵器	口縁部1/4残	灰	1	口10.0				回転ナデ	
※-7	土師器	胴部欠	土	1	110.8				胴部ヨコナデ、その他胴部内外面ヘラケズリ→内部内面ミダキ	内部内面は黒色地味
※-8	石製品	変形	長	1	長12.4	幅6.6	厚4.3		上下2面に磨りあり	499.6g 雲山岩
2号F-1	土師器	1/2残	土	1	口12.6	高4.7			口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ→内面ヨコミダキ	
3号-1	土師器	口縁部1/5残	土	1	口10.8				口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ	
※-2	土師器	胴部1/3破片	土	1	口14.6				口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ→全面ミダキ	内面黒色地味
※-3	須恵器	胴部1/5残	灰	1	口15.6				回転ナデ	
※-4	須恵器	1/2残	灰	1	口14.0	全径10.0	高4.0		回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
4号-1	土師器	1/4残	土	1	口12.6	高3.7			口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ→内面ミダキ	内面黒色地味
※-2	須恵器	底部1/3残	灰	1	口14.5				回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
1号-1	土師器	1/3残	赤黄	1	口14.0	高4.0			口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ→内面ミダキ	内面黒色地味
※-2	石製品	変形	長	1	長7.0	幅6.4	厚2.3		全周に研磨痕あり	73.6g 磁石

第12表 下前田原遺跡群 古代遺物観察表

調査番号	遺物	形状	材質	数量	長さ(㎝)	幅(㎝)	高さ(㎝)	重量(g)	調査内容	備考
1号-1	土師器	口縁部1/3残	土	1	口17.0	径11.4			口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ→外部外面を除くヨコミダキ→内面短文	
※-2	土師器	1/3残	赤黄	1	口11.8	高4.8			口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ、全面黒なヨコミダキ	
※-3	土師器	口縁部1/3、底部欠	土	1	口10.0				口縁部ヨコナデ、外部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ→胴部外面ミダキ	112.0g
※-4	土師器	1/2残	土	1	口13.2	高(19.8)			口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ→胴部内面を除くミダキ	床直
※-5	土師器	1/4残	明赤褐色	1	口13.2	底(6.6)	高12.2		口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、底部外面木炭痕、胴部内面ヘラケズリ→底部外面を除くミダキ	直立可能 炭灰を採取
※-6	土師器	ほぼ完整	土	1	口13.9	底5.3	高10.9		口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部外面木炭痕を除くヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ	床直
※-7	石製品	変形	長	1	長6.7	幅3.7	厚1.3		上面に研磨痕、裏面及び側面に磨り痕あり	50.2g 磁石片
※-8	石製品	変形	長	1	長16.5	幅9.0	厚4.1		二面に磨り痕あり	赤黄 995.4g 雲山岩
※-9	瓦	形状(芯材のみ)	外	1	外縁(1.4)	外縁(1.6)				
2号-1	土師器	底部欠	明赤褐色	1	110.4				胴部内面ヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ、底部外面木炭痕	床直
3号-1	須恵器	胴部1/4残	灰	1	口12.0				回転ナデ、外面下回転ヘラケズリ	直立可能

写 真 图 版

西方上空から見た遺跡
跡全景



左 1号竪穴住居跡

右 同 カマド



左 2号竪穴住居跡

右 同 カマド





左 3号竪穴住居跡
遺物出土状態



右 3号竪穴住居跡



左 3号竪穴住居跡
カマ下天井部



右 同 基部



左 4号竪穴住居跡



右 5号竪穴住居跡

左 溝状遺構

右 同 断面



1号竪穴住居跡出土
土器



1

5

3

6

4

7

11

12

13



1



5



2



8



3



10

3号壺穴住居跡出土
土器



2



6



12



3



7

4号壺穴住居跡出土
土器



1



4



6

5号壺穴住居跡出土
土器



7



8

西方向空から見た栗毛坂遺跡群・長土呂遺跡群全景



遺跡全景





左 1号竪穴住居跡



右 同 カマド



左 1号竪穴住居跡
掘方



右 2号竪穴住居跡



左 3号竪穴住居跡



右 同 掘方



左 3号竪穴住居跡
カマド



右 4号竪穴住居跡
カマド

左 4号竪穴住居跡



右 同 掘方



左 5号竪穴住居跡



右 同 掘方



左 同 カマド



右 同 カマド掘方



同 遺物出土状態

